

桜文論叢

第97卷

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

目 次

論 説

ブリュッゲルの「バベルの塔」とボルヘスの「バベルの図書館」 —— ^{アダム} 《土》と ^{アダム} 《人》との切り離し、あるいは 《発狂》のなかの《真実》, 《真実》のなかの《発狂》 —— …… 諸坂 成利 ……	1
--	---

Motion Analysis of Women's Judo Matches in the 2012 : London Olympics by Weight Class …… Yoko TANABE ……	31
--	----

Nagasawa Kanaye: The Spiritual Life of California's Japanese Wine Pioneer …… Thomas Lockley ……	41
---	----

社会学における仮説設定と NHST …… 常松 淳 ……	81
------------------------------	----

語 法 結 構

—— 中国语言学基础理论研究中句法语汇结构及全体语法结构 —— … 萬 清華 ……	107
---	-----

資 料

貞治六年中殿御会伝本考 …… 鹿野しのぶ ……	234
-------------------------	-----

論 説

「もっとも不気味なもの」としての人間に向けて —— 存在と無のはざままで —— …… 岡山 敬二 ……	266
--	-----

ブリューゲルの「バベルの塔」と ボルヘスの「バベルの図書館」

——《^{アダマ}土》と《^{アダム}人》との切り離し、あるいは
《発狂》のなかの《真実》、《真実》のなかの《発狂》——

諸 坂 成 利

あなたがたは上にあるものを思え、地上のものを思うな。¹
——コロサイ書第三章第二節

I はじめに

本稿の目的は、ブリューゲルの「バベルの塔」の背景にある真意を、ボルヘスとの対比から明らかにしようとするものである。結論的には《バベル》と《アレフ》との隣接性、関連性を明らかにすることになるだろう。

昨年（2017年、平成29年）4月18日から7月2日の期間、「ボイマンス美術館所蔵ブリューゲル²「バベルの塔」展 16世紀ネーデルランドの至宝——ボスを超えて——」という展覧会³が東京都美術館にて開催され、筆者は5月25日、および6月2日に、この「バベルの塔」を観に行った。個人的には、ブリューゲルよりもむしろ、学部時代に受講した美学の掛下栄一郎先生が、ヒエロニムス・ボス（先生はこれを「ボッシュ」と発音されていたが、先生のご著書『神の狂気的美を求めて』（成文堂、1992）では「ボッス」と表記されている）を研究されており、授業中もたびたびボスに言及されていたので、筆者も爾来、画集を集めるなどボスに強い関心を抱くようになっていたということもあり、24年前に一度来日している「バベルの塔」よりも、今回初来日している2点のボスの方により個人的関心はあり、むしろこれらのボスの初来日の方を奇跡的と考えているが、しかし「バベルの塔」が持つ絵画の力も、やはり圧倒的であり、これにひき込

まれないわけにはいかなかった。そしてそこで、ある疑問を持ったのである。その疑問が、本稿執筆の動機となった。

Ⅱ ベルグソンの二つのあり方、および「バベルの塔」の観察

絵画の鑑賞というものは、《わかる—わからない》という基準を所持しない。絵画は、文学作品その他芸術作品同様、《わかる》ものではなく（もちろん時として本能的に、全的に、啓示的に「わかった」と思える瞬間が訪れることもあるが）、そこでの情報伝達は第二義的なものでしかない。絵画は、学術的説明によって《わかる》というものではない。絵画との出会いは一つの経験であり、絵画を見ることはそれと《対話》できるかどうかを問うこと、あるいは、そのような対話などといった平穏なことではなく、絵との対峙性を失い、絵に、ある仕方
で支配され、隷属してしまい、例えば、その絵画世界に入り込んでしまって、この世界に帰還できなかつたらどうしよう、などと想像することである（と私は、若い人々や学生に、わかりやすく、よくそのように言っている。またこういった想像力は本来人文科学系の研究者にあまねく必要なものである。作品に魅せられ、心読し、その中に入らなければ作品研究などあり得ない。しかし大学院などでは、作品に入らずに、客観的に作品を分析することが学術的な、正しい研究であるなどと、原理的にあり得ない、根本的に間違った方法が教えられてしまう場合がある。もしそのようなことが正しいとするならば、絵画は、学術的説明によって《わかる》ということになる）。すなわち絵画についても、ベルグソンの「形而上学入門」における、対象を知るための二つのあり方が適用可能なのであり適用すべきなのである⁴。つまり外部からある知識をもって観察・分析するか、対象の内部に、ある智慧をもって観入する（こちらが本来的には《学術》的である）か、という二つの方法であるが（後者はもちろん方法なき方法であるが）、筆者は、後者のやり方でこれまで「バベルの塔」に対峙してきたが、今回は、一時的にせよ、前者の、観察・分析眼を働かせないわけにはゆかなかった。なぜなら、絵の左、レンガ職人たちが、おそらくはレンガを上層部に運んで、壁面などがレンガ色に染まっているその横が、数層にわたって白く塗られ、全身が白くなった人々も、よく見ると観察で

き、これはおそらく「漆喰」を運んでいるのである。つまりレンガと漆喰運びの作業がこの絵の中で展開されているのである。

Ⅲ 聖書比較

しかし、これは、聖書の創世記の記述と異なっている。聖書には「漆喰」ではなく「アスファルト」と書かれている。以下に創世記第11章1から9（新共同訳）を引用するが、これが有名な「バベルの塔」の物語の全体である。また聖書ではこの箇所以外に《バベル》への言及はない。

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。

彼らは、「レンガを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにレンガを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

ちなみに英訳を参照すると引用下線部は、“And they had brick for stone, and slime had they for mortar.” (*The Holy Bible*, Oxford University Press) であり、英訳でも、レンガと共に用いられているのは漆喰、モルタル、ではなく slime となっている。つまり不快な、どろどろとした粘土、粘性のある液体であり、石灰のような白い粉ではない。またフランス語訳では、*«Les briques leur servirent de pierre et le bitume leur servit de mortier.»* (*Traduction*

œcuménique de la bible, Éditions du Cerf, 1993) であり, ここも同様にモルタルではなく, bitume となっている。つまりこれは瀝青, ビチューメンであり, アスファルト, タールといった黒色の粘着性のある物質である。またスペイン語訳でも, “Y emplearon ladrillos en vez de piedras, y alquitrán en vez de argamasa.” (*Sagrada Biblia*, Biblioteca de Autores Cristianos, 2011) となっており, ここでも argamasa 漆喰の代わりに alquitrán, すなわちタール, ピッチが用いられている。つまりバベルの塔は白いモルタルではなく, レンガと黒いアスファルトで作られたと各聖書は述べている。

IV 問題の所在, 相互主体性, および《フィクション》について

ではなぜブリュゲルは, 聖書の記事に反して, 漆喰を, 白い粉を採用したのか⁵。絵画的, 美学的, 審美的理由から, 黒ではなく白なのか。もちろんブリュゲルは, 時代背景からして聖書を反映してはおらず, 自由に改変している。なぜ, アスファルトではなく漆喰を採用したのだろうか。漆喰の理由として何が考えられるだろうか。聖書の, その前の部分では, 「石の代わりにレンガを」とあり, 絵画の方もレンガで築かれていることは一見して明らかである(ただし今回来日したロッテルダムのボイマンス=ファン・ブーニンゲン美術館所蔵の「バベルの塔」は完全にレンガ造りであるが, ブリュゲルのもうひとつの, ウィーン美術史美術館所蔵の「バベルの塔」は中央部および右上に岩の塊が露呈しており, レンガではなく石が観察できる)。また石とレンガの差異としては, レンガによる建造が設計図に従う機械的なものであり, レンガが建設のためのひとつの《単位》となり得るのに対して, 石による場合は石工による直観の重視が考えられる。これは切り出された石の場合もそうであり, 石畳の石でさえも石工による相互主体的な選択が求められるのである。つまり石を交換する際も, 隣の石が Oui と言っているかどうかを石に聞くというのである⁶。おそらくこういった直観的作業の最たるものは我が国の穴太衆^{あのうしゅう}の仕事であろう。石はレンガのように《同じ》ではない(芸術作品について学術論文が書かれる際にも, この《直観》がある仕方で開かれなければ, その研究は闇の中にあるのも同然であり, 《直観》がな

ければ実は何も研究されてはいない。時間と労力をかければ誰でもできるような作業を通常《研究》とは言わない。経験と知識、知恵をもった研究者によってのみ《研究》はなされるものだからである。《学問》と《物好き》は区別されねばならない。

レンガであれば人工物、石であれば自然物である。ブリュージュは人工と自然を対比したのか。アスファルトが自然物ならば、一方の漆喰は人工物であり、ロッテルダムの「バベルの塔」は、レンガと漆喰で出来ており、すべて人工物で出来ている、聖書のように人工物と自然物の混交はない、となる。ブリュージュは、ある視点、ある解釈から、聖書の記述はおかしいと考え、そのようにしたのではないだろうか。また「一つの民で、皆一つの言葉」という統一性と、この人工性とは関連があるのではないか（ひとつの言葉とは、共通の、統一された言葉であり、真の意味を理解すれば、それは《科学》の言葉である。それは蓄積・伝達・検証が可能であり、垂直的に構築が可能な、塔的なものであろう。また《科学》には理性がなく、ある傲りがあるというのは小林秀雄の見解であった）。ブリュージュは、バベルの塔の構成は、人工物＝《フィクション》で統一されるべきである、これは人間の建造物である、と、人工性の強調、あるいは人工性での統一を、あえて図ったのではないか（これにはルネサンスの影響が考えられてしかるべきである。ルネサンスとは粉本主義を超えて、神ではなく人間が《作る》を実現できるという意識を初めてもった時代である）。人工物＝《フィクション》で塔が作られたために、この塔は神の怒りに《ふれ》たのではないか（ルネサンス以前の考えでは、《フィクション》＝《作ること》は、神のみにゆめられている）。天然物、すなわち石と天然アスファルトで塔を作っていれば、塔は、つまり「この町」は、神の《被造物》で造られることになり、神の怒りにも《ふれ》ず、建設を継続できたのではないか、ということは当然考えられる。

塔が、町が、人工物＝《フィクション》（fiction は fake, false を連想させる）で出来ている、神が作りたもうた被造物＝自然物ではなく、人間が作った人工物＝《フィクション》で出来ている、人工物＝《フィクション》は神に《ふれ》ない、そうであるがゆえに、神は、この建設を不可能なものにしたのだろうか。石と天然アスファルトで塔や町を作っていれば、たとえそれが天を目指すもの

であっても、神はこれを赦したもうたのではないか（紫式部が『源氏物語』という作りもの、《フィクション》を書いたために地獄に落とされたというエピソードが想起される）。神の怒りのためには、塔は人工物＝《フィクション》で作られねばならない。そうブリュッセルが考えたために、この絵には白塗りの、漆喰まみれの人物が描かれ、塔の数層に渡って、石灰、漆喰が落ちている描写がなされている、と、ひとまずそのように考えてみることは可能であろう。とすれば、やはりここで人工と自然を対比する議論が必要となる。

V 人工と自然、人間の《分》

人工は相対的であり、自然は絶対的である。この見方はベルグソンの先の「形而上学入門」の二つの認識に対応している。すなわち、ひとつは外部からの観察・分析であり、今ひとつは時間をかけて対象に向き合い、直観と想像力によって対象に《なる》ことである。前者は相対的、後者は絶対的であり、そうであるがゆえに前者は人工、人間的、人間がなすもの、後者は自然、超越的、神がなすもの、と定義づけられる。人工的なあり方、人間的なあらゆるものには誤りがある（同じ理由から学術論文の学術性には、学術性ゆえに誤りがある。真理の探究という観点からは、実証主義的な学術論文ほど非学術的なものはない。ウラジミール・ナボコフも同様のことを感じていたからこそ *Pale Fire* を書いたのである。五感や論理には《人間》を超えた誤りが必ずある。仏教が「煩惱」と呼んでいるものがこの誤りである）。《バベルの塔》に、たとえ《正確さ》があったとしても、その《正確さ》、《厳密さ》は、《人》の、人工の《正確さ》であるがゆえに、《神》の、全知の《正確さ》には遠く及ばず、歪んでいる、誤差がある、将来的に間違ふ、《正確ではないもの》とならざるを得ない。したがって人工的な塔の建設にも、それが現実化された場合、設計を現実化する際の誤差があり（現実化される以前の、設計図の段階であれば、計算上ミスがなければ、それは完全なものであり、神の領域に、アイデアの領域に属するものである。同様に、音楽のスコアは、《バベルの図書館》のように読まれなければ、完璧を表現している。これを演奏しようとする、と、間違いが生じる）、完全な物とはならない。人工物＝《フィクション》には、

完璧はない。芸術には必ず誤りがある（名人はその誤り，ミスでさえも有効に，ある効果として使う場合がある）。しかしそれが人間に許された身分，《分》である，というのはパスカルの考えでもあろう。「人間は考える葦である」（不正確な翻訳であるが）という有名な言葉は，小林秀雄によれば，人間は人間としての身分を超えて考えてはならぬ，ということである。とすれば，悟り，絶対的な認識は神の領域に属し，人間には許されてはいない，となるだろう。人間が悟ったり，ある絶対的な認識を得ることは，神の怒りに《ふれ》ることである。人間は本質を洞察してはいけない。人間の《分》を超えて見てはいけない。人間は本来（筆者が『中島敦「古譚」講義』の中で用いた文学用語をここで用いれば）《警察》的であるべきであり，《探偵》的に直観的に絶対を把握してはならない。人間は相対の世界をただ生き抜けばよいのである。人間は神によって描かれたデザインに過ぎないのであって，デザインがデザイナーに文句を言ったり，ましてデザインするなどということは出来ない。人間は周りを，水平的に見て，知識を獲得すべきであり，垂直的に自らを上から見て，洞察的な智慧（それは神の領分であろう）を獲得してはならない。悟ってはならず，解脱してはいけない。天からの視点も予言も人間には許されていない。ボルヘスが「ザーヒル」のなかで述べたように，一本の花を見て，その中に直観的に全宇宙を見ることは人間には許されていないのである。そのようなことをなし得た人間は，神によって《発狂》させられるだろう。この《発狂》（これはベルグソンの意味でも極めて重要な問題であり，中島敦「名人傳」にも関連する。また発狂についてはボルヘスも「バベルの図書館」で述べており，後述のネルヴァルにもある。中島敦「文字禍」でナブ・アヘ・エリバが行う凝視の果てには，《発狂》があると考えべきである）こそは《^{バラル}混乱》であり，神が人に与えた《バベル》であると考えられるだろう。

Ⅵ バベルの謎，長谷川説について

バベルの塔に関しては長谷川三千子の『バベルの謎——ヤハウィストの冒険』（中公文庫，2007）があり，バベルの塔に対する驚くべき解釈が展開されて

いる。これによれば、バベルの塔の「物語は、ふつう、人間が高慢、不遜にも天までとどく塔を建てようとして神に罰せられ、言葉を乱され、多言語、多民族へと分かれることになったという物語」（長谷川、24【以下カッコ内に数字によって頁数のみを示したものは本書からの引用である】）である。「神の罰によって互いの言葉が通じ合わなくなった人間たちは、建設を途中で放棄し、全地の面に散り散りになった、と、この物語は語る。つまり垂直に上を目指して屹立していた塔が、挫折とともに、人々の全地への拡散という水平方向への動きとなって、この物語は終るのである」（25）。これがおそらく、一般に、そして世界的に流布している「バベルの塔」の物語であろう。各国語訳から読み取れる物語も、その物語である。しかし二千数百年前の物語が、単なる言葉の翻訳だけで理解できるというのは、希望があまりにも大きすぎると言わざるを得ないだろう。氏は、この物語を真に読み解くために、創世記全体の文脈の中でこの物語を捉え直すべく、創世記冒頭からの読み直しを開始する。

長谷川氏は、創世記の冒頭が、メソポタミアの創世神話『エヌマ・エリシュ』の影響下にあることを指摘し（83）、創世記2:4、「ヤハウエ神が地と天を作ったとき」（84）における「天」と「地」の逆転に注目する。通常であれば、「天と地を作ったとき」であろうと氏は言うのであるが、しかしこの逆転は実は天理教にもあり（「みかぐらうた」第二節、「この世の地と天とをかたどりて……」）、どの程度この逆転が不自然なのか、筆者には理解できない部分もあるが、氏によれば、「天」が先であることが自然、となる（ちなみに天理教によれば、「天」は男、「地」は女であり、これを適用し、アダムが先に生まれたことを考えれば「天」が先というのは自然かも知れない）。そして神は、この《地＝土》＝アダーマーから、《人》＝アーダーム、すなわちアダムを作るのである。「ヤハウエ神は土から取った塵で人の形造り、彼の鼻に命の息を吹き入れた。すると人は生き物となった」（99）。《土》＝アダーマーと《人》＝アーダームは語呂合わせであり、言語上《土》と《人》は、深い関連性を所持している。

神は人をエデン（「飲む」の意）の園に連れてきて耕作をさせ、園の中心部に、「命の木」と、おそらくその木の性格とは真逆の、「善と悪の知識の木」を生え

させる（なぜ真逆かと言え、《命》が生きた智慧であれば、《知識》は固定的な、その意味で生きていない、死んだ知識を連想させるからである）。そしてその後、アダムが知識の木の実を食べてしまうのであるが、食べたアダムに向かって、神は、「おまえが.....あの木から食べたので、土はおまえの故に呪われる」（130）と述べる。木の実が食べられたことによって、動作主アダムではなく、理不尽にも、何もしていない《土》が呪われるのである。そして、「おまえは塵なのだから、おまえは再び塵に戻るのだ」（169）となる。せっかく塵から作ったものをまた塵に戻してしまうことは、「造物主としての敗北宣言」（172）とも解釈できる（人はなぜ人型ロボットを作るのか。神はなぜ人を作ったのか。それらの理由はすべて、手足の延長が欲しいから、ではないだろうか。これは筆者の勝手な憶測などではなく、ボルヘスも述べていることである。この世のすべての道具、目に見えるものの多くは結局神の手足の延長であるならば、延長の逆を辿れば神に行き着くだろう。しかし、《書物》は手足の延長ではない。また《図書館》も実は、目に見えるものではない）。神は《人》を、自らと対等なものに成長させることが出来ない。ヤハウェはエデンからアダムを追放する際、アダムに、エデンの土を与える。《土》の物語はまだ続く。

次はカインとアベルの物語である。ここで特徴的、対比的なことは下記である。

長い時を経た後に、カインは土の実りをヤハウェのための捧げ物として持ってきた。アベルもまた、彼の群れの初子とその脂肪とを持ってきた。ヤハウェはアベルとその捧げ物に目を留めたが、カインと彼の捧げ物には目を留めなかった。カインは怒りに燃え、顔を伏せた。（205）

ヤハウェは何を嫌ったのか。答えは《土》である。《土》は呪われている。したがって《土》の実りに目を留めてはならない。しかしカインが《土》を耕す者となるのを黙認したのはヤハウェである。ヤハウェは、カインを弟殺しに向かわせる。長谷川氏はこれを「催眠術」と述べているが、まさにその通りだ。弟の血は畑の土に吸われてしまう。ヤハウェはカインに言う。「今やおまえは

呪われて、口を開いておまえの手からおまえの弟の血を受けた畑の土を離れねばならない。おまえが土を耕しても、これ以後それはおまえに実りを拒絶する。これ以後おまえは地上をよるべなくさまよわねばならない。」(235) すべてはヤハウエの計画だった。カインの捧げ物の無視も、弟殺しも、《人》と《土》の切り離しが目的である。しかし完全にカインを見放しているのかと言えば、そうではなく、カインを殺す者があれば、その人は七倍の復讐を受ける、とも言い、カインが殺されないように、ひとつの印をカインに施すのである(創世記、4-15)。そして「カインの末裔がこの印のもつ真の意味を解きあかす日を、ヤハウエは待ちのぞむ」(245)。後に、神は人間を作ったことを後悔し、心を痛め、大洪水を起こすが、ノアの箱舟は「大地からはなれて上方に」浮かび、この《浮上》が大洪水の真の理由であると長谷川氏は指摘する(300)。《浮上》は《人》と《土》との切り離しであり、そのための大洪水なのである。しかし大洪水の後、

ヤハウエは宥めの香りをかぎ、心の中で言った。「私は二度と、人間の故に地を呪われたものとはみなさない」(306)

と述べているので、神と人、あるいは《土》との間で「和解」となったようにもみえる。人は《土》なしには物理的に生きられないことを、やっとここで神は容認したのだろうか。《土》は《人》に言葉をもたらす存在でもある。経験的にも理解できるように、《土(地)》と言葉とは、分かちがたく結びついている。言葉を学ぶことは、その《土》から発せられる、触知できないあるもの＝《言葉》を学ぶことであり、《土》なしに、言語の習得はあり得ない。「方言」という言い方をすれば容易に理解されるだろうが、ある言語は必ずその《土(地)》と結びついている。《土》なしに、言語はない。

そしてバベルの塔は、この物語の元となった『エヌマ・エリシュ』と対比しても、これは神殿であり、神のために作られたものであり、人間の傲慢さ故に作られたものではない(もちろん、神を崇めるためには信仰心のみあれば足りる、神

殿を作ること自体に人間の傲慢さがある、立派な神殿を建てても、信仰心がなければ宗教は無力である、という考え方もある。また、称えられなければならないのは自然物であり、人工物が巨大化していくことには、それだけで人間の奢り、高慢が感じられる、いかに神殿をつくり、神を頌えようと主張しても、巨大なものは人間の奢りを表している、という見方もあるだろう。「有名になろう」という箇所も、長谷川氏によれば、「言いなおせば『（われわれにさずかった名であるところの）偉大なる神々の家々を作ろう』ということであり、つまりは端的に『ジグラトを作ろう』という発言なのである。」(350) ここで言う「バブ・イリ」とは、「バベル」の語源である。

ヤハウエは、《人》が《土》の上に住まうことを警戒している。そこへの安住を良しとしない。「この神は『人』と『地』とを切り離すためには、殺人事件をもひきおこし、他の生物たちをも巻き込んだ大殺戮をも敢えてしてきたのであった。(中略) この神の『地』に対する根本的な敵意と警戒心が拭い去られたわけではない」(357-8)。大洪水以降「和解」が成立したかに見えるが、実はそうではない。

安定した土地、職業、国家、家族、等には、確かに緊張感を緩和させる、見方によっては精神を墮落させる要素があるだろう。《土》の上での安住を精神的墮落とヤハウエは考え、これを戒めているのだろうか⁷。偶像崇拝の禁止も、《土》との結びつきへの戒めと言われている。つまり《土》=《目に見えるもの》への依拠、《目に見えるもの》のみを信頼することへの戒めなのだろう。《土》は、象徴的には、《目に見えるもの》=物質を示している。偶像崇拝の禁止は、その《土》との切り離しを意味するのである。目に見えるものを見ず、本質を見ようとする、目に見えない真の姿を見ようとする、それは神に近づくこと、神の領分に《ふれ》ること、を意味する。しかし人間は人間らしく、神の領分には《ふれ》ず、偶像崇拝をしていけばいいのではないか。神に近づくべきではない、近づくと罰せられるのではないか。偶像崇拝の禁止とは、ベルグソンで言えば、本質を洞察し、目に見えないものを見よという命令であり、外部からの観察の禁止、相対的であること、実証的、科学的であることの禁止にこれは匹敵する。

また《祈り》というものも、《土》からの浮上を意味すると考えられる⁸。神に、天に祈ることは、上への志向であり、《土》からの乖離、《土》から離れようとする意志を意味する。上＝天に心が集中すれば、心は下＝形而下的現実＝《土》を忘却するというシステムである。

ジグラトという建造物は、建築技術上、地下深く基礎工事をしなければならず、《土》と深く結びつくが故、長谷川氏はこの事実から、《塔》が《ことば》である（後に見るネルヴァルにおいては、バベルの《塔》は《書物》であり、ある仕方で《図書館》でもある。それはボルヘスにおいても同様であるが、ボルヘスを参照すれば《塔》は《文字》である、という見方も成り立つ）と推察する（370）。そしてブリューゲルは、まさにバベルの塔を、レンガと漆喰という人工物＝フィクション＝《ことば》で作り上げるイメージ＝ピクチャー＝絵を作り上げている。ブリューゲルが漆喰を用いた理由は、ヤハウエ神と同様に《人》を《土》から離れさせることにあったのではないか。ブリューゲルにとってバベルの塔は《夢》（非物質的な）なのである。

VII 言語の物質性、閉鎖性、接近不可能性について

神は、物質的な偶像崇拜ではなく、非物質的な言葉によってのみ現されるべきである。しかしその言葉は《土》（＝物質）から生まれている。《土》と言葉は分かちがたく結びついており、言葉も《土》に他ならない。《土》と結びついていない言語は存在しない。すべての言語は、ある《土（地）》の《方言》である。神は、言葉を非物質であると誤解していたことに気づき、言語を、《土》を破壊しようとする。バベルの塔の物語では、人間が、たがいにコミュニケーションが出来ないようにし、その結果、建設が中断したことになっているが、しかし言葉が通じ合わなくとも建設の中断には及ばないのではないか。現に、言葉の通じない国々の人々が、我が国の建設現場において、支障なく働いている。また言葉に関して言えば、言葉とはそもそも、真の意味を理解すれば、他人には通じないものである。神が「たがいに言葉が通じ合わないようにした」と言っても、何を今更、という感が否めない。

この点については、萩原朔太郎の、大正四年五月の文章、「言はねばならない事」を参照したい。拙著『中島敦「古譚」講義』（彩流社、2009、145-6）の中でも、「ちくま日本文学全集」の『萩原朔太郎』（筑摩書房、1991）から引用し言及したが、ここでもやはり引用すべきだろう。

私は子供のときからよくかういふ事を考へるくせがある。自分が若しある何等かの重大なる神罰を蒙るとか、又は気味の悪い魔術にかかるとかして……お伽話にあるやうに……私の肉体が人間以外の動物に変形した場合の生活はどうであるかと。

たとへば私が人気のない寂しい森を散歩して居る中に、突然 Fairy といふやうなものが現れて私といふ人間を一疋の犬に変形してしまふ。

私は尻尾をひきずりながら主人の家、ではない私自身の家に帰つてくる。私はいきなり懐かしい母の姿を見つけてこの恐ろしい事件の顛末を訴へようと試みる。併し、母は一疋の見知らぬ犬としか私を認めてくれない。私がいろいろな仕方で、尻尾をふつたり、吠えたり、嘗めたりするにもかかはらず母には少しも犬の意志が通じない。そのうへ私が悲鳴をあげて泣き叫ぶにもかかはらず、種々な迫害を加へた上、私を庭の外へ追ひ出してしまふ。

世の中にこんな取り返しのつかない悲惨な出来事があらうか。犬の意志が人間に通じないと言ふことは驚くべき神の悪戯である。

而して、もちろん、詩人としての私は魔術にかかつた犬である。

言葉が通じなくなる状況、その閉所恐怖症的な恐怖が、よく描かれ、よく想像できる、と考える（ボルヘスの「バベルの図書館」にも、「君（＝「バベルの図書館」というテキストの読者）は、私のこの文章を今読んでいるが、私の言語を理解しているという確信があるだろうか？ いや、ないのではないか」（Tú, que me lees, ¿estás seguro de entender mi lenguaje?⁹）というような反語的表現が観察できる。これも言語の壁を、コミュニケーションのツールであるものが実はコミュニケーションを妨害するものであるという言語の逆説を語っている）。これは主人公が虎になる、中島敦「山月記」の優れた解説でもあるが（虎になることは言語を失うことである）、「犬の意志が人

間に通じない」という、あたりまえのことが、「^{おどろ}驚くべき神の^{いたづら}悪戯である」と言われると、バベルの塔の建設において神がなした言語破壊を想起せざるを得ない。ここで朔太郎は「詩人としての私」と限定を付けているが、別に詩人でなくとも、一個人としての《私》の思いを他者に正確に伝えることは、言語をもっては不可能である。大まかな、ことに動作的な、《目に見える》ものの伝達はある程度可能であるが、精神的な、《目に見えない》ものの伝達には当然限界がある。そしてこの《目に見える》ものは《土》の作用を受けており、言語にそれが反映されている（がしかし、言語学者はこの《土》を決して研究対象にはしないだろう。この《土》は言語学の研究対象にはなり得ない。しかし本当の比較文学は正にこの《土》の研究をするのである）、というのがこれまで見てきたことである。確かに大阪弁は大阪の《土》から生み出されたものであり、東京弁とは異なる。では東京の《土》と大阪の《土》ではどのように異なるのか。東京の《土》はオレゴンの《土》とも、バルセロナの《土》とも異なっているが、具体的にこのように異なっていると言うことは出来ない（言語の比較は可能であるが、《土》の比較は不可能である。実証的な学術研究によって《土》を解明することはできない。それこそ神のみぞ知ることではないか、と神に言ったとしても、創世記の文脈を考えれば《土》のことゆえ自分も知らないと言ったと神は言うだろう）。ニースの《土》はハワイの《土》を時として想起させるが、やはりそれは異なっているとしか言いようがなく、ただ異なっていると言うことができるのみである。言語習得はある程度可能であっても、《土》の習得には、その《土》での生まれ直しが必要ではないかと思われるほどの困難が予想される。《人》は《土》から切り離されて、コスモポリタンのようになるべきであると神は考えたのであろうか。《土》に縛られることは、ある偏見を持つことである。その言語によってしか考えられないということは偏りをもった人間になることである。それを神は嫌ったのであろうか（繰り返すが、こういった問いかけは単なる憶測ではなく、真に学究的な問いかけなのである）。

神は《土》ではなく《言葉》によって人間を作れば良かったと後悔した（し

かし《言葉》も《土》から生まれた物質である）、《言葉》によって、つまりフィクションによって人間を作る——ちょうどボルヘスの短編「円環の廃墟」において魔術師が夢を見ることで、ある人間を作るように（スタニスワフ・レムの『ソラリス』においては、惑星ソラリスの海が記憶を実体化して人間を作るが、これはボルヘスの影響なのかも知れない）、そして最後にその魔術師も別の他者によって夢見られた存在でしかなかったと気づくように——つまり、すべての人間は夢見られた存在＝影でしかないというボルヘスの思想の反映なのであるが、そのようになればよかった、そうすればよかった、と神は思ったのではあるまいか（しかしそれでも言葉は《土》であり《人》であるので、神の理想は実現しない）。《土》のもつ《気》を、神は支配できない。万物は無であり塵であり、影であるにもかかわらず、《土》のもつ《気》は、人間に《目に見えるもの》＝物質の存在性を信じさせてしまう（『ソラリス』の主人公クリスがハリーの存在を信じるように。ソラリスの海は《土》に似ている）。あらゆる執着がそこから生じる。そして目に見えない神の存在を《土》ゆえに《人》は忘却する。

筆者は、長谷川氏が述べる《土》と《人》の物語を、実はボルヘスは直観的に知っていたのではないかと推測している。というのもボルヘスは、反対に、《土》によらない、そして言語ですらない言語、つまり《文字列》だけからなる書物を蔵している図書館を夢想し、それに《バベル》と名付けているからである。「バベルの図書館」¹⁰（La biblioteca de Babel）という短編がそれである（これは「バベルの塔」の反対物として夢想されたのではないか。バベルの塔には外部しかないが、バベルの図書館には内部しかない）。

この、すべての《文字列》を有する図書館が、なぜ「バベル」なのか、一般には詩人の入沢康夫のように、「所詮『バベルの塔』からの連想で仮に選ばれた固有名詞に過ぎまい」¹¹と安易に考えがちであるが、実はそうではないだろう。ボルヘスのこと故、深い考えがあるはずである。

Ⅷ 入沢康夫によるボルヘスの「バベルの図書館」について

このバベルの図書館について、入沢康夫が手短かにまとめているので、

紙数の関係で、ボルヘスの原文ではなく、そちらを参照する。

- (1) 広大な全図書館に同じ本は二冊とない。
- (2) 本はすべて同型で、四百十ページ、各ページは四十行、各行は八十字から成る。
- (3) 用ひられてゐる綴字記号は、二十二の文字、ピリオド、コンマ、^{スペース}字空き、の計二十五種である。
- (4) 図書館は右の二十五の記号のあらゆる可能な並べ替へによつて出来る本のすべてを収蔵してゐる。その数は「膨大ではあるが無限ではない¹²。」

つまりこの図書館が所蔵する最初の本、第一の本（と名付けうるものが存在すると仮定しての話であるが）には、四百十ページ、すべて、どのページにも“a”という文字が縦四十行、横八十字にわたってスペースなしで書かれている。そして、この本は、この図書館に一冊のみ存在し、同様の本は二冊存在しない。そしてその隣の第二の本（というものが存在すると仮定しての話であるが）には、まず“ab”と書かれ、あとはすべて“a”の文字で占められる、といった具合になっている。もちろん使用される文字にはスペースも含まれているため、この図書館には、どこかにダンテの『神曲』と読めるテキストも含まれていることになる（この図書館には、『神曲』と一文字違いのテキストも存在することになるし、アクセント記号などは省略されるか別の書き方で表現されたそのスペイン語訳、フランス語訳、そしてローマ字表記にはなるが、日本語訳も存在することになるだろう）。しかしバベルの図書館は、すべてのアルファベットの組み合わせを所持しているというだけで、何かの《言語》で書かれた書物を所蔵しているのではない。ダンテの『神曲』のテキストと同一のテキストをバベルの図書館が所蔵していても、ダンテの『神曲』がイタリア語で書かれているのに対し、この図書館所蔵のダンテの『神曲』と同一のテキストは、イタリア語で書かれていない。ただそのテキストは、偶然イタリア語としても解釈可能であり、その際ダンテの『神曲』のように読めるというだけの話である。繰り返すが、バベルの図書館所蔵の書物は、何語でも書かれていない。それは単なる文字列であり、厳密に

考えればその所蔵物は書物ではないかも知れない(もちろんそれらの書物には、タイトルは存在するが《著者》が存在しない。これにはボルヘスの「作者の否定」という考えが反映されているのだろう)。書物でないとするならば、この図書館は、厳密には図書館でさえないのかも知れない。実際そこには《分類》がないので、図書館としては使えない。

さて、このバベルの図書館であるが、どのくらいの規模になるのか。実は数学が得意だった詩人の入沢康夫が計算をしているので、次にこれを引用する。

問題は順列の数に帰着する。二十五のたがひに異なつた記号を、重複を許して、 $80 \times 40 \times 410$ つまり百三十一万二千個並べる、その並べ方の総数を求めるわけで、これは周知のやうに、二十五の百三十一万二千乗、つまり

$$25^{1312000} \doteq 2 \times 10^{1834097}$$

これは、二の次に零が百八十三万四千とんで九十七個つく数である。それだけの冊数の本が収められてゐるわけだ。

たしかに無限ではなく、有限の数である。

しかし、これはまた、何といふ巨きな数であることか。どんなに巨きな数かを、今すこし具体的に示してみよう。

バベルの図書館の本の一冊一冊は、作中の叙述から見て、おそらく普通の本の大きさであると思はれるが、ここで仮に、本のマイクロ化が進んで、一冊が一ミリ立方の大きさに縮小されたとしよう。そのとき、 2×10^{1834097} 冊の本を、すきまも無しに空間につめ込むと、それはどの位の広がりをおさめると、読者はお考へだらうか。地球全体ぐらゐでおさまるとは、まさかお思ひではあるまい。太陽系(つまり冥王星の軌道は大円とする球体)ぐらゐか。とんでもない。では、銀河系宇宙全体ではどうか。どうして、どうして。とすると、全宇宙を考へねばなるまい。

宇宙の形や大きさについては諸説あると思はれるが、ここでは、多くの通俗解説書に見られる、差渡しおよそ百億光年の球体として、その体積を立方ミリで出してみよう。

一光年は 9.46×10^{12} km だから、五十億光年は、 $5 \times 10^9 \times 9.46 \times 10^{12} \times 10^3 \times 10^2 \times 10 = 4.73 \times 10^{28}$ mm であり、それを半径とする球状宇宙の体積は

$$\frac{4}{3}\pi (4.73 \times 10^{23})^3 \div 4.4 \times 10^{86} \text{mm}^3$$

となる。

四四の次に零^{ゼロ}が八十五個つくこの数は、それ自体たいへんに大きな数だが、しかし、バベルの図書館の本の総数（二の次に百八十三万四千とんで九十七個の零）に比べれば、ほとんど無に等しい。図書館の本全体を収めるためには、この宇宙が、 $(2 \times 10^{1834097}) \div (4.4 \times 10^{86}) \div 4.5 \times 10^{1834010}$ 個必要となる。

どうか、錯覚しないでいただきたいが、これはもちろん四・五に百八十三万四千とんで十を掛けた数ではない。四五の次に零が百八十万四千とんで九個続く数である。それだけの数の宇宙が要るのだ。本の大きさを一ミリ立方として（さらに小さく、水素原子の大きさにしても、事情はあまり変わらない。零の数が二十ばかり減るだけだ）、しかもなほ、このやうな厩大な空間が必要であると、読者は果して予想されたであらうか。そして、ひよつとしたら、作者のボルヘスも、これほど大きな数とは実感してみなかつたのではないか¹³。

数式など省略できず若干長めの引用となったが、この指摘は実に興味深い、と言わざるを得ない。またこのバベルの図書館の厩大さ、この宇宙でさえそれに比すれば無に等しいという大きさを考えると、これはある仕方で「天まで届いてしまったバベルの塔」なのであり、バベルの図書館とはその存在自体《神》ではないか、あるいはボルヘスが短編「バベルの図書館」の中で夢想したように、バベルの図書館のある書物の中のあるひとつの文字の中に《神》は本当に存在する、その一文字こそ「一即多」的にバベルの図書館の全書物を映し出している、と考えても良いのではないかと思えてくる（百万冊の書物の中の一文字には、神はいないかもしれない。しかし宇宙よりもはるかに広大な空間を占める書物群の中の一文字には、造物主、神が宿っているかもしれない、そういうことでもなければ宇宙は無意味であろう、とボルヘスは考えたのであろう。宇宙を最初に動かしたものの、第一作動因、すなわち神がなぜ宇宙を動かしたのか、その後ミノ的に宇宙が、私たち

が動き続けている理由も、バベルの図書館には記載があるはずである)。また今ひとつ感じ取らねばならぬことは、この六角形の回廊からなるバベルの図書館の美しさである。バベルの塔に比してもよい。上にも下にも無限に続くかに見えるその巨大さは、想像するのみであるが、現代の、ポストモダン的な美術作品であり、究極の《もの派》の作品であり、それ自体が巨大な芸術言語である。また入沢の、ボルヘスでさえ、この図書館の大きさには思い至らなかったのではないか、という問いに対しては、ボルヘス研究40年以上の筆者の経験から判断して、これほどの大きさになるとは思い至らなかったが、ほぼ無限に近い有限であることは認識していたと考える。

Ⅹ 無言語、《未開》としての《バベルの図書館》、そしてそこにおける《神》について

さて、このバベルの図書館の蔵書は、繰り返すが、何語によっても書かれていない。蔵書は、《土》に《ふれ》る言語によって書かれていない。したがって、これはヤハウエの理想である。ここにあるのは単なる文字列に過ぎず、《人》によってたまたま何語かに見える瞬間があるだけのことである。バベルの図書館は現実には存在しない。理念的に、観念の中に存在するのみである。しかしボルヘスによって一度思い描かれた以上、これを消し去る事はできない。それは人工物ではないが、天然、自然の物でもない。バベルの図書館は、何かがそこで生成してくるような、何かが作られ、編み出されるような、溶解的な《場》ではない。固定的な、動かしようのない、ある仕方で厳然と存在するひとつの《場》なのである。

バベルの図書館は、神＝ボルヘス(＝物語作者)が、すべての文字列を所持する書物からなる図書館をイメージした瞬間に存在し、それはある普遍的なイメージ＝観念の中に存在するようになる。それは現実的に、空間的に存在するのではなく、理念の世界に観念的に存在するのである(もちろんそこで空間をイメージすることは可能であるし必然的にそうならざるを得ない)。これは自然物ではない。しかしこれもまた神が作りたもうたものであり、ボルヘスによればその

一文字の中に神が宿るものなのである。とすれば、これもある仕方での《自然》に属するのではないか。もちろん人間から見れば、蔵書の多くは解読不能な《無秩序》に過ぎない。それは《未開》であり、無意識の総体である（図書館員たちはそこである《近代》化を行っている）。しかしすべての文字列の所持という意味では、究極の《秩序》を有している。

バベルの図書館は、《私》の発露、《私》の表現、《私》が表現したいと思ったものが存在するところ、ではなく、最初からそこにすべてがあり、《私》はそこで《私》を、《私》であるべきものを探すのである。そこに《私》のすべてがある。《私》によって《私》がそこに見出された時、《私》はその見出されたものを《私》だと思ふのである（本来無意味な『神曲』と同一のテキストを『神曲』だと思ふように）。カフカの「掟の門前」(Vor dem Gesetz)の《門》のように、バベルの図書館は存在している。その厳然さは《掟》を彷彿させる。《私》がいまだに発見できない《私》が、そこにはすでに書かれてあり、またそこには《私》が表現したい文章、いまだに《私》によって書かれていない《私》の文章が存在している。そこには《私》が永遠に生きるのであれば書くであろう文章までもが前もって書かれ、保存されている。しかしその文章と、現実生命のある《私》が会う可能性は、ほとんどないのである（「バベルの図書館」の語り手は、生まれたところから数キロメートルしか行かないところで死を迎えようとしている、とある）。この図書館は、《私》のすべての過去も記録しているが、その過去を《私》は忘却しており、その過去と《私》とが出会っても、《私》はその過去が《私》の過去だとは分からない場合もあるだろう。バベルの図書館はゲシュタルト崩壊とは別の仕方、人間の行為を無意味化する。一切はすでに書かれている。神は善人に危害を加え、人間に正しい裁判をさせず、地震などの天災により罪なき者たちを殺したりなどするように見えるが、神は、自らのなすことを理解せず、厳然と《出来事》を積み上げていく、そのようにバベルの図書館の文字列は存在しているのである。そこには感情、感動、感興、意志、同情などといった心的なものは存在しない。

バベルの塔は身体の延長、《土》の延長でしかないが、バベルの図書館のありようは《神》であり、ボルヘスによって考えられたこのような《土》と無関係の《神》は、想定されてしかるべきであろう。人の願いを叶えてくれる神は《神》ではない。おそらくそれは、《土》に根差した地霊のごときのものであろう。人に働きかけられてもこの《神》は何もしない。《神》に人間的な意志はない。《神》は厳然と存在し、理念的に、演繹的に、換喩的に《人》に語られるのみであり、《人》によっては全体を表現し得ない。そのように考えていくと、人工物で出来ているブリュッゲルのバベルの塔は、驚くほど《人》である、と言える(ブリュッゲルが農民を多く描いた画家であることを考慮すれば、その《人》とは《農民》である)。塔に、《人》の手によらないものはない。これは私たちが、例えば東京の街中に出て、その、どの風景をみても感じることである。すべては《人》が作ったのである。東京駅周辺に行ってみてまわりを見渡してみても、ビルがたちならび、線路は走り、様々な食品、書物、文具、美術品などが集められ、私たちはそれを日常的な風景として眺めるが、すべては《人》=《農民》がこつこつと、少しずつ、レンガを積み重ねるように積み上げてきたものであり、その労力には驚くべきものがある。つまりこれが、《バベルの塔》である(竹久夢二の詩に「世界中の木が／一本の木になつたら／どんなに大きな木になるだらう¹⁴」というのがあるが、そういう集積を考えてみるのである)。この、《人》の、休みなく、継続的に、蓄積的に(つまり垂直的に)働く行為がブリュッゲルによって、《塔》として換喩的に表現された、それが「バベルの塔」という作品なのである。そこには人間の挫折も描かれてはいないし、神の怒りも描かれてはいない。《バベルの塔》とは人間の行為の集積であり、その行為のすべてを一瞬にしてみるとすれば、人は情報の龐大さに《発狂》するだろう。《発狂》とは限度を超えることであり、通常はそのようなことがないため、親鸞の言うように、生きているうちの悟りはない。

ボルヘスの「バベルの図書館」には、《神》が換喩的に描かれている。なぜこの《図書館》=《神》が、「バベル」なのだろうか。バベルの図書館には、バラル=《混乱》はなく、むしろあるのは《秩序》である。繰り返すが、これは

「天まで届いてしまったバベルの塔」なのであり、これはひとつの完成、完璧、完全無欠を表現している。ここには人間の挫折がないのみならず、《人》もない（バベルの塔の人々のように、司書達もそこで動きまわっているが、彼等は実は人間ではない）。またここには言語がない以上、《土》もなく、多言語化も存在しない（バベルの図書館の司書たちの言語が複数ある、例えば九十階上では言葉が通じない、などとテキストにあるから《バベル》なのか、と言え、そうではないだろう。この司書たちは物語の中心ではないので、その解釈は不自然であり無理があるだろう。もちろん図書館が「偉大な神々の家々」=バブ・イリ=バベルであることは間違いのないにしても）。バベルの図書館の書物たちに足りないものは《土》である（これは人の《分》でもある）。《土》がないから、それらの文字列は言葉ではないのだ。

X 結論 1, ネルヴァルの《バベルの塔》, 《狂気》と《真実》, そして《アレフ》について

つまり結論的に言えることは、ブリューゲルの「バベルの塔」が人間の営みを描いており、そこに全体を見ることの狂気、《発狂》があるならば、そしてすべての文字列を持つバベルの図書館のことを考えあわせれば、《バベル》とは全体、すべて、《真実》を見ることにおける《発狂》であり、《アレフ》との共通性は明らかである。

筆者はまた、《バベル》（偉大な神々の家々）の理由として、ボルヘスがネルヴァルの影響を受けていたのではないかと推測している。ネルヴァルは『オーレリア』のなかで、

En somme, je retrouvais là à peu près tout ce que j'avais possédé en dernier lieu. Mes livres, amas bizarre de la science de tous les temps, histoire, voyages, religions, cabale, astrologie, à réjouir les ombres de Pic de la Mirandole, du sage Meursius et de Nicolas de Cusa, — la tour de Babel en deux cents volumes, — on m'avait laissé tout cela ! Il y avait de quoi rendre fou un sage ; tâchons qu'il y ait aussi de quoi rendre sage un fou.¹⁵

（最終的に、そこで私は終の棲み処で所有していた、ほとんどすべてのものを、再び見出し出した。私の本というのは、歴史、紀行、宗教、カバラ、占星術などといった、あらゆる時代の学問の奇妙な寄せ集め、ピーコ・デッラ・ミランドーラ（Giovanni Pico della Mirandola, 1463-1494）や賢者メウルシウス（Johannes Meursius, 1579-1639）、そしてニコラス・クザーヌス（Nicholas of Cusa, Nicolaus Cusanus, 1401-1464）らの亡霊が喜びそうな書物たち、——二百冊からなるバベルの塔——であるが、これらがすべて残されていたのだ！ 賢者を狂人にする何かがあるそこにはあった。狂人を賢者にする何かも、そこに（存在するように、つまり）見い出せるように努力しよう。¹⁶⁾

と書いた。極めてボルヘス的な文章である。原文理解のための試訳をあえてつけたが、二百冊の本から成るバベルの塔が賢者を狂人にするという、この引用の最後の部分は重要である。賢者を狂人にするものであり、かつまた同時に、狂人を賢者にするものとは、何か？ そしてなぜそれが《バベル》なのか？ 「あらゆる時代の学問の奇妙な寄せ集め」が換喩的に《すべて》を表していると考えられるので、その答えは、ボルヘスの文脈で言えば、すべてを包摂する《アレフ》であり、《真実》に他ならない¹⁷⁾。ネルヴァルも《バベル》をそのように捉えていたのである。ピーコ・デッラ・ミランドーラ、およびニコラス・クザーヌス、そしてメウルシウス、この三人はその《真実》への到達者であると考えられる。ピーコ・デッラ・ミランドーラ、およびニコラス・クザーヌスについては、両者ともに「一即多」的な神の認識を持っている（これはカバラ的であり、エマスの的でありホイットマン的な認識であるが、両者ともに時代は異なるが共にパドヴァ大学で教会法を学んでいるという共通項がある）。この《真実》とは、二百冊の書物のどれか一冊にあるのではなく、二百冊の書物全体が交響する比較文学的《間》にあるのである（この《間》を見ることは《発狂》につながる）。それはちょうど、ボルヘスの「バベルの図書館」のエピグラフ、アルファベット23文字のヴァリエーションの《間》に、ある《真実》があるのと同然である（岩波文庫の日本語訳では、ここは「これによって、あなたは二十三通の手紙の変化を考えることができるだろう……。」となっているが、原文は“By this art you may

contemplate the variation of the 23 letters...”¹⁸となっており、これは訳者が“letters”を「文字」ではなく「手紙」と考えたことによる誤訳である。「手紙」のヴァリエーションではここでは意味をなさない。ここはアルファベットの文字たちが、さまざまな形のヴァリエーションをもっているその不思議、そしてその形が音を持ち、組み合わせられて言葉となること、などの思いをはせることを意味している。これはゲシュタルト崩壊、ひとつの《発狂》にせまる認識を示している。そうでなければ「バベルの図書館」のエピグラフとしては無意味である。ちなみにアルファベットを22文字とカウントする場合もあるが、この23文字とはおそらくiとjを一文字、u, v, wを一文字としてカウントした場合ではないか、と考えられる。これら文字のヴァリエーションを熟考すると、その果てに、ある《真実》が見えてくる。《真実》を見ることは人には許されていない。人の《分》を超えている。《真実》を見ると《発狂》する、というのがこの問題圏の要約である。

二百冊からなるバベルの塔、これら書物たちに思いを馳せることは、つまり、その成り立ちの複雑さ、著者の思い、などに思いを馳せることであり、《間》を見ることであり、その書物たちの風景は、人を発狂させる。二百人の人の人生、東京のすべての建物の成立過程、そこに生まれる人々のさまざまな人生を見るとすれば、人は発狂せざるを得ない。恋しい人を思いやり、その人が今どうしているかを思うことも同様である。恋しい人との距離、その地理が、人を発狂させる（たとえば、ここでシャガールを想起せざるを得ないだろう。精神分析的アプローチが殊に有効な画家であるシャガールが描くところの浮遊した人物たちは、この《発狂》、そして《祈り》とも関連している。彼らは祈っており、発狂しており、ゆえに《浮遊》しているのだ。またシャガールの描く建物、村、町は、どれもシャガールとの距離、地理を語るものであり、なぜ彼がこれらをモチーフとして描き続けたかを考えれば、これが、時として故郷への無限の思い、《祈り》となり、これが《発狂》や《浮遊》と深い関係性を所持することは明白であろう。さらに言えば、人間とはそもそも《発狂》する存在なのであり、逆に《発狂》しないのであれば、それは人間ではない。またブリューゲルの「バベルの塔」は人工物であるがゆえに、《土》から浮いてい

なければならない。《祈り》とは《土》からの浮上である。つまりこの塔は、人間の《祈り》なのである）。これは、要約的に述べれば、ボルヘスの《アレフ》¹⁹——直径2, 3センチメートルのその球体が宇宙のすべてを見せてくれる——である。《アレフ》はありのままの《真実》を見せてくれる。そして《真実》は賢者を発狂させる、なぜなら賢者はヴェールに覆われた部分的《真実》しか知らず、それを真実と思っているからであり、ヴェールがとれた真の姿を見せつけられれば発狂せざるを得ない。その衝撃が、同時に時として狂人を賢者にするのである。《真実》は異次元にあり、通常、人はそれを触知できない。これについての具体的説明としては次の物語が考えられる。

XI 結論2, もうひとつの《アレフ》, 宝誌の《真実》の姿について

昔、唐に宝志和尚といふ聖あり。いみじく尊くおはしければ、御門、「かの聖の姿を、影に書き留めん」とて、絵師三人をつかはして、「もし一人しては、書きたがゆる事もあり」とて、三人して、面々にうつすべきよし、仰せ含められて、つかはさせ給ふに、三人の絵師、聖のもとへ参りて、かく宣旨を蒙て、まうでたるよし申しければ、「しばし」と言ひて、法服の装束して出で合ひ給へるを、三人の絵師、おのおの書くべき絹をひろげて、三人ならびて筆を下さんとするに、聖、「しばらく。我がまことの形あり。それを見て書きうつすべし」と有りければ、絵師、左右なく書かずして、聖の御顔をみれば、大指の爪にて、額の皮をさし切りて、皮を左右へ引きのけてあるより、金色の菩薩の顔をさし出たり。一人の絵師は、十一面観音と見る。一人の絵師は、聖観音と拝み奉る。おのおの見るまゝにうつし奉りて、持て参りたりければ、御門、おどろき給ひて、別の使を遣らせ給ひて、問はせ給ふに、かい消つやうにして失せ給ひぬ。

それよりぞ、「ただ人にてはおはせざりけり」と申し合へりける。²⁰

『宇治拾遺物語』一〇七、卷九の二、「宝志和尚影事」の全文であるが²¹、宝志、あるいは宝誌という和尚のところに三人の絵師がやってきて、その肖像画を描こうとしたところ、私の《真実》の姿を見せようと言って和尚が顔面を割ると、中から金色の菩薩の姿が見えた、という話である。これを見たある絵

師は、十一面観音だと言い、別の者は聖観音だと言うので、本当のところはわからず、《真実》の姿はそれを見た物の数だけ変化したと考えられる。このテクストはネルヴァルの幻視、二百冊のバベルの塔に通ずるものがあると同時に、この《真実》、この《神》は、《バベル》に通ずるものがある。この、人を《発狂》させる真の姿は、《土》からの浮上を意味している（ノアの箱舟が《土》から浮上するように宝誌の顔面が割れてゆく）。《土》からの浮上は、母なるもの、母なる大地の否定となるだろう。それは母なる言語、mother tongue、母国語、母語の否定となるだろう。そして《土》からの浮上は、言語によらない《バベルの図書館》、父なるものへの志向を意味するだろう。バベルの塔の建設において、もし天然アスファルトが使用されていたら、それは母なるもの、自然のもの、《土》を使用することと同然であると解釈できる（《土》は当然、生み出すもの＝母となるだろう。ヤハウエは、自分が生み出す存在＝神＝父なので、《土》が生み出すものを否定したかったのではないか。それは母に対するある種の嫉妬、警戒を含むものではなかったか、と推測できる。《土》が生み出すものはまず《草》であり、これはホイットマンの『草の葉』が示す通り、極めてホイットマン的なテーマとなる²²⁾）。ちなみに、ここでの《自然》は、ヤハウエ的な神に属するものではもちろんない。ブリューゲルの「漆喰」の使用は、《土》を使用せず、《人》の力のみで、その龐大な労力、巨大さ、それを考える人を《発狂》させるような、無限に近い龐大さによって、ある《真実》を表現している。ブリューゲルの、さほど大きくもない絵のなかには、約1400名もの人間が描き込まれているが、この一点をもってしても、ブリューゲルの意図、その狂気（これがテイア・マーニア、「神の狂気」であることは言うまでもない）は明らかであろう。それはネルヴァルの「バベルの塔」を表現することである。ボルヘスの「バベルの図書館」も理念的にはそこに含まれている。要は、ブリューゲルも、ネルヴァルも、宝誌も、ボルヘスの《アレフ》（神の住まう家）を表現しているのである。これが本稿の第二結論となる（ブリューゲルの《農民》も、《バベル》的意味において捉え直す必要があるだろう。また吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』における貧しき人々の《労働》の偉大さ²³⁾も、その意味で考え直されるべきである）。

XII 直観的洞察に対する懐疑，《祈り》，そして今後の課題

紙数が尽きているので、筆を擱かねばならないが、ブリュッゲルの絵に描かれた小さな白、「漆喰」から、大きな、そして複雑で興味深い問題がここに開かれた。それはこれまで、大方の見方として、《悟り》は善であり良きものと捉えられてきたが、それは実は《神》に《ふれ》ること、《神》の怒りに《ふれ》ることであり、《人》の《分》（＝《土》）を超えることで、悪なのではないか、という問題、逆転、転回である（なぜ人間の分を超えて、例えば、考えてはいけないのか、というと、人間は全知ではないがゆえに、必ずあやまちをおかすものだからである。人間の理解は常に誤解、無理解である。人間にとっては常に一寸先は闇であり、善と考えるの行動が、結果的に悪となることは往々にしてあることである）。ベルグソンの二つの認識のうち、直観的に、絶対的に知ることは、これまで、善であり、本来人間に求められるものであり、良きものとして捉えられてきたが、実はそれは悪なのではないか。直観的に事件を、《真実》を把握するポオの探偵オーギュスト・デュパンは、何も分からない警視総監よりも賢くないのではないか。絶対的であることよりも、相対的であることが良く、本質がわかることよりもわからないことが尊く、先が見えることよりも盲目的であることが求められているのではないか。神は水平に生きよと命じる。広がれ、群がれ、と。しかし垂直に伸びようとする人間は、神の怒りをかう。まわりまわって、結局は「バベルの塔」の通常解釈のように、そのようになるのではないか。

人間の、果てしのない、蓄積的な働きが、ブリュッゲルによってここに描かれている。ブリュッゲルは多くの農民も描いたが、それを描いたブリュッゲルの真意も、まさに《バベル》にあったのではないか。「バベルの塔」は、それ自体が労働する《人》の《祈り》であり、《祈り》にふさわしくそれは浮上している。それはむしろヤハウエの願い通りの姿である。ボルヘスの「バベルの図書館」が与える虚しさ（「一切は書かれている」）に対して、ブリュッゲルの「バベルの塔」は《人》の営みの偉大さを示しているのである。そこに人間の

挫折は感じられない。

最後に、《土》と《人》との切り離しの物語は、さまざまな形で展開が可能であるが、その物語が齎す逆説（「バベルの図書館」に出てくる、書物の中に意味を求めるのではなく、夢や手相に意味を求めるというのも、その逆転、逆説のひとつである）、および今回は考察できなかった《土》（当然そこに眠る死者たちのことは考えざるを得ないだろう。フォークナーとの関連もある。またもちろん、ピーテルの息子、次男のヤン・ブリューゲルの《楽園》の問題もある）と和辻哲郎の《風土》との関係を、今後の「バベルの図書館」論の課題とすることを述べて、今は稿を結ぶこととする。

- 1 『生命之光』no.780, キリスト聖書塾, 2018年1月, 3頁。なお引用は手島郁郎訳であり, これは原文の直訳である。
- 2 ピーテル・ブリューゲル (Pieter Bruegel de Oude, 1525年-1530年頃-1569年) は, 16世紀のフランドル (ブラバント公国, 現在のベルギー) の画家である。
- 3 この展覧会に付随して, 5月12日 (金) 夜の東京藝術大学による「バベルの塔」3DCG映像のイベント, また会期中, 同大学の関連企画 Study of BABEL の開催, また大友克洋氏の新作 INSIDE BABEL 特別公開, また「バベルの塔」と東京タワーが会期中限定で「友好タワー」となり, これを祝して約46,000ピースのレゴで作られた「レゴバベル」が東京タワーに設置され, 両会場でスタンプラリーが実施される, 等, この年《バベルの塔》が一大イベントになった。
- 4 *Introduction à la métaphysique* (Henri Bergson, *Œuvres*, Presses Universitaires de France, 1959) 参照。また拙論「メタフィクションの不可能性——志賀直哉「小僧の神様」について——」『桜文論叢』第91巻 ジョン・B・パワー先生古稀記念号 (日本大学法学部機関誌編集委員会, 2016) 註8番を参照のこと。
- 5 バベルの塔展の図録, 183頁には「地上から頂上部へ漆喰を運んだ白い痕がついている。(旧約聖書では, 塔の建設素材は“煉瓦”と“タール (tar)”となっており, “タール”はアスファルト, 石灰などの諸説がある)。運搬の途中に落ちた漆喰の粉をかぶったのか, 真っ白になった人々の様子も描かれている」とある。
- 6 これは大手拓次研究で有名であった早稲田大学教授・故原子朗先生がある講演で述べていたことである。パリの石畳を扱う石工が, 石の交換の際に, 任意に石を選択するのではなく, 石との相互主体的な対話から石が配列されているという, 在外研究でパリにいたときに職人から聞いた話を題材に, 直観と想像力, 相互主体性の話をされていた。
- 7 ヤハウエは, 人間が本稿註4の拙論で述べた〈あなた—あなた〉関係に陥ることを

嫌ったのではないか。とすれば西欧の一つの根源がここにあると考えられる。ヤハウエは〈私―彼〉関係を志向した。そうでなければ、法も契約も成り立たないことになる。

- 8 これは内観的にも言えることではあるが、「祈る」とは大地から離れること、浮上すること、現実から離れることであると、彫刻家・舟越桂も述べていた(「switch インタビュー 達人達 長塚圭史×舟越桂」2015年5月13日放送, NHK)。
- 9 Jorge Luis Borges, *Obras completas 1*, Emecé Editores, 2010, 505
- 10 Borges, 499-505
- 11 入沢康夫, 「バベルの図書館は一枚の垂直面なのだろうか」, 『現代思想』, 青土社, 1979年2月号, 24頁
- 12 入沢, 『現代思想』, 1979年4月号, 24頁
- 13 入沢, 『現代思想』, 1979年4月号, 25頁
- 14 竹久夢二「大きな音」, 石井桂子編『竹久夢二詩画集』所収, 岩波文庫, 岩波書店, 2016, 95頁
- 15 Gérard de Nerval, *Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, Librairie Gallimard, 1960, 406
- 16 この訳出に当たっては、『ネルヴァル全集 VI 夢と狂気』, 筑摩書房, 2003, 95頁(「オーレリア」の箇所は田村毅訳), および朝比奈美知子「屋根裏の『バベルの塔』: ネルヴァルの放浪・蒐集・夢」, 『仏語仏文学研究』42, 東京大学仏語仏文学研究会, 2011, 55-6頁における該当箇所の訳を参照させていただいた。なお, この朝比奈論文は, 筆者がボルヘスとネルヴァルを本稿において結びつける示唆を与えて下さった。記して感謝する次第である。しかしこの朝比奈論文においては, 本稿引用部分の, «tâchons qu'il y ait aussi de quoi rendre sage un fou.» が引用されておらず, 省略されている。おそらく訳出しにくい箇所なので省略したのではないかと考えられるが, この箇所は前の «Il y avait de quoi rendre fou un sage;» と, もちろん対句になっており, 片方だけを引用したのでは, 本文中で考察した《真実》の問題が閉ざされてしまい, ネルヴァルの真意が理解できない, ということになる。また «histoire, voyages, religions, cabale, astrologie» とある列挙, 羅列であるが, 英語でも “A, B, C, and D” であれば, これは A, B, C, D だけ, それ以上はない, という意味になるが, and がなく, “A, B, C, D” となっていた場合, これには E, F, G... が想定されている, という意味になる。フランス語, またスペイン語などにおいてもこれは同様であり, 原文のフランス語にも «et» がないので, E, F, G... が想定されている, ということになる。したがって訳としては「歴史, 紀行, 宗教, カバラ, 占星術など」と, 「など」を訳出する必要があるだろう。ネルヴァル全集の訳では, これが訳出されていない。
- 17 『ラ・ロシュフコー箴言集』(二宮フサ訳, 岩波文庫, 2015, 12頁) には, 「情熱はしばしば最高の利口者を愚か者に変え, またしばしば最低の馬鹿を利口者にする」とあり, 引用の最後の部分に類似している。したがって「賢者を狂人にする何か」を

「情熱」と考えることもできるが、引用で言及されているミランドーラやクザーヌスのことを考慮すれば、ここは「情熱」ではなく、真理や真実が想定されるべきであると考ええる。

18 Borges, 499

19 Borges, 658-669

20 三木紀人＋浅見和彦＋中村義雄＋小内一明校注『宇治拾遺物語 古本説話集』（新日本古典文学大系42），岩波書店，1990年，221-2頁，但しここでは，読みやすさ，あるいは読者の誤読，読み間違いを避ける意味でも若干表記を変更した。

21 このテキストについては，現在執筆中の，小林秀雄「人形」についての著書の中で，より深い考察がなされている。

22 下記拙稿を参照のこと。「ホイトマンにおける Prudence——日本ホイトマン協会創立50周年を記念して——」，『ホイトマン研究論叢』第31巻，（日本ホイトマン協会，2015）および「“The Sleepers”について——文学研究，そしてホイトマンと仏教，特に華嚴経の「一即多」から——」，『ホイトマン研究論叢』第29巻，（日本ホイトマン協会，2013）

23 『君たちはどう生きるか』のコペル君の「人間分子の関係，網目の法則」もまた，《バベル》的意味合いを持っており，同様のことはボルヘスも「神の書跡」の中で述べている。これについては拙著『虎の書跡——中島敦とボルヘス，あるいは換喩文学論』（水声社，2004）15-20頁参照。

Motion Analysis of Women's Judo Matches in the 2012 : London Olympics by Weight Class

Yoko TANABE

ABSTRACT: The motions of women judo athletes employing judo throwing techniques resulting in an *ippon* score at the 2012 London Olympics were analyzed by six weight classes using video data. The purpose of this study was to examine differences in the duration of *kake* phase (throwing phase) by weight class. Video data were analyzed using a software system based on OpenCV. The beginning and ending of the kake phase were determined for throws resulting in an ippon score, and then the duration of the kake phase was measured. Mean values and standard deviation for kake durations were calculated for six weight classes. No significant difference was found in kake duration by weight class.

KEY WORDS: Women's Judo, Throwing technique, Ippon, Kake.

INTRODUCTION

This study tested the hypothesis that the duration of the *kake* phase (throwing phase) in a judo throw is longer in heavier weight classes than in lighter classes. For this purpose, motion analysis of actual judo matches was performed to investigate whether any difference actually exists. Various

previous studies have used video to examine motions in judo, including studies on judo throwing techniques, mathematical analyses of biomechanics in judo, and studies on relations between judo and other sports. Imamura, Hreljac, Escamilla, and Edwards (2006) investigated three-dimensional analyses of the center of mass of thrown opponents in the *harai goshi*, *seoi nage*, and *osotogari* throwing techniques. Blais, Trilles, and Lacouture (2007) described joint dynamics and energy expenditure during the execution of the *morote seoi nage* throw, using an ergometer with two force sensors coupled with two force platforms, and six synchronized infrared cameras. That study described modeling methods that are limited to the *morote seoi nage* throw. Alfonso (2009) analyzed the most frequent mistakes related to initially imbalanced movement in the execution of the *uki goshi* hip throw by adults with no previous judo experience, and showed how the observed errors provide Judo professionals with a useful support tool for teaching inexperienced subjects. Sacripanti (1997) described a biomechanical theory of judo competition, introducing a mathematical theory for all contest sports. Some force techniques were introduced as a second-order ordinary differential equation, using the *uchi mata* throw as an example.

Recently, judo coaches have used computerized performance analysis to advise athletes after competition. Rosado, Mesquita, Breia, and Januário (2008) appear suggested that the coach's task is to present feedback for athletes. Hassmann, Buchegger, Stollberg, Sever, and Sabo (2010) said that 3D motion analysis provides more detailed findings in judo athlete performance. Raquel, Javier, Emerson, Pedro, and Nemanja (2014) showed the effect of receiving a penalty on the following positive actions of judo competitors. World-ranking athletes use several technical and tactical skills in a judo contest (Marek, Mirosław, & Radosław, 2014), so studies examining motions in judo are more

effective when they consider actual judo matches. Deterministic models are useful tools for analyzing changes in movement and process through improved knowledge (Chow, 2011).

There are three phases in a complete judo throw: *kuzushi*, *tsukuri*, and *kake*. In the *kuzushi* phase, the thrower makes initial movements for taking the opponent off balance (Figure 1). In the *tsukuri* phase, the thrower quickly positions the opponent so that conditions are ready for the throw (Figure 2). The thrower completes the throw in the *kake* phase (Figure 3). Blais et al. (2007) showed that most energy exerted is during the *tsukuri* phase, when the thrower is positioned under her opponent.

Figure 1: The *kuzushi* phase



Figure 2: The *tsukuri* phase



Figure 3: The *kake* phase



Throwing mechanics based on judo techniques are effective in the three phases. Actions in the kuzushi phase unbalance the opponent in preparation for a throw, and generally involve the body and arms (Kodokan, 2000). It can be very difficult to make an opponent off balance, especially when the opponent is resisting under match conditions. An attack may involve actions intended to set up a different throw after disrupting the opponent's balance, so it is important to move quickly in this phase, to be ready for such an action after disrupting the opponent's balance and placing them in a disadvantageous position. The thrower should be able to follow through with the direction of the attack relatively easily, while retaining good balance for a proper finish. Blaise et al. (2007) showed how such phase-linked movements are determined at each joint, thereby defining motor skills employed in throwing techniques. When an athlete gracefully throws the opponent down in judo competition, the throw is awarded an *ippon* (“one full point”) score (IJF, 2015). The criteria for an ippon score is that a throw is successfully applied, with the opponent landing predominantly on her back with force and speed.

METHODS

Video data provided by the All Japan Judo Federation were used to analyze motions in throwing techniques in women's judo at the 2012 London Olympic Games. The analysis was limited to matches in which an ippon score was awarded. Using the videos, Differences in duration of the kake phase were statistically analyzed in six weight classes. Kake duration was defined as the period of time between the beginning and ending time of kake motion.

PARTICIPANTS

Participants were winners of Judo matches in six weight classes in the 2012 London Olympic Games who were awarded an ippon. The weight classes analyzed were under 48 kg, under 52 kg, under 57 kg, under 63 kg, under 70 kg, and under 78 kg. Weight category cutoffs of 48, 52, 57, 63, 70, and 78 form a quadratic progression where the size of difference between each pair of adjacent terms increases by 1. The objective of this study was to examine whether there exist differences in kake duration among the six weight classes. Note that while an over 78 kg weight class exists, it was not included in this study because of its lack of an upper weight limit.

EQUIPMENT

Video data were used to examine motions in women's judo. This data were converted to AVI format using the XMedia Recode conversion tool. The video resolution was 640×360 pixels, the aspect ratio was 16:9, and the frame rate was 25 fps, so frame captures occurred every 0.04 s. Motion analysis was performed using a software system based on OpenCV, an open source library for computer vision and image processing developed by Intel Corporation. This software system has functions for forward and backward AVI data play, inverse play, fast-forward play, fast-rewind play, and frame-by-frame play. The system can also take video snapshots during frame-by-frame playback.

MEASURING KAKE DURATION

The start of the kake phase is defined as the time when either of the

thrower's feet moves forward to attack. The end of the kake phase is defined as the time when the opponent's back is inclined about 45 degrees with respect to the floor by visual inspection. In this posture, it is impossible for the opponent to recover her balance. The kake duration is defined as the span of time between the start and end of the kake phase. The following procedure was performed to measure the kake duration in seconds using the software system:

1. Fast forward to an awarded ippon score.
2. Using the rewind function, find the frame in which the thrown opponent's posture was about 45 degrees with respect to the floor by visual inspection, and record the frame number.
3. Using the rewind function, find the frame in which either foot of the thrower begins move forward in the attack, and record the frame number.
4. Calculate the difference between the frame numbers.
5. Evaluate the duration of the kake phase by multiplying the difference in frame numbers by 0.04.

RESULTS AND DISCUSSION

The mean and standard deviation of kake durations were statistically analyzed in each weight class. The results are presented in Table 1.

There were 23 matches for the under 48 kg class. 3 matches were won by ippon. The mean and standard deviation of kake duration for these 3 matches were 1.333 and 0.500 s, respectively. Among these 3 matches 68.26%, which were at least 2 matches' of kake time were between 0.833 and 1.833 of a second.

There were 26 matches for the under 52 kg class. 7 matches were won by

ippon. The mean and standard deviation of kake duration for these 7 matches were 1.314 and 0.493 s, respectively. Among these 7 matches 68.26%, which were at least 6 matches' of kake time were between 0.76 and 1.782 of a second.

There were 27 matches for the under 57 kg class. 7 matches were won by ippon. The mean and standard deviation of kake duration for these 7 matches were 1.440 and 0.656 s, respectively. Among these 7 matches 68.26%, which were at least 6 matches' of kake time were between 0.946 and 1.522 of a second.

There were 26 matches for the under 63 kg class. 3 matches were won by ippon. The mean and standard deviation of kake duration for these 3 matches were 1.733 and 1.097 s, respectively. Among these 3 matches 68.26%, which were at least 4 matches' of kake time were between 1.034 and 2.292 of a second.

There were 25 matches for the under 70 kg class. 6 matches were won by ippon. The mean and standard deviation of kake duration for these 6 matches were 1.340 and 0.534 s, respectively. Among these 6 matches 68.26%, which were at least 6 matches' of kake time were between 1.097 and 1.919 of a second.

There were 24 matches for the under 78 kg class. 9 matches were won by ippon. The mean and standard deviation of kake duration for these 9 matches were 1.476 and 0.669 s, respectively. Among these 9 matches 68.26%, which were at least 6 matches' kake time were between 1.012 and 2.356 of a second.

Table 1: Analysis of judo motions (time is measured in seconds)

Weight class (kg)	Mean kake duration (s)	Standard distribution of kake duration (s)	Number of matches (s)	Number of ippon scores (s)	Rate of ippon scores (%)
48	1.333	0.500	23	3	13.04
52	1.314	0.493	26	7	26.92
57	1.440	0.656	27	7	25.93
63	1.733	1.097	26	3	11.53
70	1.340	0.534	25	6	24.00
78	1.476	0.669	24	9	37.50

From Table 1, differences in mean kake phase duration by weight class might be arise from differences in weight and thus muscle power, but other possible factors include differences in throwing technique and the development of each match. Thus, correlations between kake duration and weight class were investigated. In addition, any correlations between the standard deviation of kake duration and weight class were investigated. To do so, correlation coefficients and regression values were examined using the values in Table 1. Table 2 shows the results.

Table 2: Correlation coefficient and regression coefficient

	Between mean kake duration and weight class (s)	Between standard distribution of kake duration and weight class (s)	Between rate of ippon scores and weight class (s)
Correlation coefficient	0.3160	0.2700	0.5760
Regression coefficient	0.0044	0.0055	0.1110

The correlation coefficients and results of regression analysis presented in Table 2 indicate no relation between weight class and mean kake duration, standard deviation of kake duration, or rate of ippon scores.

CONCLUSION

This paper presented an analysis of motions involved in judo throwing techniques performed by women in the 2012 Olympics using video data provided by the All Japan Judo Federation. Videos were limited to matches in which ippon scores were awarded.

The number of matches and the mean and standard deviation of kake durations were described in six weight classes, and differences in kake durations were analyzed in each weight class. Regression analyses indicated no relation between means or standard deviations for kake durations or the rate of ippon scores among the weight classes.

REFERENCES:

- Alfonso, G., Iván, Prieto., José M, Cancela. (2009). Most frequent errors in judo Uki Goshi technique and the existing relations among them analysed through T-patterns. *JOURNAL OF SPORTS SCIENCE AND MEDICINE*, 8(CSSI 3), 36-46.
- Blais, L., Trilles, F., & Lacouture, P. (2007). Three-dimensional joint dynamics and energy expenditure during the execution of a judo throwing technique (Morote Seoi Nage). *J Sports Sci*, 25(11): 1211 – 1220.
- Chow, J. W. (2011). THE USE OF DETERMINISTIC MODELS IN BIOMECHANICS RESEARCH. *Sports Biomechanics [Peer Reviewed Journal]*, Vol.10(3), pp.219-233.
- Hassmann, M., Buchegger, M., Stollberg, K-P., Severa, A., Saboa, A. (2010). Motion analysis of performance tests using a pulling force device (PFD) simulating a judo throw. *8th Conference of the International Sports Engineering Association (ISEA)*.
- IJF. (2015). Sport and organization rules of the International Judo Federation. *International Judo Federation*.
- Imamura, R., Hreljac, A., Escamilla, RF., Edwards, WB. (2006). A three-dimensional analysis of the center of mass for three different judo throwing techniques *JOURNAL OF SPORTS SCIENCE AND MEDICINE*.
- Kodokan. (2000). Kodokan New Japanese English Dictionary of Judo. *Kodokan*.
- Marek, A., Mirosław, S., & Radosław, L. (2014). A Technical and Tactical Profile of the Double Olympic Judo Champion: A Case Study. *International Journal of Sports Science & Coaching*, Volume 9.

- Raquel, E.-M., Javier, C., Emerson, F., Pedro, F., & Nemanja, S. (2014). The impact of effectiveness and judo competitors penalties on subsequent attack combat outcome among high elite. *International journal of Performance Analysis in Sport*, 14, pp946-954.
- Rosado, A., Mesquita, Isabel, Breia, Ezequiel, Januário, Nuno. (2008). Athlete's Retention of Coach's Instruction on Task Presentation and Feedback. *International Journal of Performance Analysis in Sport*, Volume 8, 19-30.
- Sacripanti, A. (1997). Biomechanical Classification of Judo Throwing Techniques (Nage Waza). *ENEA Technical Report*, 181-194.

Nagasawa Kanaye: The Spiritual Life of California's Japanese Wine Pioneer

Thomas Lockley

Abstract

In 1867, a young Japanese man, Nagasawa Kanaye (長澤鼎), joined the charismatic American Thomas Lake Harris' sect called 'The Brotherhood of the New Life.' Harris' teachings were originally inspired by the eighteenth-century Swedish Lutheran mystic, Emanuel Swedenborg, but later drew on a variety of religious and spiritual influences from around the world, including Japan. Harris went out of his way to attract Japanese men to his American communities and the most loyal, Nagasawa, eventually became his leading disciple and acknowledged heir. Nagasawa's spiritual involvement with Harris has traditionally been played down in favor of his status as a Californian wine guru and pioneering Japanese immigrant. This study, however, analyzing personal diaries and correspondence, attempts to uncover how a young samurai, raised to despise Christianity, became Harris' leading follower. It sheds new light on Nagasawa's religious side and what exactly his membership and eventual leadership of 'The Brotherhood of the New Life' meant to him and other Harris disciples.

1. Introduction

The British-born American, Thomas Lake Harris (1823-1906), founded a series of Christian communities in mid-nineteenth-century America, from New York State to California. The last and most enduring of these were under the aegis of ‘The Brotherhood of the New Life’ (hereafter, the Brotherhood), which Harris founded in the early 1860s. The Brotherhood combined aspects of Harris’s earlier American interests with themes from Eastern philosophies and religions – from India, China, Japan and beyond. Strikingly, Harris and his movement sought out Japanese converts to join their American communities, initially not in Japan, but in Britain. The most significant such convert for the Brotherhood was Nagasawa Kanaye (1852-1934), who was partly educated in Scotland, and eventually became Harris’s leading disciple and acknowledged heir in America.¹

There has been little scholarly attention dedicated to Nagasawa’s own life or the implications of his religious views and communal experience. He has been noticed among a group of Japanese students from the Satsuma Domain who came to Britain in the 1860s², as well as among advocates for Japanese emigration to west-coast America in the early 20th century, and most prominently among pioneers of California viticulture.^{3 4} Much of this work is more journalistic than academic in tone and glosses over how Nagasawa’s formative years in Japan and his British sojourn linked to his life in America. Furthermore, such studies evince views identified by Edward Said as ‘orientalism’ – typically a romanticizing of aspects of Nagasawa’s eastern background.⁵ No study of Nagasawa has ever taken his communal religion or beliefs seriously, commonly playing down his involvement in the Brotherhood, and often simply portraying him as a naive follower of Harris. However, as Nagasawa’s educational attainment in Japan and Scotland and

his business success in the USA suggests, besides his personal diaries and correspondence, it is unlikely that such an intelligent, and evidently thoughtful man was either Harris's dupe, or personally uncommitted to Harris's communal cause.

This article explores Nagasawa's religious activities and in doing so, attempts to answer perhaps the central historical question of Nagasawa's extraordinary life: how did an upper-class Japanese boy, brought up to doubt religion in general and Christianity in particular, become the leader of a 'theo-socialist', millennial Christian sect? An answer is sought through reconsidering both the Japanese religious and social context in which Nagasawa was brought up, and the trans-Atlantic context in which he was exposed first to Protestant Christianity, then to Thomas Lake Harris's distinctive form of religious communalism. Surviving evidence from Nagasawa's American communal career, including his diaries, are re-analyzed in light of this global perspective.

2. Japanese roots

Nagasawa Kanaye was born Isonaga Hikosuke (磯長彦輔), a mid-ranking samurai of the Satsuma Domain, in 1852.⁶ The Satsuma controlled the very southern reaches of the Japanese isles, southern Kyushu and the archipelago stretching down towards Taiwan, the then Kingdom of Ryukyu (now Okinawa Prefecture). The ruling family was the Shimazu (島津氏), who, due to having backed the wrong side in the Battle of Sekigahara in 1600, were largely excluded from central power, which was exercised by the Tokugawa clan (徳川氏) from Edo (now Tokyo). However, because of their international trade wealth and strategic position, the Shimazu were left largely to their own devices and even allowed to occupy the Ryukyu Kingdom as a de-facto colony, exploiting it for trade and knowledge of the outside world.

Since 1635, the Tokugawa had legally barred most international travel, and the few thousand foreign residents in Japan were generally allowed little local contact without special permission. Despite this, a large import/export trade in products and commodities was continued, and also ideas through Chinese writings and Dutch-language copies of European works. By virtue of their Ryukyu colony, the Satsuma were the only clan, other than the Tokugawa, with direct and extensive trade links to the wider world.⁷ As Occidental sea power, seeking whaling grounds and coaling stations, came ever closer to Japanese waters in the mid nineteenth century, the Satsuma Domain formed ambitious yet illegal plans for expanded trade, rearmament, educational reform and industrialization.⁸

An early plan to send students secretly to Europe was formed in the 1850s, but this was shelved until a conflict with the Royal Navy in 1863 gave the idea new impetus.⁹ In 1864, Satsuma founded a school of Western Studies, the *kaiseijo*, with Isonaga Hikosuke an inaugural pupil. Born into a family of scholars, of both European and Confucian learning,¹⁰ the young Hikosuke reportedly memorised the Four Books and Five Classics of Confucius as a boy, and was introduced to Japanese translations of European works from an early age.¹¹ His studies at the *kaiseijo* included gunnery, astronomy, geography, mathematics, navigation, shipbuilding, physics, chemistry and medicine, but his specialism was English.¹² Among his teachers was Nakahama Manjiro (中濱万次郎) – a central figure in helping Japan come to terms with the new world order it encountered in this period.¹³ Nakahama was a castaway fisherman, who had been rescued by an American ship and subsequently educated in New England before signing up on whaling voyages and eventually joining the California gold rush. He returned to Japan, via Hawaii and Ryukyu, in 1851, helped the Satsuma and Tokugawa found modern shipbuilding industries and became an English

teacher and interpreter.¹⁴

By 1865, the Satsuma Domain had resumed their project to send students to study at the heart of what was then the world's most powerful empire: Great Britain.¹⁵ As an intelligent, well-read boy, Isonaga Hikosuke was a natural choice for this mission, and the youngest of those selected. He was reportedly filled with joy and excitement upon receiving his orders to sail.¹⁶ He and the other students, with suitable chaperones, were eventually smuggled out of the country by Thomas Glover – a Scottish merchant based in Nagasaki who would later help to found both Mitsubishi and the Kirin Brewery corporations among other major commercial ventures.¹⁷ The party took ship for Hong Kong on 16 April 1865. To protect themselves and their families from possible legal repercussions, they all assumed aliases; Isonaga Hikosuke had the name of Nagasawa Kanaye bestowed upon him by his lord.

Nagasawa would have left Japan with a distinctive collection of social and religious ideas inherited from his upbringing and cultural environment. Social relations and the moral environment in Japan of this time were dominated by Confucianism, which strives for a harmonious society through regulating human relations and encouraging personal moral goodness. This is achieved through benevolence to others, observing proper ritual, and study. Obedience, deference and respect for authority are learned, and benevolence towards the young and weak directed. Families venerate their ancestors and preserve the family name for future generations. While Confucianism rejects divinity, it recognizes earthly, spiritual and celestial realms.

From the eighteenth century, the Edo government legally enforced 'Neo-Confucianism,' instigating a movement called *kokugaku* (national study) which rejected 'foreign' practices such as Buddhism, in favour of supposedly

‘pure’ Japanese ways, such as the ancient practices and mythology now referred to as Shinto – commonly translated as ‘Way of the Gods’.¹⁸ The *kokugaku* movement attacked any fusion with Buddhist practices, encouraging several clans to persecute Buddhism (though the Satsuma were not among them until after 1868¹⁹), and by the mid-nineteenth century new spiritual and communal movements with Shinto flavours such as *Kurozumikyo* and *Tenrikyo* had arisen. Kokugaku nevertheless remained a minority philosophy, and temples continued to house Buddhas alongside Shinto *kami* – often translated as ‘gods,’ but in fact closer in feeling to the European concept of nymphs, dryads or shades. Ancient practices encouraging cleanliness, avoidance of impurity, order, harmony and strict ritual observance had fused with Japanese Buddhism and daily life practices.²⁰

The third major moral system present in Nagasawa’s youth was *bushido* – ‘the way of the warrior.’ Samurai were taught to revere and strive for wisdom, benevolence, and courage. A samurai boy would have been brought up in Spartan conditions, learning calligraphy, ethics, literature, history and various martial arts, distaining both luxury and money. As the prominent Japanese educationalist and scholar Nitobe Inazo (新渡戸稲造) recognized, even in 1908 *bushido* remained “a living object of power and beauty among us”; it “scents the moral atmosphere”, just as it would have done half a century earlier, during Nagasawa’s childhood.^{21 22}

The one belief system that would decidedly not have been present in Nagasawa’s world was Christianity, which had been illegal on pain of death in Japan for over two hundred years. The Jesuits had enjoyed great success in the sixteenth century, but their political maneuvering led the government to suspect ulterior motives, and in the early seventeenth century numerous rounds of persecution wiped Catholicism from Japan. Even in Nagasawa’s

time, throughout the country, at regular intervals on roads and in strategic locations, injunctions against the 'false teachings' were prominently displayed and any suspected Christian was immediately arrested. In the Satsuma Domain legal code, Christianity, along with the Buddhist Ikko sect, was specifically prohibited with punishments to be expected also noted. Only in the 1860s, once the first Japanese travellers to Europe and North America began to connect Protestant Christianity to industrial and social progress, did some convert, or at least profess admiration for such exotic and strange western beliefs.

3. Nagasawa in Britain

The Satsuma party arrived in London on 21 June 1865 and most of them enrolled at University College, London – then the only secular higher education institution in England (Oxford and Cambridge still required subscription to the doctrines of the Church of England to claim a degree). Nagasawa, aged thirteen, was too young to enter university, but, after two months English study in London, went to stay with Thomas Glover's family in Aberdeen, on the east coast of Scotland. By his arrival in Aberdeen, he was reportedly already fluent in English, and soon picked up a Scottish accent although he sometimes had problems with the local dialect.²³ From this date, he appears to have spoken and written mainly in English. In the Glover household Nagasawa was treated as a member of the family and even when he got in trouble for fighting with a local boy who had thrown a potato at him, Mary, his host mother, comforted him and praised him for beating the potato thrower.²⁴

Aberdeen in 1865 was in the middle of a rapid transition from small, isolated northern community into an attractively-built, prosperous, ever-growing, internationally connected harbor city and maritime industrial

powerhouse. As such, it would have been quite a cosmopolitan place with sailors and merchants from far and wide.²⁵ There were even Japanese visitors inspecting ships ordered through Thomas Glover, though these were officials connected to the Tokugawa family, so Nagasawa had to remain incognito.²⁶

Nagasawa was enrolled in the Chanonry House School, an institution founded in 1847. The school was intended to provide a more modern and comprehensive curriculum than the historic grammar schools. Drawing lessons from the modernised *Gymnasium* model of secondary schooling in Germany, Chanonry House was often referred to as the ‘Gym’.²⁷ By Nagasawa’s time, most Scottish graduates, including Thomas Glover, sought their fortunes abroad or joined the colonial civil service. The school also attracted many overseas students – principally the sons of British colonial settlers. During its history, one other Japanese pupil is recorded, along with several Indians and a handful of continental Europeans and North Americans. Conditions at the school were very austere, with hardly any bathing facilities, and a principal diet of porridge, oatcakes and bread, with one meat dish of doubtful quality at midday, and perhaps some dried haddock (a white fish) in the evening as a treat.²⁸

One former pupil of the period recalled that religion was more “a burden we had to bear” than a subject taken seriously by the students.²⁹ However, the principal and founder, the Reverend. Dr. Alexander Anderson, most certainly did take religion seriously, and by today’s standards, and compared to Nagasawa’s upbringing, the Christian component of the curriculum was considerable. The school he oversaw included twice-daily prayers, and an extensive prayer meeting on Thursday evenings, with psalms and bible readings. Students were required to attend a church of their own choice in Aberdeen on Sunday mornings, and attend the school

chapel on Sunday evenings. Notes were taken on both Sunday sermons, which were then collected by Anderson to ensure that students had paid attention.³⁰

It was at school, and in Aberdeen more generally, that Nagasawa acquired his first full experience of Christianity, and a severe Protestant variety at that. Prior to his arrival in Aberdeen, Nagasawa appears to have remained in the care of the Satsuma escorts in London, who would certainly have forbidden Christian activities. Little or no evidence survives of Nagasawa's earliest personal response to the Christian doctrines preached around him. Like others he may have only paid lip service to the religious duties to avoid punishment, but later evidence which suggests Nagasawa kept up the practice of note-taking in sermons in his American communities may indicate a formative experience in his Scottish schooling.

Nagasawa studied Latin and Greek but also – uncommonly for the era – extensive mathematics, science (including geology and astronomy), geography, French and German. The school was notable for encouraging what would now be termed ‘critical thinking,’ as opposed to the cramming approach prevalent in Scotland at the time.³¹ The educators were all Scottish, except for the languages teacher – a German of French origin called Pedro Dusar. The school prospectus of 1855 noted that Dusar had “the rare qualification in a foreigner, of being an admirable Disciplinarian”.³² As this pejorative comment shows, Nagasawa would have contended with an atmosphere of distrust and jingoism as a foreigner. Despite this, the school record noted: “the boy from Japan carried everything before him in his classes”³³ and his rank at the top of his class each year for various subjects was even reported in the local newspaper.³⁴

The Satsuma students had been in Britain little more than a year when the clouds of civil war appeared over Japan. The Boshin War's purported

aim would be to restore the Emperor to power and end the 700-year Shogunal usurpation. While the Emperor Meiji would ostensibly be made head of state, the country would eventually come to be governed by a European-style oligarchy and administration, some of whose members numbered among the Satsuma students. As a result of the build up to, and successful prosecution of, the war the Satsuma Domain could no longer afford to support its students in Britain, leaving them with a difficult choice – either go home to fight or continue their studies without clan financial support. Ten of the party elected to return in late 1866 and early 1867, but nine chose to stay. It was at this point that several of the students were introduced by Thomas Glover to Laurence Oliphant (1829-1888), a Scottish aristocrat, travel writer, diplomat, British Member of Parliament and follower of Thomas Lake Harris.

Oliphant had been a member of one of the first British legations to Japan in the late 1850s, and was briefly, in 1861, a junior member of the permanent diplomatic staff in Edo, a position which was cut short by a renegade samurai's assassination attempt in which he was seriously injured. Despite this, he conceived a love for the country, and wrote that Japan enchanted him. Between these postings, in 1860, Oliphant and his mother, Lady Maria Oliphant, had met Thomas Lake Harris in London. Interested in Harris's teachings, they were not permitted to join the Brotherhood community immediately, as Laurence retained his diplomatic position, then secured a parliamentary seat in 1865.³⁵

During 1866, Oliphant befriended numerous Japanese men in London, but the Satsuma party in particular. Oliphant took the London-based students under his wing, personally educating them about international affairs, and arranging extensions of their education in other areas. In time, he even supported some financially after they chose not to return to Japan.

Nagasawa was among those who decided to remain, and when, as a group, they asked Oliphant for advice about future directions, he suggested that they make the journey to New York State where he knew that Harris was interested in recruiting Japanese followers. Two of the students, Sameshima Naonobu (鮫島尚信) and Yoshida Kiyonari (吉田清成) accompanied Oliphant to New York in 1866. Their meeting with Harris moved them deeply, both men said they had “physically felt God’s presence inside them.”³⁶ On this visit, Oliphant requested Harris’s permission to join the community, but was refused again on the grounds that he was not yet spiritually advanced enough.

The following year, in April 1867, Harris himself visited Europe, including the Paris Exposition. This time, Oliphant introduced him to a further six of the Satsuma students, including Nagasawa. In August, Oliphant, at last granted permission to join the Brotherhood, resigned his seat in parliament to join the new Brocton community, and Nagasawa and five other of the Satsuma students joined him, as did Oliphant’s mother in 1868.³⁷

4. The Brotherhood of the New Life

To understand Nagasawa’s spiritual life, it is necessary to look at Thomas Lake Harris, Nagasawa’s self-proclaimed spiritual ‘father’ and his works. Harris first emigrated from Britain to the eastern United States with his parents, aged five, in 1828. He became minister at the Fourth Universalist Church in New York in 1844. By 1850, Harris had become involved with Emanuel Swedenborg’s writings and gathered his own followers to form the Mountain Cove community between 1851 and 1853. Swedenborgism held that there were three levels of reality: physical, spiritual, and celestial. He claimed through ‘spiritual sight’ that there were hidden correspondences

between these levels, so that realities in heaven would come to be realities in the physical and spiritual realms – or earth would become like heaven, realizing the millennial new Jerusalem. Swedenborg further claimed to be able to hear the voices of angels, or of dead souls who became spirits in the higher spheres.³⁸

In 1857, Harris claimed to have received divine revelations enabling him to commune directly with God through ‘internal respiration’.³⁹ He subsequently embarked on an extensive lecture tour of Britain from 1858 to 1860, spending a whole year in Glasgow, where he cultivated his first Brotherhood followers. Sometime in 1860, Harris returned to New York State and founded the first Brotherhood community at Amenia, Dutchess County, close to the Connecticut border. In 1867, due to community expansion, the Brotherhood moved four hundred miles west to Brocton on Lake Erie.⁴⁰

Harris defined the Brotherhood’s mission in millennial terms, being nothing less than “the organic restoration of the nobler multitudes of the Earth’s aged and almost exhausted race”.⁴¹ He proclaimed himself the “pivotal personality” in whom the cosmic forces of good and evil would battle to facilitate the New Life on earth in the age to come.⁴²

Suitably enlightened individuals were also able to discover, like Harris, the secret of internal respiration, breathing the very essence of the Holy Spirit within themselves. This was thanks to a kind of spirit – which Harris termed ‘fays’ or fairies – who came directly from the “the bosom of the Divine Mother, to mitigate to the utmost possible degree all our afflictions”.⁴³ Their place in the world was to purify it and work towards a utopian New Life. Brotherhood members were honoured with fay names, ostensibly given by the fairies themselves through communication to Harris.

Harris held that the ‘Divine Mother’ from whence these fairies came was an aspect of a “Boundless, Invisible, Incomprehensible, Eternal” God,

both male and female, personified in the being of a unisex 'Jesus-Yessa'.⁴⁴ As Harris developed these ideas he became increasingly interested in eastern religions which embraced similar concepts. Harris began to posit that there was a universal world religion which had become fractured and distorted since ancient times. He set out his ideas concerning universality (within the framework of Christ as the ultimate saviour) in a series of volumes which began with the 1867 treatise, *The Breath of God Within Man: An Essay on the Grounds and Evidences of Universal Religion*.⁴⁵ In this work, Harris cited the prophet Mohammed, the Buddha, and many other religious teachers and scriptures. W.P. Swainson, a follower and author of several works on Harris, described his teachings as a "kind of nexus between Western or Christian thought and belief ... and Eastern thought and belief as these have come down to us through the ages."⁴⁶

A God who is both male and female, a "One-Twain-Mother-Father-God", had no need of sexual union so Harris taught that celibacy brought humanity closer to the divine state, and appears to have remained celibate himself for at least the final fifty years of his life, even when married. In Harris's communities, women and men were housed separately. That few if any children were born to community members testifies that his followers seemingly took his teaching on sexual abstinence to heart,⁴⁷ as Nagasawa also seems to have.

From this male and female God, Harris taught that a trinity of forces emanated – creative, preservative and dissolvent. Swainson found it difficult by his own admission to put this teaching into words, but tried to describe it as symbolising the creation, ripening, and destruction of worlds, implying everything is impermanent and continually changing.⁴⁸ This included the human soul, which Harris held went through a form of continuous reincarnation until it reached a suitably enlightened state and became an

angel; teachings that show evident Buddhist, Hindu and Swedenborgian influences. In time, Harris noted further similarities with Japanese religions, particularly Shinto, which Harris understood to be the worship of ‘The Divine Mother’ – Amaterasu Omikami, the goddess of the sun and universe.⁴⁹ His long-time disciple and biographer, Arthur Cuthbert, characterised Harris’s views as follows:

For this Divine Feminine is the great transforming power. She is the ‘Holy Ghost.’ From Her, in unison with the divine bridegroom whom her bosom veils, flows forth the whole blessed host of the Fays, who at this day are flocking into the bodies of all who truly love and worship Her, to restore the old physical ruins, where Death at present prevails, and in the midst of these ruins to lay the foundation of the new body that shall never die ...⁵⁰

From his reading in accounts of Japanese religions, Harris came to believe that the Japanese people, particularly their aristocracy, were already highly advanced in spiritual terms, and from this stemmed his interest in recruiting Japanese disciples.⁵¹

4.1 Interest in Japan

Harris’s interest in Japan in the 1860s was indicative of a wider fascination of the time. Japan’s centuries of self-imposed seclusion from much occidental contact and influence had been steadily eroding in the early 19th century, and was eventually formally ended by the ‘gunboat diplomacy’ of the American navy in the 1850s. Further pressure from other European powers interested in opening the country to trade and missionary influence followed suit. In July 1867, Harris wrote an unpublished essay entitled ‘Japan: How a

Nation May Enter the Divine Path' claiming to have solved the 'problem of Japan'.⁵² He predicted that an enlightened lord, influenced by Harris's prospective disciples, would establish a military college to train a Japanese Divine Army, and his teachings would make Japan an 'open breathing people.'

In his belief that Japan was ripe for spiritual change, Harris was not alone. For example, in 1858 the Anglican William Jones Boone, Bishop of Shanghai, wrote to the Board of Missions of the Protestant Episcopal Church in America of the high "prospect of the field" compared with China, recommending that missions to Japan be established as soon as possible.⁵³ Other Protestant churches were also eager to start work, though these early evangelical hopes would never be fulfilled, as subsequent Japanese converts to Christianity were predominantly those who travelled or settled overseas – like Nagasawa Kanaye.⁵⁴

Beyond the treaty ports, Japan would remain difficult for Americans and other westerners to access for some decades. One of the easiest places for Harris and the Brotherhood to find appropriate candidates, therefore, was Britain, as hundreds of young Japanese students were being sent to study there – initially, principally to learn the military, science and engineering subjects that seemed to underpin imperial Britain's military and commercial advantage over much of the rest of the world. From the late 1860s, Harris used his British followers as scouts for potential Japanese converts, and offered to pay the trans-Atlantic passage of any recruits. He also planned to build a school, in the hope that it would make the Brocton community more attractive to any Japanese students who were preparing to enter American educational institutions, although this plan was never realised.

4.2 The Use

Communal life in the Brotherhood – referred to as ‘The Use’ – was hard work. Despite the elite social origins of many of Harris’s adherents, they were expected to donate their worldly goods to the community and toil without pay in community enterprises like common labourers. Laurence Oliphant experienced his first days in the Use thus: “he was sent to sleep in a large loft containing only empty orange-boxes and one mattress [...] His earliest work was clearing out a large cattle-shed or stable.”⁵⁵

Harris explained this as a leveling of social distinctions; life was to be dedicated to the service of the Brotherhood, every member filling the position in the body politic for which he or she was most fitted.⁵⁶ Harris believed that work should not be measured by material productivity, but by the degree of dedication accorded it. The level of dedication was the extent of a person’s spirituality.⁵⁷ Harris’s Use was to commune with the divine and celestial, and his adherents referred to him as ‘Father,’ ‘Faithful,’ or ‘Primate’. The Use demanded absolute obedience to Harris, supporting his spiritual and material kingship of the community.⁵⁸ In time, Harris would be described by some as a tyrant;⁵⁹ however, there were many followers, among them Nagasawa, who gladly engaged in the Use for many years, working towards the New Life with dedication and patience.

Wishing to find more solitude and an agreeable climate, Harris decided to develop a second community in Santa Rosa, California, north of San Francisco.⁶⁰ In 1875, Harris and several of his most devoted disciples, including Nagasawa, moved to California to develop the new community as a slice of Eden, naming it Fountaingrove after the abundance of springs in the vicinity.⁶¹ Its first five years were spent as a dairy farm, but soon vineyards, an orchard, stables, a printing press and extensive living quarters were added. The women lived in a building called ‘the Familstry’ and the men in

'the Commandery'. Harris had his own luxurious mansion, 'Aestivossa', which he filled with California's then largest library and valuable works of art donated by wealthy disciples, all set within a beautifully landscaped botanical garden. The Eden like aura of the place was intended to aid direct elevation to the celestial sphere when the promised New Harmonic Civilization came into being.⁶²

At Fountaingrove, Harris largely retired from public life, spending his time in spiritual contemplation, trances and writing at great length on many topics. In his trances he claimed to visit different worlds and even wrote descriptions of other planets, their inhabitants and spiritual conditions. He only returned to public life in 1891, publishing the pamphlet *Brotherhood of the New Life: Its Fact, Law, Method and Purpose* as an answer to a number of public criticisms and scandals – principally that he lived off the labour and wealth of his followers, and overexcited suspicions that free love was practised in the community. The pamphlet claimed that Harris had found the solution to the world's problems and that he was being reborn as a man in his prime.⁶³ This did not prove to be the case though, Harris resumed travelling, first back to Britain, then to New York and Florida. He remained on the east coast until his death in 1906.⁶⁴

5. Nagasawa and the Brotherhood

Nagasawa crossed the Atlantic to New York, still only fifteen years old. At the Brocton community, he and the other Satsuma students engaged in the Use. Within months, however, most of the Japanese followers had left to attend American educational institutions or return to Japan. By June 1868, Nagasawa was the only Satsuma man left in the Brocton community.

Existing studies of Nagasawa as an individual have asserted that he retained the 'heart of a samurai' and never really engaged with, or properly

understood Harris's teachings.⁶⁵ Elements of this view bear the hallmarks of orientalism – a tendency to emphasize the exoticness and mystery of eastern cultures with the intention of portraying them as static and unsuited to the 'modern' world – not to mention a certain condescension towards Nagasawa's intelligence. It also does not consider how Nagasawa may have personally appreciated the spiritual meanings attributed to the Use.

It has further been assumed that because Harris himself considered his teachings to have parallels in eastern religious cultures, it was exclusively the points of similarity and correspondence with his Japanese background which attracted Nagasawa to Harris's movement and leadership. Even if the hard labour of the Use in Brotherhood communities bore a further continuity with the Spartan existence Nagasawa knew from his Samurai childhood and Aberdeen schooling; in reality, Nagasawa's adult life in the Brotherhood was a dramatic divergence from the expectations of his caste of birth. Nagasawa's ancestral tradition would have abhorred his engaging in business, agriculture, and even animal slaughter, not to mention an illegal religion.⁶⁶

Instead, Nagasawa adapted to British and then American ways very quickly, and to a large extent neglected the Japanese side of his life. Until the 1890s he rarely made any Japanese contacts besides other compatriots engaged in the Use.⁶⁷

While Nagasawa could not have avoided being conscious of his Japanese origins, his relationship with Harris and belief in the Brotherhood require contextualizing within a young life formed in both Japan and Britain, and aware not only of Japanese spirituality and morals, but also Scottish Protestantism.

To look deeper in to Nagasawa's early Brotherhood involvement, this section will study fragments of one of Nagasawa's surviving diaries, from

1871, written in good but still slightly broken English.⁶⁸ This, along with personal correspondence and several third-party sources from the time offer valuable evidence for this study. Many diary entries simply report mundane daily events, for example, on 8 March 1871, Nagasawa wrote: "this afternoon I spend my time in cleaning chicken house, etc. and spend very merrily".⁶⁹ On other days, he reported events such as the slaughter of a hog, visiting the schoolhouse, and other tasks undertaken while waiting for Harris to emerge from a trance to eat with them. Other entries were more spiritually charged, and turbulent: the diary is full of stories about 'Father' being forced to suffer for the sins of recalcitrant members, followers leaving in fits of rage, or feeling slighted. There was even a suicide. The diary also contains many clues relating to Nagasawa's personal belief in Harris, Harris's ambitions for Nagasawa, and his wider thoughts about his current and future roles in the Brotherhood.

From his first arrival at Brocton, Nagasawa was separated from the other Satsuma students and allowed privileged access to Harris, including accommodation in Harris's mansion. Further honours were bestowed, the greatest of these being his new names. The 'fairies' reportedly pronounced him to be 'Phoenix' – a name with significant connotations in the community's beliefs, for, as Harris wrote at the time of his first revelations in 1857, Phoenix was the name of the "the most venerable and beloved of all Fairies ... who preserves on earth the traditions of the ancient Golden Age. He is called the 'Great Phoenix,' and also the 'Wise Phoenix'. He renews his youth at the beginning of every cycle, and so becomes young again".⁷⁰ In giving this name to the young Nagasawa, Harris implied he was the reincarnation of this fairy, the hope and future of the Brotherhood and its spiritual and celestial mission. Harris also gave Nagasawa the 'earthly' name of Oliver Cromwell Harris.⁷¹ By affixing his own name to that of an English

revolutionary leader, Harris made clear again his faith in Nagasawa's role in earthly renewal and revolution, and seemed, even at this early stage, to be marking Nagasawa out as his spiritual son and a mainstay of the Brotherhood.

It is not hard to see Harris's favouritism and other tactics meant to isolate Nagasawa from 'less spiritually gifted' members of the community as a form of grooming. Harris used similar tactics on other followers, most notably the Oliphants. While many suspect the Oliphants received such attention due to their wealth and resources, Nagasawa was important to Harris for other reasons. In his quest to expand his movement to Japan, Harris sought out the most intelligent, malleable and westernized Japanese person he could, and showered him with praise and honours. Some indication of Nagasawa's beliefs and assumptions about Harris's religious claims and teachings are clear in a typically matter-of-fact diary entry from 19 February 1871: "We all took tea in Fathers' table and he seemed extremely happy. We heard Fays talk through Father. They said Father is younger than he ever was before. In the Heavens, Angels grow younger and younger all the time."⁷²

Nagasawa used his diary for a degree of self-examination and reflection; "As I examined my heart deeply I discovered all my past act, thought and aim were from selfhood", he wrote on 1 January 1871; "but my earnest aspiration is to use higher and deeper in the Lord with self abnegation commencing with the New Year."⁷³ On the following day, he reported a "most interest and sweet talk about this Life" with a fellow community member, further reflecting "I have received a great light and profited by it".⁷⁴ Nagasawa's experience in the Brotherhood community was certainly not all smooth, however, with numerous references to great spiritual torment, for example, on 10 March: "It has been a hard day for me in the night I could

not hold my state and cried great parts of the night with full of misery.”⁷⁵

From much of the diary it is difficult to avoid the impression of emotional blackmail being at work in how Nagasawa was frequently made to feel his own personal actions had a direct bearing on his spiritual condition. Time and again in the diary, Nagasawa reported spending sleepless nights feeling guilty at some personal action that had supposedly upset the spiritual life of the community. Harris's heiress disciple and secretary, Jane Lee Waring – known by her fairy name 'Dovie' – appears to have played a significant role, intentionally or otherwise, in this blackmail and wider efforts to shape Nagasawa's obedience to menial tasks. On 21 January 1871, Nagasawa recorded:

Aunt Dovie told me that study hurt me and instead of Using I am sinking down very fast [...] Books keeps my mind downward instead of lifting it higher and higher to the Lord. I suffered and struggled terribly that I could not sleep until very late.⁷⁶

Four days later he wrote further:

This noon Aunt D came and talked to me how wonderful it is that my Use is in kitchen. She herself used to think when she first came in The Use, why does she not have a Use which will bring greater result. But she misunderstood how it is by this process to annihilate utterly and absolutely our natural selfhood and aims which we held dear to us.⁷⁷

One of the outcomes of this conditioning is that Nagasawa seems to have ceased to identify with his cultural roots. On 6 March, he described cutting the hair of another Japanese member (not a Satsuma student), “and afterward

he told me [about his] student's life in Japan and their immorality. It was really awful. I could sense it from here by my imagination.”⁷⁸ Later the same month, and again the following month, Nagasawa further utilized the term and description ‘Japanese’ specifically excluding himself from inclusion in the term. “Aunt D told him what Father said, how conceited Japanese are etc.” reads one entry.⁷⁹ Another read: “Father, Aunt D, and Uncle W [Laurence Oliphant] talked a great deal about the Japanese who deserted The Use ... I had one of the hardest nights this long time for Japanese”.⁸⁰

One night in February 1871, Nagasawa was informed by a widowed senior member of the community, a Mrs. Requa that Harris “said this evening he had a hard struggle last night with the Bhuddists [*sic*] who are trying to destroy me”.⁸¹ As a consequence, Nagasawa “felt desponding and ever so miserable all day”. This symbolism of nefarious Buddhists likely represented how Harris was attempting to separate Nagasawa from his former Japanese ways, though it may possibly have been a reference to the persecution of Buddhism then taking place in Japan, notably by the Satsuma Domain itself who destroyed over 1000 temples. If the latter meaning, Harris may have been using both clan loyalties and Confucian roots to bind Nagasawa further to the Brotherhood.

Nagasawa was once advised by Harris, through Jane Lee Waring, “that I will suffer more in living with Japanese”; but when a new member, Arai Osui (新井奥邃), arrived at Brocton in March 1871, Harris appears to have seen enough spiritual promise in him to allow Nagasawa to associate with him. Arai, had been on the losing side in the civil war, and subsequently converted to Orthodox Christianity through the missionary work of the Russian Nikolai Yaponski. It appears he was in some spiritual torment in 1871 and looking for succor, which he duly found with the Brotherhood. Nagasawa was told that Harris “wishes that I should have a great sympathy

with Arai and try to make him as happy as we can".⁸² Harris was correct to see promise in Arai, he engaged in the Use for 28 years and shortly after returning to Japan in 1899, he formed his own mini community in Tokyo called 'The House of Humility and Harmony'. There he taught a mixture of Harris' and his own teachings, including women's emancipation, which some have speculated was due to the Brotherhood's belief in the female aspect of the Christian God. He died in poverty in 1922.⁸³ Despite this investment in Nagasawa and Arai, it is clear that Harris considered the majority of their compatriots to lack the intellectual capacity to receive his teachings. As Nagasawa wrote on 1 March:

Father said spiritually there are as much changes going on in Japan as in Europe or America. The thoughts of people are fast changing in every sphere. There are people in Japan who are ready to receive this Truth but as yet their mental development has not yet completed [;] these are simple and hardworking and humble people.⁸⁴

In 1871, Nagasawa started taking Jane Waring's place as secretary and transcriber during Harris's trances, some of which could last deep into the night. On one occasion, he described how "Father was dictating and talking very low. He seemed to be in a deep internal state";⁸⁵ while another time he was shown into Harris's room by Mrs Requa, "and I wrote dictation in *Wisdom of Angels*".⁸⁶ Several entries in Nagasawa's diary indicate he sincerely believed Harris to be receiving communications from another spiritual realm, that "Father is now dictating *The Wisdom of Angels* and it is most wonderful thing".⁸⁷

Nagasawa is reported to have said later in life that his first impression of Harris's teaching was deep and prophetic, but he took some time to

understand his ideas well.⁸⁸ In this he was not unique, Harris purposely kept his ideas secret, vague and ever changing to add to the Brotherhood's mystique and his own aura. By 1871 there is some indication in his diaries that Nagasawa gained particular pleasure from the religious exercises of the community. "Mr. Foster came over ... and we had a very agreeable time in singing Father's new hymns", Nagasawa noted in January; "Morning is sweet and balmy with bright sunshine and there was such sweet music ... heard in our heart repeating over and over in recognizing the sweet Sabbath ... The sermon was wonderful", he recorded in March.⁸⁹ Nagasawa kept up the habit learned at his Aberdeen school for taking notes on Harris's preaching subject: "The chief topics are as follows", he wrote after a sermon on 26 March:

... the falsity of so called Christian religion in regards to the future life of unsophisticated babes and children. [Harris's] great sympathy and love for sinners and ruffians to whom right influences were given will be brought holy and fine men. The great fallacy of conversion by baptism by sprinkling of water. He says it is same to him whether man believes in God or not or views things entirely opposite to him [as he] is his true brother if he lives out of self and laboring for the good of others.⁹⁰

On this evidence, Harris would appear to have preached in a style seeking to ensure that his followers knew the precise theological differences lying between their leader and other rival interpretations of Christianity. Harris's emphasis on living "lives out of self and laboring for the good of others" was the central underpinning of not only 'the Use', but was an extension of the Swedenborgian principle of salvation through good actions.

From his Scottish education, Nagasawa may be understood to have received an extensive exposure to the Bible and to Christian theology – something few of the other Japanese Brotherhood members, perhaps with the exception of Arai, would have had. This may well give the best clue as to why Nagasawa stayed while other Japanese men departed, as he was able to understand the Christian theological base from which Harris was consciously building. Nagasawa's diary demonstrates his scriptural familiarity, recognizing, in another sermon description, when "Father read that part, Christ holding an infant, saying verily I say unto you, except ye be converted, become as little children ye shall not enter into the kingdom of heaven. The ... oratory was marvelously grand".⁹¹ Within this particular teaching, there would appear an implicit playing down of individual intellectual engagement with belief, as children tend to represent simplicity of mind. Nagasawa's natural intelligence was very obviously identified as something to be controlled and handled within the community, so that he would not endeavour to work out his own theology, independent of Harris. Waring pointedly once told Nagasawa:

... that Father's brain is as if were filled with eggs of new Truth which by degrees will hatch and come into ultimate word. So it is really important thing that I should keep my brain quiet not to be filled with ideas of scorpions and snakes but keep it entirely free from these things so that Lord will fill it with things which we deserve and which are good in His sight but not to ask what or why.⁹²

Only one other member of the Satsuma group enjoyed a relationship to Harris similar to that of Nagasawa: Mori Arinori (森有礼). Mori resided at Brocton for a matter of months, before learning of the victory of the

Satsuma Domain and its allies in the civil war in 1868, at which point he was among those who returned to Japan. He quickly gained influence in the new administration, joining the faction keen to introduce educational and liberal political reforms, strengthen national unity and improve international relations.

In 1871, he returned to the United States as the first Japanese diplomat in residence. In the same year, he recorded his thoughts on Christianity (still illegal outside the foreign concessions in Japan) in his *Life and Resources in America*.⁹³ In this work, Mori notably made no mention of Harris, but declared the belief that the Bible was an admirable book, and there was good in the message of Christianity. Mori nevertheless echoed Harris's teaching somewhat by articulating the wish that more people who called themselves Christians would live up to the Bible's message. Only then, Mori wrote, could Christians profess the superiority of their religion over that of others.

However, in private correspondence with Nagasawa, Mori professed a greater sympathy for Harris's teaching and even contempt for those "deserted Japs" who did not comprehend his teachings. This suggests that Mori remained a Harris follower at this time, albeit one who, at least in public, had put his country and clan before his religious beliefs.⁹⁴

And it was over this point that Nagasawa and Mori had a major falling out in October 1871, when Mori suggested that it was time for Nagasawa to return to Japan, seeming to suggest that he was in effect negating his duty. Nagasawa retorted that Harris had told him that to return to Japan would be to do the devil's bidding, and refused; yet another example perhaps of Harris' grooming techniques and deep influence on Nagasawa's soul.⁹⁵

Significantly, Mori would go on to become not only ambassador to Qing China, but also a ground breaking Minister of Education in Japan. Mori's

biographer, Alistair Swale, has suggested that the educational reforms he instigated – with an emphasis on moral development through physical training (which continues to this day in the Japanese education system) – were heavily influenced by Mori's participation in the Use.⁹⁶ Furthermore, Mori was partly responsible for the legalizing of Christianity in Japan in 1873 in addition to incipient democratic movements and, like Arai, promoted the place of women in society. Ironically, given Harris' belief in the goddess Amaterasu as the divine female, Mori was assassinated in 1889 by a fanatic who believed that he had insulted her chief shrine at Ise.⁹⁷

6. Nagasawa at Fountaingrove

In both its New York and California communities the Brotherhood developed vineyards and huge wineries. The wines were aggressively marketed with semi-religious claims – suggestions that their consumer might obtain superior levels of spirituality. According to Harris' teachings, drinking Brotherhood-produced wine infused the drinker with a divine aura and enabled their breathing of the creative breath of God. Harris also claimed that Brotherhood wines did not intoxicate or harm drinkers.⁹⁸

From early in his Brotherhood career, Nagasawa was apprenticed as a vintner and would in due course become the central figure in this wine production. At Brocton, Nagasawa worked under a Dr. John W. Hyde who had joined the Use, bringing prior knowledge of viticulture to community life. Nagasawa's 1871 diary reveals the development of his understanding of the place of wine in the Brotherhood's mission, as it was reported to him "that our wine contains a quality which no other wine has. If it were drink by any one it will bring a person who drank into a great visitation and so it will gradually separate good from evil." He further understood that the wine would "work both internally and externally for the Salvation of Mankind," as

“the money which were made by wine will be used in publication” – meaning Harris’s books and other works promoting the Brotherhood.⁹⁹ Here, Nagasawa’s language is full of Harris-like symbolism, contrasting good and evil, the internal and external. It seems that even by 1871, Nagasawa was beginning to see wine as his future vocation and practical spiritual contribution to the Brotherhood.

Nagasawa, now aged 23, moved with Harris to California in 1875, and played a prominent role in the establishment of the new Brotherhood community in Santa Rosa. As Harris secluded himself away in his mansion, the everyday running of the continually expanding and diversifying estate was increasingly left in the hands of Nagasawa, who concentrated his Use more and more on growing grapes and, eventually, producing wines. By the 1890s, he had become an internationally respected wine expert, with Brotherhood wines sold under the label ‘Fountain Grove’ through a commercial outlet in New York City, and exported to Europe and Japan. When Harris left Santa Rosa in 1892, Nagasawa was left in sole charge of the everyday running of Fountaingrove, by which time, A.A. Cuthbert, a senior Brotherhood member, reported, he was “looked up to and respected, in the highest possible degree, by all the brothers and sisters yet resident there”.¹⁰⁰ The Use continued to plough its earthly productions and profits into Harris’s mission and as far as we know, Nagasawa was still taking no payment for his services, because when his colleague Arai, returned to Japan in 1897, he is recorded as leaving with nothing but the clothes on his back.¹⁰¹

In 1900, aged 77, Harris decided to relinquish control of his worldly possessions to the few remaining members of the Brotherhood. Fountaingrove was sold for \$40,000 – a fraction of its worth – to five members: Nagasawa, Eusardia Nicholas and Margaret Parting in Santa Rosa, and Robert and Mary Hart in New York.¹⁰² In 1904, feeling that his time was

near, Harris summoned Nagasawa to Florida and gave written instructions that upon his death, Waring – now Harris's wife – should be put in charge of the final Brotherhood funds, and on her death, they should pass to Nagasawa. Three years after Harris's death in 1906, Waring and the Harts moved to California. This was not a happy reunion however, and in 1916 these three left again, declaring that they wanted no further part of Fountaingrove. Robert Hart signed a legal document to this effect in 1919. In exchange, Nagasawa relinquished all claims to the remaining Brotherhood trust fund of over \$100,000. Hart was euphoric at the deal, believing he had outwitted Nagasawa.¹⁰³ Eusardia Nicholas had died in 1903, and Margaret Parting in 1911, meaning that Nagasawa was left as the sole owner of the Fountaingrove estates.

Despite Harris's death, the Brotherhood continued, with books of his life and teachings being published, and Arai's community quietly continuing in Tokyo. It has been assumed that Nagasawa did not engage in Brotherhood activities after Harris's demise, but again there are reasons to doubt this as he was clearly recognized as leader in Harris's stead by other Brotherhood members. Furthermore, correspondence between Nagasawa and his close friend and long-time Brotherhood member, the poet Edwin Markham, often mentioned Brotherhood business. For example, in a letter of 14 March 1921, Nagasawa lamented that he was the only member of the Brotherhood left at Fountaingrove and "at times I had become almost in despair in continuing to carry on the duty assigned for me by our Beloved Father."¹⁰⁴ In his reply, Markham was, "especially happy to learn of your continued interest in the B.N.L. work I have been engaged upon for many years"; and indicated he would consult with Nagasawa on a new book intended to set out the "Philosophy of the New Life".¹⁰⁵ Later in the year, Markham wrote, again praising Nagasawa for carrying on the Brotherhood's work at Fountaingrove,

“You wish to carry on the great work of the New Life, and this should be the ambition of all of us who are interested in the New Philosophy.”¹⁰⁶

In 1924, the journalist Washizu Bunzo’s (鷺津尺魔) biographical piece on Nagasawa, in ‘The Japanese American News’ of 10 July, also used extensive current personal interview testimony.¹⁰⁷ Although Washizu wrote that he would not dwell overly on Nagasawa’s religious side, he reported a simplified first hand description of Nagasawa’s explanation of Harris’ teachings of celestial love and communing with dead spirits. Nagasawa was quoted as saying, “Harris taught me that my body is a palace for the Lord, and I believe this.”¹⁰⁸ Furthermore, Nagasawa emphasized his belief in spiritual purity and personal cleanliness explaining, “I don’t go to church. I do not believe that church is a pure place. I strive for personal spiritual purity and temperance rather than listening to the theories of others”.¹⁰⁹ This evidence gives further weight to the belief that Nagasawa did indeed comprehend and engage deeply with Harris’ teachings throughout his life, particularly in this case, in regards to the corruption of current Christian practice, and the ability to communicate with the celestial sphere on a personal level through internal respiration (although Washizu does not use those exact words, as the interview was in Japanese, it is likely he simplified Harris’ terminology for his non-specialist Japanese/Japanese American audience). In fact, it may even indicate that after Harris’s death, Nagasawa had come to his own quiet, personal understanding of The New Life. Washizu did suggest, however, that perhaps as much as belief in Harris’ teachings, Nagasawa found a sense of belonging, humanity, and love with the Brotherhood.¹¹⁰ Finally, it is telling that, even after Harris died, Nagasawa followed Harris’s teachings of celibacy by never marrying, despite his family in Japan repeatedly urging him to, and even producing suitable candidates.

It is clear that Nagasawa regarded himself, and was regarded by others,

as the lynchpin of what was left of the Brotherhood movement in the early twentieth century, despite its lost missionary momentum and direction in anything other than the commercial interests of the Use. He spent his final years as a rich and well-respected businessman; surviving photographs of the period show a smart and slightly portly gentleman seemingly at ease with himself and life. This success aroused the jealousy of Robert Hart, who had been so satisfied with the 1919 deal. He had assumed that with prohibition looming, a wine business had no future.¹¹¹ In the early 1930s, in a decidedly un-brotherly act, he took legal action, asserting that the previous agreement had been secured by duress and he still in fact had an interest in Fountaingrove. The court threw the case out in damning terms, confirming Nagasawa's full title to the land and business.¹¹² Nagasawa died a year later in 1934.

7. Conclusion

Nagasawa's membership of the Brotherhood was undoubtedly serious and deep – far deeper than existing studies seem to credit. And it is was very likely influenced not just by the oriental bent to Harris's teachings, but more the series of steps Nagasawa took during a formative period of his life – leaving Japan, schooling in Scotland, and being spiritually molded under Harris's tutelage in New York State. Nagasawa engaged in the Use and followed Harris's teachings towards the realization of a millennial 'New Life', through obedience, order and discipline – principles with precedents in his Japanese background, but also in his Scottish schooling. Ultimately, Nagasawa practiced sexual abstinence and hard communal labor in his own personal quest for spiritual peace and earthly renewal. He also engaged in personal spiritual reflection and found his own path even after 'Father' had died, leaving the Brotherhood, to which Nagasawa had dedicated his life,

listless and moribund.

Nagasawa is not forgotten in California, where a portion of Fountaingrove –renamed Paradise Ridge Winery – remains planted with grapes and the rest comprises up-market housing along Thomas Lake Harris Drive, perched above Nagasawa Park. The vineyard maintains a small exhibition on his life and wines are named in his memory. President Reagan even mentioned his vinicultural achievements in an address to the Japanese Diet in 1983, stating that both Japan and the USA owe much “to this Japanese warrior-turned-businessman.”¹¹³

Neither is he forgotten in Japan, where he is remembered as one of the Satsuma students in memorials and museums dedicated to them in his birthplace, now Kagoshima Prefecture, and as this article is being written there are plans to erect a personal memorial on the site of his family home. He was also the subject of a recent two part NHK television series dedicated to his wine-making activities.

8. Acknowledgments

Sincere thanks must go to Sonoma State University Library, custodians of the Gaye LeBaron Collection, for their assistance with many crucial documents. Deep gratitude also to my brother Philip for his advice, proof-reading and support at all stages of writing and to Matsuyama Kazuhiro for all the local advice and contacts in Kagoshima.

9. Notes

- 1 Following Japanese custom, in this article the family name will proceed the given name when referring to Japanese people.
- 2 Andrew Cobbing, *The Satsuma Students in Britain: Japan's Early Search for the 'Essence' of the West* (Richmond: UK Japan Library, 2000).
- 3 Terry Jones, “The Story of Kanye Nagasawa,” *Annual Research Report of the*

- Kagoshima Prefectural College Regional Research Institute*, 8 (1980): 41-76. See also, Akira Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo), *Annual Research Report of the Kagoshima Prefectural College Regional Research Institute*, 14 (1990): 13-41.
- 4 Gaye LeBaron, “The Japanese “Baron” of Fountaingrove: A Study of Kanaye Nagasawa and the Japanese Disciples of Thomas Lake Harris,” *The 200 Series*, 16 (1976): 1-19.
 - 5 Edward Said, *Orientalism* (London: Routledge & Kegan Paul, 1978).
 - 6 Apart from in this one section, the Satsuma students will be referred to by the name they were known by in later life rather than the aliases they assumed while travelling or childhood names.
 - 7 Tsushima had connections to southern Korea, and the Matsumae had connections with the northern islands, but neither approached Satsuma's extensive foreign intercourse.
 - 8 George Kerr, *Okinawa: The History of an Island People* (Tokyo: Tuttle, 2000).
 - 9 Cobbing, *The Satsuma Students in Britain*.
 - 10 Cobbing, *The Satsuma Students in Britain*.
 - 11 Cobbing, *The Satsuma Students in Britain*; LeBaron, “The Japanese “Baron” of Fountaingrove”: 4.
 - 12 Cobbing, *The Satsuma Students in Britain*.
 - 13 Christopher Benfey, *The Great Wave: Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of Old Japan* (New York: Random House, 2005).
 - 14 Benfey, *The Great Wave*.
 - 15 Cobbing, *The Satsuma Students in Britain*, p.31.
 - 16 Cobbing, *The Satsuma Students in Britain*, p.29.
 - 17 Biographies of Glover include Alexander McKay, *Scottish Samurai: Thomas Blake Glover, 1838-1911*, second edition (Edinburgh: Canongate, 1997); Michael Gardiner, *At the Edge of Empire: The Life of Thomas Blake Glover* (Edinburgh: Birlinn Ltd, 2008); and, Shinya Sugiyama, 明治維新とイギリス商人—トマス・グラバーの生涯 (The Meiji restoration and the life of the British merchant Thomas Glover) (Tokyo: Iwanamishoten, 1993).
 - 18 After 1868, the new government's attempts to forge a Japanese nation from competing clans involved the creation of a ‘new’ religion, normally referred to as ‘State Shinto’, which formalized and organized ancient beliefs and myths and gave them the name ‘Shinto’ (way of the gods). How much this word had been used before and whether any historical meaning was congruent with its post 1868 meaning, is unclear. The Emperor of Japan, Amaterasu's direct descendant but previously only a kind of respected high-priest who mediated with the gods for

favorable conditions in the earthly realm, was made divine and the focus of worship, something that had not happened before. Many sects that had only borne a vague relation to what we now know as Shinto, were strong-armed into participating in this new ‘religion’. The above mentioned *Kurozumikyo* and *Tenrikyo* are two exmples. State Shinto ceased to exist in 1945 but Shinto, in a more organized form from its pre-1868 days, continues separate from Buddhism to this day (For more see, Josephson, *The invention of religion in Japan*; and, Eiichiro Takahata, “Religious accommodation in Japan,” *Brigham Young University Law Review*. 3: 729-750.)

- 19 George Wilson, *Patriots and redeemers in Japan: Motives in the Meiji Restoration* (Chicago: Chicago University Press, 1992). The Satsuma clan were, nevertheless, significant iconoclasts after 1868.
- 20 Notohisa Yamakage, *The Essence of Shinto: Japan’s Spiritual Heart* (New York: Kodansha Amer Inc., 2012).
- 21 Inazo Nitobe, *Bushido: The Soul of Japan*, (Tokyo: Teibi Publishing Company, 1908).
- 22 It should be noted here, that Nitobe was indulging in orientalism to a large degree himself. Soon to be Professor of Colonial Studies at Tokyo Imperial University, many of his intellectual endeavors were very much of his time and sought to justify Japanese imperialism through racial hierarchy and the fitness of his race to lead Asia. For more see, Michael Weiner, *Japan’s Minorities: The illusion of homogeneity* (Abingdon: Routledge, 2009). This does not mean that his work on Bushido should be disregarded however as although romanticizing aspects of the warrior class, it provides many indispensable facts about a samurai’s upbringing and training.
- 23 Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo).
- 24 Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo): 19.
- 25 John Smith and David Stevenson (Eds.), *Aberdeen in the Nineteenth Century: The making of the modern city* (Aberdeen: Aberdeen University Press, 1988); Gardiner, *At the Edge of Empire: The Life of Thomas Blake Glover*.
- 26 Gardiner, *At the Edge of Empire: The Life of Thomas Blake Glover*.
- 27 Alexander Shewan, *Spirat adhuc amor: the record of the Gym, (Chanonry House School), Old Aberdeen* (Aberdeen: Rosemount Press, 1923).
- 28 Shewan, *Spirat adhuc amor: the record of the Gym*.
- 29 Shewan, *Spirat adhuc amor: the record of the Gym*, 156.
- 30 Shewan, *Spirat adhuc amor: the record of the Gym*.

- 31 Shewan, *Spirat adhuc amor: the record of the Gym*.
- 32 Shewan, *Spirat adhuc amor: the record of the Gym*, 441.
- 33 Shewan, *Spirat adhuc amor: the record of the Gym*, 8.
- 34 Gardiner, *At the Edge of Empire*.
- 35 Oliphant, *Life of Laurence Oliphant*.
- 36 Van Sant, *Pacific Pioneers*.
- 37 Harris reportedly only granted permission for Oliphant and his mother to join his communities after they donated \$100,000 – allegedly from the sale of Lady Oliphant's jewels.
- 38 Leigh Eric Schmidt, *Hearing Things: Religion, Illusion and the American Enlightenment* (Cambridge MA: Harvard University Press, 2000), 199-245.
- 39 Robert Hine, *California's utopian colonies* (New Haven: Yale University Press, 1966).
- 40 Hine, *California's utopian colonies*.
- 41 Harris, *Brotherhood of the New Life*, 14.
- 42 Hine, *California's utopian colonies*.
- 43 Cuthbert, *The Life and World-work of Thomas Lake Harris*, xvi-xvii, 29.
- 44 Thomas Lake Harris, *Dedication Ode for the House of Jesus and Yessa* (1875); R. B. Hort, W. P. Swainson, & R. B. Ince, *Three Famous Occultists: Dr. John Dee, Franz Anton Mesmer and Thomas Lake Harris* (London: Rider & Co, 1939), 183.
- 45 Thomas Lake Harris, *The Breath of God Within Man: An Essay on the Grounds and Evidences of Universal Religion* (New York and London: Brotherhood of the New Life, 1867).
- 46 Hort, Swainson, & Ince, *Three Famous Occultists*, 184.
- 47 J. E. Van Sant, *Pacific Pioneers: Japanese Journey to America and Hawaii, 1850-80* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2000).
- 48 W. P. Swainson, *Thomas Lake Harris and His Occult Teaching* (London: Rider, 1922), 48.
- 49 As Jason Josephson has recently pointed out, in Japan in this period there was in fact no concept of religion congruous with western religious thought, nor even a directly translatable word for it. Jason Josephson, *The invention of religion in Japan* (Chicago: Chicago University Press, 2012).
- 50 Cuthbert, *The Life and World-work of Thomas Lake Harris*.
- 51 Cuthbert, *The Life and World-work of Thomas Lake Harris*.
- 52 Thomas Lake Harris, 'Japan: How a Nation May Enter the Divine Path' (1867). The original manuscript is in the Harris-Oliphant papers; Rare Book and Manuscript Library, Columbia University Library. It is reproduced in *Thomas Lake Harris and the Brotherhood of the New Life. Books, Pamphlets, Serials and*

- Manuscripts, 1854-1942*, ed. Jack T. Ericson, (Glen Rock NJ: Microfilming Corp. of America, 1974), reel 8 frame 197; T. L. Harris cited in Van Sant, *Pacific Pioneers*, 85.
- 53 Hamish Ion, *American Missionaries, Christian Oyatoi, and Japan, 1859-1873* (Vancouver: UBC Press, 2009), 24.
- 54 Erika Lee & Jundy Yung, *Angel Island: Immigrant Gateway to America* (Oxford: Oxford University Press, 2012).
- 55 Margaret Oliphant, *Life of Laurence Oliphant: Memoir of the Life of Laurence Oliphant and of Alice Oliphant, His Wife* (Edinburgh and London: William Blackwood & Sons, 1890), 199.
- 56 Harris, *Brotherhood of the New Life*.
- 57 Hine, *California's utopian colonies*.
- 58 Swainson, *Thomas Lake Harris*, 10.
- 59 Oliphant, *Life of Laurence Oliphant*, VI.
- 60 Hine, *California's utopian colonies*.
- 61 The community was referred to as Fountaingrove and Fountain Grove was the label under which the wine was sold.
- 62 Gaye LeBaron, "An Old Winery's Link to Eden. Fountaingrove", *Golden Gate North Magazine*, summer 1972, 23-35; 32-33.
- 63 Harris, *Brotherhood of the New Life*.
- 64 On Harris's final years, see Herbert Schneider and George Lawton, *A Prophet and a Pilgrim: being the incredible history of Thomas Lake Harris and Laurence Oliphant* (New York: Columbia University Press, 1942), 485-9.
- 65 Jones, "The Story of Kanye Nagasawa"; LeBaron, "The Japanese "Baron" of Fountaingrove".
- 66 The Isonaga family were not among the large number of Satsuma samurai, uniquely among their caste in Japan, permitted to engage in horticulture. Every other clan enforced a strict separation of castes; samurai, peasants, artisans, merchants, and outcasts. No caste was allowed to encroach on the activities of another.
- 67 Although after this he did renew contacts with his birth country and became involved in promoting Japanese emigration to the USA and Mexico as well as with exporting his products to Japan. He may also have re-engaged to a certain extent with his Japanese cultural antecedents.
- 68 Nagasawa's diary, the original of which is in the possession of his descendants, is reproduced in Akira Kadota, "長沢鼎研究 III" (Research on Nagasawa Kanaye III), *Annual Research Report of the Kagoshima Prefectural College Regional Research Institute*, 9: 75-100.

- 69 Diary entry for 8 March 1871 Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III).
- 70 Cuthbert, *The Life and World-work of Thomas Lake Harris*, XIII.
- 71 Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 82.
- 72 Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 87.
- 73 Diary entry for 1 January 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 78.
- 74 Diary entry for 2 January 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 78.
- 75 Diary entry for 10 March 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 92.
- 76 Diary entry for 21 January 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 81.
- 77 Diary entry for 25 January 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 82.
- 78 Diary entry for 6 March 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III) : 91.
- 79 Diary entry for March 28 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 95.
- 80 Diary entry for April 20 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 100.
- 81 Diary entry for 25 February 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 89; Vine, *California's Utopian Colonies*, 15.
- 82 Diary entry for 16 March 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 93.
- 83 The Arai Osui Memorial Association, 知られざるいのちの思想家—新井奥邃を読みと : Rediscovering Arai Osui (The unknown lives of thinkers: Rediscovering Arai Osui) (Yokohama: Shumpusha, 2000).
- 84 Diary entry for 1 March 1871, reprinted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 90.
- 85 Diary entry for 29 January 1871, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 93.
- 86 Diary entry for 3 March 1871, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 91.
- 87 Diary entry for 31 January 1871, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 83.
- 88 LeBaron, “The Japanese “Baron” of Fountaingrove”.
- 89 Diary entries 29 January and 26 March 1871, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research

- on Nagasawa Kanaye III): 83 & 95.
- 90 Diary entry for 26 March 1871, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 95.
- 91 Diary entry for 2 April, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 97.
- 92 Diary entry for 2 March 1871, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 91.
- 93 John Van Sant, *Mori Arinori's Life and Resources in America* (Lanham MD: Lexington Books, 2004).
- 94 Letter quoted in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 77.
- 95 Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo): 30.
- 96 Alistair Swale, *The Political Thought of Mori Arinori: a study in Meiji conservatism* (Richmond: Japan Library, 2000), 41.
- 97 Swale, *The Political Thought of Mori Arinori*.
- 98 Robert Fuller, *Religion and Wine: A Cultural History of Wine Drinking in the United States* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1996).
- 99 Diary entry for 20 February 1871, in Kadota, “長沢鼎研究 III” (Research on Nagasawa Kanaye III): 88.
- 100 Cuthbert, *The Life and World-work of Thomas Lake Harris*, 192.
- 101 The Arai Osui Memorial Association, 知られざるいのちの思想家—新井奥邃を読みと: Rediscovering Arai Osui.
- 102 Supreme Court of California, “Transcription of Hart vs. Nagasawa,” (1933), accessed December 12, 2014, <https://casetext.com/case/hart-v-kanaye-nagasawa>.
- 103 Supreme Court of California (1933) Transcription of Hart vs. Nagasawa.
- 104 Kanaye Nagasawa, cited in, Van Sant *Pacific Pioneers*, 92.
- 105 Edwin Markham to Kanaye Nagasawa, 25 March 1921, Gaye Lebaron Digital Collection, Sonoma State University Library, CA.
- 106 Edwin Markham to Kanaye Nagasawa, 18 July 1921, Gaye Lebaron Digital Collection, Sonoma State University Library, CA.
- 107 Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo).
- 108 Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo): 36.
- 109 Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo): 37.
- 110 Kadota, “鷲津尺魔 長沢鼎翁伝” (The Legend of Nagasawa Kanaye by Washizu Bunzo): 36.

- 111 Supreme Court of California (1933) Transcription of Hart vs. Nagasawa.
- 112 Supreme Court of California (1933) Transcription of Hart vs. Nagasawa.
- 113 Ronald Reagan Presidential Library and Museum. "Ronald Reagans's major speeches, 1964-89: 11/11/83, Address before the Japanese Diet, Tokyo, Japan," accessed September 24, 2015, <http://www.reagan.utexas.edu/archives/speeches/1983/111183a.htm>.

社会学における仮説設定と NHST

常 松 淳

1. はじめに

経験科学にとって、データの収集とその分析は基幹的である。自らの主張——何らかの理論や仮説、効果の存在など——を支えるものとして経験的なデータを示すことが、日常的な科学実践の中心を占めている。多くの分野において科学的証拠は、しばしば統計的な証拠であり、計量的社会学研究でも同様である。ところが近年、特に（社会）心理学を中心として、論文を通じて広く引用・参照されてきた知見が、他の研究者による実験では再現されないという問題——いわゆる「再現性の危機 Replication Crisis」——が指摘され、統計的証拠の解釈から研究慣行に至るまであらゆる側面が再考の対象となり、改変への動きが進んだ¹。この過程では従来の研究慣行、とりわけ統計的証拠の扱いをめぐる深刻な問題点がクローズアップされている。これらは、（社会）心理学などと似通った研究慣行に従っている社会学にとっても看過できないものである²。本論では、統計的証拠の解釈においてこれまで重視されてきた帰無仮説有意性検定（Null Hypothesis Significance Testing: 以下では「NHST」と略す）の枠組みと p 値 p-value に焦点を絞り、その問題点を整理した上で、社会学における仮説設定との関係を再考する。

以下では、まず2節で科学的証拠と見なされる基準の問題、とりわけ NHST と p 値の意味と誤解について論じる。3節では、特に心理学領域にお

ける再現性問題にあらためて注目を集めるきっかけともなった Simmons et al. (2011) を通じて、広く行き渡っている研究慣行がいかに統計的証拠（とされてきたもの）の信頼性を損ないうるかを確認する。以上を踏まえ、4節では日本の計量的社会学における仮説設定や研究慣行がもたらす問題を明らかにする。ポイントは、理論的な仮説と統計的な仮説との対応が一義的でなく、そこに多大な自由度が含まれていることである。理論的に語られる何らかの「効果」は、実際には、異なる統計的仮説における様々な「効果」のいずれによっても検証されたことになり得てしまう。社会学理論が特定の統計的仮説を指定できるほどの“解像度”を持ちにくい現状では、それが NHST と結びつく限り、統計的証拠の評価においては慎重でなければならないだろう。

2. p 値とは何でないか——科学的証拠の基準と広がる誤解

そもそも何が科学的証拠となるのかという問題に正面から取り組むことは簡単でない。ここでは、社会科学を中心として現実的に多くの研究者が日々実践している経験的研究のロジックを確認するにとどめよう。

現代の経験科学においては、データの示す結果が「統計的に有意であること statistically significant」, その「統計的有意性 statistical significance」に科学的証拠の基準を求めることが多い。心理学・社会学系でも、測定された何らかの効果や違いが「5% 水準で統計的に有意 = p 値が0.05以下である」と示すことが、多くの場合、実際上の研究目標であったと言ってよい。これは同時に、学術専門誌の査読を通過するための（最低限の）基準に他ならない。現代科学においては、事前の（＝出版前の）査読 peer review を経た学術誌への掲載が、科学者コミュニティに始まり広く一般社会で科学的知見として認められることとほぼ同義になっている。実験室や調査においてどのようなデータが得られたとしても、そこから統計的に有意な結果を引き出し、論文として刊行しなければ、何らかの理論や仮説の「証拠」としては通用し難い。

逆から言えば、統計的に有意な結果によって支持されたとされる仮説や効果

は、専門誌に掲載されることを通じて、経験的証拠に支えられた一定の科学的事実として受け入れられることになる。一度の実験で統計的に有意な結果が出たということがどれほど確定的な意義を持つのかについては議論の余地があり、実際のところ、刊行された論文の結果をそのまま信用するかどうかは読み手によって異なる。懐疑的な読者は、1つの論文（実験）が100%の確証になるとは受け取らない。ただ一般的にマスメディアは、学術誌（特に有名で競争率の高い国際科学雑誌——Nature や Science など）に載った研究成果について、まさにその雑誌に掲載されたことを根拠として、あたかも確定した事実のように報道する傾向にある³。

ではそもそも「統計的に有意である」とはどういうことか。p 値とはいったい何を表す値なのか。これに対する答えは明確で、おおむねすべての研究者に共有されていなければならないはずである。統計的有意性や p 値が科学的証拠の基準としてこれだけ多くの研究者に用いられ、研究論文でほぼルーティンとして採用されているにもかかわらず、実は必ずしもそうでない。p 値がいかにも誤用されやすいかはつとに指摘されてきているが⁴、アメリカ統計学会（American Statistical Association, ASA）は2016年、統計的有意性と p 値が科学者コミュニティで非常にしばしば誤解・誤用されていると指摘した上で、それらが何を意味するのかについて学会として声明を発表するに至った⁵。統計分析テキストではほぼ必ず統計的検定について説明しており、その文脈において統計的有意性と p 値は鍵になる概念として扱われている。そして多くの科学研究者は日常的にその概念を基礎としてデータの評価を行っている。それでもなお、p 値が何を意味しているのか、それをどう解釈すべきかについて深刻な誤解が広がっていると統計専門家たちは懸念しているわけである。後に触れる通り、この誤解と誤用が、再現性問題の背景にもなっている。以下では、後段の議論に関連する限りにおいて p 値と NHST のロジックを再確認しておきたい。

ASA 声明は p 値を次のように定義している。

「簡単に言えば、p 値とは、ある特定の統計モデルの下で、データの要約統

計量（2つの群の標本平均の差など）が、実際に観測された値かそれよりも極端な値を取るであろう確率のことである」（ASA 2016: 131）

この説明の難しさは、それが言わば仮想的な想像を要求している点にあるかもしれない⁶。p 値を算出するにはデータの生成に関する統計モデルが必要である。データが確率的に言ってどのように発生しているのかについて前提を置かない限り、データ（から計算された統計量）が様々な値を取る確率を算出することはできない。そして、その統計モデルに従ってデータが産出されると仮定したときに、何度も繰り返し実験ないし調査を行うとどのようなデータが得られるかという想定が、「実際に観測された値かそれより極端な値を取るであろう would be equal to or more extreme than」という表現の背後にある。ある統計モデルに従ってデータが生成されるという前提を置いたとき、繰り返しデータを収集して毎回統計量を計算したときに、その値がどのように分布するかを考えるということである。p 値とは、繰り返しの実験・調査で得られるであろうデータから計算される統計量——2 群での標本平均の差、標本相関係数など——が、いま現実には得られたデータから計算された値より（多くの場合、絶対値で）大きな値を取る確率のことである。

現実のデータについて計算されたこの p 値を基準として、もとの統計的仮説を評価する手順が仮説の有意性検定 significance test である。この手続でテストされる仮説はしばしば「帰無仮説・ゼロ仮説 null hypothesis」と呼ばれ、多くの場合、何らかの（理論的に予測されるような）効果や差が存在しない、ゼロであるという仮説が設定される⁷。つまり、NHST では、データが取られる母集団において〈効果・差などがゼロ〉というゼロ仮説をデータによってテストするのである。そしてデータによってテストしたいゼロ仮説を前提として p 値を計算したとき、それがあらかじめ定めた一定の値より小さい場合、「統計的に有意」とであると評価する。この場合の「有意」とは、ゼロ仮説を前提とするなら、きわめて稀なことが生じたという意味である。現実には得られたデータが、ゼロ仮説を前提とするならきわめて珍しいということから、逆に、そのゼ

ロ仮説を「棄却する reject」というのが NHST のロジックとなる。言い換えるなら、NHST ではデータとゼロ仮説との整合性 consistency・両立可能性 compatibility を評価している。ゼロ仮説とデータとがあまりに不整合で両立しそうな場合には、データを疑うのではなく仮説の方を棄てるわけである⁸。どの程度なら「きわめて稀」と判断するかについて絶対的な基準は存在しないが、慣習的に 5% とされることが多い (これを有意水準 α と呼ぶ)。

NHST において重要なのは、 $p > .05$ となってゼロ仮説が棄却されなかったとしても、ゼロ仮説が積極的に支持ないし証明されたわけではないという点である。単に、データとゼロ仮説は矛盾しない (両立可能だ) と評価されたに過ぎない。同様に、 $p < .05$ となってゼロ仮説が棄却されたとしても、それは「母集団において効果・差がきっかりゼロである」という仮説とデータとが整合的でないという判断に過ぎず、効果や差の存在が確証されたわけではなく、また p 値の大小から効果や差の大きさを直接評価することもできない。

p 値に関して非常によくある誤解が、それを「ゼロ仮説が正しい確率」と解釈するものである⁹。データから算出される p 値は、決してゼロ仮説の正しさに関する確率ではない。そもそも p 値はゼロ仮説を前提としない限り算出され得ないのである。にもかかわらず、この種の誤解には言わば直観的な魅力がある。われわれには「母集団では (本当は) 相関がない」といった仮説そのものを確率的に評価したい欲求がある。しかも、 p 値がきわめて低いということはゼロ仮説が棄却されるということであり、「ゼロ仮説が正しい確率が低い」という解釈と方向性としては一致しているようにも思える。棄却されるのはその仮説が正しい確率が低いからであると考えるのは、ある意味で自然でもある。見方を変えれば、ひとが自然に期待してしまうような性能を持っていないのが p 値だということでもあろう¹⁰。

このような誤解も実は、初学者にのみ見られるものではない。統計を研究の基盤として使っている研究者でさえ、論文で上述のような誤解に基づいた記述をしてしまうことがある。ある医学研究者は、国際医学雑誌に掲載された論文において、得られたデータの p 値が 0.054 であったことから次のように書いた。

「この知見は統計的有意性には達しなかったが、スタチン〔引用者注：血中コレステロールに関わる薬物〕が症状〔引用者注：筋肉痛〕を引き起こしていた確率は94.6%であることを示している。」(Thompson 2016: 1969)

ゼロ仮説——ここでは、「スタチンは筋肉痛を引き起こさない」——の下での p 値が0.054であることから、ゼロ仮説を否定する仮説——対抗仮説、この場合「スタチンが筋肉痛を引き起こす」——の確率が、 $(1 - 0.054 = 0.946)$ により94.6%だと言うのである。これに対しては同誌上に、ゼロ仮説や対抗仮説を p 値によって確率論的に評価することは不可能だとする当然の批判が寄せられている¹¹。有力誌に掲載されるような研究者が p 値を仮説そのものの確率だと誤解しているというだけではなく、そのように書かれた論文が査読を通過して掲載されていることから、 p 値と統計的有意性に関する誤解の広がりが推し量れよう。だからこそ、統計の専門家たちがあらためて声明を発表するに至ったのである¹²。

このようにある種の誤解へと流れやすいにもかかわらず、 p 値を基礎に据える NHST は、実験・調査データの評価基準として経験科学の領域でルーティンとして用いられている。実際に得られたデータから計算される p 値が0.05を下回れば、たとえば「スタチンは筋肉痛を引き起こさない」というゼロ仮説が棄却され、その対抗仮説「スタチンは筋肉痛を引き起こす」を支持する証拠として扱われることになる。それは同時に、そのデータをもとにした論文が——対象とされている理論仮説が研究領域にとって十分に意味のあるものであれば——学術誌に掲載されるということでもある。しかし、現実の研究慣行と NHST とが組み合わさったとき、次節で述べるように、看過できない問題が生じてしまう。

3. “False Positive Psychology”——NHST と研究者自由度

NHST が科学的証拠とそうでないものを選び分ける手続として機能するた

めには、得られたデータの示している効果やパターン等は、もしゼロ仮説が正しいとしたらきわめて稀であることが必要である¹³。もしゼロ仮説が正しいならごく稀にしか生じないはずの違いがデータに表れていることから、ゼロ仮説の方を棄却し、少なくとも何らかの効果がある（効果が少なくともゼロではない）と結論付けるのが NHST である。ただし、このプロセスは決して無謬ではない。NHST にはもともと判断を誤りうる可能性が織り込まれている。有意水準 α を 5% に設定するなら、本当はゼロ仮説が正しいときにそれを棄却してしまう誤り——「第一種の過誤 type-I error」——の確率は 5% ある。母集団では相関ゼロであったとしても、たとえば $n=20$ のデータで相関係数が 0.48 (以上) となる確率もゼロではない。標本相関係数が 0.48 であれば $p=0.03$ (両側検定) となるので、NHST に従う限り、もし本当はゼロ仮説が正しいのだとしても自動的に棄却される。実際にはゼロであるのに、偶然によって NHST において「効果あり」と判断された結果は“偽陽性 false positive”と呼ばれる。偽陽性の結果を「発見」してしまう誤りは避けられないが、にもかかわらずそれが研究慣行上許されるのは、その確率が低い (5% 以下) はずだからに他ならない。ところが、Simmons et al. (2011) が具体的に示したように、これまでの研究慣行の下では、研究者が偽陽性な結果を「発見」できる確率ははるかに高くなってしまっているのである。

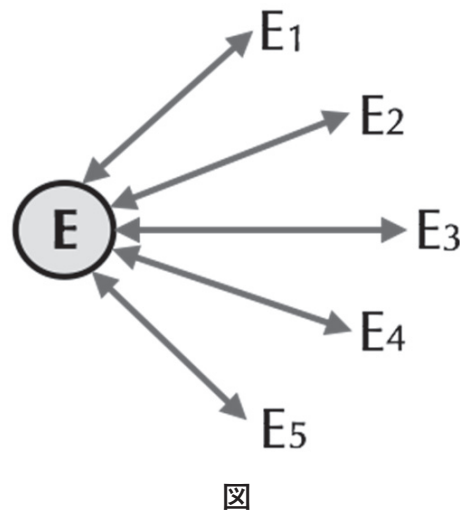
理論的に仮説を立て、実験・観察データを収集し、それを分析する過程において、研究者は数多くの決定を下さなくてはならない。どのようなデータをどれだけ集めるか (n をいくつにするか)。データのうち、不適切なケースをどのような基準で除外するか (たとえば外れ値や“不整合な”回答など)。分析に使用する変数をどう選び、どう扱うか (ひとつの変数だけを使うのか、2つ以上の変数を統合するか、変数に変換を施すかなど)。どの共変量を考慮に入れるか (どの変数で統制するか、交互作用を考えるかなど)。どのような統計モデルを使用するか。これらの決定は、基本的に研究者の裁量に任されている。Simmons et al. (2011) はこれを「研究者自由度 researcher degrees of freedom」と呼んでいるが、高い (隠された) 自由度が NHST と組み合わせると、NHST の想定し

ている“ゼロ仮説の下で珍しいことが起こったのかどうか”という判断枠組みが崩れてしまうのである。

問題の根源は、これらの諸決定が事前ではなく事後的なもの、すなわち、データや分析結果を見てからの判断になりがちだという点にある。たとえば外れ値の処理ひとつとってみても、特にまだその分布が明かでないようなものを測定している場合には、事前に除外の基準を設定しておくことは実際上は難しい。分布をチェックしてみて初めて、相対的に“異常な”値を取っているケースが判別できるからである。他の決定に関しても、データを見た後で、使用する変数の選択や処理方法を決めるといったことは、これまで通常の研究慣行として許容されてきた。さらに、どのような組み合わせでの比較を行うかが事前に決定されておらず、応答変数と説明変数の選択・組み合わせ・処理を案配することで統計的に有意な結果を探し出すということもまた、広く行われてきたと言っていいだろう¹⁴。5%水準で統計的有意となる結果でなければ科学的な発見と見なされず、そもそも出版できないという条件のもとでは、自分のデータから0.05より小さなp値を出したいという強い欲求を研究者が持つことは避けがたい。

データ分析において、研究者自由度を事後的に駆使して低いp値を探し出す「pハッキング p-hacking」(Simonsohn et al. 2013)は何をもたらすのか¹⁵。Simmonsらは、研究者自由度を駆使すれば、偽陽性の結果（ゼロ仮説が正しいにも関わらずそれを棄却するような低いp値を示す結果）の出る確率が5%を優に超える水準となることをシミュレーションによって示してみせた。まったく独立な（関連のない）観測値をシミュレートして作成したデータ（15000サンプル）に対して、実験研究でよく利用される典型的な研究者自由度を駆使し¹⁶、複数の分析法を適用することを繰り返したとき、 $p < .05$ となる結果が1回でも生じたサンプルの割合を同論文は報告している。いずれの研究者自由度を利用した場合でも、10%以上の割合で「偽陽性」な結果が生まれていた。複数の研究者自由度を組み合わせればさらに割合は高まる¹⁷。ここで取り上げられているもの以外にも研究者の決定に任される要素は数多くある以上、それらをすべて

駆使した場合に偽陽性な結果を見出せる確率は5%とは比べものにならないレベルになる。ひとつのデータセットに対して複数のデータ処理法や分析法を適用し、p 値が0.05を下回ったものだけを「統計的に有意な結果が出た」と**選択的に**報告するなら、「ゼロ仮説が正しいとしたらきわめて稀にしか起こらないはずのことが起こっている。従ってゼロ仮説は棄却されるべきであり、即ち、何らかの効果や違いが存在すると判断できる」という NHST のロジックは信頼できないものになってしまう。



理論的に想定される何らかの効果を E として、ある特定の分析方法において検定される統計的效果を E_1 としよう（図参照）。効果 E_1 が統計的有意となったのなら、その分析方法に対応したゼロ仮説の下では5%以下の確率でしか生じないことが起きたことは確かである。その効果 E_1 は、対応するひとつの分析方法によってのみ特定されるはずのものだが、それとは微妙に異なる分析方法によって、 E_1 と概念的に似てはいるが厳密には同一でない様々な統計的效果 $E_2, E_3, E_4, \dots$ もテストされていたとしたらどうだろうか¹⁸。研究者自由度によって、類似しているが厳密には同一でない効果を複数テストすることは容易であり、その中に統計的有意な E_i が見出される確率は（実はまったく関連がなくても）5%より遙かに高くなる¹⁹。本当は存在しない「効果」であっても、研究者自由度を駆使して様々な方法を試せば、確率的なバラツキのため偶然の

力によって統計的有意性だけは高い確率で発見できてしまうのである。

言い換えれば、雑誌に掲載された「 $p < .05$ 」の論文であっても、そこに示された結果が純粹に「5%以下のきわめて稀なことが起こった」ものなのか、研究者自由度のおかげで容易に発見されたに過ぎない「 $p < .05$ 」なのかは判別できない。多大な研究者自由度（およびそれを駆使した p ハッキングの蔓延）と研究者のインセンティブ構造を考えれば、出版された「 $p < .05$ 」が偽陽性に過ぎないのではないかという疑いが生じることは避けがたくなる。まったく関連のないデータからでも、 $E_1, E_2, \dots, E_n$ をテストして、有意な E_i を見つけ出し、それを理論的な効果 E の証拠として提示することは低くない確率で可能となるからである。見出したい効果 E の証拠が実は E_1 でも E_2 でも E_3 でも構わないという緩やかな仮説設定のもとで研究が行われるなら、これに研究者自由度と NHST とが組み合わさると、報告された科学的証拠に対する信頼は低くならざるを得ない。

上でも触れたように、研究上の判断を導く仮説検定の枠組みをめぐっては、特に心理学や生命科学系の分野で長年にわたって議論・注意喚起が行われてきた歴史があるが²⁰、2000年代にその流れは加速した²¹。統計的有意性を根拠として刊行され、逆にその刊行されたという事実によって確立された知見として扱われてきた過去の結果に対する疑念と再検討の機運が広がっていったのである。NHST のもとでの統計的有意性が研究者自由度を駆使することで相対的に容易に達成できるとしたら、刊行された諸結果はとても“確証された”ものとは言えない。そもそも、本当は何の効果・関連もないのに発見されてしまった“効果”—すなわち偽陽性—である可能性が低くないからである。そこで、刊行された論文で主張されている効果や関連は、果たして再現可能 replicable, reproducible なのかという疑問が生じてきたわけである²²。

データを基にした経験科学（特に心理学・社会科学）において、データ評価の基準としての NHST（ $p < .05$ ）という枠組みは批判的再考の対象となり、これと併せて、もともと NHST によって統計的有意とされてきた多くの論文（そこで主張された効果やパターン等）の信頼性が揺らぎ、世界で行われつつある再

現実験においてしばしば再現されないという事態が生じた。これを受けて、既にそれぞれの学問分野で改革への動きは活発になっている²³。改革の大きな方向性（たとえば透明化）については一致していても、具体的な方策に関してはまだ議論が続いている。p 値基準（ $p < .05$ ）をどうすべきかという 1 点をとっても、見解は分かれている。ある社会心理学の雑誌は、NHST 手続を無効なものと断じ、投稿論文においてそれを行わないよう求めるように至った²⁴。ある研究者らは、「新たな発見」と判断される p 値の基準を現在の 0.05 から 0.005 へと引き下げることを提案している²⁵。これに対しては、0.005 への引き下げは徒にコストを上げてしまうだけであって、むしろ他の研究上の決定と同じく、有意水準 α の選択に関しても研究者自身が正当化を行うべきだという批判がある²⁶。他方で、そもそも NHST・統計的有意性の枠組み、特に、p 値というたった一つの統計量によってデータに関して〈証拠か、そうではないか〉という二値的な判断を行う慣行自体を捨て去るべきだという声も強い²⁷。

経験科学における統計的証拠と再現実験はどのようなものであるべきかという問題は、それぞれの研究分野・研究対象に固有の条件や制約を考慮に入れた上で論じられるべきであろう。次節では、以上の考察を踏まえ、研究者自由度と NHST の枠組みという観点から、特に現代日本の社会学研究が含む問題点と今後の課題について考える。

4. 社会学における仮説設定と NHST

社会学の計量的実証研究は、ひとまず 3 つのレベルに分けて考えることができる。行為・相互行為をもとにした因果関係を語る説明 narrative のレベル、それらを構成する概念 concept のレベル、そして、それ自体では不可視である概念を測定によって可視化した指標 indicator のレベルである²⁸。計量的研究において社会理論等から導かれる仮説を経験的に確かめようとすれば、それをデータと突き合わせるための橋渡しとなる統計的仮説が必要になる。抽象的な日常的・理論的概念によって表現された仮説が与えられても、どうすれ

ばそれを経験的に確かめたことになるのかは自明でないからである。実際にデータとして使用可能な指標によって表現された統計的仮説を設定して初めて、理論的仮説の経験的な検討が可能となる。このときまず問題となるのは、概念と指標とを結ぶ関係に含まれる曖昧さ（多義性）ambiguity である。ひとつの概念に対してひとつの指標が対応しているとは限らず、逆に、ひとつの指標が複数の概念を“意味”してしまうことも珍しくない。たとえば、〈教育〉の程度を表す指標として〈教育年数〉がよく用いられるが、〈教育年数〉は教育の程度を表すだけでなく、たとえば〈犯罪行為に使用可能な時間〉の指標でもありうる²⁹。この種の曖昧さは実証研究のプロセスに避けがたく含まれている。ひとつの概念を何らかの指標と結びつける方法は複数存在し、いずれを選択するかは研究者に任されている（ひとつの指標を何らかの概念と結びつける方法についても同様である）。分析で使用する変数の構成や選択に関して高い研究者自由度が許容されてきた背景には、理論的な仮説と統計的仮説とが1対多対応している現状があるだろう。抽象的な概念によって表現された理論的仮説は、異なる複数の統計的仮説と対応しうる³⁰。3節で論じたように、理論的に表現された効果Eと、様々な指標によって表現されたE_iとの結びつきはそれぞれ緩やかな理論的正当化を許し得る。概念と指標との関係に留まらず、さらに統計モデルの構成まで考えれば、対応の複数性はより顕著となるだろう。

ここで具体的に、近年の日本の計量社会学でどのように仮説設定が行われているかを見ていこう。ひとつの典型的な骨格はたとえば次のようなものとなる³¹。何か社会的事象に対する（肯定的・否定的）意識と教育（学歴）との関連を検討しているとしよう。意識のあり方に関する社会学理論（先行研究）をもとに、それらから論理的に予想される命題が、論文内で検討する理論的な仮説としてたとえば次のようなかたちで設定される。

仮説：学歴が高い人ほど、低い人に比べて肯定的（ないし否定的）な意識を持ちやすいだろう

この仮説を統計データによってテストしようとするなら、まずは「学歴（の高低）」と、「（肯定的・否定的）意識」という抽象概念と理論的に結びつきうる指標、言い換えれば、その概念を測定したと言える変数が必要になる。多くの社会調査で、回答者の受けた教育については、その最終学歴が「高卒」「専門学校卒」「4年制大学卒」といったかたちでカテゴリカルに測定されている。これを高低を示す指標へと変換するため、たとえば最終学歴を2値化したダミー変数（大卒ダミー）——最終学歴が4年制大学・大学院のときは1、それ以外を0とした変数——が作られたり、あるいは教育年数——小学校から最終学歴までに受けた教育の年数として、高卒なら12、4年制大学卒なら16が割り当てられる——が用いられたりする。意識については、たとえばある意見に対する賛否を5段階で尋ねた質問に対する答えに関して、「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」を1、「どちらともいえない」「どちらかといえばそうは思わない」「まったくそうは思わない」を0とする二値変数へと集約したり、そのまま5段階の量的なスコアとして用いたりする。学歴であれば、短大卒を大卒枠に入れることもありうるし、高低ではなく教育の質的な違いという意味でカテゴリカルな変数としてそのまま使う観点もありえるだろう。意識変数については、5段階の順序尺度と解釈することも許される。「学歴（の高低）」や「肯定的・否定的意識（の強さ）」という抽象的な概念への対応付けとして、いずれかが唯一の妥当な方法として理論的に指定されることは稀である。多くの計量社会学はサーヴェイデータを用いて行われるため、測定に用いられた質問文・選択肢についてはしばしば研究者自身に選択の余地がない。しかし、離散的な回答をどのように集約するか、あるいは数値化するかといった決定は、しばしば個々の研究者に任されている³²。

このように、理論的仮説と統計的仮説とのリンクにおいて、「教育・学歴」のような基本概念に対応する指標の選択と構成においてさえ、小さくない研究者自由度が存在する。仮説に用いられる理論概念がより複雑な内容を持つものならば——社会学研究において典型的には「社会階層」のように——、それをどのような指標（の合成）によって捉えるかにも高い自由度があるといってい

い³³。もし仮説が「階層の高い人ほど～であろう」というものだったとしたら、まず階層への帰属を示す指標をどう作るかに関して複数の——そして理論的には等しく（しかし緩やかにのみ）正当化されうる——方法があり、そこからの選択に応じて統計的仮説もまた変わってくることになる。

最終的な統計的仮説は、理論的仮説が上記のようなものの場合、たとえば特定の回帰モデルに関して立てられる。この場合、まず意識に関する変数を目的変数、学歴を説明変数とした回帰モデルが想定される³⁴。この回帰モデルの係数がデータによって推定されたとき、もとの理論的仮説は、学歴変数が（他の要因を統制した上でなお）「統計的有意」になるかどうかという NHST 上の問題へと還元されるのが現在の研究慣行である。統計的有意性とはすなわち、学歴変数の係数に関して計算された p 値が 0.05 以下となることに他ならない。2 節で説明したとおり、母集団において本当は〈学歴の効果なし〉つまり〈係数 = 0〉であると仮定したときに、手元のデータによる推定値より“極端な”値の出る確率が p 値である。これが 0.05 より小さいとき、「ゼロ仮説が正しいとするときわめて稀なことが起こった」と見なし、ゼロ仮説を棄却するのが NHST のロジックであった。この枠組みにおいて、予想された理論的仮説の支持とは、効果（違い）がない、即ち回帰モデルにおいて係数 = 0 というゼロ仮説の棄却に他ならない。

もとの理論的仮説に方向性が含まれていない場合（つまり「学歴による違いがあるかどうか」）だけでなく、方向性が含まれている場合（「学歴の高い人ほど～であろう」）でも、学歴変数の係数 = 0 をゼロ仮説として両側検定の行われることがある。このとき、 $p > .05$ となりゼロ仮説が棄却されなければ「仮説は支持されなかった」と結論され、 $p < .05$ で有意となり、かつ学歴変数の符号がプラスであるときには「仮説が支持された」となる。有意かつ符号がマイナスのときは、セットで立てられた別の仮説「学歴の低い人ほど～であろう」が支持されたと推論されることになる。つまり、方向性が含まれた理論仮説であっても、しばしば双方向の仮説が同時に立てられるなど、実態としては「違いがあるかどうか」を見ていることが少なくない³⁵。

一般的に言って、社会学的な計量研究における理論(的仮説)の“解像度”はそれほど高くない。理論的仮説はしばしば「**によって～に違いがある」というものである。明確に(1つだけの)方向性が含まれた仮説が立てられることもあるが、さらに進んで、効果や違いの大きさまでをも指定する仮説が立てられることは稀である。方向性を問わず「効果・違いがある」を理論仮説として立てることは、ゼロ仮説に対して行われる NHST の枠組みと親和的ではある。ゼロ仮説が棄却されたなら、少なくとも「違いがゼロとは言い切れない」という意味で「違いがある」という仮説が支持されたと結論できるからである。解像度の低さは、変数の構成やモデルの設定(独立変数群の選択)についても同様である。社会学理論によってある概念に関して特定の測定方法が指定されたり、どのような要因で統制すべきか等が明示的に示されることはめったになく、しばしば、先行研究における方法を踏襲することが理論的正当化の役割を果たしている。逆に言えば、理論によるガイダンスが乏しいそのような条件下で、研究者は分析に必要な各種の決定を自前で行わざるを得ないのである³⁶。

このとき、データによる理論仮説の検討が、NHST によるゼロ仮説の受容・棄却判断に集約されてしまうならば、p ハッキングの問題が避けられない。仮説に含まれる概念と変数との関係はしばしば一義的でなく、研究者自由度は高い。加えて、どのような統計モデルを立てるか(特に変数の構成と選択)に関しても同じである。これは、理論的仮説が想定する抽象的な効果 E に等しく対応しうる様々な統計的な効果 E_i ($i=1, 2, \dots, n$) が存在しているということに他ならない。しばしば、「学歴によって違いがある」という理論的仮説は、「大卒ダミー変数の係数が有意」という統計的仮説にも、「教育年数変数の係数が有意」という統計的仮説にも対応したものとして扱われうる。さらに、回帰モデルの独立変数に何を投入するか、交互作用を考慮に入れるかに関しても選択肢は数多い。上でも述べたように、多くの社会学理論や理論的仮説の“解像度”では、どのような要因で統制すべきであるか、どの要因との間に交互作用を想定すべきかを指標のレベルで指定することはしばしば困難であり、逆に言えば、

種々のやり方が理論的には緩やかに正当化可能になっている。しかし、異なる仕方で特定されたモデルで見出される大卒ダミー変数・教育年数変数 etc. の係数が示す「効果」は、それぞれ（共通点はあっても）厳密には異なるものである。抽象的に表現された効果 E と、現状では理論的に正当化可能な仕方で結びつけられる統計的効果が複数 ($E_1, E_2, E_3, \dots, E_n$) 存在しているなら、本当は何の関連もないところで統計的に有意な効果 E_i を発見してしまう確率が 5% を上回ってしまうことは 3 節で示したとおりである。

あるひとつの E_i が統計的有意となったことをもって理論的効果 E が検証されたと言えるか？理論における解像度の低さ、仮説設定における制約の緩さは高い研究者自由度をもたらすが、これに NHST と p 値の偏重とが結びつくなら、偽陽性の恐れを無視できなくなる。言い換えれば、選択的に報告された「統計的有意」な結果の科学的証拠としての弱さということである。多くの可能性のうち、たまたまある E_i が統計的有意になったということだけでは、 E に対する確実な証拠として扱うことは難しい。

*

大規模なサーヴェイデータが特定化された理論仮説のためだけに収集されることは少ない。もちろんサーヴェイごとに共通テーマの設定されることも多いが、むしろ汎用性の高い質問項目が多く含まれているのが特徴である。特定の理論仮説を念頭に行われることが多い実験とは、この点で異なっている。従って実際問題として、サーヴェイデータを元にした計量社会学においては、理論仮説に合わせた指標・変数を事後的に選ぶしかないのが現実ではある³⁷。さらに、社会学的分析で基幹的な諸概念——教育、(出身・到達)階層・階級、年齢(層)、職業、収入等々——は、それらをどのように数値化・カテゴリー化するかについて完全に一致した見解があるわけではない。それゆえ研究者と研究課題に応じて、既存の調査で測定された変数から選択・決定せざるをえないのだが、結果として、ひとつの理論仮説に対して、データの許容する統計的仮説が数多く存在してしまうことは事実である³⁸。この研究者自由度を駆使すれば、Simmons らが示したとおり、実際には効果や違いがない場合でも $p < .05$ を得

ることはさほど難しいことではなくなってしまう。これは、すべての研究者が意図的に多くの組み合わせ試し、そこから有意となるパターンをピックアップしているという意味では必ずしもない。その可能性は常に開けているということである。

社会学理論そのものが、細部まで詰められた統計的仮説を指定できるような性能を現在のところ持っていないとすれば、仮説設定に自由度の入り込むことは避けがたい。であるならば、**選択的に報告されたひとつの**〈 $p < .05$ 〉な結果を絶対的な証拠としては扱わないことが必要になる。社会学理論やそこから導かれる理論的仮説の設定について言えば、概念の操作化や変数の選択についてはもちろんのこと、効果や違いが〈あるかないか〉という 0 か 1 かの解像度からもう一歩進み、効果や違いの方向性や大きさ等を明確かつ理論的に正当化できるかたちで示せるようなものへと洗練していくことも求められるだろう。たとえば社会階層における違いに焦点を絞るとすれば、関心の対象となっている社会現象が「どのようなメカニズムで起こると想定するかによって、階層指標は理論的に選択される必要がある」（橋本・盛山 2015: 28）。どのような統計モデルを前提とするのか、どのような要因で統制するのか、違いの方向性はどう予想されるのか等についても同様である。社会学理論が高い解像度を持ち、抽象概念に対応すべき指標や、統制すべき要因について理論的に（事前）指定できる性能を備えていれば、データ分析における（隠れた）研究者自由度は格段に低くなる³⁹。他方で、そもそも、 p 値によってある仮説に対する〈科学的証拠〉と〈証拠でないもの〉へとデータを二分して扱わないというのも一つの方法である⁴⁰。統計的仮説の検討においても、ゼロ仮説が棄却されたかどうかという観点から有意性を見るだけでなく、係数の大きさや組み合わせによる変動、モデルによる予測などをも評価していくことが重要である⁴¹。効果や違いが「あるかないか」という二値的な仮説設定は NHST と親和的ではあるが、経験的な社会学がそれだけの判断に留まらなければならない理由は存在しないだろう。

6. まとめ

計量的な社会学では、データによる理論（的仮説）のテストが中心を占めている。そこで最もよく用いられているのが NHST の枠組みであり、判断基準としての p 値である。 p 値が 0.05 を下回ることが科学的証拠の基準とされ、論文が刊行されるための条件ともなっている。これをめぐっては、従来からその誤用・誤解についての注意が喚起されてきたが、近年では、さらに大きな見直しの動きが生まれてもいる。特に社会科学系の分野における問題の根底には、研究者がデータ収集・分析のプロセスで行う様々な決定における自由度がある。Simmons らが示したように、この自由度を駆使すれば、NHST の枠組みにおいて、偽陽性な結果を「発見」できる確率が高くなってしまう。この観点から見ると、計量的な社会学研究における仮説設定のあり方は問題を含んでいる。サーヴェイデータを元にした多くの研究で探られる「効果・違い」に関する理論的仮説は、実際には、多くの統計的仮説と対応可能なものである。結果として見出された統計的に有意な「効果・違い」は、実は他にも可能であった多くの統計的仮説から選り出されたものでありうる。このとき、「ゼロ仮説が正しいとするとき極めて稀なことが起こった」という想定は危うくなってしまいうだろう。経験科学としての社会学には、理論（および、そこから導かれる理論的仮説）における“解像度”を高めること、また NHST が前提とする二値的な判断（ゼロかどうか）に還元されないかたちでデータやモデルを評価することが求められている。

【注】

- 1 特に心理学分野を中心とした「再現性の危機」をめぐる流れ、現在までの研究慣行や研究環境が抱える科学としての問題点、あるべき対応策などについては Chambers (2017) が詳しい。
- 2 ただ今のところ、社会学においては再現性問題は大きな論点となっていない。この点について、社会科学における再現性問題を整理している Freese & Peterson (2017) を見よ。
- 3 科学者の置かれた状況と、科学論文をめぐる科学コミュニケーションの問題につい

ては常松（2016）で論じている。

- 4 後に触れる文献のほか、たとえば Goodman（2008）、Chambers（2017: 63）を見よ。
- 5 声明は American Statistical Association（2016）を、作成の背景と経緯については Wasserstein & Lazar（2016）を見よ。この声明に対しては、さらに統計専門家20名以上のコメントが付されており、オンライン版で公開されている。参照 URL：
http://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/00031305.2016.1154108#_i24
- 6 科学記者が何人かの科学者に実際にインタビューしてみたところ、彼・彼女たちは p 値のテクニカルな定義は示してくれても、それを容易に理解できるようには翻訳できなかったとする報告がある（Aschwenden 2015）。
- 7 「帰無」仮説という呼び方には、仮説検定の結果として棄却されることが期待される仮説という含意があるが、あらゆる検定の場面でそうであるとは限らない。この点に注意を促す杉野（2017: 53）の示唆に従って、また、典型的な NHST では“効果・差がない”という仮説を検定していることを考慮し、以下ではゼロ仮説という訳語を用いる。訳語の使い分けについて、Sober（2008=2012: 125 [訳注30]）も見よ。
- 8 ゼロ仮説に固執し、データの方を疑うという場合もありえる。効果や違いがあるはずがないと確信しているとき、たとえばデータの方で測定ミス等があったと考えるわけである。ただ通常は、データを基準として仮説を評価するというのが想定されている手順である。
- 9 Chambers（2017: 63）、ASA（2016: 131）などを見よ。
- 10 データから計算される p 値は、「ゼロ仮説に対する反証の強さ」を測るものと解釈することもできる（Sober 2008=2012: 83）。研究者は“心の底では”仮説そのものを確率的に評価したいという欲求を持っており、その結果として p 値への誤解が生じるとする指摘として Gigerenzer（2004）、Wagenmakers et al.（2008）を見よ。この欲求に応えてくれるのがベイズ統計だということになるが、頻度論かベイズアンかという問題にここでは踏み込まない。
- 11 Malachowski et al.（2017）。同誌同号には原著者からのリプライも掲載されており、Malachowski らの批判を正しいと認めてはいるのだが、本文で触れた p 値についての誤解そのものではなく、「p 値は因果性を表してはいないから」という理由を挙げている（Thompson 2017: 1080）。
- 12 「ASA の声明に新しいことは何も含まれていない。統計学者たちはこの問題に対して何十年にもわたって警鐘を鳴らし続けてきたのである——ただそれは役に立たなかった」（Wasserstein & Lazar 2016: 130）とも言われている。
- 13 ここでは、p 値というひとつの指標によってデータを証拠と非証拠とに二分する考え方そのものの当否は措くとする。この点は後に再度触れる。
- 14 現在（2018）では、既にそうではなくなりつつある。この Simmons らの論文もひとつの契機として生じた「再現性の危機」の結果として、心理学を中心に、すべての決定を事前に行い、それを公開・事前登録 preregister することが求められるようになってきている。特に実験科学を中心とした研究の透明性を求める動き、「Open

Science」化は大きな流れである。この潮流のひとつの拠点として Center for Open Science (<https://cos.io>) を見よ。心理学分野における主導的な雑誌のひとつ Psychological Science 誌は、投稿論文に対する条件を2014年に見直したが、そこでも、分析手法に関する情報公開、Open Science 化の推奨が中心となっている (Eich 2014)。同誌論説 Lindsay (2015) も見よ。

- 15 統計的に有意な結果を掘り出してくるという問題はこれまで何度も指摘され、同種の振舞いに対していくつかの名前が与えられてきたが (Simonsohn et al. 2013: 534, n.1), 現在の心理学系では p ハッキングという用語が広く使われている (Chambers 2017: 25f)。Gelman & Loken (2013) は同種の問題を潜在的な多重比較という観点から論じているが、彼らは、意図的なしらみつぶしの探索を含意しうる p ハッキングという用語よりも「枝分かれする選択肢 forking paths」という捉え方を推奨している。Gelman のポイントは、たとえ探索的な p ハッキングを行っていなかったとしても、もしデータが異なったものであったなら研究者は別の分析方法を選んでいただろうという点にある。
- 16 従属変数の選択 (2つの候補のうちいずれを使うか、両者の平均を使うか)、実験をどこで止めるか (n の設定)、どの共変量を使うか (さらに交互作用を考慮するか) など。
- 17 Simmons et al. (2011) の Table1 による。従属変数の選択、実験の停止時期、統制変数の選択、実験条件の選択という4つの自由度をすべて組み合わせると、6割以上のサンプルで少なくとも1つの「有意な」結果が得られている。
- 18 たとえば「X の Y に対する効果」を回帰モデルで考えるとして、他の独立変数 Z1 によって統制された場合、Z2 によって統制された場合、Z1 と Z2 によって同時に統制された場合、Z1*X によって統制された場合等々として、それらはすべて似てはいるが厳密には異なる統計的効果である。
- 19 もし探し出したい「効果」が似ている必要さえなく (研究主題からの理論的制約がなく)、何であれ有意でさえあればよいという条件で探すなら、探し出せるもっと確率は高くなる。
- 20 Meehl (1967), Rosenthal (1979), Cohen (1994), Krantz (1999) などを見よ。
- 21 Ioannidis (2005), Simmons et al. (2011), Simonsohn et al. (2013) など。特に心理学分野における研究の再現性問題の流れについては Chambers (2017) の第2・3章を、日本語で読めるものとして池田・平石 (2016) を、またこの NHST (の誤用) と再現性問題について積極的な発言を続けている統計学者 Andrew Gelman による記事 (Gelman 2016 など) を見よ。
- 22 そもそも、なぜ経験科学において結果の再現性が問題となるのか? 基本となるのは Popper の示した次のような見方だろう。

すべての実験物理学者は、自分の実験室でしばらくのうちは再現できさえするものの、ついには跡形もなく消え去ってしまうような驚くべき、そして説明のつかない

いはっきりした「結果 effects」を知っている。もちろん、このような場合、どの物理学者も自分が科学的発見をしたとはいまい（そのような結果を再現可能にさせるために自分の実験を再調整しようと努めるではあろうが）。実に科学的に有意義な scientifically significant 《物理的結果》とは、指定された仕方で適切な実験をする誰によっても規則正しく再現 reproduce できるもの、と定義されよう。」(Popper 1959=1971-72 (上): 49; 強調原文)

たまたま生じた結果を「科学的発見」と呼ぶことはできず、それは一定の手順に従えば誰によっても正しく「再現」できるものでなければならぬとするなら、(多くの場合に) 一度の実験で見出されたに過ぎない「統計的に有意な効果」はどうだろうか。ここまで論じてきたように、ただでさえ統計的有意性は——研究者自由度を許す研究慣行の下では——見出されやすい。単なる“統計的に有意”を越えて“科学的に有意”な結果であるためには、他の研究者がそれを再現実験によって確認できなければならないのだが、ここに様々な実際上の、また原理的な困難が含まれる。実際上の困難の筆頭は、多くの学術雑誌がその掲載基準として新奇性 novelty を求めている点に由来する。たとえば Nature 誌は論文刊行の基準として、「結論に対する強力な証拠提供」や「各分野の研究者にとっての最大限の重要性」などと並んで、「新奇であること novel」を掲げている (http://www.nature.com/authors/policies/peer_review.html)。一般に、既に発表されているものと同じ（であろうとする）実験の結果を論文として刊行することは、それが新奇であるとは判断されにくいことから、難しくなる（再現性それ自体が関心と呼ぶテーマになってきたこともあり、直接的な再現実験も近年では刊行されることもある。Science 誌に掲載されて注目を集めた論文として、大規模な再現実験プロジェクトの結果をまとめた Open Science Collaboration (2015) を見よ）。しかも研究者は他の研究（者）との差別化を図る必要があり、この点からもなおさら直接的な再現実験を行う動機付けに乏しい。また、スペースに制約のある雑誌論文に書かれた実験方法の記述だけで「同じ」実験を行うことはしばしば困難である（この問題を反映して、注14で触れた Psychological Science 誌の改革では、「方法と結果 Method and Results」セクションは全体の語数制限から除外されている。研究についての「明確かつ完全で、すべて揃った記述 clear, complete, self-contained description」を実現するためとされる。ただ、研究論文ならほとんどのケースで2500ワード以下で達成できるだろうとも述べられている (Eich 2014: 3)。

加えてこれとは別に、原理的にいってそもそも「同じ実験」とは何かという問題がある。厳密に考えるなら、原実験とあらゆる点に関して全く同一である実験を繰り返すことはできない。何らかの点では異ならざるを得ない実験が、どれほど原実験と「似ているか」、同じ実験（効果）に対する再現であると認められるほど十分に「似ているか」という一種の解釈問題を科学者コミュニティで決めるという社会的プロセスが避けがたいのである。科学社会学的観点から見た再現性問題については

Collins (1992) を、知識が算出されるプロセスという観点からの批判的な検討として Feest (2016) を見よ。また、そもそも「再現実験」の意味は多義的であり、同じデータを使うか/新しいデータを使うか、同じ分析法か/異なる分析法か等によって、異なる意義と目的を持ちうることに注意が必要である (Freese & Peterson 2017, Clemens 2017)。

- 23 注14, 21を見よ。たとえば分析方法の事前登録は、テストされるべき効果 E_i をあらかじめ一つに限定し、仮説設定の緩さを許さないことにより NHST に期待された性能を発揮させようという仕組みになる。とはいえ一方で、「多様な実験が同一の事象の反復よりも説得力があることは明らかなのである」(Hacking 1983=2015: 443) という意味で、それぞれ微妙に異なる複数の統計的効果 E_i をテストすることにより理論的效果 E を確認することもまた重要な方法である。
- 24 The Basic and Applied Social Psychology 誌が2014年から始めた。詳細は Trafimow & Marks (2015) を見よ。
- 25 数十名にもおよぶ著名な研究者が名を連ねた Benjamin et al. (2017)。
- 26 Lakens et al. (2017) による。
- 27 Trafimow et al. (2017), McShane et al. (2017) などを見よ。
- 28 以下の「曖昧性」をめぐる議論を含め、Abbott (2001: Ch.2) による。
- 29 Abbott (2001: 68)。
- 30 この点について、実際の研究例をもとに、研究者によって行われている潜在的な選択の問題、特に仮説設定における研究者自由度の引き起こす問題を論じた Gelman & Loken (2013) が重要である。
- 31 最近の学会誌に掲載された論文や学術研究書から引き出したひとつの範例である。これ以外のパターンや、いわゆる仮説検証型ではない探索的・記述的な計量研究もありえることは言うまでもない。
- 32 分析結果の頑健性を調べるために他の変数構成やモデルで結果がどう変わるかがチェックされることも少なくない。ただ、あらゆる組み合わせが網羅的に試されるわけではなく、やはり何らかの選択と決定が行われることに変わりはない。
- 33 「社会階層」は社会学にとって最重要概念のひとつでありながら、「階級」との使い分けを含め、論者によってそもそも定義からして異なりうる。広く用いられている階層分類はいくつかあるが、絶対的と言えるものは存在しない。この点に関する近年の観察として平沢 (2014: 第五章), 橋本・盛山 (2015) を見よ。
- 34 回帰系のモデルでは、焦点となるもの以外に、条件を統制するためとして様々な変数が同時に投入されるのが普通である。この変数の選択・構成に関してもほぼ研究者の決定に任される。モデルのタイプは、おおむね目的変数の選択に依存して自ずと決まってくる。意識変数が5段階の量的変数と見なされる場合には通常の線型回帰モデルが、順序だけに意味がある変数と見なされれば順序ロジスティック回帰モデルが、二値変数に集約している場合には二項ロジスティック回帰モデルといった具合である。

- 35 社会学においてほとんど片側検定が行われていない事情とその問題点については、杉野（2017: 63-65）の指摘を見よ。
- 36 社会科学では、変数間の関係を表す関数形に対する意味ある制約を理論が与えることは稀であるという指摘として Gelman & Shalizi（2013: 23）を見よ。
- 37 ここでは理論的概念とデータとの対応の妥当性（構成概念妥当性）の問題は問わないが、サーヴェイデータの場合に限らず、そもそも研究のために収集されたのではないデータ（いわゆるビッグデータなど）ではこの問題がより大きくなりがちである（Salganik 2018: 24-25）。
- 38 さらに、データを見た後で仮説を立てるいわゆる HARKing（Hypothesizing After the Results are Known）（Kerr 1998）も珍しいことではない。
- 39 ここで言いたいのは、低い研究者自由度が無条件に望ましいということではない。事前に方法を限定されない探索的なデータ分析にも充分意味があり、むしろ理論構築そのものがこれに依存している。問題はあくまで、隠れた自由度と NHST との（不幸な）結びつきにある。
- 40 McShane & Gal（2016; 2017）、McShane et al.（2017）などの示唆する方向性である。注10も見よ。
- 41 回帰モデルの係数解釈について常松（2018）を見よ。

【謝辞】 本論の草稿に対して大林真也（青山学院大学）・瀧川裕貴（東北大学）・福井康貴（名古屋大学）の各氏〔五十音順〕から有益なコメントを頂いた。記して感謝する。

【文献】

- Abbott, Andrew, 2001, *Time Matters: On Theory and Method*, Chicago University Press.
- Aschwanden, Christie, 2015, “Not Even Scientists Can Easily Explain P-values,” *FiveThirtyEight*, URL: <http://fivethirtyeight.com/features/not-even-scientists-can-easily-explain-p-values/>.
- American Statistical Association, 2016, “ASA Statement on Statistical Significance and P-Values,” *The American Statistician*, vol.70, no.2, 131-133.
- Benjamin, Daniel J. et al., 2017, “Redefine Statistical Significance,” *Nature Human Behavior*, 01 September 2017.
- Chambers, Chris, 2017, *The 7 Deadly Sins of Psychology: A Manifesto for Reforming the Culture of Scientific Practice*, Princeton University Press.
- Clemens, Michael A., 2017, “The Meaning of Failed Replications: A Review and Proposal,” *Journal of Economic Surveys*, vol.31, issue 1, 326-342.

- Cohen, Jacob, 1994, “The Earth Is Round ($p < .05$),” *American Psychologist*, vol.49, no.12, 997-1003.
- Collins, H.M., [1985] 1992, *Changing Order: Replication and Induction in Scientific Practice*, University of Chicago Press.
- Eich, Eric, 2014, “Business Not as Usual,” *Psychological Science*, vol.25, no.1, 3-6.
- Feest, Uljana, 2016, “The Experimenters’ Regress Reconsidered: Replication, Tacit Knowledge, and the Dynamics of Knowledge Generation,” *Studies in History and Philosophy of Science*, vol.58, 34-45.
- Freese, Jeremy & David Peterson, 2017, “Replication in Social Science,” *Annual Review of Sociology*, vol.43, no.5, 1-19.
- Gelman, Andrew, 2016, “What has happened down here is the winds have changed,” *Statistical Modeling, Causal Inference, and Social Science*, URL: <http://andrewgelman.com/2016/09/21/what-has-happened-down-here-is-the-winds-have-changed/>.
- Gelman, Andrew and Eric Loken, 2013, “The Garden of Forking Paths: Why multiple comparisons can be a problem, even when there is no “fishing expedition” or “p-hacking” and the research hypothesis was posited ahead of time,” URL: http://www.stat.columbia.edu/~gelman/research/unpublished/p_hacking.pdf.
- Gelman, Andrew & Cosma Rohilla Shalizi, 2013, “Philosophy and the Practice of Bayesian Statistics,” *British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, vol.66, 8-38.
- Gigerenzer, Gerd, 2004, “Mindless Statistics,” *The Journal of Socio-Economics*, vol.33, 587-606.
- Goodman, Steven, 2008, “A Dirty Dozen: Twelve P-Value Misconceptions,” *Seminars in Hematology*, vol.45, 135-140.
- Hacking, Ian, 1983, *Representing and Intervening: Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science*, Cambridge University Press. (= 2015, 渡辺博訳『表現と介入——科学哲学入門』ちくま学芸文庫.)
- 橋本英樹・盛山和夫, 2015, 「社会階層と健康」川上憲人・橋本英樹・近藤尚己〔編〕『社会階層と健康——健康格差解消に向けた統合科学的アプローチ』東京大学出版会, 21-37.
- 平沢和司, 2014, 『格差の社会学入門——学歴と階層から考える』北海道大学出版局.
- Ioannidis, John P.A., 2005, “Why Most Published Research Findings Are False,” *PLoS Medicine*, vol.2, issue 8, 696-773.
- 池田功毅・平石界, 2016, 「心理学における再現可能性危機: 問題の構造と解決策」『心理学評論』, vol.59, no.1, 3-14.
- Kerr, Norbert L., 1998, “HARKing: Hypothesizing After the Results are Known,” *Personality and Social Psychology Review*, vol.2, no.3, 196-217.

- Krantz, David H., 1999, "The Null Hypothesis Testing Controversy in Psychology," *Journal of the American Statistical Association*, vol.44, no.448, 1372-1381.
- Lakens, Daniel et al., 2017, "Justify Your Alpha," *PsyArXiv Preprints*, <https://psyarxiv.com/9s3y6/>.
- Lindsay, D. Stephen, 2015, "Replication in Psychological Science," *Psychological Science*, vol.26, issue 12, 1827-1832.
- Malachowski, Stephen J., Alexander M. Quattlebaum, Branko Miladinovic, 2017, "To the Editor," *The Journal of the American Medical Association*, vol.317, no.10, 1079-1080.
- McShane, Blakely B., and David Gal, 2016, "Blinding Us to the Obvious? The Effect of Statistical Training on the Evaluation of Evidence," *Management Science*, vol.62, issue 6, 1707-1718.
- McShane, Blakely B., and David Gal, 2017, "Statistical Significance and the Dichotomization of Evidence," *Journal of the American Statistical Association*, vol.112, no.519, 885-908.
- McShane, Blakeley B., David Gal, Andrew Gelman, Christian Robert, and Jennifer L. Tackett, 2017, "Abandon Statistical Significance," *arXiv*, <https://arxiv.org/abs/1709.07588>.
- Meehl, Paul, 1967, "Theory-testing in Psychology and Physics: A Methodological Paradox," *Philosophy of Science*, vol.34, 103-115.
- Open Science Collaboration, 2015, "Estimating The Reproducibility of Psychological Science," *Science*, vol.349, no.6251, aac4716-1-8.
- Popper, Karl Raimund, 1935=1959, *The Logic of Scientific Discovery*, Hutchinson & Co. (=1971-1972, 大内義一・森博訳, 『科学的発見の論理 (上・下)』 恒星社厚生閣.)
- Rosenthal, Robert, 1979, "The 'File Drawer Problem' and Tolerance for Null Results," *Psychological Bulletin*, vol.86. no.3, 638-641.
- Salganik, Matthew J., 2018, *Bit By Bit: Social Research in the Digital Age*, Princeton University Press.
- Simmons, Joseph P., Leif D. Nelson, and Uri Simonsohn, 2011, "False Positive Psychology: Undisclosed Flexibility in Data Collection and Analysis Allows Presenting Anything as Significant," *Psychological Science*, vol.22, issue 11, 1359-1366.
- Simonsohn, Uri, Leif D. Nelson, and Joseph P. Simmons, 2013, "P-Curve: A Key to File-Drawer," *Journal of Experimental Psychology*, vol.143, no.2, 534-547.
- Sober, Elliot, 2008, *Evidence and Evolution: The Logic Behind the Science*, Cambridge University Press. (= 2012, 松王政浩訳 『科学と証拠——統計の哲学入門』 名古屋大学出版会 [第1章抄訳].)
- 杉野勇, 2017, 『入門・社会統計学——2ステップで基礎から[R]で学ぶ』 法律文化社.

- Thompson, Paul D., 2016, “What to Believe and Do About Statin-Associated Adverse Effects,” *The Journal of the American Medical Association*, vol.316, no.19, 1969-1970.
- Thompson, Paul D., 2017, “In Reply,” *The Journal of the American Medical Association*, vol.317, no.10, 1980.
- Trafimow, David, and Michael Marks, 2015, “Editorial,” *The Basic and Applied Social Psychology*, vol.37, 1-2.
- Trafimow, David, et al., 2017, “Manipulating The Alpha Level Cannot Cure Significance Testing – Comments on ‘Redefine statistical significance’,” *Peer J Preprints*, <https://peerj.com/preprints/3411v1/>.
- 常松淳, 2016, 「科学データからの往路と復路」『桜文論叢』第90巻, 51-75.
- 常松淳, 2018, 「統計モデルを通じて何を知るべきか—ロジスティック回帰モデルの係数解釈をめぐって—」『桜文論叢』第96巻 [刊行予定].
- Wagenmakers, Eric-Jan, Michael Lee, Tom Lodewyckx, and Geoffrey J. Iverson, 2008, “Bayesian Versus Frequentist Inference,” Herbert Hoijtink, Irene Klugkist, and Paul A. Boelen eds., *Bayesian Evaluation of Informative Hypotheses*, Springer, 181-207.
- Wasserstein, Ronald L. & Nicole A. Lazar, 2016, “The ASA’s Statement on p-Values: Context, Process, and Purpose,” *The American Statistician*, vol.70, no.2, 129-131.

语 法 结 构

—— 中国语言学基础理论研究中句法语汇结构及全体语法结构 ——

萬 清 華

提 要：

本文讨论的语法结构问题是中国语言学基础理论研究中句法语汇结构及全体语法结构问题。本研究讨论的问题关系中国语言学基础理论研究的方法论，是以往的中国语言学基础理论研究和现代汉语语法研究中所没有的。

本文是继笔者1997年〈中国語の語音体系における語音単位〉（《言语与文化论集》第4号 1997）和2012年〈声调描写〉（《樱文论丛》第84卷 2013年2月）讨论语言分析中的语音部门单位问题、2013年〈句単位〉（《樱文论丛》第86卷 2014年2月）讨论语言分析中的句法部门单位问题、2014年〈単語〉（《樱文论丛》第89卷 2015年3月）讨论语言分析中的语汇部门单位并涉及句法部门、语音部门、表记部门单位问题、2015年〈语言分析方法〉（《樱文论丛》第90卷 2015年10月）讨论语言分析方法问题、2016年〈语音元素〉（《樱文论丛》第92卷 2016年10月）讨论语言分析中最小成分语音元素及其结构模型，讨论句法语汇结构及全体语法结构问题。

文中指出本研究讨论语言的基本问题，包括提出语言分析区分2个形式，即，音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以用于指出1个句子表示语言单位，分析句子语言单位区分四个语法部门：句法部门、语汇部门、语音部门、表记部门，可以用于指出全部成分单位，可以用于指出1个句子的句法语汇结构以及一个语言的全体语法结构。分析1个句子可以区分广义和狭义语法单位。广义语法

单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。广义语法单位可以用于指出语言全过程中无限数量所有任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位可以构成包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的一个语言的全体语法结构。狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的 1 个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。狭义语法单位可以用于指出 1 个句子的句法语汇结构及其具有的句法词类型和语法词类型，1 个句子的语法结构是句法词结构包括语法词结构的句法语汇结构。语言分析可以指出 1 个句子的结构是句法语汇结构，以及句法语汇结构类型。可以指出句子中的句法词类型和语法词类型。句法词类型表示句单位类型，可以区分重音句法词和轻音句法词二类，又区分为四等：重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词和轻音型句法词。把归类充任句法词成分的语法词类型称作品词，包括重音类语法词和轻音类语法词，即，重音类实词和轻音类虚词二类，又区分为四等 8 品词。可以用于指出 1 个句子中句法词结构包括语法词结构，指出 1 个句子的句法语汇结构。任何 1 个句子的句法语汇结构具有语汇结构。语法词表示的任何 1 个单语是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。可以用于指出语法词表示充任句法词成分的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出句子中的任何 1 个语素的成分是区别轻重音的语元素，1 个语元素具有 1 个语元素音节和汉文字表记，语法词可以归类为重音类实词和轻音类虚词，重音类实词成分中区别轻重音的语元素音节可以区分普通音节和特殊音节，可以用于指出语元素音节中的最小成分是语音元素包括音元素和超音元素声调。文字符号作为表记单位，表示语言的超音成分单位，可以表示语言单位及其全部成分单位。汉文字表记的基本单位是语元素，可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。汉语拼音符号是汉语语音的符号，表示的

基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调，可以用于指出汉语的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。用于区分语言单位的超音特征是语言单位及其全部成分具有的超音成分。归类的句切和轻重音等超音语言成分可以用于区分语言单位及其成分。可以用于指出句切和轻重音等超音语言成分区分的语言单位及其全部成分单位为超音语言成分单位。文字符号作为表记单位，也是语言单位及其全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号表记的音声语言的表记形式可以表示1个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式，区分的任何1个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。区分的任何1个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构，一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，即，超音句法语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中句法词表示不可再切分的句单位构成的句法结构，即，超音句法结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的1个单语的结构是句子中1个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的语汇结构，即，超音语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的单语的成分语元素具有的语元素音节中最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音结构，即，超音语音结构。可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。超音全体语法结构的核心是语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成：汉语语元素音节中语音元素结构模型。汉语语音元素结构可以构成：汉语语元素音节结构统音法式音节表。一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音

全体语法结构模型。

文中指出本研究讨论语言问题的目的，是解明中国语言学基础理论研究中的语言形式、语言单位、语法部门、语法单位、语法结构包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构和语言的全体语法结构及其关系。提出语言分析的任何1个句子具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式。可以把归类音声语言表达形式中存在的大小停顿（归类的停顿用于语言分析时称作：句切。）、轻重音、标峰重音等等超音特征用于区分指出1个句子。可以指出超音特征是音声语言表达形式具有的超音语言成分。只要朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写表记形式，就可以指出1个句子语言单位同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以用于指出任何1个句子的句法语汇结构，以及可以用于指出语言的全体语法结构。指出语言学讨论的“语言是人类思维的表现手段。可以概括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的任何1个语言共同体约定俗成的思维的表现手段。语言是人类社会的产物。人类与语言共存，语言与人类社会同步发展。”“语言形式是语言分析的对象。包括音声语言表达形式和音声语言的表记形式。1个语言的语言形式是1个语言共同体约定俗成的思维表现的形式。1个音声语言表达形式是语言分析的基本单位，表示语言的基本成分单位句子。音声语言的表记形式是对音声语言的表记，表记单位是文字符号。分析语言的基本成分单位包括句法、语汇、语音、表记四个部门。”

文中指出研究现代汉语的范围和作用，提出这—个分析方法及其全部结果具有特定性，—般性，概括性，适用性。本研究分析的是从20世纪50年代中后期至今半个多世纪以来的具有代表性的现代中国语。即，**具有特定性**。由语言分析区分2个形式，指出1个句子语言单位，分析句子区分四个部门，区分语元素音节全过程，指出全体语法结构核心，到：指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语

法结构。即，**具有一般性**。这 1 个分析方法及其全部结果可以概括为中国语言学基础理论研究中的超音理论：“音等论”，这 1 个分析方法及其全部结果可以概括为语言的定义和语言形式的定义，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。即，**具有概括性**。这 1 个分析方法及其全部结果可以适用于今后包括其他语言研究、中国语言学基础理论研究和现代汉语语法、语汇、语音研究以及今后的现代汉语大语法研究和基础语言教学与研究。即，**具有适用性**。

文中指出本研究提出语言学的方法论，指出我们讨论中国语言学基础理论研究中的基本问题采用的语言分析方法及其全部结果是以往中国语言学基础理论研究、现代汉语语法研究中所没有的。指出这一个语言分析方法及其全部结果提出的方法论称作：音等论。音等论最初是笔者1998年提出的语言学超音理论。指出这一个语言分析方法及其全部结果提出的方法论可以用于解答语言学基础理论研究中的语言单位及有关问题，可以化解以往语言研究、语言学基础理论研究、中国语言学基础理论研究和现代汉语语法、语汇、语音研究中无法解决的全部疑难问题。以往的中国语言学基础理论研究、现代汉语语法研究以字词为依据，排除了音声语言表达形式在语法中的作用。以往语言分析不区分语言形式具有的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，因而以往的中国语言学基础理论研究中并没有也不可能指出语言分析的基本单位是 1 个句子语言单位，不可能指出全部语言成分单位，也不可能指出句法语汇分析的 1 个句子的句法语汇结构，以及 1 个句子具有可以区分的句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构，不可能指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。我们相信：这一个语言分析方法及其全部结果提出的语言学超音理论：音等论，一定会在今后的语言研究、中国语言学基础理论研究、现代汉语语法、语汇、语音研究以及今后的现代汉语大语法研究和基础语言教学与研究起到应有作用。由此而来的今后的科学语言学一定会在科学全领域中起到应有作用。

本文扼要讨论了语言分析中的句法语汇结构和语言分析中的全体语法结构

2 个方面的问题。

本文提出语言分析的 1 个句子的结构是句法语汇结构。可以从 2 个方面来说明。一是，语言单位及其全部成分单位可以区分广义和狭义的语法单位。广义语法单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。广义语法单位可以用于指出语言全过程中无限数量所有任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位可以构成包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的一个语言的全体语法结构。狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的 1 个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。狭义语法单位可以用于指出 1 个句子的句法语汇结构及其具有的句法词类型和语法词类型，1 个句子的语法结构是句法词结构包括语法词结构的句法语汇结构。二是，语言分析可以指出 1 个句子的结构是句法语汇结构，以及句法语汇结构类型。任何 1 个句子具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号的表记形式指出 1 个句子及其成分。句法语汇结构分析时，用句法词表示不可再切分的句单位，用语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出 1 个句子的句法结构具有语汇结构。语法词表示的任何 1 个单语是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。语法词表示的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。可以指出 1 个句子的结构中具有句法词结构类型和语法词结构类型。

本文提出语言分析的一个语言的结构是全体语法结构。可以从 2 个方面来说明。一是，用于区分语言单位的超音特征是语言单位及其全部成分具有的超音成分，归类的句切和轻重音等超音语言成分可以用于区分语言单位及其成分。可以用于指出句切和轻重音等超音语言成分区分的语言单位及其全部成分单位为超音语言成分单位。文字符号作为表记单位，是语言单位及其全部成分单位具有的超

音成分单位。文字符号标记的音声语言的标记形式可以用于指出 1 个句子以及无限数量所有任何 1 个相同句和有可能的非相同句, 以及可以用于指出任何 1 个句子具有的全部成分单位。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式, 可以指出任何 1 个句子的标记形式同时具有包括超音成分的音声语言表达形式, 以及可以用于指出句子中不可再切分的句单位及其成分语素。文字符号可以表示句法词和语法词。句法词用于表示句子中不可再切分的句单位, 语法词用于表示单语充任句法词成分的语素, 可以用于指出语法词表示的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构, 可以用于指出 1 个句子的结构是包括可以区分句法词结构类型和语法词结构类型的句法语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。语法词表示单语充任句法词成分语素, 可以用于指出语法词的成分是区别轻重音的语元素, 可以用于指出任何 1 个句子中的 1 个语法词有几个语元素就有几个语元素音节和汉文字标记。文字符号作为标记单位, 表示语言的超音成分单位, 可以表示语言单位及其全部成分单位。汉文字表示的基本单位是语元素, 可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。汉语拼音符号作为汉语语音的符号, 表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调, 可以用于指出汉语的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示 1 个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式, 区分的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。二是, 语言的全体语法结构是语言全过程中无限数量所有任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的以语音元素结构为核心的超音全体语法结构。文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示 1 个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式, 区分的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。区分的任何 1 个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构, 一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。可以用于指出句法语汇分析的任

何 1 个句子的句法语汇结构，即，超音句法语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何 1 个句子的句法语汇结构中句法词表示不可再切分的句单位构成的句法结构，即，超音句法结构。可以用于指出句法语汇分析的任何 1 个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的语汇结构，即，超音语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何 1 个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的单语的成分语元素具有的语元素音节中最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音结构，即，超音语音结构。可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。超音全体语法结构的核心是语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成：汉语语元素音节中语音元素结构模型。汉语语音元素结构可以构成：汉语语元素音节结构统音法式音节表。一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结构模型。

前 言

（一）本研究讨论的问题及目的作用和方法论

本文讨论的语法结构问题是中国语言学基础理论研究中句法语汇结构及全体语法结构问题。本研究讨论的问题关系中国语言学基础理论研究的方法论，是以往的中国语言学基础理论研究和现代汉语语法研究中所没有的。

本文是继笔者1997年〈中国語の語音体系における語音単位〉（《言语与文化论集》第4号 1997）和2012年〈声调描写〉（《樱文论丛》第84卷 2013年2月）讨论语言分析中的语音部门单位问题、2013年〈句単位〉（《樱文论丛》第86卷 2014年2月）讨论语言分析中的句法部门单位问题、2014年〈単語〉（《樱文论丛》第89卷 2015年3月）讨论语言分析中的语汇部门单位并涉及句法部门、语音部门、表记部门单位问题、2015年〈语言分析方法〉（《樱文论丛》第90卷 2015年10月）讨论语言分析方法问题、2016年〈语音元素〉（《樱文论丛》第92卷 2016年10月）讨论语言分析中最小成分语音元素及其结构模型，讨论句法语汇结构及全体语法结构问题。

1、本研究讨论语言的基本问题

本研究讨论语言的基本问题，包括提出语言分析区分2个形式，即，音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以用于指出1个句子表示语言单位，分析句子语言单位区分四个语法部门：句法部门、语汇部门、语音部门、表记部门，可以用于指出全部成分单位，可以用于指出1个句子的句法语汇结构以及一个语言的全体语法结构。

分析1个句子可以区分广义和狭义语法单位。广义语法单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。广义语法单位可以用于指出语言全过程中无限数量所有任何1个句子语言单位及其全部成分单位可以构成包括句法语

汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的一个语言的全体语法结构。

狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的 1 个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。狭义语法单位可以用于指出 1 个句子的句法语汇结构及其具有的句法词类型和语法词类型，1 个句子的语法结构是句法词结构包括语法词结构的句法语汇结构。

语言分析可以指出 1 个句子的结构是句法语汇结构，以及句法语汇结构类型。可以指出句子中的句法词类型和语法词类型。句法词类型表示句单位类型，可以区分重音句法词和轻音句法词二类，又区分为四等：重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词和轻音型句法词。把归类充任句法词成分的语法词类型称作品词，包括重音类语法词和轻音类语法词，即，重音类实词和轻音类虚词二类，又区分为四等 8 品词。可以用于指出 1 个句子中句法词结构包括语法词结构，指出 1 个句子的句法语汇结构。

任何 1 个句子的句法语汇结构中语法词具有语汇结构。语法词表示的任何 1 个单语是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。可以用于指出语法词表示充任句法词成分的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。

语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出句子中的任何 1 个语素的成分是区别轻重音的语元素，1 个语元素具有 1 个语元素音节和汉文字标记，语法词可以归类为重音类实词和轻音类虚词，重音类实词成分中区别轻重音的语元素音节可以区分普通音节和特殊音节，可以用于指出语元素音节中的最小成分是语音元素包括音元素和超音元素声调。

文字符号作为表记单位，表示语言的超音成分单位，可以表示语言单位及其全部成分单位。汉文字标记的基本单位是语元素，可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。

汉语拼音符号是汉语语音的符号，表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调，可以用于指出汉语的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。

用于区分语言单位的超音特征是语言单位及其全部成分具有的超音成分。归类的句切和轻重音等超音语言成分可以用于区分语言单位及其成分。可以用于指出句切和轻重音等超音语言成分区分的语言单位及其全部成分单位为超音语言成分单位。

文字符号作为表记单位，也是语言单位及其全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号表记的音声语言的表记形式可以表示1个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式，区分的任何1个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。区分的任何1个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构，一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，即，超音句法语汇结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中句法词表示不可再切分的句单位构成的句法结构，即，超音句法结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的1个单语的结构是句子中1个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的语汇结构，即，超音语汇结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的单语的成分语元素具有的语元素音节中最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音结构，即，超音语音结构。

可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。

超音全体语法结构的核心是语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成：汉语语元素音节中语音元素结构模型。汉语语音元素结构可以构成：汉语语元素音节结构统音法式音节表。

一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结构模型。

2、本研究讨论语言问题的目的

本研究讨论语言问题的目的，是解明中国语言学基础理论研究中的语言形式、语言单位、语法部门、语法单位、语法结构包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构和语言的全体语法结构及其关系。

提出语言分析的任何1个句子具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式。可以把归类音声语言表达形式中存在的大小小停顿（归类的停顿用于语言分析时称作：句切。）、轻重音、标峰重音等等超音特征用于区分指出1个句子。可以指出超音特征是音声语言表达形式具有的超音语言成分。只要朗读文字符号标记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写表记形式，就可以指出1个句子语言单位同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以用于指出任何1个句子的句法语汇结构，以及可以用于指出语言的全体语法结构。

指出语言学讨论的“语言是人类思维的表现手段。可以概括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的任何1个语言共同体约定俗成的思维的表现手段。语言是人类社会的产物。人类与语言共存，语言与人类社会同步发展。”“语言形式是语言分析的对象。包括音声语言表达形式和音声语言的表记形式。1个语言的语言形式是1个语言共同体约定俗成的思维表现的形式。1个音声语言表达形式是语言分析的基本单位，表示语言的基本成

分单位句子。音声语言的表记形式是对音声语言的表记，表记单位是文字符号。分析语言的基本成分单位包括句法、语汇、语音、表记四个部门。”

3、研究现代汉语的范围和作用

研究现代汉语的范围和作用，提出这一个分析方法及其全部结果具有特定性，一般性，概括性，适用性。

本研究分析的是从20世纪50年代中后期至今半个多世纪以来的具有代表性的现代中国语。即，**具有特定性**。

由语言分析区分2个形式，指出1个句子语言单位，分析句子区分四个部门，区分语元素音节全过程，指出全体语法结构核心，到：指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。即，**具有一般性**。

这1个分析方法及其全部结果可以概括为中国语言学基础理论研究中的超音理论：“音等论”，这1个分析方法及其全部结果可以概括为语言的定义和语言形式的定义，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。即，**具有概括性**。

这1个分析方法及其全部结果可以适用于今后包括其他语言研究、中国语言学基础理论研究和现代汉语语法、语汇、语音研究以及今后的现代汉语大语法研究和基础语言教学与研究。即，**具有适用性**。

4、本研究提出语言学的方法论

本研究提出语言学的方法论，指出我们讨论中国语言学基础理论研究中的基本问题采用的语言分析方法及其全部结果是以往中国语言学基础理论研究、现代

汉语语法研究中所没有的。指出这一个语言分析方法及其全部结果提出的方法论称作：音等论。

音等论最初是笔者1998年提出的语言学超音理论。指出这一个语言分析方法及其全部结果提出的方法论可以用于解答语言学基础理论研究中的语言单位及有关问题，可以化解以往语言研究、语言学基础理论研究、中国语言学基础理论研究和现代汉语语法、语汇、语音研究中无法解决的全部疑难问题。

以往的中国语言学基础理论研究、现代汉语语法研究以字词为依据，排除了音声语言表达形式在语法中的作用。以往语言分析不区分语言形式具有的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，因而以往的中国语言学基础理论研究中并没有也不可能指出语言分析的基本单位是1个句子语言单位，不可能指出全部语言成分单位，也不可能指出句法语汇分析的1个句子的句法语汇结构，以及1个句子具有可以区分的句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构，不可能指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。

我们相信：这一个语言分析方法及其全部结果提出的语言学超音理论：音等论，一定会在今后的语言研究、中国语言学基础理论研究、现代汉语语法、语汇、语音研究以及今后的现代汉语大语法研究和基础语言教学与研究中起到应有作用。由此而来的今后的科学语言学一定会在科学全领域中起到应有作用。

（二）本文讨论句法语汇结构及全体语法结构

本文讨论中国语言学基础理论研究中句法语汇结构及全体语法结构。本文讨论的要点和要目分别记于下。

1、本文的要点

本文扼要讨论了语言分析中的句法语汇结构和语言分析中的全体语法结构 2 个方面的问题。

首先，本文提出语言分析的 1 个句子的结构是句法语汇结构。可以从 2 个方面来说明。

一是，语言单位及其全部成分单位可以区分广义和狭义的语法单位。广义语法单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。广义语法单位可以用于指出语言全过程中无限数量所有任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位可以构成包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的一个语言的全体语法结构。狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的 1 个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。狭义语法单位可以用于指出 1 个句子的句法语汇结构及其具有的句法词类型和语法词类型，1 个句子的语法结构是句法词结构包括语法词结构的句法语汇结构。

二是，语言分析可以指出 1 个句子的结构是句法语汇结构，以及句法语汇结构类型。任何 1 个句子具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号的表记形式指出 1 个句子及其成分。句法语汇结构分析时，用句法词表示不可再切分的句单位，用语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出 1 个句子的句法结构具有语汇结构。语法词表示的任何 1 个单语是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。语法词表示的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。可以指出 1 个句子的结构中具有句法词结构类型和语法词结构类型。

其次、本文提出语言分析的一个语言的结构是全体语法结构。可以从2个方面来说明。

一是，用于区分语言单位的超音特征是语言单位及其全部成分具有的超音成分，归类的句切和轻重音等超音语言成分可以用于区分语言单位及其成分。可以用于指出句切和轻重音等超音语言成分区分的语言单位及其全部成分单位为超音语言成分单位。文字符号作为表记单位，也是语言单位及其全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号表记的音声语言的表记形式可以用于指出1个句子以及无限数量所有任何1个相同句和有可能的非相同句，以及可以用于指出任何1个句子具有的全部成分单位。朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的表记形式，可以指出任何1个句子的表记形式同时具有包括超音成分的音声语言表达形式，以及可以用于指出句子中不可再切分的句单位及其成分语素。文字符号可以表示句法词和语法词。句法词用于表示句子中不可再切分的句单位，语法词用于表示单语充任句法词成分的语素。可以用于指出语法词表示的任何1个单语的结构是句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的1个语汇结构，可以用于指出1个句子的结构是包括可以区分句法词结构类型和语法词结构类型的句法语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出语法词的成分是区别轻重音的语元素，可以用于指出任何1个句子中的1个语法词有几个语元素就有几个语元素音节和汉文字表记。文字符号作为表记单位，表示语言的超音成分单位，可以表示语言单位及其全部成分单位。汉文字表示的基本单位是语元素，可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。汉语拼音符号作为汉语语音的符号，表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调，可以用于指出汉语的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。可以用于指出文字符号表记的音声语言的表记形式可以表示1个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式，区分的任何1个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。

二是，语言的全体语法结构是语言全过程中无限数量所有任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的以语音元素结构为核心的超音全体语法结构。文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示1个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式，区分的任何1个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。区分的任何1个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构，一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，即，超音句法语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中句法词表示不可再切分的句单位构成的句法结构，即，超音句法结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的1个单语的结构是句子中1个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的语汇结构，即，超音语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的单语的成分语元素具有的语元素音节中最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音结构，即，超音语音结构。可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。超音全体语法结构的核心是语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成：汉语语元素音节中语音元素结构模型。汉语语音元素结构可以构成：汉语语元素音节结构统音法式音节表。一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结构模型。

2、本文的要目

本文主要包括以下问题。

一、语言分析中的句法语汇结构

1、广义和狭义的语法单位

(1) 广义语法单位

- 1) 语言的基本单位
- 2) 句子的成分单位

(2) 狭义语法单位

- 1) 句法词和语法词
- 2) 语法词品词归类

2、句法语汇结构及其类型

(1) 句法语汇结构

- 1) 1 个句子的成分
- 2) 1 个句子的结构

(2) 句子结构类型

- 1) 句法词结构类型
- 2) 语法词结构类型

二、语言分析中的全体语法结构

1、语言单位中的超音成分

(1) 句切和轻重音

- 1) 切分的超音成分
- 2) 区分轻重音成分

(2) 汉文字和符号

- 1) 文字是超音成分
- 2) 文字标记的单位

2、全体语法结构及其模型

（1）语法结构核心

1）语音元素的结构

2）统音法式音节表

（2）全体语法结构

1）一个语言的结构

2）语言的超音结构

本文中若有与笔者以往其他文中不同处，以本文为准。

一、语言分析中的句法语汇结构

语言分析的任何 1 个句子的结构是句法语汇结构。可以从 2 个方面来说明。

一是，语言单位及其全部成分单位可以区分广义和狭义的语法单位。广义语法单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。广义语法单位可以用于指出语言全过程中无限数量所有任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位可以构成包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的一个语言的全体语法结构。狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的 1 个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。狭义语法单位可以用于指出 1 个句子的句法语汇结构及其具有的句法词类型和语法词类型，1 个句子的语法结构是句法词结构包括语法词结构的句法语汇结构。

二是，语言分析可以指出 1 个句子的结构是句法语汇结构，以及句法语汇结构类型。任何 1 个句子具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号的表记形式指出 1 个句子及其成分。句法语汇结构分析时，用句法词表示不可再切分的句单位，用语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出

1 个句子的句法结构具有语汇结构。语法词表示的任何 1 个单语是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。语法词表示的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。可以指出 1 个句子的结构中具有句法词结构类型和语法词结构类型。

以下扼要讨论广义和狭义的语法单位和句法语汇结构及其类型 2 个问题。

1、广义和狭义的语法单位

(1) 广义语法单位

(2) 狭义语法单位

2、句法语汇结构及其类型

(1) 句法语汇结构

(2) 句子结构类型

1、广义和狭义的语法单位

语法单位可以区分广义语法单位和狭义语法单位。

广义语法单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。广义语法单位可以用于指出语言全过程中无限数量所有任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位可以构成包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的一个语言的全体语法结构。关于语言分析中的全体语法结构在第二节讨论。

狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的 1 个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。狭义语法单位可以用于指出 1 个句子的句法语汇结

构及其具有的句法词类型和语法词类型, 1 个句子的语法结构是句法词结构包括语法词结构的句法语汇结构。关于句法语汇结构及其类型在第 2 小节讨论。

(1) 广义语法单位

(2) 狭义语法单位

(1) 广义语法单位

广义语法单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。

以下扼要说明语言的基本单位和句子的成分单位。

1) 语言的基本单位

2) 句子的成分单位

1) 语言的基本单位

语言的基本单位是句子。任何 1 个句子具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式。用于区分 1 个句子语言单位的超音特征是其具有的超音成分。朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的表记形式可以指出 1 个句子及其成分, 以及可以指出任何 1 个句子同时具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式。用附加句切符号和标峰重音符号描写的表记形式可以用于指出音声语言的表记形式可以表示 1 个句子以及无限数量无论任何时候所有任何相同句和有可能的非相同句。

①语言的基本单位是句子

语言的基本单位是句子。1个句子是1个语言单位。

语言分析可以区分音声语言表达形式和音声语言的表记形式2个形式，用于区分和指出句子语言单位及其数目类型。

区分的任何1个句子具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式。

例略。(参见：“2)句子的成分单位”。)

(另参见笔者2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月、〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。)

②语言单位具有超音成分

语言单位具有超音成分。任何1个句子具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以把归类音声语言表达形式中存在的大小小停顿(归类的停顿用于语言分析时称作：句切。)、轻重音、标峰重音等等超音特征用于区分指出1个句子。

用于区分1个句子语言单位及其全部成分单位的超音特征是音声语言表达形式具有的超音语言成分，也是任何1个句子语言单位及其全部成分单位具有的超音成分。

(参见：“二、语言分析中的全体语法结构”的“1、语言单位中的超音成分”。)

③指出1个句子语言单位

指出1个句子语言单位。任何1个句子具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式，只要朗读文字符号标记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写表记形式，就可以指出1个句子及其成分，以及可以用于指出任何1个句子同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式。

例略。(参见：“④指出无限数量的相同句”。)

(另参见笔者2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月。)

④指出无限数量的相同句

指出无限数量的相同句。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以指出1个句子，可以用于指出这1个句子具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式，也可以用于指出音声语言的标记形式可以表示这1个句子以及无限数量无论任何时候所有任何相同句和有可能的非相同句。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学·生 |。”表示1个句子。可以用于指出这1个句子具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式，也可以用于指出音声语言的标记形式可以表示这1个句子和无限数量无论任何时候所有任何1个相同句。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学·生 | ？”表示1个句子。可以用于指出这1个句子具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式，也可以用于指出音声语言的标记形式可以表示这1个句子和无限数量无论任何时候所有任何1个相同句。

可以用于指出“| 我 | 是 | 学·生 |。”表示的这1个句子及其无限数量相同句与“| 我 | 是 | 学·生 | ？”表示的这1个句子及其无限数量相同句为非相同句。

（参见：“2、句法语汇结构及其类型”中“（1）句法语汇结构”的“1）1个句子的成分”的“①1个句子”。）

2）句子的成分单位

1个句子语言单位具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式的2个形式，区分句子语言单位具有的全部成分单位，可以区分二类四个部门。即，句法部门、语汇部门、语音部门和表记部门。

语言分析的1个句子语言单位的成分单位包括：

①句法部门单位

句法部门单位是句单位。任何1个句子中不可再切分的成分单位是句单位。句单位的成分是语素。1个句单位有可能具有1个或2个以上数目区别轻重音的语素。1个语素有可能具有1个或2个以上数目区别轻重音的语元素。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出任何1个句子中不可再切分的句子成分是句单位，也可以用于指出1个句子中句单位的数目类型，以及可以用于指出1个句子的每1个句单位中具有区别轻重音的语素及其语元素数目类型。

句单位是句子中不可再切分的成分

任何1个句子中不可再切分的成分单位是句单位。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出任何1个句子中不可再切分的句子成分是句单位，也可以用于指出1个句子中句单位的数目类型。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”可以用于指出这1个句子具有不可再切分的3个句单位，其中，“| 我 |”、“| 学 生 |”表示重音句单位（区分为重音型句单位），“| 是 |”表示轻音句单位（区分为轻音型句单位）。

句单位类型可以区分为二类四等，二类即：重音句单位和轻音句单位，四等包括：重音型句单位、前重型句单位、后重型句单位、轻音型句单位。

例略。（参见下文。）

句单位的成分是区别轻重音的语素

句单位的成分是语素。任何1个句子的1个句单位中有可能具有1个或2个以上数目区别轻重音的语素。语素可以区分为重音类语素和轻音类语素二类，又可以区分为四等，即：重音语素、次重音语素、次轻音语素、轻音语素。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形

式可以用于指出 1 个句子的句单位数目类型,也可以用于指出 1 个句子的每 1 个句单位中具有区别轻重音的语素及其语元素数目类型。

例如,可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”和“| 你好吗 | ?”分别表示 1 个句子具有 1 个重音句单位。前者的这 1 个重音句单位中具有 2 个重音类语素,可以区分为重音语素和次重音语素,前者的这 1 个重音句单位可以区分为前重型句单位;后者的那 1 个重音句单位中具有 2 个重音类语素和 1 个轻音类语素,可以区分为次重音语素、重音语素和轻音语素,后者的那 1 个重音句单位可以区分为后重型句单位。

又如,可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”这 1 个句子中具有 1 个重音语素的重音句单位“| 我 |”和“| 学生 |”可以区分为重音型句单位,具有 1 个次轻音语素的轻音句单位“| 是 |”可以区分为轻音型句单位。

1 个句子的成分中的 1 个语素有可能具有 1 个或 2 个以上数目区别轻重音的语元素。

例如,可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”这 1 个句子中“我”、“是”表示的语素分别具有 1 个区别轻重音的语元素,“学生”具有 2 个区别轻重音的语元素。

语元素可以区分重音类语元素和轻音类语元素二类。又可以区分为四等,即:重音语元素、次重音语元素、次轻音语元素、轻音语元素。

例如,可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”这 1 个句子中重音语素“我”具有的 1 个语元素可以区分为重音语元素,重音语素“学生”具有的 2 个语元素可以区分为重音语元素和次轻音语元素,次轻音语素“是”具有的 1 个语元素可以区分为次轻音语元素。

②语汇部门单位

语汇部门单位是单语。任何1个单语表示句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的1个语素集合体。语汇中的任何1个单语具有句子中无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的1个语素集合体构成的1个语汇结构。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出1个句子和无限数量任何1个句子中1个语素具有无限数量区别轻重音的同类语素，无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的1个语素集合体表示1个单语，可以用于指出任何1个单语的结构是句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的1个语汇结构。可以用于指出同一单语可以表示无限数量所有任何句子中区别轻重音的同类语素。

单语表示句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的1个语素集合体，单语就可以区分重音类单语和轻音类单语二类。单语的成分是区别轻重音的语元素，1个单语有可能具有1个或2个以上数目区别轻重音的语元素。

句子中区别轻重音的语元素可以区分二类四等，可以用于指出重音类单语成分的语元素可以区分重音语元素、次重音语元素、次轻音语元素、轻音语元素。轻音类单语成分的语元素可以区分次轻音语元素和轻音语元素。

任何1个句子中1个语素成分中的每1个语元素具有1个语元素音节和汉文字标记，可以用于指出单语成分中的每1个语元素具有1个语元素音节和汉文字标记，1个单语具有几个语元素就有几个语元素音节和汉文字标记。

单语表示句子中的1个语素集合体

任何1个句子中的1个语素都具有无限数量相同语音和文字标记的区别轻重音的同类语素。句子中的1个语素具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体表示语汇中的1个单语，语汇中的1个单语就表示句子中1个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的1个语素集合体。语汇中的任

何 1 个单语具有句子中无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出 1 个句子中的 1 个语素具有的语素集合体表示语汇中的 1 个单语，语汇中的任何 1 个单语表示具有句子中无限数量的 1 个语素集合体，可以用于指出任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学·生 |。”这 1 个句子和无限数量所有任何 1 个相同句，可以用于指出这 1 个句子具有的任何 1 个相同句的句单位中的语素与这 1 个句子的句单位中的语素相同，为同类语素，又可以用于指出这 1 个句子中的 1 个语素和无限数量所有任何 1 个有可能的非相同句中的相同语素，为同类语素。由此可以用于指出任何 1 个句子中 1 个语素具有无限数量的同类语素，无限数量同类语素汇成 1 个语素集合体表示语汇中的 1 个单语，语汇中的单语“我”、“是”、“学·生”分别表示具有句子中无限数量的 1 个语素集合体。可以用于指出任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。

单语区分重音类单语和轻音类单语

单语表示句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的 1 个语素集合体，单语就可以区分重音类单语和轻音类单语。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出充任任何 1 个句子中同类语素的重音类单语和轻音类单语，可以用于指出同一单语表示句子中区别轻重音的同类语素。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学·生 |。”这 1 个句子和无限数量任何 1 个相同句以及有可能的非相同句中的同类语素可以区分重音类语素和轻音类语素。这 1 个句子和无限数量所有任何句子中表示重音类语素“我”、“学·生”同类语素

的单语即重音类单语，这1个句子和无限数量所有任何句子中表示轻音类语素“是”同类语素的单语为轻音类单语。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出同一单语表示区别轻重音的同类语素。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”这1个句子和无限数量所有任何1个相同句以及有可能的非相同句中的同类语素分别由重音类单语“我”、“学生”的同一单语和轻音类单语“是”的同一单语表示。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 是 |。”这1个句子和无限数量所有任何1个相同句中的同类语素为重音类语素，由重音类单语“是”的同一单语表示。

可以用于指出单语区分重音类单语和轻音类单语，同一单语表示区别轻重音的同类语素，上例子中的轻音类语素“是”和重音类语素“是”为非同类语素，轻音类单语“是”和重音类单语“是”为非同一单语。

单语的成分是区别轻重音的语元素

单语的成分是语元素。句子中的1个语素有可能具有1个或2个以上数目区别轻重音的语元素。同一单语表示任何1个句子中1个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素的成分是语元素。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出单语的成分是区别轻重音的语元素。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”这1个句子和无限数量所有任何1个句子中，同一单语表示的“我”及其无限数量所有任何1个同类语素的成分为区别轻重音的1个语元素，同一单语表示的“是”及其无限数量所有任何1个同类语素的成分为区别轻重音的1个语元素，同一单语表示的“学生”及其无限数量所有任何1个同类语素的成分为区别轻重音的2个语元素。可以用于指出单语的成分是区别轻重音的语元素。

区别轻重音的语元素可以区分二类四等，用附加句切符号和标峰重音符号描写的句子可以用于指出重音类单语成分的语元素可以区分重音语元素、次重音语元素、次轻音语元素、轻音语元素，轻音类单语成分的语元素可以区分次轻音语元素和轻音语元素。

例略。（参见：“①句法部门单位”、“③语音部门单位”。）

语元素具有语元素音节和文字标记

单语成分中每1个语元素具有1个语元素音节和汉文字标记。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出句子中同一单语表示的1个语素及其无限数量所有同类语素成分中的每1个语元素具有1个语元素音节和汉文字标记。可以用于指出单语成分中的每1个语元素具有1个语元素音节和汉文字标记，1个单语具有几个语元素就有几个语元素音节和汉文字标记。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”这1个句子和无限数量所有任何1个句子中，同一单语表示的“我”及其无限数量所有任何1个同类语素的成分为区别轻重音的1个语元素，具有1个语元素音节和汉文字标记；同一单语表示的“是”及其无限数量所有任何1个同类语素的成分为区别轻重音的1个语元素，具有1个语元素音节和汉文字标记；同一单语表示的“学 生”及其无限数量所有任何1个同类语素的成分为区别轻重音的2个语元素，具有2个语元素音节和汉文字标记。可以用于指出单语“我”、“是”、“学 生”成分中的每1个语元素具有1个语元素音节和汉文字标记，1个单语具有几个语元素就有几个语元素音节和汉文字标记。

（参见：“③语音部门单位”、“④标记部门单位”。）

③语音部门单位

语音部门单位是语元素音节。句子中1个语素以及所有同类语素汇成的1个语素集合体即单语具有的每1个区别轻重音的语元素有1个语元素音节和汉文字

标记。单语成分中的语元素音节可以区分重音类语元素音节和轻音类语元素音节二类，又区分四等，即：重音语元素音节、次重音语元素音节、次轻音语元素音节、轻音语元素音节。又区分声调音节，以及普通音节和特殊音节。

1个语元素音节的成分可以区分调音素以及语音元素包括音元素和超音元素声调。语元素音节成分中的1个调音素具有1个或2个语音元素包括音元素和超音元素声调，1个语音元素包括音元素和超音元素声调是语元素音节中的最小成分单位，也是语言分析中语音部门最小语音成分单位。语元素音节中的每1个语音元素有语音的符号。汉语的语元素音节结构具有语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成汉语语音元素结构模型。汉语的语音元素结构模型称作：“汉语语元素音节中语音元素结构模型”。汉语语音元素又可以构成：“汉语语元素音节结构统音法式音节表”。简称作：“统音法式音节表”。

（参见本文：“二、语言分析中的全体语法结构”的“2、全体语法结构及其模型”中“图（1）：汉语语元素音节中语音元素结构模型”和“图（2）：汉语语元素音节结构统音法式音节表”。另参见笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。）

由单语成分语元素区分语元素音节

单语成分中的每1个区别轻重音的语元素有1个语元素音节。语元素音节可以区分二类四等，又区分声调音节，以及普通音节和特殊音节。

重音类单语成分中的语元素可以区分重音语元素、次重音语元素、次轻音语元素、轻音语元素。重音类单语成分中的语元素音节可以区分重音类语元素音节和轻音类语元素音节，又可以区分为：重音语元素音节、次重音语元素音节、次轻音语元素音节、轻音语元素音节。重音类单语成分中的重音语元素音节、次重音语元素音节可以区分为重音类语元素四声音节，次轻音语元素音节可以区分为次轻音语元素四声音节和次轻音语元素轻声音节，轻音语元素音节可以区分为轻音语元素特殊轻声音节。由此，重音类单语成分中的轻音语元素特殊轻声音节区分为特殊音节，此外的语元素音节区分为普通音节。

轻音类单语成分中的语元素可以区分次轻音语元素和轻音语元素，轻音类单语成分的声调音节区分为次轻音语元素四声音节和轻音语元素轻声音节。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”这1个句子中的“我”、“是”、“学 生”3个语素和无限数量任何1个相同句以及非相同句中所有同类语素分别由同一单语表示。可以用于指出重音类单语“我”具有的那1个重音语元素的音节是重音类语元素四声音节，重音类单语“学 生”具有的那2个语元素区分重音语元素和次轻音语元素，其中，“学”具有的那1个音节为重音类语元素四声音节，“生”具有的那1个次轻音语元素音节又可以区分次轻音语元素四声音节和次轻音语元素轻声音节，轻音类单语“是”具有的那1个次轻音语元素音节为次轻音语元素四声音节。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你 好 吗 | ？”这1个句子中的“你”、“好”、“吗”3个语素和无限数量任何1个相同句以及非相同句中所有同类语素分别由同一单语表示。可以用于指出重音类单语“你”和“好”分别具有次重音语元素和重音语元素的那1个音节为重音类语元素四声音节，轻音类单语“吗”具有轻音语元素的那1个音节为轻音语元素轻声音节。

重音类单语成分中的轻音语元素特殊轻声音节区分为特殊音节，此外的语元素音节区分为普通音节。

例如，重音类单语“馒 头”具有的这2个语元素，区分为重音语元素和轻音语元素，其中，“馒”具有的那1个音节为重音类语元素四声音节，“头”具有的那1个轻音语元素音节区分为轻音语元素特殊轻声音节。可以把重音类单语成分中的这一类轻音语元素音节区分为特殊音节，此外的语元素音节区分为普通音节。（参见下文：“由发音时肌肉紧张区分语元素音节”。）

（另参见笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。）

由发音时肌肉紧张区分语元素音节

1个语元素音节以重音类单语发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程为依据，可以用于指出发音时1个语元素音节具有1次由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程。

语元素音节的成分是调音素，发音时语元素音节中的1个调音素具有1个发音肌肉紧张阶段，普通音节可以区分为3个发音肌肉紧张阶段：紧张增强阶段、紧张高峰阶段、紧张减弱阶段。特殊音节可以区分为1个发音肌肉紧张阶段：紧张增强减弱阶段。语元素音节中普通音节的前辅音性调音素具有紧张增强阶段，元音性调音素具有紧张高峰阶段，后辅音性调音素具有紧张减弱阶段，特殊音节的特殊辅音性调音素具有紧张增强减弱阶段。1个调音素有1个或2个语音元素。语音元素是语元素音节中的最小成分，1个语音元素包括音元素和超音元素声调，发音时语元素音节中的每1个语音元素具有一定发音肌肉紧张阶段。（参见笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。）

例如，重音类单语“别人(biéren)”具有重音语元素和次轻音语元素的2个语元素音节，区分为重音类语元素四声音节和次轻音语元素轻声音节。发音时有2次由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程。“别人(biéren)”发音时发音肌肉紧张分别可以分为3个阶段，即：紧张增强阶段、紧张高峰阶段、紧张减弱阶段。可以把语元素音节成分的调音素分为3个：紧张增强阶段的前辅音性调音素、紧张高峰阶段的元音性调音素、紧张减弱阶段的后辅音性调音素。可以用汉语拼音音节符号指出调音素：“别(bié)”中“é”可以用于指出紧张高峰阶段的元音性调音素，“bi”可以用于指出紧张增强阶段的前辅音性调音素，紧张减弱阶段的后辅音性调音素为“零符号表记”；“人”中“e”可以用于指出紧张高峰阶段的元音性调音素，“r”可以用于指出紧张增强阶段的前辅音性调音素，“n”可以用于指出紧张减弱阶段的后辅音性调音素。可以用于指出语元素音节中的最小成分是语音元素包括音元素和超音元素声调，1个语音元素具有发音肌肉紧张一定阶段：“别人(biéren)”发音时，“b”、“i”、“é”、“零符号表记”、“r”、“e”、“n”分别表示具有发音肌肉紧张一定阶段的1个语音元素，每1个语音元素包括音元素和超音元素声调。

汉语的语元素音节结构具有语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成汉语语音元素结构模型。汉语的语音元素结构模型称作：“汉语语元素音节中语音元素结构模型”。汉语语音元素又可以构成：“汉语语元素音节结构统音法式音节表”。简称作：“统音法式音节表”。

“汉语语元素音节中语音元素结构模型”和“汉语语元素音节结构统音法式音节表”，参见本文“二、语言分析中的全体语法结构”中“图（1）：汉语语元素音节中语音元素结构模型”和“图（2）：汉语语元素音节结构统音法式音节表”。（另参见笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。）

④表记部门单位

表记部门单位是文字符号。文字符号表记的音声语言的表记形式可以表示1个句子语言单位及其全部成分单位。文字符号可以表示句法词和语法词用于句法语汇结构分析时指出1个句子的成分。句法词用于表示句子中不可再切分的句单位，语法词用于表示单语充任句法词成分的语素，可以指出1个句子的结构是句法词表示句子中不可再切分的句单位和语法词表示单语充任句法词成分语素构成的句法语汇结构。语法词表示的任何1个单语是句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。语法词表示的任何1个单语的结构是句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。语法词表示单语充任句法词成分还可以用于归类语法词类型。归类的语法词类型即二类四等8品词，可以用于指出1个句子中具有可以区分的句法词结构类型和语法词结构类型。可以用于指出句法语汇结构分析的1个句子的句法结构具有语汇结构，1个句子的结构是句法语汇结构。汉文字表记表示的基本单位是语元素。汉语拼音符号作为语音的符号，汉语拼音音节符号可以表示语元素音节。汉语拼音符号作为语音的符号表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调。

文字符号可以表示语言的全部成分

文字符号可以表示任何1个句子语言单位及其全部语言成分单位。语言形式区分音声语言表达形式和音声语言的表记形式，由音声语言表达形式具有的超音语言成分（如，句切、轻重音、标峰重音等等）可以指出1个句子并区分其成分，就可以由文字符号表记的音声语言的表记形式指出其表示的1个句子以及无限数

量所有任何 1 个相同句和有可能的非相同句。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式，可以指出 1 个句子同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”可以指出这是 1 个句子语言单位，可以用于指出 1 个句子语言单位同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式。可以用于指出文字符号标记的标记形式可以表示 1 个句子和无限数量所有任何 1 个相同句以及有可能的非相同句。可以用于指出文字符号表示的 1 个句子语言单位，以及 1 个句子具有的全部成分单位。

(参见：“①句法部门单位”、“②语汇部门单位”、“③语音部门单位”。)

文字符号可以表示句法词和语法词

分析 1 个句子的结构时文字符号可以表示句法词和语法词。句法词表示句子中不可再切分的句单位，语法词表示单语充任的句子中句单位成分语素。可以用于指出 1 个句子的成分包括句法词表示的句单位和语法词表示单语充任句法词的成分，可以用于指出句法语汇结构分析的任何 1 个句子的句法结构具有语汇结构，句法语汇结构分析的任何 1 个句子的结构是句法语汇结构。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”这 1 个句子中可以用句法词表示不可再切分的句单位“| 我 |”、“| 是 |”、“| 学 生 |”，可以用语法词表示单语充任句法词成分“我”、“是”、“学 生”。可以用于指出句法语汇结构分析的任何 1 个句子的成分包括句法词和语法词，1 个句子的结构是句法词表示句子中不可再切分的句单位和语法词表示单语充任句法词成分语素构成的句法语汇结构。

(参见：“(2) 狭义语法单位”的“(1) 句法词和语法词”和“2、句法语汇结构及其类型”。)

语法词表示 1 个单语具有语汇结构

语法词表示单语充任句法词成分语素，语法词表示的任何 1 个单语是句子中

1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。语法词表示的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。

例略。（参见：“（2）狭义语法单位”中“1）句法词和语法词”的“②指出 1 个句子中的语法词。”）

语法词表示单语充任句法词成分还可以用于归类语法词类型。由充任句子中句法词成分归类的语法词类型称作：品词。可以归类和区分为区别轻重音的二类四等 8 品词。（参见：“（2）狭义语法单位”的“2）语法词品词归类”。）

归类的语法词类型即二类四等 8 品词，可以用于指出 1 个句子中具有可以区分的句法词结构类型和语法词结构类型。

例略。（参见：“2、句法语汇结构及其类型”。）

文字符号表示的语言成分基本单位

汉文字作为汉语的表记单位，表示的语言成分基本单位是语元素。汉语拼音符号作为汉语语音的符号，汉语拼音音节符号可以表示语元素音节。汉语拼音符号作为语音的符号表示的语音成分基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调。

汉文字表示的单语的成分是语元素。1 个单语成分中有几个语元素就有几个汉文字表记。汉文字表记表示的语言成分基本单位是语元素。

例如，可以指出“学生”表示的这 1 个重音类单语成分中有 2 个语元素，区分为重音语元素和次轻音语元素。可以用于指出单语成分中有几个语元素就有几个汉文字表记，汉文字表记表示的语言成分基本单位是语元素。

单语成分中的 1 个语元素具有 1 个语元素音节。汉语拼音符号作为汉语语音的符号，汉语拼音音节符号可以表示语元素音节。

例如，“别人 biéren”表示的这 1 个重音类单语成分中有 2 个语元素，区分为重音语元素和次轻音语元素，分别具有 1 个语元素音节。汉语拼音音节符号

“biéren”可以表示“别人”具有的这2个区别轻重音的语元素音节。可以用于指出汉语拼音音节符号可以表示语元素音节。

汉语拼音符号作为汉语语音的符号表示的基本单位是语元素音节中的最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调。

例如，“别人 biéren”的语元素音节符号中“b”、“i”、“é”、“零符号标记”、“r”、“e”、“n”分别表示具有发音肌肉紧张一定阶段的1个语音元素，每1个语音元素包括音元素和超音元素声调。可以用于指出汉语拼音符号作为汉语语音的符号表示的基本单位是语元素音节中最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调。

（参见笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。）

（2）狭义语法单位

狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的1个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。

以下扼要说明句法词和语法词及语法词品词归类。

1) 句法词和语法词

2) 语法词品词归类

1) 句法词和语法词

句法语汇结构分析的任何1个句子的成分包括句法词和语法词。

句法词表示句法语汇结构分析的任何1个句子中不可再切分的句单位。

语法词表示单语充任句法语汇结构分析的任何1个句子的句法词成分。

①指出 1 个句子中的句法词

指出 1 个句子中的句法词。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出 1 个句子，也可以用于指出 1 个句子中句法词表示不可再切分的句单位。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出分析的这 1 个句子中的句法词“| 你好 |”表示句子中不可再切分的句单位。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出 1 个句子，以及无限数量所有任何 1 个相同句，也可以用于指出 1 个句子和无限数量所有任何 1 个相同句和有可能的任何 1 个非相同句中的 1 个句法词表示 1 个句单位。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出分析的这 1 个句子，以及无限数量所有任何 1 个相同句，也可以用于指出 1 个句子和无限数量所有任何 1 个相同句和有可能的任何 1 个非相同句中的那 1 个句法词“| 你好 |”表示 1 个句单位。

②指出 1 个句子中的语法词

指出 1 个句子中的语法词。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出 1 个句子中的句法词，也可以用于指出语法词表示单语充任句法词成分语素。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出分析的这 1 个句子具有的那 1 个句法词，也可以用于指出这 1 个句子中“你”、“好”分别是语法词表示单语充任那 1 个句法词成分语素。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出句子中语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音

符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出分析的这1个句子与无限数量所有任何1个相同句和有可能的任何1个非相同句中的语法词表示的同一单语“你”、“好”可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。

指出句法语汇结构分析的任何1个句子的成分包括句法词和语法词，语法词表示单语充任句法词成分，语法词表示的任何1个单语的结构是句子中区别轻重音的1个语素及其具有的无限数量所有同类语素即语素集合体构成的语汇结构，可以用于指出1个句子的句法结构具有语汇结构，句法语汇结构分析的任何1个句子的结构是句法语汇结构。

(参见“2、句法语汇结构及其类型”。)

2) 语法词品词归类

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出1个句子的成分包括句法词和充任句法词成分的语法词，可以由充任句法词成分归类语法词类型。句子中归类的语法词类型称作：品词。

①由充任句法词成分归类语法词类型

由充任句法词成分归类语法词类型。语法词表示的任何1个单语是句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体，语法词类型必须由充任任何1个句子中句法词成分的区别轻重音的语法词归类。

以下略记。(参见下文。)

②句子中归类的语法词类型称作品词

句子中归类的语法词类型称作：品词。可以归类和区分为区别轻重音的二类四等8品词。

品词可以归类为重音类实词和轻音类虚词二类。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你·你好吗 | ？”可以指出这 1 个句子以及无限数量所有任何 1 个相同句和有可能的非相同句中，“你”、“好”分别表示的重音类语法词可以归类为重音类实词，“吗”表示的轻音类语法词可以归类为轻音类虚词。

可以用于概括指出汉语的任何 1 个句子中的重音类语法词可以归类为重音类实词，轻音类语法词可以归类为轻音类虚词。

重音类实词和轻音类虚词又可以区分为四等 8 品词。包括：

重音类实词

一等：1，名词（代词）。

2，数词。

二等：3，形容词。

4，动词。

轻音类虚词

三等：5，副词。

6，介词。

四等：7，连词。

8，助词。

重音类实词可以区分为一等和二等

属于重音类实词的名词（代词）、数词和形容词、动词可以区分为一等和二等。

例如，由上例“| 你·你好吗 | ？”可以指出任何 1 个重音句中的重音类语法词“你”、“好”可以归类为重音类实词，但是在区分重音类实词类型时，这 1 个句子以及无限数量任何 1 个相同句和有可能的非相同句中的重音类语法词“你”可以区分为属于重音类实词的代词，可以用于概括指出任何 1 个重音句中的代词，然而，却不能用于指出这 1 个句子以及无限数量任何 1 个相同句和有可能的非相

同句中的重音类语法词“好”可以区分为属于重音类实词的形容词，如，用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 好 |。”表示的这1个句子和无限数量任何1个相同句中的重音类语法词“好”不一定可以区分为属于重音类实词的形容词。即，属于重音类实词的形容词并不可以用于概括指出任何1个句子中的形容词。由此可以指出重音类实词可以区分为一等和二等。名词（代词）和数词属于重音类实词一等，可以用于概括指出任何1个重音句中的名词（代词）和数词。形容词和动词属于重音类实词二等，不可以用于概括指出任何1个重音句中的形容词和动词。

轻音类虚词可以区分为三等和四等

属于轻音类虚词的副词、介词和连词、助词可以区分为三等和四等。

例如，副词、介词表示的轻音类虚词只充任重音句法词成分中的次轻音语素，而不充任轻音句法词成分。可以用于概括指出任何1个重音句中的副词和介词。但只充任重音句法词成分中的次轻音语素而不充任轻音句法词成分的轻音类虚词，不可以用于概括指出句子中的连词和助词，如，连词的一部分（如，“可是”、“但是”）和助词的一部分（如，“唔”、“嗯”）可以单独充任1个重音句中的轻音句法词成分，也可以单独充任1个轻音句的轻音句法词成分。由此可以指出轻音类虚词可以区分为三等和四等。副词和介词属于轻音类虚词三等，可以用于概括指出任何1个重音句的重音句法词中的副词和介词。连词和助词属于轻音类虚词四等，可以用于概括指出任何1个重音句和轻音句中的连词和助词。

（参见笔者2010年〈说“的”〉《樱文论丛》第79卷 2011年2月、2011年〈说“就”“才”〉《樱文论丛》第82卷 2012年2月、2014年〈单语〉《樱文论丛》第89卷 2015年3月、2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月。）

由句子中充任句法词成分的语法词归类和区分的二类四等8品词，可以用于归类和指出句法语汇结构分析的任何1个句子的句法语汇结构具有可以区分的句法词结构类型和语法词结构类型。

2、句法语汇结构及其类型

句法语汇结构分析的任何 1 个句子的结构是句法语汇结构。可以区分句法词结构类型和语法词结构类型。

（1）句法语汇结构

（2）句子结构类型

（1）句法语汇结构

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式，可以用于指出任何 1 个句子的成分包括表示不可再切分句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词，可以用于指出 1 个句子的结构是句法词和语法词构成的句法语汇结构。可以用于指出任何 1 个句子中的每 1 个句法词结构类型包括充任句法词成分的语法词结构类型。

以下扼要说明 1 个句子的成分和 1 个句子的结构。

1）1 个句子的成分

2）1 个句子的结构

1）1 个句子的成分

句法语汇结构分析时用句法词和语法词表示 1 个句子的成分。可以用于指出句法语汇结构分析的 1 个句子的成分包括句法词表示不可再切分句单位和语法词表示单语充任句法词成分语素。

① 1 个句子

文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示 1 个句子。1 个句子同时具有可以区分的包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出 1 个句子。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出分析的这 1 个句子。文字符号标记的这 1 个句子表示同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式。可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示 1 个句子。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式表示的任何 1 个句子具有无限数量的相同句，1 个句子和无限数量任何 1 个相同句具有相同的包括句切和轻重音等超音语言成分的音声语言表达形式。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出这 1 个句子具有无限数量的相同句，这 1 个句子和无限数量任何 1 个相同句具有相同的包括句切和轻重音等超音语言成分的音声语言表达形式。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式又可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式有可能表示 2 个以上非相同句。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得好 |。”可以指出这 1 个句子以及无限数量任何 1 个相同句。

又如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得好 |。”可以指出这 1 个句子以及无限数量任何 1 个相同句。

可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式“| 他 | 写得好 |。”这 1 个句子与“| 他 | 写得好 |。”这 1 个句子是 2 个非相同句。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式又可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式有可能表示 1 个句子具有无限数量的相同句和非相同句。

例如, 用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得_·好 |。”可以指出文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示这 1 个句子具有无限数量的相同句以及“| 他 | 写得_·好 |。”表示的这 1 个和无限数量任何 1 个非相同句。同样, 用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得_·好 |。”可以指出文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示这 1 个句子具有无限数量的相同句以及“| 他 | 写得_·好 |。”表示的这 1 个和无限数量任何 1 个非相同句。

②句子成分

语言分析可以指出 1 个句子语言单位的成分单位是不可再切分的句单位, 句单位的成分单位是区别轻重音的语素。句法语汇结构分析时, 朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以指出文字符号标记的 1 个句子, 就可以用句法词表示不可再切分的句单位, 用语法词表示单语充任句法词成分语素。

句法语汇结构分析时 1 个句子的成分包括句法词表示不可再切分的句单位和语法词表示单语充任句法词成分语素。

例如, 朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你_·好 |。”可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示 1 个句子。句法语汇结构分析时这 1 个句子的成分可以用句法词“| 你_·好 |”表示不可再切分的句单位, 语法词“你_·”、“好”分别表示单语充任句法词成分语素。

1 个句子的成分中句法词的类型可以表示句单位类型。

例如, 可以指出“| 你_·好 |。”这 1 个句子的成分中句法词“| 你_·好 |”表示前重型句单位, 可以指出这 1 个句子的成分中句法词类型为前重型句法词。以下略记。(参见: 下文“2) 1 个句子的结构”、“(2) 句子结构类型”的“1) 句法词结构类型”。)

1 个句子的成分中语法词的类型可以表示单语充任句法词成分的语法词类型。

例如，可以指出“| 你好 |。”这 1 个句子的成分中表示单语充任句法词成分的语法词“你”、“好”分别表示重音类实词。以下略记。（参见：下文“2）1 个句子的结构”、“（2）句子结构类型”的“2）语法词结构类型”。）

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出句法语汇结构分析的 1 个句子和句子成分，可以用于指出 1 个句子的成分包括句法词表示不可再切分句单位和语法词表示单语充任句法词成分语素。

2）1 个句子的结构

1 个句子的结构是句法语汇结构。1 个句子有可能具有 1 个或 2 个以上数目的句法词，每 1 个句法词有可能具有 1 个或 2 个以上数目的语法词。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出 1 个句子的结构。指出 1 个句子的结构，首先可以指出分析的这 1 个句子的成分中句法词的数目和充任每 1 个句法词成分的语法词数目，然后可以指出这 1 个句子中的每 1 个句法词类型和充任句法词成分的语法词结构类型。可以用于指出任何 1 个句子中的每 1 个句法词结构类型包括充任句法词成分的语法词结构类型。

①指出句子中的句法词及语法词数目

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出分析的这 1 个句子的成分中句法词的数目和充任每 1 个句法词成分的语法词数目。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出这 1 个句子的成分中句法词数目为 1 个，充任这 1 个句法词成分的语法词数目为 2 个。

②指出句子中的句法词及语法词类型

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出句子中的每1个句法词类型和充任句法词成分的语法词结构类型。

句子中的任何1个重音句法词有1个中心语，（重音类语法词即重音类实词充任句法词成分中的重音类语素包括重音语素和次重音语素，重音语素也称作：标峰重音语素，充任句法词成分中重音语素即标峰重音语素的重音类实词可以称作：中心语。）可以用于指出重音句法词类型。句子中的任何1个轻音句法词没有中心语，充任轻音句法词成分的是1个轻音类语法词即轻音类虚词。（轻音类虚词充任句法词成分中的轻音类语素包括次轻音语素和轻音语素。）

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”这1个句子的成分中有3个句法词和分别充任句法词成分的1个语法词。其中，“| 我 |”、“| 学 生 |”分别是重音类实词“我”、“学 生”充任句法词成分中的1个重音语素即标峰重音语素构成的重音型句法词，（重音句法词中的重音型句法词类型表示只具有1个重音语素即标峰重音语素或有轻音类语素的重音型句单位。）重音类实词“我”、“学 生”充任的重音型句法词成分也称作：中心语。重音类实词“我”、“学 生”分别是代词和名词，（语法词类型归类为二类四等8品词。二类即重音类实词和轻音类虚词，重音类实词包括一等：1、名词（代词）。2、数词。二等：3、形容词。4、动词。）可以指出这1个句子中的重音型句法词“| 我 |”、“| 学 生 |”分别是由代词“我”和名词“学 生”结构而成的。这1个句子的成分中，“| 是 |”是轻音类虚词“是”充任轻音句法词成分中的1个次轻音语素构成的轻音句法词，区分为轻音型句法词。（轻音句法词区分为轻音型句法词类型表示只具有1个轻音类语素的轻音型句单位。）轻音类虚词“是”可以区分为结构助词，（语法词类型中轻音类虚词包括三等：5、副词。6、介词。四等：7、连词。8、助词（助数词，态助词，结构助词，语气助词）。）可以指出这1个句子中的轻音型句法词“| 是 |”是由结构助词“是”结构而成的。

又例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你 好 |。”这1个句子的成分中有1个重音句法词

“| 你好 |”，充任这 1 个句法词成分的语法词是重音类实词“你”和“好”，可以指出这 1 个句法词的类型为前重型句法词，（重音句法词中的前重型句法词类型表示 2 个以上重音类语素构成标峰重音语素在其他次重音语素之前或有轻音类语素的前重型句单位。）充任这 1 个句法词成分的重音类实词“你”和“好”分别是代词和形容词，其中，“你”表示中心语，可以指出这 1 个句子的前重型句法词是代词“你”为中心语和形容词“好”结构而成的。

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以用于指出分析的 1 个句子的成分中句法词和语法词数目类型，可以用于指出任何 1 个句子中的每 1 个句法词结构类型包括充任句法词成分的语法词结构类型。

（2）句子结构类型

句法语汇结构分析指出 1 个句子以及句子成分中的句法词和语法词的数目类型，可以用于指出任何 1 个句子中的每 1 个句法词结构类型包括充任句法词成分的语法词结构类型。

以下扼要说明句法词结构类型和语法词结构类型。

- 1) 句法词结构类型
- 2) 语法词结构类型

1) 句法词结构类型

句法语汇结构分析时句法词表示 1 个句子中不可再切分的句单位，句法词类型表示句单位类型。任何 1 个句子中的句法词结构是由充任其成分的语法词结构而成的，可以用于指出句法词结构类型具有语法词结构。

①句法词类型

句法语汇结构分析时句法词类型表示句单位类型，可以称作：二类四等句法词。二类四等句法词可以用于指出句子可以区分重音句和轻音句。

表示句单位的二类四等句法词类型

句单位可以区分为重音句单位和轻音句单位二类。又分4个类型，也可以称作：四等。分别是：1. 重音型句单位。2. 前重型句单位。3. 后重型句单位。4. 轻音型句单位。

只具有1个重音语素（也称：标峰重音语素）或有其他轻音类语素的重音句单位区分为重音型句单位，具有2个以上重音类语素或有其他轻音类语素的重音句单位区分前重型句单位（标峰重音语素在其他次重音语素前）和后重型句单位（标峰重音语素前有次重音语素），只具有1个轻音类语素（包括次轻音语素和轻音语素）的轻音句单位区分为轻音型句单位。

句法词类型表示句单位类型。句法词类型可以称作：二类四等句法词。二类句法词可以称作：重音句法词和轻音句法词。四等句法词可以分别称作：1. 重音型句法词。2. 前重型句法词。3. 后重型句法词。4. 轻音型句法词。（我在以往的文曾把表示四等句单位的句法词类型分别称作：词、复合词、词组、助词。）

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”这1个句子中的“| 我 |”、“| 学 生 |”表示重音型句法词，“| 是 |”表示轻音型句法词。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你 好 |。”这1个句子中的“| 你 好 |”表示前重型句法词。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你 好 吗 | ？”这1个句子中的“| 你 好 吗 |”表示后重型句法词。

句子可以区分重音句和轻音句二类

句法语汇结构分析时区分二类四等句法词，可以用于指出句子可以区分重音句和轻音句二类。可以指出任何具有重音句法词（重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词）或有轻音句法词（轻音型句法词）的1个句子为重音句。可以指出任何不具有重音句法词只具有轻音句法词（轻音型句法词）的1个句子为轻音句。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学·生 |。”、“| 你·好 |。”、“| 你·好吗 | ？”分别是具有重音句法词（重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词）或有轻音句法词（轻音型句法词）的重音句。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 可是 |……。”这1个句子是不具有重音句法词只具有轻音句法词（轻音型句法词）的轻音句。

②句法词结构

任何1个句子中的句法词结构是由充任其成分的语法词结构而成的，可以用于指出句法词结构类型具有语法词结构。句法词类型可以用于归类语法词类型。

句法词结构类型具有语法词结构

句子中的句法词类型包括重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词、轻音型句法词，句法词结构类型具有语法词结构。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学·生 |。”这1个句子中的3个句法词类型分别是重音型句法词“| 我 |”、轻音型句法词“| 是 |”和重音型句法词“| 学·生 |”。可以指出这1个句子中的每1个句法词结构类型具有语法词结构，如，重音型句法词“| 我 |”具有重音类语法词“我”，轻音型句法词“| 是 |”具有轻音类语法词“是”，重音型句法词“| 学·生 |”具有重音类语法词“学·生”。可以用于指出句法词结构由充任其成分的语法词结构而成，句法词结构类型具有语法词结构。

句法词类型用于归类语法词类型

句法词结构类型具有语法词结构，句法词类型可以用于归类语法词类型。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”是1个重音句。这1个重音句中的重音型句法词“| 我 |”具有重音类语法词“我”，重音型句法词“| 学 生 |”具有重音类语法词“学生”，可以用于指出这1个重音句具有的无限数量所有任何1个相同句中充任重音型句法词成分的重音类语法词“我”和“学生”可以归类为重音类实词，任何1个非相同句中充任重音句法词（包括重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词）成分的重音类语法词“我”和“学生”可以归类为重音类实词。这1个重音句中的轻音型句法词“| 是 |”具有轻音类语法词“是”，可以用于指出这1个重音句具有的无限数量所有任何1个相同句中充任轻音型句法词成分的轻音类语法词“是”可以归类为轻音类虚词，任何1个非相同句中充任轻音句法词（轻音型句法词）和重音句法词（包括重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词）成分的轻音类语法词“是”可以归类为轻音类虚词。

语法词类型可以归类和区分为包括重音类实词和轻音类虚词的二类四等8品词。

以下略记。（参见“1、广义和狭义的语法单位”中“（2）狭义语法单位”的“2）语法词品词归类”。）

2）语法词结构类型

任何1个句子的结构是句法语汇结构，句法词结构类型具有语法词结构。

①语法词类型

充任句法词成分的语法词归类为重音类实词和轻音类虚词二类，又区分为四等8品词。语法词类型也称作：二类四等8品词。

语法词类型包括：重音类实词，一等：1、名词（代词）。2、数词。二等：3、形容词。4、动词。轻音类虚词，三等：5、副词。6、介词。四等：

7、连词。8、助词（助数词、态助词、结构助词、语气助词）。

以下略记。

（参见“1、广义和狭义的语法单位”中“（2）狭义语法单位”的“2）语法词品词归类”。）

②语法词结构

语法词类型可以用于指出任何1个句子中的句法词结构类型具有的语法词结构。可以用于指出句法语汇结构分析的1个句子中的句法词结构类型包括充任句法词成分的语法词结构类型。

例如，重音句中的每1个重音句法词具有由1个或2个以上数目的语法词（重音类实词和轻音类虚词）构成的语法词结构。可以用于指出重音句中的1个重音型句法词由1个重音类实词表示的中心语或有其他轻音类虚词的语法词构成，重音句中的1个前重型句法词由表示中心语的重音类实词前没有其他重音类实词的2个以上重音类实词或有其他轻音类虚词的语法词构成，重音句中的1个后重型句法词由表示中心语的重音类实词前有其他重音类实词的2个以上重音类实词或有其他轻音类虚词的语法词构成，重音句中的1个轻音型句法词由1个轻音类虚词构成。轻音句中只有1个轻音型句法词，轻音句中的那1个轻音型句法词由1个轻音类虚词构成。可以用于指出任何1个句子中的1个句法词结构类型具有语法词结构。

重音句中重音句法词具有的语法词结构可以区分为二类。

一类是由重音句法词中区分表示中心语的重音类实词（表示中心语的重音类实词指句法词中充任标峰重音语素的语法词）以及有可能的其他重音类实词（其他重音类实词指句法词中充任次重音语素的语法词）构成的语法词结构类型。可以称作：重音类实词中心的语法词结构类型。

二类是由重音句法词中区分包括轻音类虚词（轻音类虚词指句法词中充任次轻音语素和轻音语素的语法词）结构的语法词结构类型。可以称作：包括轻音类虚词的语法词结构类型。

重音类实词中心的语法词结构类型

重音类实词中心的语法词结构类型指由重音句法词中区分表示中心语的重音类实词以及有可能的其他重音类实词构成的语法词结构类型。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”这1个重音句中有1个前重型句法词。这1个前重型句法词具有2个充任句法词成分的重音类实词“你”和“好”，“你”为中心语，表示充任标峰重音语素的语法词，“好”表示充任次重音语素的语法词，可以指出这1个前重型句法词具有的语法词结构是重音类实词的代词“你”为中心语和形容词“好”构成的语法词结构。

包括轻音类虚词的语法词结构类型

包括轻音类虚词的语法词结构类型指由重音句法词中区分包括轻音类虚词结构的语法词结构类型。重音句中的充任1个重音句法词成分的语法词除了重音类实词外或有轻音类虚词，可以指出重音句法词中包括轻音类虚词结构的语法词结构。

重音句法词具有的语法词结构可以区分包括副词的语法词结构和包括介词的语法词结构以及包括连词的语法词结构和包括助词的语法词结构等等。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 把门 | 关上 |。”是1个重音句。这1个重音句有2个重音型句法词。前者中充任句法词成分的是属于轻音类虚词的介词“把”和属于重音类实词的名词“门”。这1个重音型句法词中的语法词结构可以区分为包括介词的语法词结构。可以指出这1个重音型句法词具有介词“把”和名词“门”为中心语结构的语法词结构。后者中充任句法词成分的是属于重音类实词的动词“关”和属于轻音类虚词的助词“上”，助词可以区分助数词、态助词、结构助词、语气助词，我们把这1个句子的重音型句法词“| 关上 |”中的轻音类语法词“上”区分为助词中的态助词。这1个重音型句法词中的语法词结构可以区分为包括助词的语法词结构。可以指出这1个重音型句法词具有动词“关”为中心语和态助词“上”结构的语法词结构。

要注意的是，属于轻音类虚词的副词的一部分充任重音句法词的成分时有可能表示特殊轻音类同类语素的（强调）重音语素，这时，标峰重音符号可以标示在充任重音句法词成分中的副词上，但充任那1个重音句法词成分中心语的仍然是重音类实词。

重音句中的充任重音句法词成分的副词表示特殊轻音类同类语素时的（强调）重音与重音类实词充任重音句法词成分的中心语和有可能的重音类语法词表示的重音语素和次重音语素是有区别的。一般来说，重音句中的充任重音句法词成分的副词表示特殊轻音类同类语素时的（强调）重音显得较为强势，音长也有可能会长些。

用标峰重音符号标示充任重音句法词成分的副词表示特殊轻音类同类语素时的（强调）重音不会与重音类实词充任重音句法词成分的中心语和有可能的重音类语法词表示的重音语素和次重音语素相混淆。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 很忙 |。”和“| 很忙 |。”分别是具有重音型句法词的1个重音句。前者中充任重音句法词成分的副词“很”与后者中充任重音句法词成分的副词“很”表示次轻音语素的同类语素，“很”表示的同类语素称作：特殊轻音类同类语素。用标峰重音符号标示充任重音句法词成分的副词表示的特殊轻音类同类语素（强调）重音，可以用于指出副词充任重音句法词成分时的特点（参见笔者2014年〈单语〉《樱文论丛》第89卷 2015年3月、2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月。）。这2个重音句中，前者可以用于指出这1个重音句的重音型句法词具有副词“很”和形容词“忙”为中心语结构的语法词结构。后者可以用于指出这1个重音句的重音型句法词具有副词“很”表示特殊轻音类同类语素和形容词“忙”为中心语结构的语法词结构。

重音句中的充任重音句法词成分的副词有可能表示特殊轻音类同类语素的这一特点是其他轻音类虚词（介词、连词、助词）所没有的。（参见笔者2011年〈说“就”“才”〉《樱文论丛》第82卷 2012年2月、2014年〈单语〉《樱文论丛》第89卷 2015年3月。）

朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写标记形式，可以用于指出任何 1 个句子的成分包括句法词和语法词，1 个句子的结构是句法词和语法词构成的句法语汇结构。可以用于指出语法词表示的任何 1 个单语是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体，语法词表示的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。可以用于指出 1 个句子的句法语汇结构中的句法词结构类型具有语法词结构类型。

用于基础语言教学只要用句切符号或空格标示出句子中句法词前后的句切，用标峰重音符号标示出语法词中的中心语，就可以指出 1 个句子的句法语汇结构。

二、语言分析中的全体语法结构

语言分析的一个语言的结构是全体语法结构。可以从 2 个方面来说明。

一是，用于区分语言单位的超音特征是语言单位及其全部成分具有的超音成分，归类的句切和轻重音等超音语言成分可以用于区分语言单位及其成分。可以用于指出句切和轻重音等超音语言成分区分的语言单位及其全部成分单位为超音语言成分单位。

文字符号作为标记单位，也是语言单位及其全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号标记的音声语言的标记形式可以用于指出 1 个句子以及无限数量所有任何 1 个相同句和有可能的非相同句，以及可以用于指出任何 1 个句子具有的全部成分单位。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式，可以指出任何 1 个句子的标记形式同时具有包括超音成分的音声语言表达形式，以及可以用于指出句子中不可再切分的句单位及其成分语素。文字符号可以表示句法词和语法词。句法词用于表示句子中不可再切分的句单位，语法词用于表示单语充任句法词成分的语素。可以用于指出语法词表示的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音

的同类语素即语素集合体构成的1个语汇结构，可以用于指出1个句子的结构是包括可以区分句法词结构类型和语法词结构类型的句法语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出语法词的成分是区别轻重音的语元素，可以用于指出任何1个句子中的1个语法词有几个语元素就有几个语元素音节和汉文字表记。文字符号作为表记单位，表示语言的超音成分单位，可以表示语言单位及其全部成分单位。汉文字表示的基本单位是语元素，可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。汉语拼音符号作为语音的符号，表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调，可以用于指出汉语的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。可以用于指出文字符号表记的音声语言的表记形式可以表示1个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式，区分的任何1个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。

二是，语言的全体语法结构是语言全过程中无限数量所有任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的以语音元素结构为核心的超音全体语法结构。文字符号表记的音声语言的表记形式可以表示1个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式，区分的任何1个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。区分的任何1个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构，一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，即，超音句法语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中句法词表示不可再切分的句单位构成的句法结构，即，超音句法结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的1个单语的结构是句子中1个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的语汇结构，即，超音语汇结构。可以用于指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的单语的成分语元素具有的语元素音节中最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音

结构，即，超音语音结构。可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。超音全体语法结构的核心是语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成：汉语语元素音节中语音元素结构模型。汉语语音元素结构可以构成：汉语语元素音节结构统音法式音节表。一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结构模型。

以下扼要讨论语言单位中的超音成分和全体语法结构及其模型 2 个问题。

1、语言单位中的超音成分

（1）句切和轻重音

（2）汉文字和符号

2、全体语法结构及其模型

（1）语法结构核心

（2）全体语法结构

1、语言单位中的超音成分

用于区分语言单位的超音特征是语言单位具有的超音成分。归类的句切和轻重音等超音语言成分可以用于区分语言单位及其成分。用句切和轻重音区分的句子语言单位及其成分单位是语言的超音成分单位。

文字符号是语言单位及全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号表记的音声语言的表记形式可以表示同时具有包括超音语言成分的音声语言表记达形式

和音声语言的表记形式的 1 个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。可以用于指出文字符号表示任何 1 个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构。

(1) 句切和轻重音

(2) 汉文字和符号

(1) 句切和轻重音

句切和轻重音表示由音声语言表达形式中存在的大小停顿、轻重音归类并用于区分语言单位的超音语言成分。可以用于指出用句切和轻重音区分的句子语言单位及其成分单位是语言的超音成分单位。

以下扼要说明切分的超音成分和区分轻重音成分。

1) 切分的超音成分

2) 区分轻重音成分

1) 切分的超音成分

句切是由音声语言表达形式中存在的大小停顿归类的用于切分句子和句单位的超音成分。可以用于指出用句切切分的任何 1 个句子和句单位是语言的超音成分单位。

①由停顿归类的二类四等句切

把音声语言表达形式中存在的大小停顿归类为二类四等用于切分句子语言单位及其成分，称作：句切。

句切区分为二类：

一类，包括1个句子前后具有的停顿和2个句子前后之间具有的较大停顿。

二类，包括1个句子中2个句单位前后之间有可能有的较小停顿和小停顿。

句切又区分四等：

一等句切，表示1个句子前后具有的停顿。也称作：停顿。

二等句切，表示2个句子前后之间具有的较大停顿。也称作：较大停顿。

三等句切，表示1个句子中2个句单位前后之间的较小停顿。也称作：较小停顿。

四等句切，表示1个句子中的2个句单位前后之间的小停顿。也称作：小停顿。

②句切符号表示二类四等句切

句切符号可以表示二类四等句切。句切符号用2条竖线“| |”表示。句切符号写在1个句子和句子中每1个不可再切分的成分前后，句切符号用于基础语言教材时可以用“空格”表示。

句切符号表示二类四等句切，可以用于指出任何1个句子前后具有句切，句子中每1个不可再切分的句单位前后具有句切。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号描写的标记形式可以用于指出用句切切分的句子和句单位是语言的超音成分单位。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号描写的“| 你好 |。”前后具有的停顿表示一等句切。可以用于指出由句切切分的这1个句子及其具有1个不可再切分的句单位“| 你好 |”。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号描写的“| 你好 |。| 好久不见了 |。”前后具有的停顿表示一等句切，“| 你好 |。”和“| 好久不见了 |。”前后之间具有较大停顿，表示二等句切。可以用于指出由句切切分的是2个句子而不是1个句子，以及可以指出切分的各句分别具有1个不可再切分的句单位。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号描写的“| 有英文 |、| 中文说明 |。”前后具有的停顿表示一等句切，“| 有英文 |”和“| 中文说明 |”前后之间具有较小停顿，表示三等句切，可以用于指出由句切切分的这1个句子及其具有2个不可再切分的句单位。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”前后具有的停顿表示一等句切，“| 我 |”和“| 是 |”前后之间具有小停顿，表示四等句切，“| 是 |”和“| 学生 |”前后之间具有小停顿，表示四等句切，可以用于指出由句切切分的这1个句子及其具有3个不可再切分的句单位。

可以用于指出由音声语言表达形式中存在的大小停顿归类的用于切分句子和句单位的句切是语言的超音成分，句切符号可以表示二类四等句切，可以用于指出任何1个句子前后具有句切，句子中每1个不可再切分的句单位前后具有句切。可以用于指出用句切切分的任何1个句子和句单位是语言的超音成分单位。

（另参见笔者2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月。）

2) 区分轻重音成分

轻重音是语言的音声语言表达形式中具有超音成分。可以用于区分句单位成分语素以及用于区分句单位和句子类型。句子中的每1个语素都具有轻重音，用轻重音区分的语素也称：区别轻重音的语素。重音句单位中的重音语素是具有标峰重音的语素，用下傍点“.”作为标峰重音符号，可以用于指出重音句单位中的标峰重音语素。标峰重音语素的位置可以用于区分具有2个以上重音类语素的重音句单位类型。重音语素还可以用于区别相同汉文字标记的2个非相同句中的不同句单位。可以用于指出用句切和轻重音区分的句子语言单位及其成分单位是语言的超音成分单位。

①用轻重音区分的语素

句子中的每1个语素都具有轻重音，可以用于区分1个句子中的每1个语素。用轻重音区分的语素也称：区别轻重音的语素。

句子中区别轻重音的语素区分为二类四等。二类，是重音类语素和轻音类语素。四等，分别是：一等，重音语素。二等，次重音语素。三等，次轻音语素。四等，轻音语素。

句子中不可再切分的句单位有可能具有1个或2个以上数目的重音类语素或有轻音类语素，也有可能只具有轻音类语素而不具有重音类语素。具有重音类语素的句单位区分为重音句单位，不具有重音类语素只具有1个轻音类语素的句单位区分为轻音句单位。具有重音句单位的句子为重音句，不具有重音句单位只具有轻音句单位的句子为轻音句。重音句单位中有1个起标峰作用的重音类语素，这1个语素区分为重音语素，也称：标峰重音语素。其他重音类语素区分为次重音语素。重音句单位中有可能有轻音类语素，重音句单位中的轻音类语素可以区分次轻音语素和轻音语素。轻音句单位只具有1个轻音类语素，可以区分次轻音语素和轻音语素。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学 生 |。”这1个句子是具有重音句单位的重音句，句子中的那2个重音句单位“| 我 |”和“| 学 生 |”分别具有1个重音类语素，区分为重音语素，句子中的那1个轻音句单位“| 是 |”具有1个轻音类语素，区分为次轻音语素。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 可是 |……。”这1个句子是只具有轻音句单位的轻音句，句子中的轻音句单位“| 可是 |”具有1个轻音类语素，区分为次轻音语素。

②具有标峰重音的语素

重音句单位中的重音语素是具有标峰重音作用的语素。因而，重音语素也可以称作：标峰重音语素。用下傍点“.”作为标峰重音符号，可以用于指出重音句单位中的标峰重音语素。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”这1个重音句具有的“| 你好 |”这1个重音句单位中的“你”为具有标峰重音的重音语素，即，标峰重音语素，“好”为次重音语素。

重音句单位中的标峰重音语素可以用标峰重音符号标示，但是，标峰重音符号也可以用于标示标峰重音语素以外的特殊（强调）重音。

例如，属于轻音类虚词的副词的一部分充任重音句法词的成分时有可能表示特殊轻音类同类语素的（强调）重音语素，这时，标峰重音符号可以用于标示充任重音句法词成分的副词表示的特殊轻音类同类语素，但充任那1个重音句法词成分中心语的仍然是重音类实词表示的标峰重音语素。重音句中的充任重音句法词成分的副词表示特殊轻音类同类语素时的（强调）重音显得较为强势，音长也有可能会长些，用标峰重音符号标示不会与重音类实词充任重音句法词成分的中心语和有可能的重音类语法词表示的重音语素和次重音语素相混淆。（参见“一、语言分析中的句法语汇结构”的“2、句法语汇结构及其类型”中“（2）句子结构类型”的“2）语法词结构类型”。）

③标峰重音语素的位置

标峰重音语素的位置可以用于区分具有2个以上重音类语素的重音句单位类型。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”这1个重音句中的重音句单位有2个重音类语素，其中，“你”是标峰重音语素，这1个重音句中的重音句单位可以区分为前重型句单位。

又如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好吗 | ？”这1个重音句中的重音句单位有2个重音类语素和1个轻音类语素，其中，“好”是标峰重音语素，这1个重音句中的重音句单位可以区分为后重型句单位。

可以用于指出标峰重音语素的位置可以把具有 2 个以上重音类语素的重音句单位区分为前重型句单位和后重型句单位。

④重音语素区别句单位

重音语素可以用于区别相同汉文字标记的 2 个非相同句中的不同句单位。可以指出用句切和轻重音区分的句子语言单位及其成分单位是语言的超音成分单位。

例如,可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得_·好 |。”这 1 个重音句中有 2 个重音句单位。前者是重音语素“他”构成的重音型句单位,后者是 2 个重音类语素“写”和“好”以及轻音语素“得”构成的前重型句单位,其中,“写”是重音语素。

又如,可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得_·好 |。”这 1 个重音句中有 2 个重音句单位。前者是重音语素“他”构成的重音型句单位,后者是 2 个重音类语素“写”和“好”以及轻音语素“得”构成的后重型句单位,其中,“好”是重音语素。

可以用于区别和指出“| 他 | 写得_·好 |。”和“| 他 | 写得_·好 |。”是相同汉文字标记的 2 个非相同句。这 2 个句子中有相同句单位的重音型句单位“| 他 |”,以及不同句单位的前重型句单位“| 写得_·好 |”和后重型句单位“| 写得_·好 |”。

(另参见笔者 2010 年〈说“的”〉《樱文论丛》第 79 卷 2011 年 2 月、2015 年〈语言分析方法〉《樱文论丛》第 90 卷 2015 年 10 月。)

可以用于指出句切和轻重音是音声语言表达形式具有的语言的超音成分。用句切和轻重音区分的句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位。

(2) 汉文字和符号

文字符号作为标记单位,是语言单位及其全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号可以表示任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位。可以用于指出任何

1 个句子的语法结构是句法语汇结构，以及可以用于指出 1 个句子具有可以区分的句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构。汉文字表示的基本单位是语元素，汉语拼音符号作为汉语语音的符号，表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素。可以用于指出文字符号表示的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位，任何 1 个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构。

以下扼要说明文字是超音成分和文字标记的单位。

- 1) 文字是超音成分
- 2) 文字标记的单位

1) 文字是超音成分

文字符号是语言单位及其全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号标记的音声语言的标记形式可以用于指出任何 1 个句子具有 2 个形式，可以用于指出任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位。可以用于指出文字符号表示的语言的全部成分单位是超音成分单位。可以用于指出任何 1 个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构为超音语法结构。

①指出 1 个句子有 2 个形式

文字符号作为标记单位可以由音声语言的标记形式指出任何 1 个句子语言单位同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”这 1 个句子同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式。

可以用于指出文字符号作为表记单位可以由音声语言的表记形式指出任何 1 个句子语言单位同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式。可以用于指出文字符号表示的任何 1 个句子语言单位是语言的超音成分单位。

②指出语言的全部成分单位

文字符号作为表记单位可以由音声语言的表记形式指出任何 1 个句子语言单位具有的全部成分单位。

例如，可以指出朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”表示 1 个句子语言单位。可以指出句子中“| 你好 |”表示 1 个不可再切分的句单位，句法词表示句单位。可以指出句子中“你”、“好”表示句单位成分中区别轻重音的语素，语法词表示单语充任句法词成分语素。可以指出句子中的语法词表示单语充任句法词成分的“你”、“好”的成分是语元素。可以指出 1 个语元素具有 1 个语元素音节和汉文字表记。可以指出“你”、“好”分别具有的语元素音节，以及可以指出语元素音节中的最小成分是语音元素包括音元素和超音元素声调。

可以用于指出文字符号作为表记单位可以由音声语言的表记形式指出任何 1 个句子语言单位具有的全部成分单位。可以用于指出文字符号表示的语言的全部成分单位是超音成分单位。

③指出 1 个句子的语法结构

文字符号作为表记单位可以由音声语言的表记形式指出任何 1 个句子的语法结构是句法语汇结构。

例如，可以指出朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”这 1 个句子的语法结构是句法语汇结构。可以指出句子中的“| 你好 |”表示的句法词类型为前重型句法词。可以指出句子中的表示单语充任句法词成分的重音类语法词“你”、“好”为重音类实词，构成代词“你”为中心语和形容词“好”的语法词结构。可以指出语法词“你”、

“好”分别表示的1个单语是句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体，语法词表示的1个单语的结构是句子中1个语素及其具有的无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的1个语汇结构。可以指出语法词“你”、“好”分别表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句子中句法词成分中区别轻重音的同类语素。

可以用于指出文字符号作为表记单位可以由音声语言的表记形式指出任何1个句子的句法语汇结构。任何1个句子的句法语汇结构中具有可以区分的句法结构和语汇结构。可以用于指出任何1个句子的句法语汇结构是超音句法语汇结构，任何1个句子的句法语汇结构中具有可以区分的句法结构是超音句法结构，语汇结构是超音语汇结构。

④指出1个句子的语音结构

文字符号作为表记单位可以由音声语言的表记形式指出任何1个句子的句法语汇结构中具有可以区分的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。

例如，可以指出朗读文字符号标记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”这1个句子的句法语汇结构中具有可以区分的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。可以指出这1个句子中表示单语充任句法词成分的重音类语法词“你”、“好”的成分是重音类语元素，“你”的成分区分为重音语元素，“好”的成分区分为次重音语元素。1个区别轻重音的语元素具有1个语元素音节和汉文字标记。区别轻重音的语元素音节中的最小成分是语音元素包括音元素和超音元素声调。可以指出汉语的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。

可以用于指出文字符号作为表记单位可以由音声语言的表记形式指出任何1个句子的句法语汇结构中具有可以区分的语音结构是语元素音节中语音元素包

括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。可以用于指出任何 1 个句子的句法语汇结构中具有可以区分的语音结构是超音语音结构。

2) 文字标记的单位

文字符号作为语言的标记单位，表示语言的超音成分单位。汉文字表示的基本单位是语元素。汉语拼音符号作为汉语语音的符号，表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调。

①汉文字表示的基本单位是语元素

汉文字表示的基本单位是语元素。汉文字表示区别轻重音的语法词成分，可以表示区别轻重音的 1 个语元素和无限数量所有任何 1 个同类语元素以及有可能不同的语元素。汉文字表示的基本单位是语元素，可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。

例略。（参见：“一、语言分析中的句法语汇结构”“1、广义和狭义的语法单位”中“（1）广义语法单位”“2）句子的成分单位”的“④标记部门单位”。）

可以用于指出汉文字标记可以表示语元素构成的句子语言单位及其成分单位，语言单位及其成分单位为语言的超音成分单位。

可以用于指出汉文字标记可以表示语元素构成的任何 1 个句子的句法语汇结构是超音句法语汇结构。

可以用于指出汉文字标记可以表示语元素构成的任何 1 个句子的句法语汇结构包括可以区分的句法结构和语汇结构为超音句法结构和超音语汇结构。

②拼音表示的基本单位是语音元素

汉语拼音符号作为汉语语音的符号，汉语拼音音节符号可以表示语元素音节。汉语拼音符号作为汉语语音的符号表示的基本单位是语元素音节中的最小成分：

语音元素包括音元素和超音元素声调。

例略。(参见：“一、语言分析中的句法语汇结构”“1、广义和狭义的语法单位”中“(1) 广义语法单位”“2) 句子的成分单位”的“③语音部门单位”。)

可以用于指出汉语拼音音节符号表示的语元素音节是语言的超音成分单位。

可以用于指出汉语拼音符号作为语音的符号表示的语元素音节中的最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调是语言的超音成分单位。

可以用于指出语音的符号表示的语音元素包括音元素和超音元素声调构成汉语的语音结构是超音语音结构。

指出汉文字作为表记单位表示的基本单位是语元素，汉语拼音符号作为语音的符号表示的基本单位是语音元素，可以用于指出文字符号表示的任何1个句子语言单位及其全部成分单位是语言的超音成分单位，任何1个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构。

2、全体语法结构及其模型

一个语言的全体语法结构是语言全过程中无限数量所有任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的以语音元素结构为核心的超音全体语法结构。汉语的语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构是超音语音结构。汉语的语音元素结构模型可以表示一个语言的全体语法结构核心。汉语的语音元素结构模型称作：汉语语元素音节中语音元素结构模型。汉语的每 1 个语元素音节成分中具有语音元素包括音元素和超音元素声调。汉语的语音元素可以构成：语元素音节结构统音法式音节表。

语言分析区分 2 个形式可以用于指出 1 个句子语言单位及其全部成分单位，可以用于指出语言的全部成分单位是语言的超音成分单位。可以用于指出 1 个句子的语法结构即句法语汇结构包括可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构为超音语法结构。可以指出一个语言的结构是由语言的全过程中无限数量所有任何 1 个语言单位及其全部成分单位构成的全体语法结构。可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结构模型。

（1）语法结构核心

（2）全体语法结构

（1）语法结构核心

一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。一个语言的全体语法结构的

核心是语音部门最小成分单位语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。汉语的语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构是超音语音结构。汉语的语音元素结构模型可以表示一个语言的全体语法结构核心。

汉语的区别轻重音的语元素音节是语音元素包括音元素和超音元素声调结构而成的。语元素音节结构具有语音元素结构。汉语的语音元素可以构成语元素音节结构统音法式音节表。

以下扼要说明语音元素的结构和统音法式音节表。

- 1) 语音元素的结构
- 2) 统音法式音节表

1) 语音元素的结构

语元素音节中最小成分单位是语音元素包括音元素和超音元素声调。可以用于指出汉语的区别轻重音的语元素音节是语音元素包括音元素和超音元素声调结构而成的。

略记。(参见笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。)

汉语语元素音节结构具有语音元素结构。汉语语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调可以构成语音元素结构模型。

略记。(参见笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。)

汉语的语音元素结构模型称作：汉语语元素音节中语音元素结构模型。表示汉语语音结构体系为语元素音节中语音元素包括音元素同时具有弧线型超音元素声调的语音元素结构体系。汉语语元素音节中语音元素结构模型中的超音元素声调体系称作：“音之声”。音元素体系中的元音体系称作：“音之元”。辅音体系包括辅音和半元音体系分别称作：“音之辅”和“音之介”。(参见：“图(1)汉语语元素音节中语音元素结构模型”。)

汉语语元素音节中语音元素结构模型，可以用于指出汉语的语音元素包括音

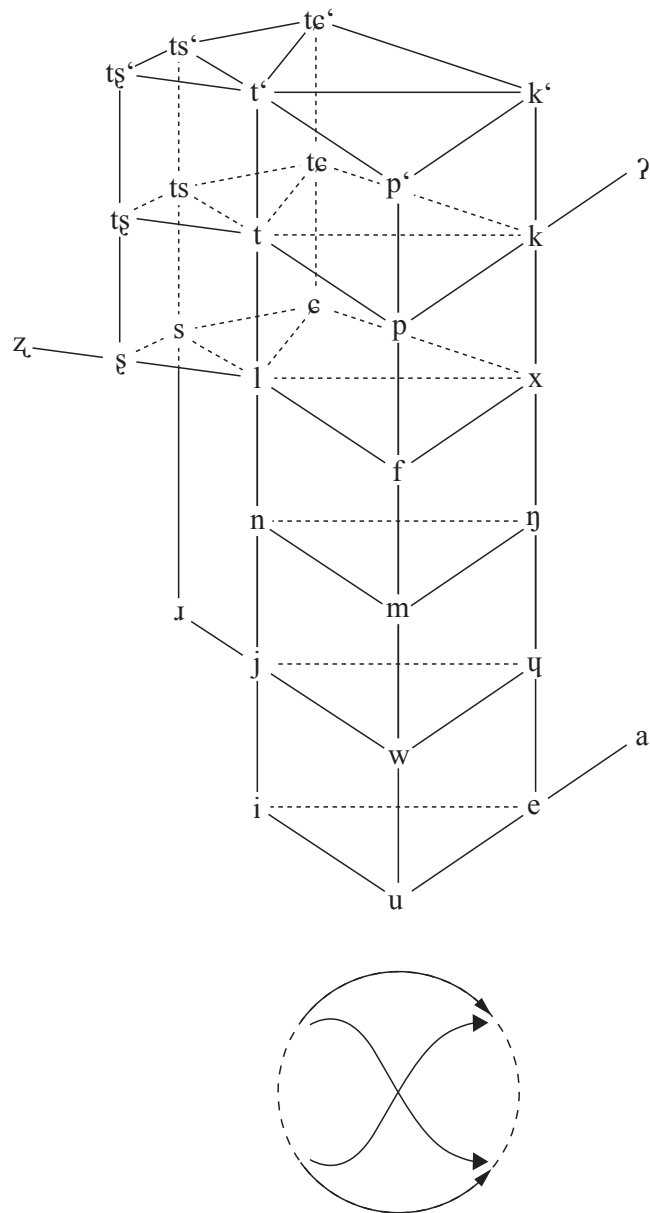
元素和超音元素声调构成的语音元素结构是超音语音结构。（参见：“图（1）汉语语元素音节中语音元素结构模型”。）

一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。汉语语元素音节中语音元素结构模型，可以表示一个语言的全体语法结构核心。

以下略记。

图（1）为笔者2016年〈语音元素〉一文中的：“汉语语元素音节中语音元素结构模型”。（参见笔者2016年〈语音元素〉“图（21）汉语语元素音节中语音元素结构模型”《樱文论丛》第92卷 2016年10月。）

图（1）：汉语语元素音节中语音元素结构模型



图（1）：汉语语元素音节中语音元素结构模型。表示汉语语音结构体系为语元素音节中语音元素包括音元素同时具有弧线型超音元素声调的语音元素结构体系。模型中的超音元素声调体系称作：“音之声”。音元素体系中的元音体系称作：“音之元”。辅音体系包括辅音和半元音体系分别称作：“音之辅”和“音之介”。

2) 统音法式音节表

汉语的每个区别轻重音的语元素音节的成分中具有语音元素包括音元素和超音元素声调。语音元素包括音元素和超音元素声调结构而成的汉语语元素音节构成：汉语语元素音节结构统音法式音节表。(参见：“图(2)汉语语元素音节结构统音法式音节表”。)

“汉语语元素音节结构统音法式音节表”简称：“统音法式音节表”。

“统音法式音节表”分二类。包括4个音节表。也称：二类4音表。

“统音法式音节表”分二类，把可以构成不参与介音对立的音节模型及其构成的所有音节归类为第一类。把可以构成介音对立的音节模型及其构成的所有音节归类为第二类。

“统音法式音节表”的4个音节表中，“表1”即包括第一类所有音节的音节表。“表2”、“表3”、“表4”即包括第二类所有音节的音节表。“表2”包括可以构成介音 / j / (用“i”表示)对立的音节模型及其构成的所有音节。“表3”包括可以构成介音 / w / (用“u”表示)对立的音节模型及其构成的所有音节。“表4”包括可以构成介音 / y / (用“ü”表示)对立的音节模型及其构成的所有音节。

“统音法式音节表”的4个音节表，元音按“a”、“e”、“i”、“u”，辅音按“部位特征”、“方式特征”、“共鸣特征”顺序排列。二类音节表也分别称作：主表和辅表。

主表：表1。

表1：包括可以构成不参与介音对立的音节模型及其构成的所有音节。

①，包括元音“a”、“e”、“i”、“u”各栏与前、后辅音性调音素包含辅音音元素或半元音音元素构成不参与介音对立的音节模型及所有音节。

②，“er”符号是唯一1个表示元音后的音元素为“r”表示半元音 / ɹ / 的音节符号。“er”符号排在“e”后。写作：“e / er”，表示具有“e”同位音和不同后辅音的2个不同音节以及“er”是唯一后辅音符号为“r”表示半元音 / ɹ /

的音节。

③, “o” 符号表示的音节与 “ou” 符号表示的音节相似。“o” 和 “ou” 中的 “o” 分别表示 “e” 的同位音, 元音前的音元素分别为 “零符号表记” 辅音 / ʔ /, 元音后的音元素分别为 “零符号表记” 半元音 / w / 和 “u” 表示的半元音 / w /。“o” 符号排在 “ou” 后。写作: “ou / o”, 表示相似音节的 2 个符号。

④, 构成音节时, 辅音 “g”、“k”、“h” 与 “j”、“q”、“x” 相互排斥又相互对补。“j”、“q”、“x” 符号排在 “g”、“k”、“h” 后。写作: “g / j”、“k / q”、“h / x”。

辅表: 表 2, 表 3, 表 4。

表 2: 包括可以构成介音 / j / (用 “i” 表示) 对立的音节模型及其构成的所有音节。

①, 包括 “a”、“e” 和表示 “e” 的同位音的 “o” 前有 “i” 表示半元音 / j / 的音节模型及参与介音对立的 “i” 表示 “介音” / j / 的所有音节。

②, “you” 行音节模型以外的音节符号省去了表示 “e” 的同位音的 “o”。是不记入元音的音节符号。

表 3: 包括可以构成介音 / w / (用 “u” 表示) 对立的音节模型及其构成的所有音节。

①, 包括 “a”、“e” 和表示 “e” 的同位音的 “o” 前有 “u” 表示半元音 / w / 的音节模型及参与介音对立的 “u” 表示 “介音” / w / 的所有音节。

②, “wei” 行音节模型以外的音节符号省去了 “e”。是不记入元音的音节符号。

表 4: 包括可以构成介音 / ɥ / (用 “ü” 表示) 对立的音节模型及其构成的所有音节。

①, 包括 “a”、“e” 前有 “ü” 和表示 “u” 的同位音的 “o” 前有 “i” 表示半元音 / ɥ / 的音节模型及参与介音对立的 “ü”、“i” 符号表示 “介音” / ɥ /

的所有音节。

②，音节中的“ü”后没有其他元音符号时兼表示半元音 / ʏ / 和“i”的同位音。

上述二类4音表中的音节模型用韵母符号表示。

“汉语语元素音节结构统音法式音节表”二类4音表，记入音节符号包括，表1：265个。表2：51个。表3：63个。表4：24个。此外，“n (ng)”作为1个特殊音节符号（写在“注”中）计入。共404个。

引自笔者2016年〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月。

图（2）为笔者2016年〈语音元素〉一文中的：“汉语语元素音节结构统音法式音节表”。（参见笔者2016年〈语音元素〉“图（23）汉语语元素音节结构统音法式音节表”《樱文论丛》第92卷 2016年10月。）

图(2): 汉语语元素音节结构统音法式音节表

汉语语元素音节结构统音法式音节表

表 1

a														
	b	p	f	m	d	t	l	n	g/j	k/q	h/x	z	c	s
a	ba	pa	fa	ma	da	ta	la	na	ga	ka	ha	za	ca	sa
ai	bai	pai		mai	dai	tai	lai	nai	gai	kai	hai	zai	cai	sai
ao	bao	pao		mao	dao	tao	lao	nao	gao	kao	hao	zao	cao	sao
an	ban	pan		man	dan	tan	lan	nan	gan	kan	han	zan	can	san
ang	bang	pang		mang	dang	tang	lang	nang	gang	kang	hang	zang	cang	sang
e/er	bo	po	fo	mo	de	te	le	ne	ge	ke	he	ze	ce	se
ei	bei	pei	fei	mei	dei		lei	nei	gei	kei	hei	zei	cei	
ou/o		pou	fou	mou	dou	tou	lou		gou	kou	hou	zou	cou	sou
en	ben	pen	fen	men				nen	gen	ken	hen	zen	cen	sen
eng	beng	peng	feng	meng	deng	teng	leng	neng	geng	keng	heng	zeng	ceng	seng
yi	bi	pi		mi	di	ti	li	ni	ji	qi	xi	zi	ci	si
i	bin	pin		min			lin	nin	jīn	qin	xin			
ying	bing	ping		ming	ding	ting	ling	ning	jīng	qing	xing			
wu	bu	pu	fu	mu	du	tu	lu	nu	gu	ku	hu	zu	cu	su
u	wen				dun	tun	lun	nun	gun	kun	hun	zun	cun	sun
weng					dong	tong	long	nong	gong	kong	hong	zong	cong	song

表 2

i														
	b	p	m	d	t	l	n	j	q	x				
ya								jia	qia	xia				
yao	biao	piao	miao	diao	tiao	liao	niao	jiao	qiao	xiao				
yan	bian	pian	mian	dian	tian	lian	nian	jian	qian	xian				
yang					liang	niang	jiang	jiang	qiang	xiang				
ye	bie	pie	mie	die	tie	lie	nie	jie	qie	xie				
you			miu	diu	liu	liu	niu	jiu	qiu	xiu				

表 4

ü													
yuan													
yue								nüe	jue	que	xue		
yu								nü	ju	qu	xu		
yun									jun	qun	xun		
yong									jiong	qiong	xiong		

表 3

u														
	d	t	l	n	g	k	h	z	c	s	zh	ch	sh	r
wa					gua	kua	hua				zhua	chua	shua	
wai					guai	kuai	huai				zhuai	chuai	shuai	
wan	duan	tuan	luan	nuan	guan	kuan	huan	zuan	cuan	suan	zhuan	chuan	shuan	
wang					guang	kuang	huang				zhuang	chuang	shuang	
wo	duo	tuo	luo	nuo	guo	kuo	huo	zuo	cuo	suo	zhuo	chuo	shuo	ruo
wei	dui	tui			gui	kui	hui	zui	cui	sui	zhui	chui	shui	rui

注：二类 4 音表记入音节符号，表 1：265 个。表 2：51 个。表 3：63 个。表 4：24 个。此外，“n(ng)”作为 1 个特殊音节符号计入。共 404 个。

（2）全体语法结构

语言分析区分 2 个形式可以用于指出 1 个句子语言单位及其全部成分单位，可以用于指出语言的全部成分单位是语言的超音成分单位。可以用于指出 1 个句子的语法结构即句法语汇结构包括可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构为超音语法结构。可以指出一个语言的结构是由语言的全过程中无限数量所有任何 1 个语言单位及其全部成分单位构成的全体语法结构。可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。

一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结构模型。

以下扼要说明一个语言的结构和语言的超音结构。

- 1) 一个语言的结构
- 2) 语言的超音结构

1) 一个语言的结构

指出一个语言的结构首先要指出语言单位及其全部成分单位。而指出语言单位及其全部成分单位，必须区分音声语言表达形式和音声语言的表记形式这 2 个形式。归类音声语言表达形式中存在的大小小停顿（把归类的停顿用于切分语言单位称作：句切。）、轻重音、标峰重音等等超音特征可以用于区分和指出 1 个句子语言单位及其全部成分单位。可以指出停顿、轻重音、标峰重音等等超音特征

是语言的超音成分。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的标记形式可以指出 1 个句子同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式。可以用于指出文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示 1 个句子语言单位及其全部成分单位。可以用于指出文字符号标记作为标记单位，是语言的超音成分单位。文字符号表示的語言的全部成分单位是语言的超音成分单位。

可以用于指出 1 个句子的语法结构即句法语汇结构是超音句法语汇结构，以及可以用于指出 1 个句子的句法语汇结构包括可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构，为超音句法结构、超音语汇结构、超音语音结构。

可以指出一个语言的结构是由语言的全过程中无限数量所有任何 1 个语言单位及其全部成分单位构成的全体语法结构。

例略。（参见：本文“二、语言分析中的全体语法结构”的“1、语言单位中的超音成分”。）

2) 语言的超音结构

指出 1 个语言单位及其全部成分单位，可以用于指出一个语言的结构是由语言的全过程中无限数量所有任何 1 个语言单位及其全部成分单位构成的全体语法结构。

又可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。

一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。可以概括为语言的定义和语言形式的定义。

语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结

构模型。（参见笔者2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月。）

语言的定义：

“语言是人类思维的表现手段。可以概括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的任何 1 个语言共同体约定俗成的思维的表现手段。语言是人类社会的产物。人类与语言共存，语言与人类社会同步发展。”

语言形式的定义：

“语言形式是语言分析的对象。包括音声语言表达形式和音声语言的表记形式。1 个语言的语言形式是 1 个语言共同体约定俗成的思维表现的形式。1 个音声语言表达形式是语言分析的基本单位，表示语言的基本成分单位句子。音声语言的表记形式是对音声语言的表记，表记单位是文字符号。分析语言的基本成分单位包括句法、语汇、语音、表记四个部门。”

语言的定义和语言形式的定义可以表示一个语言的全体语法结构模型，即，超音全体语法结构模型。

我们把这—个语言分析的方法论称作：音等论。

结 语

本文讨论的语法结构问题是中国语言学基础理论研究中句法语汇结构及全体语法结构问题。本研究讨论的问题关系中国语言学基础理论研究的方法论，是以往的中国语言学基础理论研究和现代汉语语法研究中所没有的。

文中指出本研究讨论的问题及目的作用和方法论。

1、指出本研究讨论语言的基本问题

本研究讨论语言的基本问题，包括提出语言分析区分2个形式，即，音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以用于指出1个句子表示语言单位，分析句子语言单位区分四个语法部门：句法部门、语汇部门、语音部门、表记部门，可以用于指出全部成分单位，可以用于指出1个句子的句法语汇结构以及一个语言的全体语法结构。

分析1个句子可以区分广义和狭义语法单位。广义语法单位指语言分析的句子语言单位及句法、语汇、语音、表记各部门单位和全部成分单位以及可以包括用于句法语汇结构分析的句法词和语法词。广义语法单位可以用于指出语言全过程中无限数量所有任何1个句子语言单位及其全部成分单位可以构成包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的一个语言的全体语法结构。

狭义语法单位指用于句法语汇结构分析的1个句子中表示不可再切分的句单位的句法词和表示单语充任句法词成分的语法词以及可以包括由句子中充任句法词成分的语法词归类的品词。狭义语法单位可以用于指出1个句子的句法语汇结构及其具有的句法词类型和语法词类型，1个句子的语法结构是句法词结构包括语法词结构的句法语汇结构。

语言分析可以指出1个句子的结构是句法语汇结构，以及句法语汇结构类型。可以指出句子中的句法词类型和语法词类型。句法词类型表示句单位类型，可以区分重音句法词和轻音句法词二类，又区分为四等：重音型句法词、前重型句法词、后重型句法词和轻音型句法词。把归类充任句法词成分的语法词类型称作品

词，包括重音类语法词和轻音类语法词，即，重音类实词和轻音类虚词二类，又区分为四等 8 品词。可以用于指出 1 个句子中句法词结构包括语法词结构，指出 1 个句子的句法语汇结构。

任何 1 个句子的句法语汇结构中语法词具有语汇结构。语法词表示的任何 1 个单语是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素汇成的语素集合体。可以用于指出语法词表示充任句法词成分的任何 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的 1 个语汇结构。可以指出语法词表示的同一单语可以充任无限数量所有任何句法词成分中区别轻重音的同类语素。

语法词表示单语充任句法词成分语素，可以用于指出句子中的任何 1 个语素的成分是区别轻重音的语元素，1 个语元素具有 1 个语元素音节和汉文字标记，语法词可以归类为重音类实词和轻音类虚词，重音类实词成分中区别轻重音的语元素音节可以区分普通音节和特殊音节，可以用于指出语元素音节中的最小成分是语音元素包括音元素和超音元素声调。

文字符号作为标记单位，表示语言的超音成分单位，可以表示语言单位及其全部成分单位。汉文字标记的基本单位是语元素，可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。

汉语拼音符号是汉语语音的符号，表示的基本单位是语音元素包括音元素和超音元素声调，可以用于指出汉语的语音结构是语元素音节中语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构。

用于区分语言单位的超音特征是语言单位及其全部成分具有的超音成分。归类的句切和轻重音等超音语言成分可以用于区分语言单位及其成分。可以用于指出句切和轻重音等超音语言成分区分的语言单位及其全部成分单位为超音语言成分单位。

文字符号作为标记单位，也是语言单位及其全部成分单位具有的超音成分单位。文字符号标记的音声语言的标记形式可以表示 1 个句子同时具有超音语言成分的音声语言表达形式，区分的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位是语言

的超音成分单位。区分的任何 1 个句子的语法结构即句法语汇结构及其具有可以区分的句法结构、语汇结构、语音结构是超音语法结构，一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何 1 个句子的句法语汇结构，即，超音句法语汇结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何 1 个句子的句法语汇结构中句法词表示不可再切分的句单位构成的句法结构，即，超音句法结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何 1 个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的 1 个单语的结构是句子中 1 个语素及其无限数量所有区别轻重音的同类语素即语素集合体构成的语汇结构，即，超音语汇结构。

可以用于指出句法语汇分析的任何 1 个句子的句法语汇结构中语法词表示充任句法词成分的单语的成分语元素具有的语元素音节中最小成分语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音结构，即，超音语音结构。

可以用于指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。

超音全体语法结构的核心是语音元素包括音元素和超音元素声调构成的语音元素结构，可以构成：汉语语元素音节中语音元素结构模型。汉语语音元素结构可以构成：汉语语元素音节结构统音法式音节表。

一个语言的全体语法结构是超音全体语法结构，可以概括为语言的定义和语言形式的定义。语言的定义和语言形式的定义是语言分析的结果，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。一个语言的全体语法结构模型也称作：超音全体语法结构模型。

2、指出本研究讨论语言问题的目的

本研究讨论语言问题的目的，是解明中国语言学基础理论研究中的语言形式、语言单位、语法部门、语法单位、语法结构包括句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构和语言的全体语法结构及其关系。

提出语言分析的任何1个句子具有音声语言表达形式和音声语言的表记形式。可以把归类音声语言表达形式中存在的大小小停顿（归类的停顿用于语言分析时称作：句切。）、轻重音、标峰重音等等超音特征用于区分指出1个句子。可以指出超音特征是音声语言表达形式具有的超音语言成分。只要朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写表记形式，就可以指出1个句子语言单位同时具有包括超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，可以用于指出任何1个句子的句法语汇结构，以及可以用于指出语言的全体语法结构。

指出语言学讨论的“语言是人类思维的表现手段。可以概括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的任何1个语言共同体约定俗成的思维的表现手段。语言是人类社会的产物。人类与语言共存，语言与人类社会同步发展。”“语言形式是语言分析的对象。包括音声语言表达形式和音声语言的表记形式。1个语言的语言形式是1个语言共同体约定俗成的思维表现的形式。1个音声语言表达形式是语言分析的基本单位，表示语言的基本成分单位句子。音声语言的表记形式是对音声语言的表记，表记单位是文字符号。分析语言的基本成分单位包括句法、语汇、语音、表记四个部门。”

3、指出研究现代汉语的范围和作用

研究现代汉语的范围和作用，提出这一个分析方法及其全部结果具有特定性，一般性，概括性，适用性。

本研究分析的是从20世纪50年代中后期至今半个多世纪以来的具有代表性的现代中国语。即，具有特定性。

由语言分析区分2个形式，指出1个句子语言单位，分析句子区分四个部门，区分语元素音节全过程，指出全体语法结构核心，到：指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。即，**具有一般性**。

这1个分析方法及其全部结果可以概括为中国语言学基础理论研究中的超音理论：“音等论”，这1个分析方法及其全部结果可以概括为语言的定义和语言形式的定义，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。即，**具有概括性**。

这1个分析方法及其全部结果可以适用于今后包括其他语言研究、中国语言学基础理论研究和现代汉语语法、语汇、语音研究以及今后的现代汉语大语法研究和基础语言教学与研究。即，**具有适用性**。

4、指出本研究提出语言学的方法论

本研究提出语言学的方法论，指出我们讨论中国语言学基础理论研究中的基本问题采用的语言分析方法及其全部结果是以往中国语言学基础理论研究、现代汉语语法研究中所没有的。指出这一个语言分析方法及其全部结果提出的方法论称作：音等论。

音等论最初是笔者1998年提出的语言学超音理论。指出这一个语言分析方法及其全部结果提出的方法论可以用于解答语言学基础理论研究中的语言单位及有关问题，可以化解以往语言研究、语言学基础理论研究、中国语言学基础理论研究和现代汉语语法、语汇、语音研究中无法解决的全部疑难问题。

以往的中国语言学基础理论研究、现代汉语语法研究以字词为依据，排除了音声语言表达形式在语法中的作用。以往语言分析不区分语言形式具有的音声语言表达形式和音声语言的表记形式，因而以往的中国语言学基础理论研究中并没有也不可能指出语言分析的基本单位是1个句子语言单位，不可能指出全部语言

成分单位，也不可能指出句法语汇分析的 1 个句子的句法语汇结构，以及 1 个句子具有可以区分的句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构，不可能指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何 1 个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。

我们相信：这一个语言分析方法及其全部结果提出的语言学超音理论：音等论，一定会在今后的语言研究、中国语言学基础理论研究、现代汉语语法、语汇、语音研究以及今后的现代汉语大语法研究和基础语言教学与研究中起到应有作用。由此而来的今后的科学语言学一定会在科学全领域中起到应有作用。

2017年 春

参考文献要目：

- 张世禄 《中国音韵学史》 台湾商务印书馆1986
高名凯，石安石 《语言学概论》 中华书局1963
高名凯 《语言论》 中华书局1995
服部四郎 《言語学の方法》 岩波书店1960
市河三喜，服部四郎 《世界言語概説》 研究社1995
岑麒祥 《语音学概论》 科学出版社1959
谢云飞 《语音学大纲》 台湾学生书局1987
罗常培 《普通语音学纲要》 商务印书馆1981
罗常培 《汉语音韵学导论》 中华书局1956
赵元任 《北京口语语法》（李荣译） 中国青年出版社1953
赵元任 《A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE》 台湾敦煌书局1968
徐世荣 《普通话语音知识》 文字改革出版社1980
刘月华 潘文娣 故韡 《实用现代汉语语法》 外语教学与研究出版社1983
冯志伟 《现代语言学流派》 陕西人民出版社1987
万清华 〈关于“去”与“来”动词的归类〉《中国语学》第242号 1995年
萬清華 〈中国語の語音体系における語音単位〉《言語与文化论集》第4号 1997
万清华 〈超音元素一声调〉《中国语研究》第39号 1997
万清华 〈构语形态“子”的分类〉《开篇》第16号 1997
萬清華 〈音等论〉 1998年学位论文 日本国立国会图书馆藏制本
萬清華 〈说“儿”〉《人文研究》第134集 1998年12月
萬清華 〈动态语言学原理〉《樱文论丛》第61卷 2004年8月
万清华 〈句切和标峰重音〉《樱文论丛》第73卷 2009年2月
萬清華 〈说“的”〉《樱文论丛》第79卷 2011年2月
萬清華 〈说“就”“才”〉《樱文论丛》第82卷 2012年2月
萬清華 〈声调描写〉《樱文论丛》第84卷 2013年2月
萬清華 〈句单位〉《樱文论丛》第86卷 2014年2月
萬清華 〈单语〉《樱文论丛》第89卷 2015年3月
萬清華 〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月
萬清華 〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月

貞治六年中殿御会伝本考

鹿 野 し の ぶ

キーワード 中殿御会 伝本 後光厳天皇 足利義詮 二条良基 冷泉為秀

要 旨

貞治六年（一三六七）三月二十九日、北朝の後光厳天皇が中殿（清涼殿）で御遊および歌会を行った。公式の宮中行事であるが、開催は足利義詮の奏請によるものであった。この御会に関する作品の伝本は未整理の状態であり、本稿では、伝本の整理を行い、諸本を系統分類する。これまで、その伝本は二条良基の記録『雲井の花』が群書類従に翻刻され、和歌集成は島原図書館松平文庫蔵本のみとされ、『新編国歌大観』第十巻に翻刻されている。今回の調査によって和歌集成は他に二本の存在が明らかとなった。また、『雲井の花』は江戸期の写本が知られていたが、調査の過程で室町期の最古写本の存在を知り、これについて分析、翻刻を示した。

一、はじめに

北朝第四代の天皇である後光厳が践祚したのは、観応三年（一三五二）八月のことである。父光厳院・兄崇光院が正平の一統ののち、幽閉されたため足利義詮によって急遽擁立された。在位中は朝儀の振興に努めたが、即位当初は戦乱に見舞われた⁽¹⁾。こうした北朝の和歌御会については小川剛生氏⁽²⁾によって詳細な分析がなされている。本稿で取り上げる貞治六年中殿御会は、後光厳天皇の在位中に行われたものである。中殿御会とは天皇が即位後に中殿（清涼殿）で行う「初度」「代始め」の和歌と管絃の会、または漢詩と管絃の会と定義される⁽³⁾。近年、この御会についての論究が進んでいる⁽⁴⁾。

文和、延文、康安年間と、即位から十五年の歳月を経て、後光厳天皇はようやく中殿御会を行うことができた。貞治六年（一二六七）三月二十九日のことである。

これに関する作品としては、従来、群書類従巻二八二に「貞治六年中殿御会記（称雲井の花）」として、二条良基のいわゆる仮名日記が知られ、和歌集成については島原図書館松平文庫蔵の『歌書集』に収められているもの⁽⁵⁾のみとされてきた。この伝本について調査を進めたところ、単行の写本の存在は未整理の状態であることから、本稿では伝本整理を行うことを目的とする。その上で『雲井の花』の最古写本である西尾市岩瀬文庫蔵本と、国立歴史民俗博物館蔵本を翻刻し、校異を示した。

二、貞治六年中殿御会に関する伝本について

改めて、この御会の記録を整理すると次のようになる。

- 1、『後愚昧記』
- 2、二条良基による仮名序（『雲井の花』）
- 3、二条良基による仮名序（『雲井の花』）と、二条良基による真名序および和歌
- 4、二条良基による真名序および和歌
- 5、真名序・仮名序のみの序文（扶桑拾葉集）
- 6、『太平記』卷四十

1の『後愚昧記』⁽⁶⁾は三条公忠の日記であり、御会における和歌の御製講師について公武での確執があったことなどが詳しく記され、その上で、二条良基の真名序と和歌が記される。2は『雲井の花』として群書類従巻二八二に収録されており、容易に披見できる。しかし、この類従本は本文に多くの欠陥があり善本とは言えない（後述）。そして、3は2の『雲井の花』と4の真名序および和歌が記される伝本である。4は和歌集成として、従来島原図書館松平文庫蔵の『歌書集 雅』に所収されるものとされ、『新編国歌大観』第十巻に所録されている。5は『扶桑拾葉集』所収の序文集成⁽⁷⁾。6の『太平記』卷四十では南北朝の動乱が収束した年を貞治六年とし、治世の象徴として中殿御会が描かれる。この内容は2の『雲井の花』からほぼ全文を引用したものであり、太平記絵巻にも描かれている⁽⁸⁾。

貞治六年中殿御会を単行とする伝本として、2、3、4について現在までに十六本ほどの諸本を調査したが、その掲載内容から2をⅠ類、3をⅡ類、4をⅢ類と分類した。Ⅰ類については最古写本の存在の教示を受け、類従本の不備を補うことができる。Ⅱ類について諸本間の大きな異同は認められないが、和歌の掲載順や作者表記などに着目するとこれをさらに三種に分類することができる。Ⅲ類については、今回の調査により、新たに二本の伝本の存在が知られることとなった。以下に書誌を簡単に紹介をする。なお、所蔵者名の下に小稿で用いる略号をゴチックで示した。

Ⅰ類（内容は二条良基の仮名日記『雲井の花』のみ）

① 西尾市岩瀬文庫蔵（岩）

（函号午／22）一軸 300×657.9 広橋兼宣書写（柳原紀光識語）〔外題〕「兼宣公記〈貞治六年三月廿九日／中殿御会記〉」（見返貼紙、紀光筆）「貞治六年三月廿九日 中殿御会記／後瑞雲院贈内大臣兼宣公筆《反古／裏》／明和九二十四 八座左大丞（花押）誌」とある。紙背文書には「応永二十二年九月二十日」「応永廿」などとある。現存最古写本。冒頭部分に記される中殿御会の歴史的叙述の一部を闕く。

② 多和文庫蔵（多）

（所蔵者番号 35-4 原本未見、国文学研究資料館マイクロフィルム271-308-3-203067に拠る）『桺葉日記』『北山行幸記』『雲井之花』合冊写本 一冊 香木舎文庫旧蔵（蔵書印）。異本注記が多く見られる。

③ 宮内庁書陵部蔵（書①）

（所蔵者番号 209-262（松岡本））江戸中期写 一冊 袋綴、27.1×19.9 柿渋刷毛表紙 本紙楮紙〔外題〕「雲

井乃花」(右傍に朱書きで「義詮公中殿御會御出仕記」とある)(左・簽・書)〔内題〕「雲井乃花」、全十二丁 一面十一行書き

④ 宮内庁書陵部蔵(書②)

(所蔵者番号 黒・76(黒川本))江戸中期写 一冊 袋綴、27.1×19.8 鶯濃淡色表紙 本紙楮紙〔外題〕「雲井乃花 全」(左・直・書)(中央やや右寄りに朱書きで「將軍義詮公中殿御會御出仕記」とある)〔内題〕「雲井乃花」(右傍に「義詮公中殿御會御出仕記」とある) 全十二丁 一面十一行書き 誤写多し

⑤ 群書類従本(群)

Ⅱ類『貞治六年中殿御会之記并和歌』(内容は『雲井の花』+真名序并和歌) 一種

⑥ ノートルダム清心女子大学蔵(ノ)

(所蔵者番号 G 66 原本未見、国文学研究資料館マイクロフィルム332-2842に拠る)写本 一冊〔外題〕「中殿御會／貞治六年」(左・簽)打曇表紙〔内題〕ナシ 一面十一行 和歌一首一行書き 全十六丁。〔備考〕もとの本の下部が破損。その部分を線で示す。歌会一座は冒頭に良基の真名序・和歌に続き、懷紙が置かれた順(懷国↓御製)に端書・位署を記す。

二種

⑦ 国立歴史民俗博物館蔵高松宮旧蔵(歴)

(所蔵者番号 ゐ函467・原本未見、画像データに拠る)写本 一冊 江戸前期写 仮綴。29.5×20.6 表紙本文共

紙(原)〔外題〕「中殿御会之記」(原・左・直・書)〔内題〕「中殿御會 貞治六年」全八丁 一面十六行。⁽¹⁰⁾

⑧ 日本大学文学部図書館蔵(日)

(所蔵者番号 911.18/c61) 写本 一冊 袋綴 江戸写 27.7×19.7 縹色表紙 本紙楮紙〔外題〕「中殿御會
〈貞治六年〉」(原・左・直書)〔内題〕「中殿御會 〈貞治六年〉」全十二丁(前後遊紙一丁ずつ含む) 一面十二行
書き 和歌一首一行書き

三種

⑨ 宮内庁書陵部蔵(書③)

(所蔵者番号 501-327・御所本) 写本 一帖 列帖装 江戸初期写 17.2×16.3 花浅葱色布地黄色菱形花刺繡
表紙 本紙鳥の子紙 〔外題〕「中殿御會〈貞治〉」(簽・左・書)〔内題〕ナシ 全二十四丁(遊紙・前一丁、後
二丁) 一面十行、和歌一首二行書き

⑩ 国会図書館蔵(国)

(所蔵者番号 195-92) 写本 一冊 袋綴 江戸写 25.3×18.5 朱色表紙 本紙楮紙〔外題〕ナシ 〔内題〕
「貞治和歌御会仮名記」全十四丁 一面十二行、和歌一首一行書き

⑪ 国文学研究資料館蔵(資)

(所蔵者番号 タ211) 写本 一冊 袋綴 江戸写 縦28.3×横20.05 柿渋刷毛表紙 本紙楮紙〔外題〕「中殿
御會和歌〈有序〉」〔内題〕ナシ 全十七丁(前後遊紙各一丁含む)。一面九行書き 和歌一首一行書き 異本
注記あり。

⑫ 兵庫県篠山市立青山歴史村蔵(青1)

(所蔵者番号 函313 原本未見、国文学研究資料館マイクロフィルム339-6313に拠る) 写本 一帖 [外題]「□治六年 中殿御會」[内題]「中殿御會 貞治六年」全十六丁。一面十行書き 和歌一首一行書き

⑬ 兵庫県篠山市立青山歴史村蔵(青2)

(所蔵者番号 函314 原本未見、国文学研究資料館マイクロフィルム339-6314に拠る) 写本 一冊 [外題]「貞治六年 中殿御會」墨流し表紙[内題]「中殿御會 貞治六年」全十二丁。一面十二行書き 和歌一首一行書き

Ⅲ類 歌書(「真名序と和歌」)

⑭ 島原図書館松平文庫蔵(松)

(所蔵者番号 119-6-2 原本未見、国文学研究資料館データ画像358-975-Cに拠る) [外題]『哥書集 雅』六冊(叢書) 写本 「中殿御會和哥」と項目立てにあり「春日侍中殿同詠花多春友 應製和歌一首並序」一面十行書き 和歌一首二行書き(御製、仲光・為敦・懷国は和歌一首三行書き) 末尾懷国詠の後に空白ありその後「貞治六年三月廿九日中殿和歌御會」とある。[識語]「以尊道親王御真筆之卷物不違一字書写之令校合畢」

⑮ 祐徳稻荷神社中川文庫蔵(祐1)

(所蔵者番号 6-22-3557 原本未見、国文学研究資料館データ画像ユ1-555に拠る) 写本 一冊 枡形袋綴[外題]「後光厳院 貞治中殿御會」(題簽・書)[内題]ナシ。一面七行書き(六・八行書きの丁もあり) 和歌一首一行書き 末に「貞治六年三月廿九日中殿和歌御會」とあり。[書写奥書]木下喜左衛門写

⑯ 祐徳稻荷神社中川文庫蔵(祐2)

(所蔵者番号 6-22-248 原本未見、国文学研究資料館データ画像ユ1-982に拠る) 写本 一冊 袋綴[外題]「貞治

中殿御會 完」〔直書〕。〔内題〕ナシ。一面七～九行書き 和歌一首二行書き 末に「貞治六年三月廿九日
中殿和歌御會」〔備考〕別筆で「距昭和四八年 五百七十二年 北朝後光厳院 足利義詮征夷大將軍」とあ
り

以上本文の確認ができたものを記した。この他に四天王寺大学恩頼堂文庫蔵「中殿御会之記」（写本・一冊）、
佐賀県立図書館蓮池鍋島文庫蔵（「榊葉の記」と合冊、写本）、実践女子大学図書館など未見の伝本があるが、これ
までの調査から異本というような伝本はないと考えられる。

三、「中殿御会記」（雲井の花）本文の異同について

I類とII類の『雲井の花』に該当する部分に関する異同を検討する。内容的には同一系統本とみなして良いと
考えられるが、次のような異同に着目し、あえて分類した。

表 1

③	②	①			
○	○	○	岩瀬	一種	Ⅰ類
○	○	×	多和	二種	
○	○	×	書①		
○	○	×	書②		
○	○	×	群書		
×	×	×	ノ大	一種	Ⅱ類
×	×	○	歴博	二種	
×	×	○	日大		
×	×	×	書③	三種	
×	×	×	国会		
×	×	×	資料		
×	△	×	青①		
×	△	×	青②		

⑦	⑥	⑤	④
○	○	○	○
×	×	×	△
×	○	×	△
×	○	×	△
×	○	×	△
○	○	○	×
×	×	△	○
×	×	△	○
×	×	△	×
×	×	△	×
×	×	△	△
×	×	△	○
×	×	△	○

① 一言―有○、無×

② うけたまはる○、うけたまはらる×、うけたまはれる△

③ 実綱○、実遠×

④ 時秀○、明秀× 明秀〔明〕の右傍に「時イ」△

⑤ 直氏○、真氏×、貞氏△

⑥ 鎌倉右大将○、鎌倉右大臣×

⑦ しきしまのた、しき道○、た、しき道×

表1における異同について述べたい。①は「雲井の花」の冒頭部であり、『論語』為政篇の「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」に拠る。この「一言」の有無による相違。これを踏まえているのは、歴・日のみであり、岩は当該部分を欠いているので、不明であるが、良基が『論語』を踏まえて執筆していることは容易に想像できる。

③の「実綱」に関する一文を見てみよう。

為秀・行忠・実綱等卿・為邦朝臣以下、ことなる由緒につきて庭上にてをりたつ、

ここは為秀以下が「ことなる由緒」により自流の所作を明示した点で、重要な一文である。為秀は冷泉家二代目当主権中納言冷泉為秀であり、『公卿補任』によれば、この年の正月に正三位となっている。行忠は世尊寺行忠であり従二位参議でこの日侍従を兼任される。そして実綱は正親町実綱であり参議従三位左近権中将で、この御会の後四月十三日に権中納言に任ぜられている。一方、実遠は小倉実遠であり、前参議でこの年の正月に正三位に叙されている。実綱は和歌を詠じていないが、**多**でも「実綱」とあり、ここは実綱とあるのが古態であるとわかる。

現存最古写本である**岩**は、類従本やその他の伝本の内容を修正できる点で貴重である。

例えば、懷紙を置く順であるが、懷国から順に置いていくが、類従本その他で「富小路前宰相。二條前宰相。小倉前宰相中将。按察内大臣。右大臣。関白。懷紙の見やう膝行などみな思ひく也。関白は建保の例によりて序者たりと雖も、位次にまかせて是ををく。又直衣ふみく、み膝行あり。故太閤元徳中殿御参に此作法侍るとかや。大樹本座并御前にて懷紙を見てをかる。」とあるが、**岩**では次のようにある。

富小路前宰相中将・二条宰相・小倉前宰相中将・侍従宰相・別当・冷泉中納言・藤中納言・鎌倉大納言・按察・内大臣・右大臣・関白、懷紙のみ様、膝行などみなく思ひくなり、関白は建保の例によりて序者たりといへども位次にまかせて懷紙をおかる、直衣ふんく、みの膝行あり、故太閤、元徳中殿御会にこの作法侍るにや、

富小路前宰相中将は実遠、二条宰相は従二位権二条為忠であるから類従本に「前」とあるのは訂正される。小倉前宰相中将は実名で、以下傍線部は類従本に欠く部分である。侍従宰相は行忠、別当は忠光、冷泉中納言は為秀、藤中納言は時光、鎌倉大納言は義詮と、懷紙を置いた順にすべて名が記される。按察は実継、内大臣は師良、

右大臣は実俊、関白は良基である。

ところで、Ⅱ類（およびⅢ類）における和歌の記載は、ほとんどの伝本が良基以下高位の順に記されるが、ノのみはここに記される懷紙を置いた順に和歌が示されており、御会の様子を如実に記すものとして、他の伝本より上位に分類した。さらに、ノは表1の⑤や⑦についても、ノのみが岩と同じ本文であることも注意され、ノも古態を示す伝本として注意されよう。

さて、その後の次第に関して披講が終わり、類従本では「講讀師みな退く。」とあり、歴は「講讀みなしりぞく。」と省略して記しているところ、岩では「講師読師みなしりそく、」とあり、丁寧な叙述が為されている。

また、群・歴などには「応徳以来度々の御製の講師あながち歌人にあらざれども。其例多きゆへなり」とあるが、岩では「応徳以来の御製の講師、あながちに哥人の家にあらざれども其例おほき故なり」と歌道家でなくとも良いことがことさら強調されている。これは周知のことであるが、この御製講師をめぐって、二条為遠を推す後光厳天皇と、冷泉為秀を推す將軍義詮に間で衝突があり、結果、時光となったことが『後愚昧記』に記される。これを擁護する発言である。

また、御遊の場面で群その他の伝本が、「次に伊頭朝臣笛筥をもちて関白前にをく」とするが、伊頭は五位殿上人であり、他の部分の記述と同様に「朝臣」と書かず「次伊頭臣下の笛筥をもちて関白前にをく」とする岩が古態である。

最後に、「雲井の花」最末尾を見てみよう。中殿御会は漢詩あるいは和歌の御会に必ず御遊を伴う。本来は御遊が行われたのち、和歌の披講が行われるが、義詮がこれを望まず、歌会を前にして義詮が退出後、御遊を行った。これについても良基は先例があるので、問題はないとしている。その上で後光厳天皇が演奏した楽器につい

て述べている。群と歴、岩の本文をあげてみよう。

類従本

抑中殿宴に主上御所作侍る事は、邂逅の儀にて侍るにや。建保には御琵琶にてぞありし。此御代詩歌兩度の宸宴大方ありがたきためしに侍る上。たびごとの御所作。玉笛の声の中には鳳凰も来儀し、和琴の調べの間には鬼神も感動し侍らんとぞ覺侍し。中殿宴は中古以来纔に六七度こそ侍に、此たび無為にとげ行れぬれば。万邦正しき道に歸し。

歴博本

抑中殿宴に主上御所作侍る事は、邂逅の儀にて侍るにや、建保には御琵琶にて侍り、此御代詩歌兩度の宸宴おほかたありがたきためしに侍るうへ。度ごとの御所作、玉笙の声鳳凰も来儀し、鬼神も感動し侍らんとぞ覺侍し。中殿宴は中古以来纔に六七度こそ侍るに、此度無為に遂をこなはれぬれば、万邦たゞしき道に歸し、

岩瀬本

抑中殿の宴に主上御所作侍事は邂逅の儀にて侍にや、建保には御琵琶にて侍り、この御代、詩哥兩度の宸宴^{宸殿}大かたありがたきためしにて侍うへ、たびごとの御所作、玉笙のこゑ、鳳凰も来儀し、鬼神も感動し侍らんとぞおぼえ侍し、中殿の宴は中古以来わづかに六七度こそ侍るに、此度無為に遂行はれ侍ぬれば、万邦しき嶋のたゞしき道に歸し。

まず、群で「玉笛」とあるのは、岩や歴のように「玉笙」とあるのが正しい。後光厳天皇が笙を演奏したことについては、豊永聡美氏⁽¹¹⁾に詳しい。武家の計らいによって即位した後光厳天皇は持明院統嫡流の帝器である琵琶ではなく、足利尊氏も習得していた笙を帝器としたのであった。この笙を自らも習得することにより、武家との関係を緊密にすることができた。武家と公家の共同開催となったこの中殿御会でも笙を用い、「鳳凰も来儀し、鬼神も感動し」と『古今集』仮名序の表現を踏まえながら良基は記している。群で「和琴のしらべ」とあるのは後人の書き込みであると考えられる。⁽¹²⁾そして表1の⑦に示したように岩には「しき嶋のたゞしき道」とあるのが古態である。

ここまで岩の優位性を確認してきた。この岩の書写された経緯について述べておく。紙背文書に「応永廿二年九月廿日 兼宣」や「応永廿年（以下中絶）」とあることから、応永二十六年三月十六日に行われた称光天皇の代始会や同じく二十八日に行われた仙洞和歌御会との関わりが考えられよう。称光天皇の代始会については『薩戒記』⁽¹³⁾に記録が残っており、兼宣は講師を務めている。⁽¹⁴⁾さらに国立歴史民俗博物館蔵『仙洞和歌御会記』は『兼宣記』から当日の和歌御会の記事が抜書されたもので、岩の書写者とされる広橋兼宣自筆で応永二十六年三月二十一日条からはじまり、後小松院からの院宣・請文・三席御会の指図・参会者注文の散状などが記載される。⁽¹⁵⁾

四、和歌本文について

次にⅢ類とした伝本に記載される和歌と、Ⅱ類を含めた他出の和歌本文について述べておきたい。まず、Ⅱ類とⅢ類の異同について述べる。まずⅡ類・Ⅲ類それぞれの伝本間における大きな異同は見られない。そして、今、

細かな検証は省略するが、和歌本文および作者の官位表記を見てみると、概ねⅡ類本よりもⅢ類本が優位である。これは『後愚昧記』の表記から確認される。この『後愚昧記』の表記との相違が一点だけ見られる。次の「行輔」の位置である。

Ⅱ類本 「従四位上行左近衛権中将臣藤原朝臣行輔上」

Ⅲ類本 「正四位行左近衛権中将臣藤原朝臣行輔上」

和歌の表記および位置において『後愚昧記』はⅢ類本と同表記であったが、このみ、「従四位上行左近衛権中将臣藤原朝臣行輔上」とあり、Ⅱ類本と同じである。この中殿御会と同時期に詠進されたとされる『新玉津島社歌合』において、行輔は「九条」と肩書され、「正四位下行左近衛権中将藤原朝臣行輔」とある。『新玉津島社歌合』は貞治六年三月二十三日と冒頭の表題にある。稲田利徳氏に拠れば、この三月というのは弘長三年の『玉津島社歌合』をモデルとし「3」という数字にこだわって、急ぎ三月中に（しかも二十三日として）披講を行ったものであるとする。⁽¹⁶⁾ 行輔は『愚管記』永和元年十一月二十三日条の後円融天皇大嘗会に関する記録の中に、近年その所在が不明であると記される。⁽¹⁷⁾ 愚見を述べると、この時、まだ従四位であったのではないか。そしてあるいはこの中殿御会を経て正四位になったのではなからうか。新玉津島社歌合が「3」という数字にこだわって意図的に日付を記載したのであれば、そのような憶測も可能であろう。

さて、他出状況を見ておこう。本歌会の和歌は、『新続古今集』賀に四首が入集する。「後光厳院御製」と「良基」「為邦」「懷国」の詠である。撰者の飛鳥井雅世は本御会を後光厳院の代始会と意識し、その和歌資料と捉えていたのであろう、義詮の歌は採歌されていない。また、『題林愚抄』には十五首入集している。そのうち、後光厳天皇の歌は『新続古今集』と本歌会のそれぞれを出典とし重複して採歌されている。このほか、時光歌が

「貞和二年仙洞御会」の歌として採歌されている。この仙洞御会の題は「花色春久」であり、天皇の予祝を詠むという点においても差異がなく、題による歌の相違は難しいが、『題林愚抄』の編集ミスと考えてよい。

五、まとめ

この中殿御会は義詮が武家の将軍として初めて参内した歌会であり、良基がさまざまな配慮したことが知られる。また、御製講師についても義詮が為秀を推挙したのに対し、後光厳が為遠を推し、どちらも譲らなかったために、歌道家ではない時光が務めたことが『後愚昧記』に詳しい(先述)。為秀はこの頃、義詮に擁護され、前年には『年中行事歌合』の判者を務めるなど歌道家の当主として最も華やいた時期であった。さまざまな困難を乗り越えた為秀はこの頃には良基に「偏執」(『近來風牀』⁽¹⁸⁾)と言われるほど頑固さも身に付けていた。『雲井の花』に記される「ことなる由緒」により他とは別の行動を取った背景には冷泉家の当主としての自負と御製講師になれなかったことへの強い意思表示であったといえる。また本来は御遊ののち、和歌会が行われるところ、義詮が厭がったので、歌会を行い、その後に御遊としたことなど義詮が本会に積極的ではなかったことが知られる。良基は「応徳の例に従い」と擁護している点など、『後愚昧記』と比較して述べるべきだが、別の機会に論じたい。

(1) 『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー) 小川剛生氏執筆。

(2) 『三条良基研究』(笠間書院 二〇〇五年十一月) 第三篇 第一章「北朝和歌御会について―「御会始」から「歌会始」へ―」。

- (3) その成立については佐多芳彦氏「中殿御会の成立について」（『国史学』142 一九九〇年十一月）に詳しい。
- (4) 山本啓介氏「鎌倉・南北朝期における中殿和歌御会と三席御会」（廣木一人教授退職記念論集刊行委員会編『日本詩歌への新視点・廣木一人教授退職記念論集』風間書房 二〇一七年三月）。
- (5) 『和歌文学大辞典』「貞治六年三月廿九日歌会」の項、板野みずえ氏執筆。
- (6) 本文は『大日本古記録』による。
- (7) 『扶桑拾葉集』所収の「雲井の花」については国文学研究資料館マイクロフィルム化されているものはみな閲覧した。
- (8) 建保六年の中殿歌会の記録の後に『太平記』抜書として宮内庁書陵部蔵「貞治六年中殿御會事」（所蔵者番号B6-534、原本未見、国文学研究資料館画像データDIG-KSRM-44351-2000-2に拠る）一軸・写本がある。
- (9) 小川剛生氏のご教示による。
- (10) 書誌データは『国立歴史民俗博物館資料目録 高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」』国立歴史民俗博物館 二〇〇九年三月による。
- (11) 『天皇の音楽史』吉川弘文館 二〇一七年。
- (12) 小川剛生氏のご教示による。
- (13) 人間文化研究機構連携展示『うたのちから 和歌の時代史』二〇〇五年、一一五頁。なお、『史料纂集 兼宣公記 第二』（続群書類従完成会 一九七三年）には「コノ月廣橋賢光本ヲ以テ補フ」として載る。
- (14) 『大日本古記録 薩戒記一』岩波書店 二〇〇〇年。
- (15) 『薩戒記』には「非中殿」と書かれ、中殿御会がこの貞治六年の後光厳天皇の会で最後であることなど、小川氏注(2)に指摘がある。また、この「和歌御会」については山本啓介氏「室町期における三席御会」（『青山語文』四七号 二〇一七年三月 四三頁）に詳しい。
- (16) 「『新玉津島社歌合』をめぐって」（『和歌四天王の研究』第五章第三節 笠間書院 一九九九年）。
- (17) 『和歌文学大辞典』古典ライブラリーの「行輔」の項には『新玉津島社歌合』の記録を最後とする（大野順子氏執筆）。
- (18) 『歌論歌学集成』三弥井書店。なお、拙著『冷泉為秀研究』（新典社 二〇一四年）参照。

I 類本 翻刻

【凡例】

- 一、本資料は、西尾市立岩瀬文庫に所蔵される。
- 一、可能な限り、原本に忠実に翻刻するようにつとめ、改行についても原則として底本通りとした。
- 一、平仮名・片仮名は、現行の字体に統一した。漢字の旧字体は本文通りとした。
- 一、底本に存する校異・注記などの類いは、原本に従って示した。
- 一、文章中に記される省略は、原則として「―」で示した。
- 一、虫損や汚れなどで判読できない箇所は字数分の「□」を用いて表示し、他本によって欠字部分が確定できる場合は、□で囲って示した。字数がわからない場合は「」を用いて示した。
- 一、補入記号として「○」を用いた。
- 一、誤写と想定される箇所や不審な箇所には、右傍に「〈ママ〉」を付した。
- 一、割注は「〜」でくくり、改行位置を「／」で示した。
- 一、読みやすさを考慮し、適宜読点を付した。

I 類本

西尾市岩瀬文庫蔵本「兼宣公記」

貞治六年三月廿九日 中殿御會記

後瑞雲院贈内大臣兼宣公筆（反故／裏）

明和九二十四 八座左大丞（花押）誌

○前闕

講せられき「

権中納言為定卿「

といふ題をめし「

き、此外承保二年四月、長治「

月、嘉承二年三月、建武二「

清涼殿にて和哥宴あ「

度にあらされば、中殿宴の先規

にはくはへ侍らさる「 「事に堪□

たる人、序をたてまつるなり、抑□□□

六年の春九城のうち花かうは「

八嶋の外風おさまれる時にあ「

宸宴をもよをさるゝ事あり「

序の事建保の往躅をたつねられ

て関白是を承はる、征夷大將軍、

此道の数寄の心さしもあさからす□

て勅撰なとも申おこなはれし「」

建武の宸宴に贈左府の芳「」

なきにあらさるよし□□勅命に

よりて俄に参せらる、まことに

当時の壯観、後代の美談たるをや、

奉行蔵人左少弁仲、兼日に

勅喚の人くゝに題をくはる「」

春友といへる題也、今度建保「」

にまかせて関白当座の出題

あるへからさるよし申うけらる、故

なり、当日に御殿の御装束をよ

そふ、母屋廂の御簾を卷て、階「」

間より三ヶ間北にをれて二ヶ「」

菅円座をしきて公卿の座とす関「」

の座は二枚をかさぬ、長治 元徳には

二行たりといへとも一行本儀たるにより

て今度かくのことく座を儲らる御「」

昼御座はひころのことし、御「」

東西の間に三尺の御几帳をた「」

らる、西第一間に四季御屏風をたつ

昼御座のうへに御劔（左方）、御硯筥（右方）

おく、常のことし、大臣座の末に参議

座の前に各高燈台一本をた「」

切とうたゐ 文臺 円座などは期「」

そみて是をおかるへし、夜やうくふくる

ほとに諸卿参あつまる、関白は今朝

より直廬に参候せらる、右大臣

内大臣今日共に直衣はしめなり、関「」

直廬よりまうのほらる、内大臣以「」

今日宿侍はしめ、やかて保安例に「」

ちよくろより直衣はしめのことあり、

前駟布袴、隨身褐衣、常のことし、

丑刻はかりに將軍参せらる、其行「」

万人目を驚かさすといふ事なし、

為秀 行忠 実綱等卿 為邦朝臣以下、

ことなる由緒につきて庭上にて
をりたつ、左衛門陣の四足より参入、
先太刀はき十人、左右に行列は、

一番

左方、佐々木佐渡次郎左衛門尉時秀

地しろき直垂、金銀のはくにて「」

をおす、紅のこしかいらきつくりの太刀、

右方、小串二郎右衛門尉詮行

ちむらさきの直垂、白はくにて二雁を「」

白「」

二番、

左、伊勢七郎左衛門尉貞信

ち白直垂、金薄にてむらこをおす、「」

右、斎藤三郎清長

ちかうの直垂、二すちかへの中に白「」

ひしをおす、黄こしかいらき作の太「」

三番、

左、大内修理亮詮弘

ちかうの直垂、金薄にて大ひしを「
かいらき作の太刀

右、大内七郎詮長

ちみかきつけの直垂、くろきひし「
こしきんはくかいらき作の太刀

四番、

左、海老名七郎左衛門尉詮季

地白直垂、茶染、金薄にて大かこ□

おす、黄こし、白太刀

右、本間左衛門太郎

ちしろ紫かたみかはりの直垂、金銀の
薄にて○^{十六}目結をおす、紅の腰白太刀

五番、

左、山城次郎左衛門尉師政

地白直垂、白ていにてすなかしをかく、白「

右、栗飯原弾正左衛門尉詮胤

ちかりやすの直垂、白泥にて水をかき
金泥にてかえてをかく、かうの大帷、白「

建久暦仁には虎皮のしりさや「」

そろへてはきけるにや、今度□

おほく白太刀也、

次に大樹〈常の直衣、うす色のかたもんのおり／物のさしぬき、紅のうちのきぬ「」〉、
左のかたはらに山名民部少輔氏□

太刀をもつ、〈山吹のかりきぬこき／むらさきのさしぬき〉、右かたは「」

撰津掃部頭能直沓の役、〈しろあやの狩衣〉、／うす色のさしぬき〉、

うしろのかたはらに佐々木備前五「」

左衛門尉高久調度役、〈二藍／狩衣〉

本郷左近大夫将監詮泰、笠の「」

ためなり、〈かうのかりきぬ／むらさきのさしぬき〉此外直垂の□

ともがら済々あひしたかふ、今川

伊与守貞世、侍所にて今日けい「」

承はる、又土岐伊与守直氏 山城中□

少輔行元 赤松判官光範〈しろき／直垂〉、

〈かうの大かたひら／引たてよほし、下部四人／めしくす〉 佐々木尾張守「」

信濃守高泰 曾我美濃守氏「」

小嶋掃部頭詮重 朝倉小次郎詮繁

同又次郎高繁 彦部新左衛門□

秀光 藤民部五郎盛明 八代新

藏人師国 佐脇右京亮明秀 藁

科新左衛門尉 中嶋弥次郎家信

後藤伊勢守、久下筑前守 浜□

左京亮詮政 荻野出羽守 忠光

長次郎 横地山城守 波多野出雲

守、以上思くゝの直垂なり、座敷などは

いたく才学なきによりて、次第不

同にしるし侍なり、今度俄に参仕□

うへ、当職の時いまた大納言の慶を

奏せず、又直衣始の儀なし、建久

かまぐらの右大将内々参内の例□

准して式しやうを略せられて太刀

はきの役人はかりをめしくせらるゝ、

とそ承侍し、又出衣も建久暦仁

の例になすらへて、紅のうちを着

られたるとかや、大樹堂上の後、役人

太刀はき、中門の外に敷皮しきて

列居す、先別勅によりて御前のめし

あり、関白御前に候せらる、刻限にいたりて

人々殿上につく、右大臣 内大臣 按察〈実継〉

藤中納言〈時光〉 冷泉中納言〈為秀〉 別当

〈忠光〉 侍従宰相〈行忠〉 小倉宰相中將〈実□〉

二条宰相〈為忠〉 富小路前宰相中將〈実遠〉

右兵衛督〈為遠〉、このうち少々便宜の所□

徘徊のともがら○ありけるにや、関白、奉行

の職事仲光をめして事の具否

をとほる、やかて出御あり、〈御引直衣、うち御はかま〉関白

ちきに座につく、次頭左中弁嗣房朝□

をめして公卿着座すへきよしを仰す、

嗣房朝臣、殿上に出て諸卿をめす、右大臣

内大臣以下次第に着座す、大樹□

殿上には着座せられす、直に御前の

座に着、諸卿ことく座につく、関白

仲―をめして切燈臺立へきよしを仰、

仲―切燈臺を持参す、五位殿上人伊顕、火をもちてしたかふ、御座の左方に□

次関白嗣房朝臣をめして、文臺をおく

へきよしを仰す、嗣房朝臣やかて御前へ

す、みて御座にある御硯筥のふたを

とりて、御前におきてしりそく、又仲、

をめして円座をくへき由を仰す、伊顕

〈読師／円座〉、藤原懷国〈講師／円座〉二人円座をもちて

御前にしきてしりそく、次殿上人より

次第に懷紙を、く、先藏人懷国是を

をく〈但哥とりおとすによりて／臨期下読師にわたす〉、次為敦是を、く、

仲―為有朝臣、為邦朝臣、為重朝臣、行輔「」

皆次第に是を、く、次公卿下臈より

又是を、く、右兵衛督〈御前の座にはつかす、／殿上へんに徘徊、建保〉

〈定家卿／如此〉富小路前宰相中将、二条宰相、小倉

前宰相中将、侍従宰相、別当、冷泉中納言、

藤中納言、鎌倉大納言、按察、内大臣、

右大臣、関白、懷紙のみ様、膝行など

みなく思くなり、関白は建保の例に

よりて序者たりといへとも位次にま

かせて懷紙をおかる、直衣ふんく、み

の膝行あり、故大閣、元徳中殿御

會にこの作法侍けるにや、又大樹本

座并御前にて懷紙をみておかる、

其作法優美のよし一同感嘆の色

あり、右大臣読師たるによりて直に

御前の円座につく、次右大臣講師仲、を

めす、仲―御前の円座にす、みつく、次講

頌の人をめす、時光卿〈序を講せんために／別勅にてめさる〉

為秀卿 忠光卿〈是も序の／ためにめさる〉 為忠卿 為遠卿

也、又行輔 為重 為邦等朝臣めしに

よりて簀子にす、みつく、次右大臣、為重朝臣を

めして〈下読／師〉、懷紙をかさねしむ、序より

次第にとりて、文臺の上に披をく、仲―

是をよむ、人々講頌、序は三反ばかり

これを講す、関白哥五反披講あり、

次に殿上人より公卿にいたるまで次第に

是を講せらる、公卿は二反、大樹 丞相などの

哥は三反はかり是を講す、臣下披講

をはりて、講師読師みなしりそく、

講頌人々には猶候すへき由関白是を仰す、

天気によりて、関白、読師の円座にす、

みつきて、御気色を伺て、時光卿をめして

御製講師とす、〈今日為秀卿 為遠卿、所存を申に／依て別勅によりて時光卿を〉

へめさる、応徳已来の御製の講師、あなちちに哥人の家に／あらされとも其例おほき故なり〉

関白御製をたまはりて、文臺のうへに

ひらきをく、人く講頌十反はかりに

およふ、すてに日さしいつる程なれ

は、物、色あひ、さたかにみえて、花の

かほりもなつかしく、霞のたゝすまひも

いとえんあるに、人く詠哥のこゑ、雲井に

とをる心地して、身にしむはかりそ

きこえし、御製講しをはりて各

本座にしりそく、関白、御製をまき

て文臺のうへにをきて本座にしり

そく〈御製懷中の例も／あれとも今度此事なし〉伶人にあらざる人々、

次第にしりそく、内大臣 按察 大樹をな

しく座をたつ、関白一人は猶座に

候せらる、次御遊事あり、先関白、仲、

をめして雑具撤すへきよしを仰す、殿上

の五位六位の役人まいりて、切燈臺 円座

をとりてしりそく、次嗣房朝臣を

めして文臺とるへき由を仰す、

嗣房朝臣、御前にす、みて御製を懷中

して、御硯蓋をとりてもとのことく

御硯におほゐて臣下の哥ともをとりて

しりそく、伶人三條大納言〈実音卿、笛〉 左宰相

中将〈実綱卿、和琴〉 前兵部卿〈兼親卿、箏篳〉 前衛門督〈教言卿、笙〉

綾小路三位〈成賢卿、拍子〉、公全朝臣〈箏〉 宗泰朝臣〈付哥〉

両人は簀子に候す、次管絃の具をおく、先

嗣房朝臣御笛筥を持て関白座の

前にをく、関白はこをとりて簀子より

すゝみて御座の前にをきてしりそかる、

次伊顯臣下の笛筥をもちて関白

座前にをく、次基清朝臣、琵琶をとり

て右大臣の前におく、次和琴 箏、

六位藏人懷国 言長これをおく、次

関白笛筥をとりくたす、次御遊はし

まる、呂に此殿コノトノ 鳥破トリノハ 席田ムシロタ 鳥急トリノキウ、律万歳

楽 伊勢海 三臺急、御遊をはりて、関白

御笛筥をたまはりて、嗣房朝臣をめして

これを返したまふ、もとの役人、殿上の

五位六位参て、器をとりてしりそく、

次入御あり、翌日午刻はかりに事を

はりて人くまかりいつ、此度応徳

の例によりて祿の事なし、抑中殿の

宴に主上御所作侍ことは邂逅の儀にて

侍にや、建保には御琵琶にて侍り、この

御代、詩哥兩度の宸宴宸殿大かたあり

かたきためしにて侍うへ、たひことの

御所作、玉笙のこゑ、鳳凰も来儀し、鬼神も感動し侍らんとそおほえ侍し、中殿の宴は中古以来わつかに六七度こそ侍るに、此度無為に遂行はれ侍ぬれは、万邦しき嶋のたゝしき道に帰し、四海難波津のふかき風をあふくなるへし、人みな柿下の遺愛をしたふのみにあらず、世こそりて柳営の数寄を感せずといふ事なし、先和哥を講せられて後に御遊あること、常の儀にあらされとも、応徳の佳例につきて、関白申をこなはれ侍けるとそつたへうけたまはり侍し、

Ⅱ 類本 翻刻

【凡例】

一、本資料は、国立歴史民俗博物館に所蔵される。

一、表記・記号などについてはⅠ類本の翻刻に準ずる。

一、Ⅰ類本Ⅱ類本の異同箇所には番号を（）に入れ、附して示した。なお、ノ大の闕部分、諸伝本において明らかに誤写と思われる異同は省略した。

歴博本（『雲井乃花』該当部分のみ翻刻）

中殿御会 〈貞治六年〉

聖人いへることあり。詩三百一言よこしまなからむ
ことをおもへと。されはおさまれる世のこゑはやす
くしてたのしみ。^②みたれたる世の声はうらみていかれ
りといへり。やまと歌も又かくのことくなるへし。政教の
邪正をたゝし王道の興廢をしるは此道なり。いに
しへの代々の御門。春の花の朝。秋の月の夜事に
つけつゝ哥をたてまつらしめて。人のさかし
くおろかなるをもしろしめしけるにや。神国の風
俗なり。いつれの君かすて給はむ。聖代の教誡なり。
たれの人かこれをもてあそはさらむ。こゝに中殿の宴
と申侍る事は。後冷泉院天喜四年閏三月に画工の桜
花を感じ給て。大納言師房卿〈土御門／右大臣〉に勅して新成桜

花といふ題を献せしめ。清凉殿〈中殿／これ也〉に群臣をひき

て御製を加^③られ。絲竹の宴遊ありしよりこの

かた。白河院應徳元年三月左大弁匡房に勅して。

花契多春といふ題を献せしめて中殿にて講

せられき。又堀河院永長元年三月権中納言

匡房卿に勅して花契多年といふ題をけんせしめて

宸宴をのへられき。崇徳院天承元年十月権中納言

師頼卿に勅して松樹久緑といふ題を献せしめて

宸宴ありき。順徳院建保六年八月右大臣藤原

朝臣〈光明峯／寺関白〉に勅して池月久明といふ題を献せしめて

講せられき。後醍醐院元徳二年二月権中納言^⑤

為定卿に勅して花契万春といふ題をめして中殿にて

講せられき。此外承保二年四月長治二年三月。嘉承

二年三月。建武二年正月清凉殿にて和歌宴あり

といへとも。初度にあらされは。中殿の宴の先規にはくは^⑥へらる

へからさるにや。代々ことにたへたる人序をたてまつる也。抑貞治

六年の春九城のうち花かうはしく。八嶋の外風おさまれる

時にあひて宸宴をもよほさるゝ事あり。題ならひに

序のこと建保の往躅を尋^⑦られて。関白これをうけ^⑧
たまはらる。征夷大將軍此道数寄の心さしもあさ
からすして。勅撰なども申おこなはれしうへ。建武宸宴に
贈左府の芳躅なきにあらざるなし^⑩。再三勅命に
よりて俄に参せらる。まことに当時の壯觀後代の
美談たるをや奉行蔵人左少弁仲光兼日勅喚
の人くゝに題をくはる。花多春友といへる題也。此度
関白建保の例にまかせて当座の出題あるへから
さるよし申請らるゝゆへ也。当日に御殿の御装束
をよそふ。母屋廂の御簾を卷て。階の西間より
三ヶ間北におりてをのく^⑪菅圓座敷て公卿の
座とす。関白座二枚をかさぬ。長治元徳には二行たり^⑫
といへども。一行本義たるにつきて。此度かくのことく
座をまうけらる。昼御座は日比のことし。御帳の東^⑬
西の間に三尺の御几帳をたてらる。西の第一の間
に四季の御屏風をたつ。昼御座のうへに御劔（左方）
御硯筥（右方）置。常のことし。大臣の座のすゑ。参議の座の
前をのく高燈臺一本をたつ。切灯臺。文臺。圓座

なとは期にのそみてこれを、かるへし。夜やうくふくる

ほとに諸卿まいりあつまる。関白は今朝より直廬に

参候せらる。右大臣内大臣今日ともに直衣始也。

子刻⁽¹⁴⁾に関白直廬よりまうのほらる。内大臣以下

あひしたかふ。今日宿侍⁽¹⁵⁾はしめ。やかて保安の例により

て直廬より直衣始のことあり。前駆布袴。隨身⁽¹⁶⁾褐

常のことし。丑刻はかりに將軍参せらる。その行粧万人

目⁽¹⁷⁾をおとろかすといふことなし。為秀。行忠。実遠卿⁽¹⁸⁾、為邦朝臣⁽¹⁹⁾

ことなる由緒につきて庭上⁽²⁰⁾におりたつ。左衛門陣⁽²¹⁾

の四足より参入。まつ帯刀十人左右に行列

左方一番佐々木佐渡⁽²²⁾二郎左衛門尉時秀⁽²³⁾〈地白キ直垂金銀の薄にて／四目結を、す紅の腰かいらき／の金作⁽²⁴⁾の

太刀〉

右方小串二郎右衛門尉詮行⁽²⁵⁾〈地むらさきの直垂白薄にて二雁を／をす白太刀〉

左方二番伊勢七郎左衛門尉貞信⁽²⁷⁾〈地白き直垂黄薄にてむらこを／をす／白太刀〉

右方齋藤三郎清長⁽²⁹⁾〈地香の直垂二すちかへの中に白薄に菱を、す／黄腰かいらきつくりの太刀〉

左方三番大内修理亮詮弘⁽³¹⁾〈地香の直垂黄薄白薄にて大菱を、す／かいらき作の太刀〉

右方大内七郎詮長⁽³³⁾〈地みかきつけ直垂くろき菱をかく腰黄薄かいらき／つくりの太刀〉

左方四番海老名七郎左衛門尉詮季⁽³³⁾〈地黒き茶染の直垂黄薄にて／大カコヲ、ス黄腰白太刀〉

右方本間左衛門太郎茂景⁽³⁵⁾〈地白むらさきかたみかはりの直垂金銀のはく／にて目結を、すくれなるのこし白太刀〉

左方五番山城四郎左衛門尉師政⁽³⁷⁾〈地白直垂白泥にてすなかしを／かく白太刀〉

右方栗飯原彈正左衛門尉詮胤⁽³⁹⁾〈地かりやすの直垂白泥にて水をかき黄泥にて／かえてをかく腰黄薄大帷／香白太刀〉

建久曆仁には虎皮の尻鞆をそろへてはけるにや此度

はおほく白太刀也。次大樹〈常の直衣薄色のかた文のをり物指貫くれ／なひ打のきぬをいたす〉⁽⁴¹⁾

左のかたはしに山名民部少輔氏清⁽⁴²⁾〈山吹の狩衣にき紫の／さしぬき太刀をもつ〉⁽⁴³⁾右の

かたはらに摂津掃頭能直⁽⁴⁴⁾〈しらあをのをりもの、狩衣／うすいろのさしぬき〉沓の役

うしろのかたはらに佐々木備前五郎左衛門尉高久⁽⁴⁵⁾〈二重の／狩衣〉

調度役。本郷左近大夫将監詮泰⁽⁴⁶⁾かさの役の為なり。

此外直垂のともから濟々あひしたかふ。今河伊予守貞世

侍所にて今日警固をうけ給はる。又土岐伊予守貞氏⁽⁴⁷⁾。

山城中務少輔行元。赤松判官光範。〈白直垂。香大帷。引立烏／帽子。下部四人召具〉

佐々木尾張守秀信⁽⁴⁸⁾。安東信濃守高泰⁽⁴⁹⁾。曾我美濃守

氏助。小嶋掃部助詮重⁽⁵⁰⁾。朝倉小次郎詮繁。同又二郎

高繁。彦部新左衛門尉秀光。藤民部丞成明⁽⁵¹⁾。屋代新藏

人師国。佐脇左京亮明秀。藁科新左衛門尉家治⁽⁵²⁾。中

嶋弥次郎家信。後藤伊勢守。久下筑前守。濱名左京亮
詮政。荻野出羽守。忠光長次郎。横地山城守。波多野
出雲守。以上おもひ／＼の直垂也。座敷などは

いたく才学なきにつきて。⁽⁵¹⁾次第不同にしるし侍なり。

此度俄に参仕のうへ。當職の時いまた大納言の慶を

奏せず。又直衣始の儀なし。建久鎌倉右大臣内々参内

の例に准してしきしやうを略せられて。帯刀役人はかり

を召具せらるゝとぞ承侍し。又出衣は建久暦仁の例に

なずらへて。紅打を着せられたるとかやうけたまはる。⁽⁵³⁾

大樹堂上の後。役人帯刀。中門外に敷皮しきて列

居すと也。⁽⁵⁴⁾別勅によりて御前の召あり。関白御前に候

せらる。刻限にいたりて人々殿上に着。右大臣。内大臣。按察

〔実継〕。藤中納言〔時光〕。冷泉中納言〔為秀〕。别当〔忠光〕。侍従宰相〔行忠〕。〕

小倉前宰相中将〔実名〕。⁽⁵⁶⁾二條前宰相〔為忠〕。富小路前宰相中将〔実遠〕。右兵

衛督〔為遠〕これら少々便宜所に徘徊のともからもあり。関白奉

行職事仲光を召て事の具否をとほる。やがて出御

〔御さけ直衣／打はかま〕あり。関白直座につく。次頭左中弁嗣房朝臣

を召公卿着座すへきよしを仰す。嗣房朝臣殿上に

出て諸卿をめす。右大臣内大臣以下次第に着座す。大樹は

殿上には着座せられす。直に御前にす、みつ、⁽⁵⁷⁾。諸卿ことくく

座につく後。関白仲光をめして切燈臺たつへき由を

仰す。仲光燈臺を持参す。五位殿上人伊顕火を持て

したかふ。御座のかたにたつ。次関白嗣房朝臣を召て

文臺を、くへき由を仰す。嗣房朝臣やかて御前にす、

みて。御座にある御硯篋の蓋をとりて御前にをき

てしりそく。又仲光をめして圓座をくへきよしを⁽⁵⁸⁾

仰す。伊顕〈読師／円座〉藤原懷国〈講師／圓座〉二人圓座を持て御前

に敷てしりそく。次に殿上人より次第に懷紙をおく。

先藏人懷国これを、く。〈但哥とりおとすによりて／臨期に読師にわたす〉次為敦これを、く。

仲光。為有朝臣。為邦朝臣。為重朝臣。行輔朝臣みな

次第にこれををく。次に公卿下臈より又是をおく。右兵衛

督。〈御前⁽⁶⁰⁾には着せず。殿上辺に／徘徊。建保定家卿如此〉富小路前宰相中将。二條前宰相⁽⁶²⁾。

小倉前宰相中将。按察内大臣。右大臣。関白。懷紙の見やう

膝行などみなおもひくなり。関白は建保の例により

て序者たりといへとも、位次にまかせてこれを、く。⁽⁶³⁾又

直衣ふんく、み膝行あり。故大閤元徳中殿御會⁽⁶⁴⁾に此

作法侍るとかや。大樹本座并御前にて懷紙を見て
をかる。その作法優美のよし人々一同に感嘆の色あり。

右大臣読師たるによりて。すぐに御前の圓座に

つく。次右大臣講師仲光をめす。御前⁽⁶⁶⁾の圓座にすゝみ

つく。次講頌の人をめす。時光卿⁽⁶⁷⁾〈序を講せんために別／勅にてこれをめさる⁽⁶⁸⁾〉

為秀卿。忠光卿。〈これも序の／ためにめさる〉為忠卿。為遠卿なり。又行輔。為重。

為邦等朝臣めしによりて簀子にすゝみつ。次右大臣

為重朝臣を召て〈下読／師〉懷紙をかさねしむ。序より

次第に取て。文臺の上にひらきおく。仲光これをよむ。人々

講頌。序は三反はかり是を講す。関白歌五反披講あ

り。殿上人⁽⁷⁰⁾より公卿にいたりて。次第にこれを講せらる。公卿

二反。大樹丞相などの哥は三反はかりこれをかうす。臣下の

哥披講おはりて。講讀⁽⁷²⁾みなしりそく。講頌人⁽⁷¹⁾には猶

候へきよし。関白これを仰す。天氣によりて。関白読師⁽⁷³⁾

の圓座にすゝみつきて。御氣色をうかゝひて。時光卿を

召て御製の講師とす。今日為秀卿。為遠卿所存を

申によりて別勅にて時光卿めさる。應徳以来度々⁽⁷⁴⁾

の御製講師あながち哥人⁽⁷⁵⁾にあらされとも。その例おほき

ゆへなり。関白御製をたまはりて文臺の上にひ

ろけをく。人々講頌十反はかりにをよふ。すてに日さし

出る程なれば。物の色あひさたかにみえて花のかほりも

なつかしく。霞のたゝすまひもいとえむなりママに。人々詠哥(76)

のこゑ雲井にとほる心ちして。身にしむはかりそき(77)

こえし。御製講しおはりて各本座にしりそく。

関白御製(78)まきて文臺の上にをきて本座にしりそ

かる。〈御製を懷中の例もあれ／とも。此度はこの事なし〉伶人にあらさる人々次第に

座をしりそく。内大臣按察大樹(80)おなしく座をたつ。

関白一人は猶座に候せらる。次に御遊の事あり。まつ

関白。仲光をめして雑具を撒すへき由を仰す。殿上

五位六位(81)もとの役人まいりてきり燈臺圓座をとり

てしりそく。次嗣房朝臣を召て文臺をとるへき由を

仰す。嗣房朝臣御前にすゝみて。御製を懷中して

御硯蓋をとりて。もとのことく御硯(82)に置いて。臣下の

哥ともを取てしりそく。伶人三条大納言。〈実音、笛〉左宰相

中将。〈実綱／和琴〉前兵部卿〈兼親／筆策〉(83)前右兵衛

督〈教言／笙〉綾小路三位〈成賢／拍子〉

公全朝臣〈箏〉宗泰朝臣〈付歌〉兩人簀子に候す。次管

絃の具をく。まつ嗣房朝臣御笛の笛をもちて、関白

の座の前にをく。関白笛をとりて簀子よりすゝみて。

御座⁽⁸⁴⁾のまへにをきてしりそく。次に伊顯朝臣⁽⁸⁵⁾笛笛を

もちて関白前におく。次に基清朝臣琵琶をとりて

〈象丸大樹／比巴也〉⁽⁸⁶⁾右大臣の前にをく。次に和琴箏六位藏人懷

国言長これをおく。次関白笛笛をとり下す。次に御遊

はしまる。呂に此殿。鳥破。席田。鳥急。律に伊勢海⁽⁸⁷⁾。万歳

楽。三臺急。御遊おはりて関白御笛笛をたまはりて。

嗣房朝臣をめしてこれを返給ふ。もとの役人。殿上の

五位六位参てうつは物を取りて退⁽⁸⁸⁾て後⁽⁸⁹⁾に入御あり。

翌日午刻はかりに事おはりて人々まかりいつ。此度應徳

の例によりて祿の事なし。抑中殿宴に主上御所作侍る

事は、邂逅の儀にて侍るにや。建保には御琵琶にて」

侍り⁽⁹⁰⁾。此御代詩哥兩度の宸宴おほかたありかたき

ためしに侍るうへ。度ことの御所作。玉笙⁽⁹¹⁾の声鳳凰⁽⁹²⁾も

来儀し⁽⁹³⁾、鬼神も感動し侍らんとぞ覺侍し。中殿

宴は中古以来纔に六七度こそ侍るに、此度無為に遂

をこなはれぬれは。万邦⁹⁴た、しき道に帰し。四海難波
 津のふるき風をあふくなるへし。人みな柿本の遺愛を
 したふのみにあらず。世こぞりて柳宮の数寄を感せず
 といふ事なし。先和哥を講⁹⁵して後に御遊⁹⁶あることつねの儀
 にあらされとも此度應徳の佳例につきて。関白申
 をこなはれ侍るとそつたへうけたまはり侍し。

【校異】

- (1) ナシ(多・群・書①・書②・ノ・青①・青②・書③)、(2)「たのしび」群、(3)か、れ(右傍に「くわへらて
 イ」(多)かられ(右傍に「くわへられイ」書①②)、(4)「明」の右傍に「澄イ」(多・書②)、(5)「二」の右傍
 に「三イ」(書②)、(6)くはへ侍らさる「」岩、(7)「往」の右傍に「芳イ」(多・書①・書②)、(8)「たつ
 ねて」(多・書①・書②)、(9)うけたまはる(多・群・書①・書②)、(10)「よ」(岩・多・群・書①・書②)、(11)
 「をれて」(岩)「おりて二ヶ間」ノ、(12)右傍に「年イ」(多・書①・書②)、(13)「御昼御座」ノ、(14)ナシ・
 岩、(15)仕(多・書①・書②・群)、(16)「褐衣」・岩、(17)「おとろかさす」(多・書①・書②・群)、(18)実綱
 (岩・多・書①・書②・群)、(19)「等」・岩、(20)「以下」・岩、(21)「て」・岩、(22)「次」・岩、(23)「明秀」「明」
 の右傍に「時イ」多・書①・書②・群・資、(24)「の金」ナシ岩、(25)「右」の右傍に「左イ」書②、(26)
 右傍に「くろイ」多・書①、(27)貞信(「信」の右傍に「行イ」多・書①・書②)、(28)むらこ(右傍に「蝶」多・
 書①・書②・群)、(29)三郎清長(右傍に「左衛門尉イ」多・書①・書②・群)、(30)菱(「瞿麦イ」多・書①・書②)、

(31)「金薄」岩、「白」の右傍に「金イ」多・書①・書②・群、(32)「かいらき」「打鹹」多・書①・書②、(33)「白直垂」岩、(34)「金」岩、(35)「茂」の右傍に「義イ」書②、(36)目(右傍に「十六イ」岩・多・書①・書②・群)、(37)「次」岩、(38)「金イ」多・書①・書②・群、(39)「栗」右傍に「栗イ」書①・書②、右傍に「アイハラ」資、(40)「の」多・ノ、(41)「うら」とあり右傍に「うちイ」多、(42)「氏春」ノ、(43)「こ」多・書①・書②・群・ノ・書③、(44)「かきの」(群)・「かさの(かうのかりきぬ)」ノ、(45)「直氏」岩・「真氏」多・書①・書②・群・ノ、(46)「秀」の右傍に「高イ」多・書①・書②・群、(47)「安東」ナシ・岩、(48)「頭」・岩、(49)「藤民部五郎盛明」岩・「藤民部丞成明(右傍に「五郎左衛門盛時イ)」多・書①・書②・書③・群、「藤民部五郎成明」ノ・「藤民部丞盛明(右傍に「成明イ)」資、(50)ナシ岩・ノ、(51)「よりて」・岩、(52)「鎌倉右大将」岩・書①・書②・群・ノ、(53)「とぞ」多・書①・書②・「とかやそ」書③、(54)「となり」ナシ岩・多・書①・書②・書③・群、(55)「まづ」岩・多・書①・書②・書③・群、(56)「前」ナシ岩、(57)「の座に着」岩、「に進つく」群・資・青1、(58)「、」ノ、(59)「催す」ノ、(60)「御前の座にはつかず」岩、(61)宰相中将を見せ消ち「中納言」ノ、(62)「前」ナシ岩、(63)「おかる」岩、(64)「参」多・書①・書②・書③・群・ノ・資、(65)「人々」ナシ岩、(66)「仲光」岩・ノ、(67)ナシ多・書①・②・群、(68)「時光イ」多・書①・書②、(69)「為忠卿」ノ、(70)「次」多・書①・書②・書③・群、(71)「の歌」ナシ岩、(72)「講師読師」岩「講師」多・書①・書②・書③・群・資、(73)「講」多・書①・書②・群、(74)「度々」ナシ岩、(75)「哥人の家」岩、(76)「いとえんある」岩、(77)「聞こえ侍し」岩・ノ、(78)「講師」ノ、「を」岩・多・群、(79)「座を」ナシ岩、(80)「按察」ナシ多・書①・書②・群、(81)「もと」ナシ岩、(82)「おほめて」岩、(83)「前衛門督」岩、右傍に「衛門イ」多・書①・書②、(84)「座の」ナシ多・書①・書②・群、(85)「臣

下」岩、(86)「割り注ナシ岩、(87)「万歳楽 伊勢海」岩、(88)「しりそく」岩、(89)「次」岩、(90)「侍り」ナシ多、「そありし」書①・書②・群、(91)「笛」群、(92)「の中には」多・書①・書②・群、(93)「和琴の調べの間には」群、補入記号を付し「イ」として書①・書②、(94)「万邦しき嶋のたゝしき道」岩・ノ、(95)「請せられて」岩、(96)「ありと」書①・書②

〔付記〕

本稿を成すにあたり、西尾市岩瀬文庫、国立歴史民俗博物館には資料の閲覧などで便宜を賜り、翻刻のご許可もいただいた。心より御礼申し上げます。

「もつとも不気味なもの」としての人間に向けて

—— 存在と無のはざままで ——

岡 山 敬 二

はじめに

そもそもなぜ存在するものがあり、むしろ無があるのではないのか。(GA40.3)⁽¹⁾

ライブニッツにはじまるとされるこの問いを、ハイデガーは『形而上学入門』（一九三五年夏学期講義）のはじまりにかかげている。ハイデガーによると、この問いこそが形而上学、つまり哲学の根本の問いであり、しかも、「まずはもつとも広い問いとして、さらにはもつとも深い問いとして、最後にはもつとも根源的な問いとして、等級からいって第一の問いである」(GA40.4)のだという。

この問いが根本の問いであるとはどういうことか。それが等級からいって第一の問いといわれるとき、その広さや深み、根源的なありようはどうなっているのか。

その具体的な内容について全貌を説き明かすには、やはり、このテキストを全体にわたって丁寧に辿りなおしてゆくしかないのだろうが、その核心にふれる準備として、本稿では、とくに、このテキストの第四章「存在の限定」の第三節「存在と思考」で講じられる「もっとも不気味なもの」という概念に注目し、この根本の問いにとって、この概念が担うことになる意味や役割を探ってみようと思う。

この講義は、ハイデガーの思想において、いわゆる中期に位置づけられ、『存在と時間』（一九二七年）の時期のいわゆる前期とこの講義以後のいわゆる後期とをつなぐ過渡期の思想だとする見方もなりたつ。つまり、『存在と時間』での「人間存在（現存在）の分析」から「存在の歴史への問い」への転回を準備する移行期にあたるというわけだ。なにしろ、ハイデガー自身も、この講義録の付録で、「この講義は、根本的に存在の理解という枷から脱け出していないので、中途半端な道にはまり込んだままだ」とし、「存在の理解から存在の生起へ！」（GA40,219）という自己批判を口にして⁽²⁾いるわけである。

だとしても、その転回にとって、このテキストが、たんにそれを準備するためだけの梯子的な役割として捨て去らなければならないものだという事にもならないだろう。「人間存在の分析」から導きだされた「存在の理解」という考え方そのものが捨てられ、人間の理解を超えた「存在の生起」という一辺倒の考え方に移行したのではなく、むしろ、人間存在の分析がそのまま深められることで、人間による「存在の理解」のなりたち⁽³⁾にまで目が配られるようになったのだとはいえないだろうか。そこではじめて、その転回も準備されたのだとすれば、それは「転回」というよりは、むしろ、人間存在の分析そのものの深化によって可能になった、存在の理解から存在の生起への思索の「展開」といったほうがいいのだろう。

このテキストからは、人間存在の分析にとどまるのではなく、かといって、それを捨て去り、存在の生起をた

だじつと待つのもなく、これらの二つの観点の間で揺れ動く独特の緊張感が伝わってくる。この転回がけつして偶然ではなく、それなりの必然性があるのだとすれば、前期から後期へと移行する思索のつながりを影で支えつづけている問題意識もあったはずである。まさにそれがこの緊張感として現れているとはいえないだろうか。その意味で、このテキストは、たしかに時期的にも内容的にも過渡期の思想と見ることもできるだろうが、そうした表面的な位置づけにとどまらず、ハイデガーの思索をその最後まで駆り立てていたはずの問いの動機が垣間見られる貴重な瞬間にもなってくれるように思われる。だとすれば、それは、後期の詩的で神秘的ともいわれるその語り口のわかりにくさや含みについても、それなりの見通しを開くための格好な手がかりになるだろう。⁽³⁾

ハイデガーの思想の時期的な位置づけや、ハイデガー自身が口にする自己批判に必要以上に振り回されずに、虚心坦懐にこのテキストの内容に沿いながら、そうした緊張感や問題意識のありようについて探りあててみようというのが、本稿の大きな目的である。そのためには、やはり、「もつとも不気味なもの」という概念を指標にし、このテキストがどうして「もつとも不気味なものとしての人間」の解釈へと向かわざるをえなかったのか、その意味や必然性を調べなおしてみようと思うのだ。⁽⁴⁾

ところで、この「もつとも不気味なもの」というのは、ギリシアの悲劇詩人ソフォクレスの『アンティゴネー』に残される詩の一節、「不気味なものはさまざまにあるが、人間以上に不気味なものはない」を踏まえたものであるが、そのもつとも不気味なものというのは、人間というよりも人間のもつ技術のことだとすること、その詩をめぐるハイデガーの議論も、人間存在の分析というよりも、むしろ、ハイデガーの後期の技術論の文脈に寄せて解釈することもできそうである。⁽⁵⁾ そうなると、やはり、そのハイデガーの議論は、後期の思索を橋渡しする過渡期のものということになりそうである。

しかし、そうした解釈にも目を配りながらも、本稿では、技術という点だけでなく、人間そのものの不気味さにも着目することで、さきほど示唆したような緊張感や問題意識に迫ってみようと思う。そうすることで、ただの過渡期の思想という見方とはまたべつの見通しも探ってみたいのだ。そして、これが、そのまま、冒頭で紹介した「根本の問い」の核心にふれる準備にもなるはずである。

I. 存在はどうなっているのか

1. 異常なものへの異常な問い

「もっとも不気味なもの」をめぐるハイデガーの『アンティゴネー』解釈は、すでに指摘したように、この講義の「存在と思考」という節で講じられているわけだが、それは、テキスト全体のおよそ三分の一もの分量を占めている。そこから窺われるように、ハイデガーによると、存在と思考との区別は、「その歴史からいって、もっとも複雑な区別であり、その意図からして、もっとも問題のある区別である」し、「だからこそ、もっとも問うに値する区別でありつづけている」（GA40,102）のだという。

その複雑さや問題性、問うに値することの意味合いを確認するためにも、やはりまずは、『形而上学入門』においてどういう道筋でこの区別が問題として着目されることになるのか、その経過についての概要を辿りなおしてみたほうがいいだろう。

はじめに見たように、この講義の冒頭を飾る、根本の問いは、もっとも広く、もっとも深く、もっとも根源的な問いとされるわけだが、さしあたり、ハイデガーの提示する形式的な説明だけでもかいつまんでおこう。

もつとも広いというのは、この問いは、いつ、どこ、といった時間や空間を問わず、存在するもののすべてを包括するからである。いや、それどころか、しまいには、けっして存在しないもの、つまり無そのものさえもそこに含まれるというのである。そして、この問いは、「なぜ……」と問うことで、存在するものの根拠を問うのであって、存在するものと同じ次元、同じ平面に存在するような何らかの原因を求めているわけではない。そうしたさまざまな原因を含めて、その深層の次元で、存在するものをまるごとすべて存在するものたらしめている、究極の根拠を問うのだから、その意味で、もつとも深い問いだというわけだ。そうなると、その根拠は、存在するもののいっさいを跳び越え（「跳躍 (Sprung)」 (GA40,8)、もはや存在するものとさえ、いや無とさえもいえないような次元に求められることになるわけだが、それをハイデガーは「根源へのー跳躍 (Ur-sprung)」 (GA40,8) とよぶ。だからこそ、この問いは、もつとも根源的な (ursprünglichst) 問いだというのである。

この問いが無をすらも包括するということ、そして、もはや無とさえもいなくなるような根拠へ跳躍するということとは、いったい、どういうことなのか。これから、順を追って、その核心に迫る見通しを開いてゆこうと思うのだが、ハイデガーは、まさにこの問いを問うことが「哲学すること (Philosophieren)」 (GA40,10) だとし、哲学についての誤解をとりあげているので、それも確認しておこう。ハイデガーがこの問いに込める思いを探り当てるための一つの手かがりになるように思われるからだ。

ハイデガーによると、哲学することが存在するものの根拠を問うことだからといって、その哲学に、特定の時代や文化を形成するための基礎を提供したり、あるいは、存在するもののすべてのありようを見透かすための見取り図を用意することで、日常生活や、科学の研究活動、文化の建設などに直接貢献することを期待してはならないという。交通手段の便利さや医薬品の効能などを評価するのと同じ日常的な基準で哲学を評価するのは、哲

学への誤解だというわけだ。その意味では、「哲学からは何も出てこない、哲学をやってもはじまらないというのは、まったく正しく、まことにもっともなことである」（GA40,14）のだが、だからこそ、裏を返せば、哲学すること、つまりあの問いを問うことは、「周知のもの、日々の安定した通常のもの（das Ordentliche）を超えて問う」（GA40,15）ことだというのである。そうすると、ハイデガーがいうように、そこで問われていることも、それを問うことも、通常（ordentlich）から外れた（außer）、つまりは「並み—外れた（außer-ordentlich）」、「異常な（außerordentlich）」ことであり、この意味で、この問いは、異常なものへの異常な問いということになりそうである（GA40,15）。

ところで、この問いには、どうして、「無があるのではないのか」という句が添えられているのだろうか。そもそもこの問いが、無ではないもの、存在するものの根拠を問う問いなのだとすれば、その句は、わざわざ添えられなくてもすむような蛇足に思われるかもしれない。ところが、ハイデガーによると、それがつけ加えられることで、存在するものの根拠をこれまたどこかに存在するものとしてしまう思いに惑わされずにすむのだということ。その句があるからこそ、存在するものすべてについて、それが当たり前前に存在するものではなく、むしろ、それが存在しない可能性、無でありうる可能性にも目が配られるきっかけになるからである。こうして、その根拠は、たんに目の前のどこかにすでに存在しているような説明根拠ではなく、存在するもののすべてが、それが存在しない可能性、無の可能性から切り離されることを根拠づけるような、そうした根拠として問われることになる。

当たり前前に存在すると思われたものが当たり前でなくなり、それが存在しなくなる可能性、そこにふと顔を覗かせる無の可能性、その無に迫られることではじめて、この問いはこの問いとしてなりたつというわけだ。このように、この問いが、無の可能性すらも巻き込むことで、日常生活の自明性を跳び越え、その深層をどこまでも

掘り下げることになるのだとすれば、少なくとも形式的には、たしかに、それは、ハイデガーのいうように、もつとも広く、深い、根源的な問いであり、だからこそ、並み外れた、異常な問いだともいえそうである。

2. 根本の問いから先行の問いへ——存在の意味の空虚さ

こうして、この根本の問いは、存在するものすべての根拠を問うものであるかぎり、これを問うことで、無の可能性の前に立たされることになるわけだが、ハイデガーは、そのときすでに気づかぬうちに、「存在するもの (das Seiende)」を「非存在 (das Nichtsein)」からだけでなく、「存在 (das Sein)」からも区別しているのだという。

存在するものが非存在という極端な可能性に逆らっているかぎり、それ自身は存在のうちに踏みとどまっているが、それでもやはり、それは非存在の可能性を追い越してもいないし、克服してもいないのである。

(GA40,33)

非存在、存在しないこと、つまり無の可能性から切り離され、はじめて、存在するものが存在することになるのだから、そのとき、「存在するもの」と、それが存在しないということ (「非存在」) だけでなく、さらに、それが存在するということ (「存在」) も区別されていることになる。この根本の問いが、存在するものが存在するということ、すなわちそれが存在しないのではないこと、無ではないことの根拠を問うのだとすれば、とりあえずは、それに先だって、そもそも存在するとか、しないということはどういうことなのか、つまりは、存在するもののその「存在はどうなっているのか」を問わなければならないだろう。その意味で、ハイデガーは、この存在

についての問いを根本の問いに先行する問い、「先行の－問い」(Vor-frage) (GA40,36) とよみなのである。

もっとも、ハイデガーによると、先行といっても、この問いは根本の問いから区別され、いわばセカンドステージとしての根本の問いへと進むために、あらかじめクリアしておかなければならないファーストステージとして設定されるような問いではない。根本の問いを問うことは、とりもなおさず、この先行の問いを問うことであり、そうならざるをえないというわけである。

先行の問いは、ここでは、けっして根本の問いの外にあるのではなく、それはいわば根本の問いを問うなかで赤々と燃えている、かまどの火であり、問うことすべてのかまどなのである。(GA40,45)

こうして、そこからさき、この根本の問いは、先行の問いとして展開されてゆくことになるのだが、そこで、第二章でハイデガーは「存在」という語に注目し、その文法や語源についての考察を手がかりにしてゆく。

ドイツ語の文法が教えるとおりの、「存在 (das Sein)」という語は、「ある (Sein)」という動詞の不定詞の頭に「das」という定冠詞が付されることで、その不定詞を名詞に変えたものである。この不定詞においては、主語の人称や数、能動や受動といった態や時制、直接法や命令法といった法などの特定の意味連関が切り離され、そのすべてが抹消され、抽象化される。そうになると、それが「存在」という名詞に変えられることで、この抹消が固定化され、何か不特定の曖昧なものを名指す一つの名称になっているといえるだろう。

ところが、ハイデガーによると、ドイツ語の不定詞 (Infinitiv) という用語は、ラテン語の「modus infinitivus」を縮めたもので、無限定、無規定の (infinitivus) 様式 (modus) のことをいうのだが (GA40,60)、『

そのもとになるギリシア語の「ἐγκλῶς ἀπαρήμεναι」^{エンクリシス アパレエムファティコス}は、非(α)ー随伴現象的(παρήμεναι)な変化(ἐγκλῶς)、つまり、特定のさまざまな意味とともに出現させることの欠如を意味していたのだという。このように、ラテン語訳をそのまま継承する不定詞という用語には、もとのギリシア語にあったそうした意味合いが消失してしまっているというのである(GA40.71)。

さらにハイデガーは、「存在」という語の語源を探り、「es」「bhū, bheu」「wes」(GA40.75-76)という三つの語幹に注目する。それぞれに、「生きる」、「発現する」、「滞在する」という三つの意味があったのだが、やがて、「ある」という抽象的な意味だけが残されることになり、こうして、もとにあったはずのそれぞれの意味は薄められ混合されてしまっているというのだ。

さしあたり、ハイデガーは、そうした抹消や混合によって、「ある」、「存在」という語は空虚でふわふわした意味になってしまっているという事実を確認する(GA40.79)。

3. 存在の限定された意味

とはいえ、日常、いつでも、どこでも、だれだって、あれこれのものがあるとかないとか、そしてそれが何であり、何でないかについて判断しているはずなのだとすれば、そのとき、すでに、あるということ(「存在」と、ないということ(「非存在」)をはっきり区別できているはずだろうし、ということは、あるとか、ないとかいうこと、つまりは、「存在」とは何かということ、それなりに、しっかりとわかっていなければならないことになるだろう。

そこで第三章で、ハイデガーは、「ある」という動詞の直接法現在の三人称単数形「est」の用法に注目する。

「存在」という名詞は、私やあなた、われわれやあなたたち、彼らや彼女らに使われる「bin」「bist」「sind」「seid」や、過去形や未来形、命令法や接続法でもなく、ふつうは、「ist」の不定詞として理解されているというのである。たとえば、「神がある」は、現実居合わせていること、「大地がある」は、絶えず現存すること、「その人はシュヴァーベン出身である」は、そこから来ていること、「その杯は銀製である」は、そこからなることであるように、気づかぬうちに、「ある」ということ、つまり「存在」は、居合わせ、現存すること、なりたつて、成立していること、滞在し、到来すること、といった限定された意味に理解されているというわけだ。そうすると、その意味は、さきほど確認した、不定詞の名詞化によって抹消、混合されてしまった意味、つまり、ともに出現させる、発現する、滞在するといった意味にも重なる面があることになりそうだが、ハイデガーによると、それは偶然そうになっているわけではなく、存在の意味の理解をそのはじまりから決定しているものだという。

そうすると、「存在」には、ここで指摘したような意味、存在の本質についてのギリシア的なとらえ方を思い出させるような意味があることになるが、それは、どこからわれわれに転がりこんできたものではなく、われわれの歴史的な現存在 (Dasein) を昔から支配している、一つの決定されたことなのである。(GA40,98)

この「歴史的な現存在」とは人間存在のことをいうのだが、ここでは、このように存在の意味を理解することではじめて人間が人間として存在している、そうした人間存在のありようのことを、存在の意味が理解されるその現場 (da) である (sein) という点から「現存在 (Dasein)」とよんでいると理解しておいていいだろう。

そして、これと同じように、「存在」という言葉を使うさいに、すでに決まり文句になっている言い方が、存在と生成、存在と仮象、存在と思考、存在と当為であり、こうして、存在は、生成、仮象、思考、当為から対立し、区別されるものとして理解されてきたし、理解されているのである。そこでハイデガーは、パルメニデスやヘラクレイトス、ソフォクレスといったソクラテス以前の思想家や悲劇詩人たちの言葉にまで遡り、古代ギリシアにあったはずのもとの存在の理解がどのように変転してゆくことになるのかを調べなおしてゆくわけだが、まずは、ハイデガーが提示するその方針について、ひどく簡単ではあるが、要点だけでも確認しておきたい。

「存在」という語は、生成、仮象、思考、当為の四つの点から区別されることによってその意味が限定され、規定されているわけだが、ハイデガーによると、これらの区別は、もともとは対立というよりも、むしろ相関の關係にあったというのだ。だからこそ、この対立も、やはり、けっして偶然によるものではなく、そこにはそれなりの必然性があるのだという。この対立を統一していたはずのもとの相関する意味のなかにも、すでに対立へと向かう意味も含まれていたというわけである。まとめてみると、この区別は、もともとの統一した意味にあったはずの相関する關係から必然的に生じてきた対立ということになるだろう。この点を方針にして、ハイデガーは、それぞれの区別の根拠を問おうというのである。

ところで、そのなかでも、三つ目の、存在と思考との区別が「もつとも問うに値するもの」であり、その区別のなりたちを問うなかで、「もつとも不気味なもの」という概念が登場するということは、すでに紹介したとおりだが、ハイデガーがこの概念に注目しなければならなかった意味や、根本の問い、つまり先行の問いを問うなかでこの概念に向かわざるをえなくなる必然性を調べなおしてみるためには、やはり、その準備として、第一と

第二の区別、存在と生成、存在と仮象という区別のなりたちについて、ハイデガーの提示するさきほどの方針から、これらの区別がどうとらえなおされることになるのか、その要点だけでもおさえておいたほうがいいだろう。

Ⅱ. 存在の原義——フュシス（発現し、滞在する支配）としての存在

4. 存在と仮象からフュシス (φύσις)、アレーテイア (ἀληθεια)、ドクサ (δόξα) へ

ハイデガーも指摘するように、存在（ある）と生成（なる）とを区別し、対立させることは、存在（ある）の意味について、もはや当たり前になってしまっているような、ごくわかりやすい考え方であるかもしれない。つまり、なるもの（生成するもの）は、まだない（存在しない）のだし、あるもの（存在するもの）は、もはや、なり（生成し）終えているのだから、存在は生成でなく、生成は存在ではないとすればいいわけだ。このように、すでに、紀元前六世紀から五世紀のパルメニデスの言葉からも、存在とは生成から免れた存続である、とする主張が聞きとれるわけである。そして、パルメニデスのその言い分に逆らってヘラクレイトスは、すべては存在ではなく、生成でしかないと主張したとされているわけだが、ハイデガーによると、一見対立するかにみえるこの二人の見解は、じつは、同じことをいっているのだという。もっとも、ハイデガーは、その指摘だけにとどめ、説明は後回しにするとして、すぐに存在と仮象の区別へと話を進めてゆくわけだが、その点については、これから順を追って確認してゆくこととして、さしあたり、ハイデガーの話の順序に合わせてみたい。

存在と仮象の区別も、一見すると、当たり前ではつきりしているかに思われる。つまり、存在が、現実的なもの、本物であるのに対して、仮象は、非現実的なもの、偽物であり、だからこそ、ふつうは、仮象よりも存在に

価値が置かれるわけである。こうして、仮象は夢や幻や影として移ろいゆくような、出来損ないの現実という意味で、生成の一つとも考えられてくるかもしれない。ところが、さきほど指摘した方針にあるように、その区別の背後に隠された統一的な意味もあったはずであり、そこからその区別がなりたっていると考えられるわけだが、そこで、ハイデガーは、ドイツ語の用法にも残されるその痕跡を手がかりにしている。

仮象を意味するドイツ語の「シャイン (Schein)」には、外見や見せかけといった仮象という意味だけでなく、光や輝きという意味もあるのだが、ハイデガーによると、この両者に同時に当てはまるだけでなく、そのなりたちを支える根拠が、「出現すること」(zum Vorschein kommen, Erscheinen) (GA40,107) であるのだという。仮象も、光や輝きも、それとして出現することには変わりがないし、出現することによって初めてそれがそれとなるというわけだ。ところで、パルメニデスやヘラクレイトスの古代ギリシアにおいて、もともと、存在というのは、ふつう「自然」と訳されるギリシア語の「フュシス (φύσις)」のことであったのだが、とはいえ、自然といっても、そのフュシスとしての自然とは、「出現しー滞在する支配」(GA40,108) のことだったのである。そうになると、その意味での存在は、シャインの根拠にある、出現することに重なることになるわけだから、ハイデガーのいうとおり、「ここで、シャインは存在とぴたり同じものを意味する」(GA40,107) ことになりそうである。

このように、存在、つまり、出現しー滞在する支配とは、シャインとして出現してくることであるのだとすれば、そこにはすでに、隠されていたものが隠れなきありようになるということも含まれていることになるだろう。ハイデガーによると、まさにその隠れなきありようが、ふつうは「真理」と訳されるギリシア語のアレーテイア (ἀληθεια) のもともとの意味であったというのだ。

となると、ギリシア語のものと意味においては、存在（フュシス…出現し―滞在する支配）とシャイン（出現すること）、そして真理（アレーテΙΑ…隠れなさ）は、相互に重なり合うことになる。これが存在と仮象の区別のもとにある隠された相関関係であり、統一的な意味であったというわけだ。

この点について、ハイデガーは太陽を例に説明している。太陽は毎日昇っては沈んでゆくように見えるが、天文学や物理学といった科学的知見からいうと、本当はそうではなく、太陽の周囲を地球が回っているだけであり、朝の景色、夕べの海、夜などは、その現実がこちらにそう見えているだけの現象、つまり仮象でしかないとされるわけである。しかし、だからといって、「この仮象は無ではない」し、「真実でないわけでもない」し、「単なる現象でもない」（GA40.112）のであり、やはりそれも、そのような隠れなき様子や姿としてこちらに出現しているのと同じように、科学的知見にとっても、やはりそれなりに、地球の回転運動という見方が隠れなき様子や姿として出現しているだけだといえなくもない。ハイデガーによると、ふつうは「臆見」など、仮象に近い意味合いで訳されるギリシア語のドクサ（δόξα）のものと意味も、このように、出現し、滞在し、支配し、隠れなきありようとなる、その姿や様子（Ansehen）のことであったというのである。

5. 存在と仮象、存在と生成から、存在と思考へ

では、その統一がどう対立し、区別されることになったというのだろうか。

隠れなき姿や様子としてのドクサといっても、それは、程度の差はあれ、いつだって、すでに、そのつどの視点や観点に応じて違った姿や様子として現れるしかないのだろう。そうした姿や様子がさまざまな見解や意見や想定を抱かせることにもなるのだとすれば、そこに現れるドクサは、ときには、包み隠された存在のボールをと

り除くこともあるかもしれないが、その逆に、隠れなきありようを覆い隠してしまうことにもなるかもしれない。その意味で、ドクサは、いつだってすでに仮象である可能性にさらされているわけである。

ハイデガーによると、どうやら、ソフィストやプラトンのもとではじめて、もっとも広い意味ではどちらもドクサとよばれていたはずの、隠れなき様子や姿とその仮象とが区別され、隠れなき様子や姿を真の存在（イデア）とすることで、ドクサ、つまりシャイン（出現すること）がその仮象という意味に限定されてしまうことになってしまい、こうして存在と仮象とが対立し、区別されることになったというのだ。

ソフィストとプラトンのもとではじめて、シャインは単なる仮象に定められ、そうして格下げされた。それと同時に、存在はイデア（*idea*）として超感覚的な場所へとつり上げられる。こちらの、下の方の見せかけだけであるものと、どこか上方の本当の存在とのあいだに裂け目、コリスモス（*κορισμός*）が切り開かれることになる。（GA40.113）

そして生成も、仮象がそうであったように、ギリシア語のものと意味においては、「現前―へ―到来し、そこから去り―ゆくこと」（*In-die-Anwesenheit-kommen und aus ihr Weg-gehen*）（GA40.122）として理解されていたかぎりで、「出現し―滞在する支配」を意味するフュシスとしての存在に重なる意味をもっていたというのである。つまり、存在が出現し滞在することであり、非存在が去りゆき不在であることだとするなら、まさにフュシスとしての存在とは、出現と消失を繰り返してゆくことだともいえるからである。そうになると、ハイデガーがすでにそう仄めかしてもいたように、パルメニデスとヘラクレイトスは同じことをいっていることになりそうである。

ところが、ハイデガーによると、まさに仮象が存在から区別されることで、生成も存在から区別されることになったのだという。というのは、生成（なる）とは、もはやこれでもないが、まだあれでもないことであり、そのつど違うものであるのだとすれば、いつ、どこ、だれかに応じてそのつど違ってくるような、仮初の様子や姿、つまりは仮象として現れてくることになるだろう。こうして、生成も仮象の一つということになり、本当の現実（イデア）として理解される存在から対立するものとして区別されることになったというわけである。

もっとも、存在や生成と、フュシス、アレーテイアやドクサという言葉をめぐるこのハイデガーのこのエチモロギーや、すでに確認したその方針の成否については、ここで問うことはできないし、その準備をすることも本稿の目的ではない。それはともかく、いずれにしても、その方針に従えば、これらの対立や区別は、たまたま生じてきたのではなく、存在の原義とされたフュシスとしての存在、つまり「出現し―滞在する支配」という相關した統一的な意味から必然的に導かれる帰結ということになるわけだが、それはどういうことだろうか。その必然性のありようをハイデガーは、存在と思考の区別のなりたちから、つまり、これもその方針どおりに、その後には隠されているはずの相關する統一的な意味から探りだそうとするのである。というのも、ハイデガーの見積もりでは、「思考は、何か他の種類の区別のただの対立項にとどまるものでなく、対立するものについて決定が下される基盤や足場であり、しかも、そもそも存在は思考からその解釈を受けとるまでになっている」(GA40,124)からである。存在と思考の区別も、もとの相關する統一的な意味からくる必然であり、その必然性から、存在と生成、存在と仮象の区別が決定されているのだとすれば、存在とはどうなっているのかを問おうとする先行の問いにとって、たしかに、この区別は、ハイデガーが仄めかしていたように、「もっとも複雑な」
「もっとも問題のある」「もっとも問うに値する」(GA40,102) 区別ということになりそうである。

ハイデガーによると、「思考」は、ギリシア語のロゴスやノエインに由来する言葉であるが、これらのギリシア語のもとの意味も、やはり、フュシスとしての存在に相関し、重なり合うものであったのだという。もつとも、思考とは、他でもない人間による思考であるのだろうし、ロゴスやノエインというもとの意味にしても、やはり人間存在としての現存在のあり方に関わってくるのだろう。こうして、存在と思考との区別は、フュシスとしての存在と、人間としての現存在のあり方との相関と対立の関係性として問いなおされてくるわけである。

そして、その関係性を問いなおそうという、まさにそうした文脈から、「もつとも不気味なものとしての人間」についての解釈が講じられることになるのだが、そのようすを探るためにも、さしあたり、ロゴスやノエインとフュシスについて、そのもとの意味にあったとされる相関関係とはどういったことなのかを確認しておこう。

6. ロゴス (λογος)、ノエイン (νοεῖν) と、フュシスとの相関性

ハイデガーによると、ロゴスは、もともと、思考やその表明としての話すことや語ることではなかったのだという。ロゴスという名詞のもとになる動詞のレゴー (λέγω)、レゲイン (λέγειν) は、ラテン語ではレゲール (legere) にあたるのだが、これは、落ち穂や枝を「拾う (lesen)」、葡萄を「摘む (lesen)」、「えり抜き (Auslese)」という使われ方をするときのドイツ語のレーゼン (Lesen) と同じ意味の言葉であるというのだ。このように、レーゼンの本来の意味は、拾ったり、摘んだり、選んだりして収集すること、もつと簡単にいえば、「集める」ことだというわけだ (GA40,132)。「集める」というレゲインのこのもとの意味について、ハイデガーは、ホメロスの『オデュッセイア』やアリストテレスの『自然学』を実例にしながら、その裏づけを試みているのだが (GA40,133)、ようするに、この「集める」という意味を名詞化したものがロゴスのもとの意味であったといった

いのである。

それにしても、この意味でのロゴスとフュシスとはどのように相関していたというのだろうか。ハイデガーは、やはり、ヘラクレイトスの断片に残される言葉を手がかりにし、そこから読みとられるロゴスの意味が、「絶えず、自らのうちで支配しつつ、根源的に集めつつ集められていること」(GA40.137)であるという点に注目する。少々ややこしい言い方ではあるが、その中味については、「出現しー滞在する支配」という、フュシスとしての存在のものと意味にひき合せてみると、もつとはつきりしてくるだろう。

出現し、滞在する支配といっても、このもとの意味によってハイデガーがいわんとするのは、個々の存在するものが出現し、そこに居合わせているということではなく、むしろ、何であれ何かが存在するというときには、いつだって、すでに、しかも気づかぬうちに、それが存在するということ、つまり存在とは何か、というように存在の意味が理解されてしまっている、そのことなのである。このように、存在という視点が開かれ、出現し、滞在して、いつでも、すでにその視点に身をおいているからこそ、いつ、どこ、何であろうと、すべてのものが一様に、その視点に支配され、存在するものとして、つまりはあるとされるあらゆるものとして現われては消えてゆきもするのだろう。何であれ存在するものは、存在、つまりフュシスとして出現し、滞在する、そうした視点の支配下にあるものと理解されていたわけである。

一方、ロゴスもこれに対応し、いつだって（「絶えず」）、何であれ、何かが存在するとき、そもそも（「根源的に」）、そのすべてのものをその支配的な視点のもとに（「自らのうちで支配しつつ」）集めてしまっているはたらし、つまり「集めつつ集められていること」であつたし、その意味で、フュシスと相関し、重なり合うものであつたといいたいのだろう。

それにしても、そこからどうして、フュシスとロゴスが切り離され、思考としてのロゴスと存在との区別が生じてきたのだろうか。そこでハイデガーは、ヘラクレイトスから離れ、今度は、パルメニデスの断片五に残される余りにも有名な一文、「だが思考（ノエイン）と存在（エイナイ）は同じである」とふつうは訳される「τὸ νοεῖν αὐτὸ νοεῖν ἐστὶν τὸ καὶ εἶναι」(GA40,146) に注目する。

とはいえ、やはりハイデガーにいわせると、そう訳してしまうのは曲解であり、このノエインとは思考、つまり主観的な作用のことではなかったのだという。そう曲解するなら、ギリシア語の *ἵσθαι* 動詞にあたるエイミ (*einai*) の不定法のエイナイ (……がある、……である) も、パルメニデスがそれを思考と同じであるとしていることから、思考によって考えられた内容、いわゆる観念のことだと曲解されたとしてもおかしくはないだろう。こうして、パルメニデスのこの一文は、すべてが主観的な観念に過ぎず、それ以外は何も存在しないとする主張だとされることが、カントや、いわゆるドイツ観念論の学説にもつながる意味をもち、その先駆けとなる根本的な主張でもあるかのように曲解されてしまうことになったというのである。

ところが、エイナイ (「ある」)、つまり存在のもとの意味が、出現し、滞在する支配のことだとすると、たしかに、それと同じだとされるノエインを思考という意味で理解するのはおかしいことになってくる。ハイデガーによると、このノエインとは、聞きとること、受け入れることであり、「出現するものを受け入れて、立つことへ」ともたらしこと (GA40,147) という意味が含まれていたのだという。

では、ここで「同じ (τὸ αὐτὸ)」というのはどういうことかというところ、その点を確かめるために、ハイデガーは、ふつう「一者」と訳されるパルメニデスのいう「ἓν」(「*Ein*」)、一なるものに注目する。つまり、ここでの同じとは、一なるものとしての両者の統一のことではあるが、統一といっても、一様なもの、同等なものとし

で一括りにされるのではなく、むしろ、互いに対立するものの相関関係や連帯性のことだというわけだ。

存在という視点が出現し、滞在し、支配するときには、その要求を聞き入れ、受け入れるはたらきが必要であり、その意味で、エイナイ（存在）つまりフュシスがまさにフュシスとしてあるためにはノエインが必要であるし、逆にまた、ノエインがまさにノエインであるためにも、それはフュシスから差し出されてくる視点や要求を待たなければならない。そう理解すれば、ノエインと、フュシスとしてのエイナイとが同じであるという言い分も、そうおかしいことにはなくなるといいたいのである。だとすると、ハイデガーのいうように、「存在の出現とともに、必然的に聞きとり、受け入れることもまた生起する（*geschehen*）」（GA40,148）ことになるだろう。

すでに確認したように、その存在の出現には、存在という視点のもとに「集めつつ、集められること」という、ロゴスのもとの意味に含まれていたはずのはたらきも関与しているのだとすれば、ノエインは、そうしたロゴスの支配や要求をも聞きとり、それを受け入れていることにもなるだろう。そうになると、たしかに、ハイデガーがその方針でも示唆していたように、ロゴス、ノエイン、フュシスは、もともと、互いに相関し、重なり合う意味をもっていたということになりそうである。

Ⅲ・存在と無のはざまへ

7. 主観としての人間から、もっとも不気味なものとしての人間へ

とはいえ、その存在を聞きとり、受け入れるのはだれかというところ、すでにそう問うときに「だれか」という問い方しかできないことからわかるように、やはり、それも人間というしかないのだろう。その意味では、パルメ

ニデスの一文にも人間存在についてのそれなりの規定も含まれていることになるわけだが、しかし、そのノエインが存在の出現とともに生起する (geschehen) のだとすれば、人間とはいっても、それはもはや、いわゆる近代的自我からイメージされるような自由な主体としての個人や主観でもないし、まして観念論的に曲解された主観とはいえなくなってくる。そのノエインとは、そうした主観が思ったり、考えたりすることなどではなく、そうした思いや考えの向こうから出現してくる、存在という出来事、それに伴い、つき従う、これもまた一つの出来事 (Geschehnis) であるからだ。だからこそ、ハイデガーも、「人間自身が存在に帰属していなければならない」という言い方をするのだろう。

だがそこで、このように出現することと、聞きとり、受け入れること、その出来事に人間が関与しているのだとすれば、もちろん、その人間自身がいて、存在に帰属していなければならない。しかし、そうだとしたら、この人間存在の本質やそのあり方はただ存在の本質からのみ規定されうることになる。(GA40,148)

人間という存在も、そもそも人間として存在するものであるのだから、他のすべてのものと同じように、存在という視点に支配され、そのもとに集められ、そこに帰属しているのだろう。いつの間にか、すでに、存在(エイナイ)という視点が出現し(フュシス)、すべてのものがその視点のもとに集められ(ロゴス)、それを受け入れてしまっている(ノエイン)からこそ、気がつけばすでに、人間も一個人として存在するものとなってしまうているわけだ。だが、存在の支配や要求を聞きとり、受け入れてしまっているという、個人の思いや考えを超えているはずのその出来事に、まさにその同じ一個人であるはずの人間が関与することで、はじめて人間は人間に

なったのであり、だからこそ、こうしていま、その個人も一人の人間でいられるのだろう。

そうすると、ハイデガーのいうように、その出来事に関与しているはずの人間とは、もはや、いわゆる「自我 (Ich)」や個人、社会ともいえなくなるだろうし (GA40,152)、まるで何か特定の存在するものでもあるかのよう
に、「ロゴスをもつ生きもの (ゾーオン・ロゴン・エコノ *ζῷον λόγον ἔχον*)」、「理性的な動物 (animal rationale)」
(GA40,150) としてすら定義することもできなくなるだろう。それは、何かとして定義したり、何かとしてその
答えを求めることはできないものということになりそうである。だからこそ、ハイデガーも、「人間自身の存在
への問いは、『人間とは何か』という形から、『人間とはだれか』という形に変えられなければならない」
(GA40,152) というのである。

すでに触れたように、ハイデガーのいう「歴史的な現存在 (Dasein)」とは、存在の意味が理解されるその現
場 (da) であり (sein)、そうしてはじめて人間が人間となるような、人間存在のありようのことだとすると、
「人間とはだれか」と問うときのその「だれか」とは、まさにこの「歴史的な現存在」のことだといっていだ
ろう。

いずれにしても、こうして、ロゴスやノエインとフュシスの相関関係から、さらに、現存在としての人間存在
とフュシスとしての存在との相関関係が問いなおされることになるわけだが、それにしても、ハイデガーの方針
にもあったように、そこからどうして、ノエインやロゴスが個人や主観の観念や思考とされることで存在から区
別することになるのだろうか。そもそも、現存在としての人間がそうした出来事の出現を受け入れる一つの出来
事だとしても、その出来事とは具体的にどういうことであり、その人間とはどういう中味をもった存在なのだろ
うか。

まさにその点を補うために、ハイデガーは、ソフォクレスの『アンティゴネー』に注目し、その最初のコーラスの歌をひき合いにしながら、大胆ともいえるユニークな解釈を試みるのである。もともと、その解釈については、ハイデガー自身が「やむをえず不十分で」(GA40.157)、「どうしても強引にならざるをえない」(GA40.171)と自覚しているのだから、ここでその解釈の成否を詮索してもそれほど意味はないだろう。それはともかくとして、そもそもどうして、そうした不十分で強引な解釈をしてまでそのコーラスに注目しなければならなかったのだろうか。それは、このコーラスの冒頭部をハイデガーが「人間以上に不気味なものはない」と訳すとき、その「不気味な」にあたるドイツ語の「unheimlich」に、その原語のギリシア語であるデイノン (δῆνον) と重なり合う意味だけではなく、それ以上の意味をも含ませたかったからだといっていいだろう。

ドイツ語の「unheimlich (ウンハイムリッヒ)」にも、「すごい、恐ろしい、不気味な」といったデイノンに重なり合う意味もあるのだが、デイノンに含まれる「力強い」という意味は直接そこには含まれてはいない。そのはずであるのだが、あえてハイデガーは、「圧倒的な、抗しがたい (überwältigend)」、「暴力的な (gewalttätig)」という、むしろ、それとはべつのドイツ語に直接含まれるはずの意味を、その自覚にもあるように、なかば強引に読みこもうとしている。しかも「不気味な (ウンハイムリッヒ)」というこの形容詞は、「住みついた、わが家のような、慣れ親しんだ」という意味で使われる「heimisch (ハイミッシェ)」と同じように、「故郷をしのばせるような、居心地のよい、アットホームな」という意味でも使われる「heimlich (ハイムリッヒ)」と、その否定や反対を意味する前綴りの「un- (ウン-)」からなる言葉でもあることから、ハイデガーは、「すごい、恐ろしい、不気味な」という意味に加えてさらに、デイノンには直接含まれていないはずの『ハイムリッヒなもの』、すなわちハイミッシェなもの、ふだんのもの、なじみのもの、危なげのないものから投げ出すもの (GA40.160) とい

う意味、一言でいえば、「居心地のよくないもの」という意味までも、これまた、なかば強引にデイノンという言葉に含ませようとしている。まとめてみると、その強引さとは、「不気味な (unheimlich)」という形容詞に、そこに直接含まれないはずの「力強い」という意味とデイノンに直接含まれないはずの「居心地のよくないもの」をあえて含ませようとしたということになるだろう。

あえてそうすることで、「もっとも不気味なもの」をめぐる『アンティゴネー』の一節に、ただの人間論や、人間のいとなみを描きだす技術論だけでなく、ハイデガーが問いかけたかったはずの存在論、つまり、存在という出来事を人間が受け入れるというあの出来事についてのより具体的なありようを読みこもうとしたように思われる。

最後に、その具体的なありようの核心を抽出することで本稿を結ぶことにしたい。これがそのまま、はじめに示唆しておいた、ハイデガー哲学に胚胎しつつづけているはずの独特の緊張感や問題意識のありようについて一つの見通しを提示すると同時に、冒頭に掲げたあの根本の問いの核心にも触れる準備にもなるはずである。⁽¹⁾

8. 不気味なものの両義性、存在と無のはざま

『アンティゴネー』のコーラスで人間がもっとも不気味なものとして歌われているその内容をふつうに耳にすれば、人間というものが自然や生物を支配し、その保全や安全を脅かす最たる生き物であるという、そのありさまが、もっとも恐ろしく、もっとも不気味なものとして描きだされているようにみえる。大海へ船出し、大波をくぐり抜け、大地を鋏で掘り起こし、魚を網で捕獲し、獣をくびきに繋いで手なずける人間には、しかも、それをうまくやりぬく思案を練るための言葉や理解力も備わっている。こうして自然や生物をその才智や技能でねじ伏せ、

自然界に君臨すること、ときには自然や生物を破壊や死滅へと導いてもきたのだろう。神をも恐れぬともいえるそうした人間の所業は、たしかに、デイノタトン (deinotaton)、つまり、もつとも恐ろしく、もつとも不気味なものだといえそうである。

ところが、ハイデガーは、そこで歌われる不気味さとは人間のそうした身勝手な所業を描きだしているだけではないのだとし、デイノンという言葉にそれとはべつの両義的な意味を読みこもうとする。その両義的な意味とは、すでに指摘したように、「圧倒的な」という意味と「暴力的な」という意味なのだが、それもまた、ふつうの意味とは少し違ったふうを考えることで、そのどちらの意味についても、さらに「ハイムリッヒでないもの」つまり「居心地のよくないもの」という意味を含ませようとするのである。

「圧倒的な」というのは、フュシスとしての存在のことであり、人間の思いや考えを超え、それを圧倒し、有無を言わさぬしかたで現われては消えてゆく、存在の御しがたさのことである。むしろ人間の方が存在のそうした身勝手ともいえる動向を見守りながら、そのつど、知恵を絞り、やりくりしてゆかなければならないのだろう。このコーラスに出てくる海や、大地や、魚や、獣もそうしたフュシスとして解釈できるというわけだ。

ところで、すでに確認したように、人間がそうしなければならないのは、いつだってすでに、存在(エイナイ)をフュシスとして理解する視点が出現し、すべてのものがそこに集められ(ロゴス)、支配されているからであるし、そして、その要求を聞きとり、受け入れている(ノエイン)のもまた人間であつたわけである。人間の思いどおりにならず、その意味では、人間にとってけっして「居心地のよいものとはいえない(ウン・ハイムリッヒな)」その出来事(フュシス・ロゴス・エイナイ)を、その同じ人間が受け入れてしまっている(ノエイン)という、これまた一つの出来事によって、はじめて人間は人間となっている。それが人間の不気味さの一面だというわけ

だ。人間にのしかかる存在の不気味さ（居心地のわるさ）とでもいえようか。

そして人間が、居心地のよくないその不気味さのただなかで、どうにかやりくりしてゆくためには、そのつどの状況や場面に応じて、何が本当に存在するもので何が仮象であるかをそれなりに見定めてゆくしかないのだろう。こうして、その見定めがうまくゆくかぎりには、本当に存在するものとして見定められたものが、生成を免れて存続するものとみなされることにもなる。そのときはじめて、本当のものとして存続するものが、生成や仮象としての非存在、つまり無から区別されるだけでなく、それを見定める人間の思いや考え、つまり思考からも区別されることになり、そのさい、思考がそれらの区別をすべて決定することにもなるのだろう。こうして、その見定めどおりにうまくいつているときには、人間は、いわば居心地のよい（ハイムリッヒな）思いをするのだといえる。コースに描きだされる、海へ船出し、大地を掘り起し、魚を捕獲し、獣を手なずけるといった人間の所業は、人間が操るいわゆる技術のことだといえようが、それをハイデガーは、そうした見定めによって人間がやりくりした結果のことだと解釈するわけである。

だが、見定めどおりにうまくゆくのも、程度の差はあるにせよ、やはり必然的には、束の間のことでしかない。なにしろ、何であれ存在するものは、そもそもフュシスとして、いつだって、すでに、人間の見定める思いや考えを超え、いわば向こうの勝手しだいに現れては消えてゆくはずのものであったのだから、その思いや考えは、どうしても、裏切られるという可能性を免れることはできないわけである。これが、人間の不気味さの一面、つまり人間にのしかかる存在の不気味さであるわけだが、こうして、その見定めや決定では思いどおりにゆかなくなるるとき、居心地のよくない（ウン・ハイムリッヒな）思いをするのだろうし、さらなる居心地のよさを求めて、またべつの見通しを探し、やりくりしてゆくほかはなくなる。

だとすると、そのやりくりの結果としての技術も、フュシスが招き入れた結果の一つであるのだから、人間の思いどおりに製作、利用されるだけでなく、それを裏切って、いわば独り歩きしだすことで失敗や事故といった不測の事態を招きおこし、さらなる対応に迫られることになってもおかしくないだろう。技術を身勝手に操る人間が不気味だというよりも、むしろ、そのように独り歩きする技術に人間が操られているのだとすれば、技術のほうこそ不気味なものといえそうである。ハイデガーによると、このように、いつまでも居心地のよい思いをしていられるはずもなく、それが居心地のよくない（ウン・ハイムリッヒな）ものになってしまう可能性にさらされつづける、そうした人間の居心地のわるさが、人間の不気味さのもう一つの意味だというのだ。人間に課せられた宿命としての不気味さ（居心地のわるさ）とでもいえるのだろうか。

だからこそ、人間は、たとえ裏切られるはずであっても、そのつど、どうにか手を変え、品を変え、存在するものをあれこれと見定めてゆくしかないのだが、その意味では、出現し、滞在する支配という、もともと統一した意味をもったフュシスとしての存在を、いわば力づくで、存在と、非存在つまり無としての生成や仮象とに区別し、そこからさらに、その決定をくだす思考を区別せざるをえなくなるのだろう。ハイデガーは、そこに「暴力的な」という意味を読みこもうとしたのである。

そうになると、「圧倒的」という意味での、存在の不気味さ（居心地のわるさ）に翻弄されながら、「暴力的」という意味での、自らに課せられる不気味さ（居心地のわるさ）からも逃れられない、この両義的な意味での不気味さは、人間のしでかす不気味な所業はおろか、個々の不気味なものが不気味なものとして存在するためにも、すでに出現してしまっているあの出来事のことをいうのだから、およそ不気味だと考えられるどんなものさえも凌駕し、その上に聳え立つ次元のものといわざるをえない。その意味で、その出来事に関与せざるをえない人間は、

もっとも不気味なものだというわけである。

この意味でのもっとも不気味なものとしての人間は、存在が生成や仮象、つまり非存在や無へと移ろいゆく可能性にさらされ、そうした無の可能性から逃げだすことはできないのだろう。このように、フュシスとして出現してくる存在のなりゆきは、人間の見定める思いや考えの背後に、いわばその暴力を拒絶するかのように、未だ出現しない闇の無として隠されてゆくわけである。それでもやはり、いやだからこそ、その隠されてゆく無のただなかで、人間は、人間となったそのはじまりから、そのつど、その思考という暴力によって存在を生成や仮象という無からも区別してゆくしかないのだとすると、ハイデガーのその方針どおり、たしかに、これらの区別は、皮肉にも、フュシスとしての存在からなりたつ必然ということになるだろう。

9. むずび——「転回」から、「存在の理解の生起（なりたち）」としての「展開」へ

存在が生成や仮象という無へと移ろいゆく、その無もまた存在へと移ろいゆく可能性、存在の隠れなさの背後に闇の無が隠されてゆき、その隠された無が隠れなきありようとなりゆく可能性。ハイデガーは、このように存在と無のはざまを移ろいゆく、もっとも不気味な出来事のうちに、人間による存在の理解のなりたちを探りだすことで、存在の意味やそれを限定する区別のなりたちを問いなおそうとしたわけである。

その試みからは、「人間存在の分析」と「存在の生起」という二つの観点の間を揺れ動く独特の緊張感が伝わってくるだろう。そして、この緊張感がまさに、前期の「人間存在の分析」と後期の「存在の歴史への問い」の思索のつながりを影で支えつつづけている問いの動機であったとはいえないだろうか。だとすれば、ハイデガーの自覚や意図はともかく、ハイデガー自身が口にする「存在の理解から存在の生起へ！」という、いわゆる「転

「回」も、むしろ、人間存在の分析の深化が招きよせた「存在の生起」への「展開」、いや、存在の理解のなりたち（生起）を見つめなおすことで可能となった「存在の理解の生起」への「展開」とでもいいいたくなる。その生起を見つめなおすことをのちにハイデガーは、人間の勝手による理解ではなく、その生起を静かに見守りつづける「省察 (Besinnung)」⁽⁸⁾と言いなおすにしても、それもやはり、ハイデガーという「人間」がその哲学の歩みのなかで辿りつくことになった、またべつの意味での「理解」だとはいえないだろうか。

このように、もつとも不気味なものを解釈するその試みが、人間のいとなみを描きだす技術論でありながらも、そのいとなみのなりたちを問いなおす人間論でもあると同時に、存在のなりたちを問いなおす存在論でもあるように、ハイデガーの思索は、そのはじまりから終わりまで、そのような緊張した問題意識に駆り立てられた人間論であり、技術論であり、存在論であつたように思われてならないのだが、この段階でそこまでいつてしまうのは、やはり、穿ち過ぎということになってしまうのだろうか。

あの根本の問いを問うことが、とりもなおさず先行の問いを問うことであり、そして先行の問いを問うために、もつとも不気味なものとしての人間が問いなおされることで、あの出来事へ、つまり、存在と無のはざまを不気味に揺れ動きながら、存在をめぐるすべての区別と対立がそこで重なり合い統一される、出来事へ向かうことになったわけである。だとすれば、根本の問いが、無すらも包括し、無とすらいえない根拠へ跳躍する、もつとも広く、もつとも深い、もつとも根源的な第一級の問いといわれたことの具体的な意味について、すでに、その核心に迫るだけの見通しは開かれたはずである。

(1) ハイデガーのテキストからの引用箇所およびそれへの参照箇所の表示に際して、GAという略号は、ドイツ語版

『マルティン・ハイデガー全集』（Martin Heidegger Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1975-）を意味し、その後のアラビア数字は全集の巻数を、コンマの後のアラビア数字はページ数を示す。なお、引用文中で傍点を付した箇所は原文でのイタリック体等の強調箇所に相当する。

邦訳については、マルティン・ハイデガー『形而上学入門』（川原栄峰訳、平凡社ライブラリー、一九九四年）を参照させていただいたが、文脈にに応じて一部改変させていただいた部分もある。

（2）『存在と時間』の第七版（一九五三年）が出版されたとき、それまでの版に見られた「前半」という表記が削られ、この第七版で書きなおされた「まえがき」で、「後半」が断念されたことが告げられると同時に、『形而上学入門』への参照が指示されている。ハイデガーは、自分の講義を初めて公刊するさいに数ある講義の中からあえてこの講義を選んでいるが、それは、「この講義がその主題からみて、『存在と時間』から最近の公刊論文にいたるまでの道のりを見えるようにするために、とくに適していると思ったからである」（一九五三年九月一日、『ツァイト』誌編集者レヴァルター宛て書簡）と自身の口から述べている。そうした発言や、一九三五年というこの講義が行われた時期が第二の名著と評される『哲学の寄与』（一九三六—一九三八）の執筆の直前の時期にあたるということから、この講義をその後の「転回」への移行期に位置づける見方もなりたつのだろう。

（3）この講義は、ハイデガーのナチス加担への批判が再燃する火種となった資料としても知られている。その点の事情については、川原栄峰訳『形而上学入門』（一九九四年）所収（四三六頁以下）の木田元「解説」を参照されたい。ハイデガーの思想とナチスへの関与との結びつきをどう捉えるかという問題は、改めて考察が必要となる深刻な課題ではあるが、本稿では、それを試みる準備もできていないし、そのつもりもない。その点をめぐる試みとしては、ジャック・デリダ『新版 精神について——ハイデッガーと問い』（港道隆訳、平凡社ライブラリー、二〇一〇年）、ヴィクトル・ファリアス『ハイデガーとナチズム』（山本尤訳、名古屋大学出版会、一九九〇年）、ジャン・フランソワ・リオタール『ハイデガーと「ユダヤ人」』（本間邦雄訳、藤原書店、一九九二年）、ペーター・トラヴニー／中田光雄／齋藤元紀編『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か——「黒ノート」をめぐる討議』（水声社、二〇一五年）などがある。

（4）小林信之「13 もっとも不気味なものへの問い 『形而上学入門』と「芸術作品の根源」」（秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』法政大学出版局、二〇一四年、所収）は、『形而上学入門』の「もっとも不気味なもの」という概念に注目し、「芸術作品への根源」（『拙道』所収の講演論文）をも取りあげ、一九三〇年代半ばのハイデガーにおける、政治や歴史的現実との緊張関係を視野に入れながら、この独特の緊張感の現代的意義を探ろうとしている。

る。その小林の示唆を参考にしながらも、本稿では、『形而上学入門』での議論にのみ絞られ、小林とはまた違った視点や角度から、この緊張感の必然性を「もつとも不気味なもの」をめぐる『アンティゴネー』解釈に含まれる、人間論、技術論、存在論の独特な絡み合いという点から調べなおしてみたい。政治的な観点というよりは、むしろ、存在論的な観点から、「存在への問い」というハイデガー哲学の根本的なモチーフを影で支えているはずの「人間への問い」の深化や展開という点に注目してみようと思う。

(5) たとえば、木田元著、マイケル・エメリック訳『対訳 技術の正体』（デコ、二〇一三年）四八頁など。

(6) ハイデガーが採りあげている断片を概ね順に列举すると、断片一、二、五〇、七三、三四、一一四、一〇三、一九、七、五四、一二四ということになる。

(7) 『アンティゴネー』解釈のそのような大胆さや強引さを補うつもりもあつたのだろうか、ハイデガーは、じつに根気よく、じっくりとその解釈を試みているのだが、その全容を辿りなおす紙幅はもはや残されていない。本稿の目的にとっても、いろいろと注目すべき論点もあるのだが、その点については、また別の機会があれば、それに譲りたい。その解釈の核心については、本論がここまで試みてきた考察でそれを確かめるための準備は十分整っているものと考えたい。

(8) たとえば、「技術への問い」「科学と省察」（『講演論文集』一九五四年、所収）など。

※本稿は、平成二九年九月十四日に中央大学多摩キャンパスの哲学研究室で開催された私的研究会（「第三回リアリティー研究会」）で発表した構想をもとになりつつ。本稿を書き進めるにあたり、当研究会で貴重な指摘をえられた。研究会にご参加いただいた、須田朗、吉田達、寺本剛、齋藤宜之、竹中真也、各先生方には、この場を借りて改めて謝意を申し上げます。

尚、その構想がなりたつにあたって、平成二八年度に日本大学法学部で開講された「教養演習ⅠB」（ハイデガー『形而上学入門』の邦訳を講読する授業）での議論から有益な示唆をえられた。当演習の受講生である、各氏にも、この場を借りて改めて謝意を表したい。

『桜文論叢』 執筆要領

平成16年2月10日大宮校舎委員会決定

平成17年9月29日桜文論叢編集委員会改正

平成17年9月29日施行

平成19年7月 5日改正

平成19年7月 5日施行

平成22年7月 1日改正

平成22年7月 1日施行

平成25年5月30日改正

平成25年5月30日施行

- 1 原稿は未発表の完全原稿とし，提出締切日を厳守する。他誌に投稿中でないものに限る。また，審査の迅速化のため，原稿の要旨を添付する。翻訳原稿については，必ず原著者又は原出版社の許可を得てから提出することとし，許可の確認ができる文書等も添付する。
- 2 文章は原則として常用漢字，現代仮名遣いを用いる。学術上必要な場合は，その限りではない。
- 3 原稿は，原則として，Microsoft Wordで作成し，フォントは和文では「MS 明朝」，欧文では「Times New Roman」を使用し，いずれも下部にページ番号を付すこととする。注は，原則として，「挿入」メニューの文末脚注機能を使用せず，すべて尾注とする。
- 4 原稿の提出は原則として，電子メールの添付ファイルで研究事務課（kenjimu.law@nihon-u.ac.jp 宛）へ送付するとともに，印刷した原稿2部を同課へ提出する。

5 原稿の長さは、表題、氏名、本文、注、引用文献を含めた上で、和文の場合 20,000 字以内、欧文の場合 10,000 語以内とする（和文は「ツール」メニューの「文字カウント」で「スペースを含めない文字数」、欧文は「単語数」でカウントする）。なお、多少の超過はやむを得ないものとする。表題と氏名は、和文表記及び欧文表記を併記する。

6 要旨は和文 600～1,000 字程度、欧文 300～500 語程度とし、A4 版 1 枚に収めるものとする。

7 校正については、初校の際の加筆、訂正はやむを得ない場合に限るものとし、再校以後の加筆、訂正は避ける。

執筆者による校正は再校までとし、初校、再校ともに入手後 1 週間程度で返却する。再校返却の際は、タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

8 文献の引用について

① 横書きの場合、本文の当該箇所の右上（行間）に括弧つきの算用数字で注記番号を付し、各章等の後に引用文献等を表示する。縦書きも同様とする。

② 表示については、著書の場合、著者名、書名『 』、発行年、頁等を示し、論文の場合は、執筆者名、論文名「 」, 掲載誌名、巻・号、発行年、頁等を示すことを原則とする。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

諸坂成利	日本大学教授	萬清華	日本大学非常勤講師
田邊陽子	日本大学准教授	鹿野しのぶ	日本大学非常勤講師
Thomas Lockley	日本大学専任講師	岡山敬二	日本大学准教授
常松淳	日本大学専任講師		

機関誌編集委員会

委員長	渡邊容一郎	委員	西原雄二
副委員長	柳瀬昇	委員	水戸克典
副委員長	大江岡聡子	委員	渡辺徳義
委員	江島泰拓也	委員	岩井山敬美
委員	久保来合	委員	岡小野多義
委員	賀河楠谷清里	委員	小喜中静未
委員	河楠谷清水	委員	喜中野白方
委員	楠栗清水	委員	中野白方
委員	栗清水岡	委員	白田村
委員	清水岡	委員	田村

桜文論叢 第97巻（非売品）

平成30年3月20日発行

発行者 池村正道

発行所 日本大学法学部
機関誌編集委員会
東京都千代田区神田三崎町2-3-1
電話 03(5275)8510番

印刷所 株式会社メディアオ
東京都千代田区神田猿樂町2-1-14 A&Xビル

ŌMON RONSŌ

Vol. 97, March 2018

CONTENTS

— ARTICLES —

- MOROSAKA Shigetoshi*, Pieter Bruegel's The Tower of Babel and Jorge Luis Borges' "The Library of Babel": The Isolation of Adama (Soil) and Adam (Man) in the Bible, or the Truth in Madness and Madness in the Truth 1
- TANABE Yoko*, Motion Analysis of Women's Judo Matches in the 2012 : London Olympics by Weight Class 31
- Thomas LOCKLEY*, Nagasawa Kanaye: The Spiritual Life of California's Japanese Wine Pioneer 41
- TSUNEMATSU Jun*, Specification of Research Hypothesis and the NHST Procedure in Current Quantitative Sociology 81
- WAN Qinghua*, Grammatical Structures 107

— MATERIAL —

- SHIKANO Shinobu*, A Study of the Extant Edition of the Chudengokai from the Sixth Year of the Joji Era (1367) 234

— ARTICLE —

- OKAYAMA Keiji*, Auf dem Weg zum Menschen als »dem Unheimlichsten«: Zwischen Sein und Nichts 266